

---

# 蒼空への扉.GGM

とー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼空への扉・GGM

### 【Nコード】

N9761W

### 【作者名】

とー

### 【あらすじ】

きつとそこにあるはずの情け。この作品は『蒼空への扉・MDP』の続きとして書かせていただいております。まずは、前作をご覧になることをお勧めいたします。

## 諸事情がありまして

その部屋は、ピンク色だった。

ピンク色と言っても、すべて淡いピンクで統一されていた。壁紙も、飾られているぬいぐるみも、かわいらしい小さな目覚まし時計も。そして、テーブルクロスもピンク色だった。

しかし、その部屋には、一点だけ淡いピンクではなく、黄色が存在していた。意図的にあるわけではなくて、その黄色には意志があった。その黄色は、綺麗な姿勢で、淡いピンク色の椅子に、腰掛けていた。

対面には、ピンク色が似合う少女が、その黄色に目をやっていた。かわいらしい部屋に一つ、場違いなほどに、少しばかりかわいらしいとは無縁の生き物がいた。淡いピンク色が似合う少女は、こうその黄色に言った。

「そろそろ学園祭なんだけどね？でも、中間試験も近いの。どっちを優先した方がいいと思う？黄龍<sup>おうりゅう</sup>……」

少しばかり楽しそうに、悩みとは無縁の笑顔を浮かべて、その少女は、黄龍と呼んだその黄色に言った。

黄龍は、姿勢だけはいいものの、背中から蝙蝠のような翼が生えて、しなやかな尻尾があり、全身は黄色の鱗で埋め尽くされていた。顔は、鰐のように顎が前に引き伸ばされている。その眼の瞳孔は、軽く縦に割れている。

黄龍は、言い換えればその名の通り、龍だった。もっと言うなら、ドラゴンだった。

普通、ドラゴンなんてものは存在しない、と言うのが一般的だ。しかし、ここにはその例外がある。でも、『ドラゴンがいる！』なんて言っても世間からは何も認めてもらえない。それは、黄龍がその場にいてもいなくても、だ。

一般人には、龍と言う存在を認識する事が出来ない。そう、逆を

言つと、ある特殊な条件をクリアした人物のみが、龍と言う存在を認識できる、ということだ。

龍は、器と呼ばれる類と、術師と呼ばれる類でないと、認識する事が出来ない。その少女は、器だった。黄龍は、どこまでも龍だった。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり目をつぶって、少女の方に視線を向けた。

「私に聞かれても困るけど…」

小さく言つと、その少女の方に視線を向ける。少女は、遠くの方にまで染み渡る笑顔を、黄龍の方に向けている。

「私だったら、中間試験にも力を入れる。そして、学園祭を満喫する。その方がいいと思う」

はつきりと、黄龍は言つた。

聞いた少女は、「そうね！」と答える。もしかしたら、こういう場合はどんなことを言つても、「そうね！」と答えるのかもしれない。黄龍は考えた。

「やっぱり、両立が大切よね！」

どこか明るそうな、そんな声で言つた。それを聞いた黄龍は、しばかり腕を組んで、そして小さく視線を向けた。

「でも、香奈<sup>かな</sup>」

黄龍は言つた。

その少女、香奈はそれを聞くと黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、香奈の方へと視線を向けている。

「言つておくけど、私はこっちに来てからまだ一か月くらいしか経つてないし、まだよく分からないわ。香奈の言つてる試験が、どれほど大切なものなのかは分からないわ。それだけは言つておく」

黄龍は淡々と香奈に告げた。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は真面目な視線を、香奈の方に向けている。

黄龍は、夏休みごろにこっち（人の世）に来たのだ。居候するこ

とに決めた、ともいえる。

香奈、春潮<sup>はるせ</sup> 香奈は、黄龍とはそれ以前の知り合いだった。黄龍は常に冷静で、周りの物事を把握する。そこが、なんとなく香奈は好きだった。そして、香奈は器だ、勿論黄龍以外の龍も見える。

「でも、黄龍の言う通りよ！」

香奈は、楽しそうにそう言った。そんなに楽しそうに言われても、逆に黄龍としては困るだけなのだが。

黄龍は聞くと、香奈の方に視線を向ける。

香奈はこう答える。

「だって、文武両道って言うじゃない？だから、その武が祭に代わっても、きつと大丈夫よ！」

香奈は楽しそうにそう告げた。そんな風に言われても、黄龍には困る。そもそも、黄龍には学園祭と言う物がなんなのか、ちゃんと把握し切れてはいない。

「…、そうなのかもしれないけど、とりあえず、それは私の考えよ」最後にそう言うておかないと、責任逃れが出来ない。そんなことは考えていないが、黄龍は、あくまでも自分の考えだということを強調した。

それを聞いた香奈は、「分かってるわよ」と楽しそうに黄龍に言った、それを聞いた黄龍は、それが本当に分かっているかは別として、少しばかり、心の中で安心した。

「それに、高校に上げれるようにしないとね！」

香奈は言った。

香奈の学校、天野下学園中学高等学校（正確には、天野下学園大学付属中学高等学校）は、中学高校と言うように、中学と高校が一貫になっている。つまり、中学生の成績次第で、高校に上げれるかどうかが決まる。殆どが上げれるが、やはり、上げれないケースもあるらしい。話でしか聞いたことがないが、それは本当だった。

黄龍が聞いた限りの知識はこの程度だ。それが何なのか、なんて聞かれてお、はつきり言って答えられない。そもそも、黄龍には学

校の定義すらあいまいだった。その状態でそれを詳しく説明しろだなんて言われても、まず無理だ。つまり、そう言うことだ。

「がんばらなきゃ!」

香奈は、笑顔で黄龍に言った。

それを聞いた黄龍は、「それが一番」と、小さく香奈に言った。

その時だった。

その時、香奈の携帯電話が鳴った。携帯電話は、テーブルの上でバイブレーションを響かせる。

ブルルルルル…

学校で、携帯電話は電源を切るか、マナーモードにすること、という校則がある。それにしたがって、香奈は常に携帯電話を、マナーモードにしていた。

それを聞いた香奈は、「あら?」と小さく言った。

「…このバイブレーションの長さ、メールか」

黄龍が、博識そうな口調で言った。

それを聞いた香奈は、「そうよ、慣れて来たじゃない」と、笑顔で黄龍に言った。この音に、黄龍は初め慣れなかった。何の音かと思っただけ聞いていたら、それが『携帯電話』とか言う滅茶苦茶な機能を持った物体だと知り、そして、バイブレーションが一体何を意味しているのかも、大体黄龍は把握した。

「まあ…」

黄龍は小さく言った。流石に、このくらい覚えていられなければね。黄龍はちいさくおもった。

「それで、誰から…?」

黄龍は聞いた。

それを聞いた香奈は、「ちょっと待って」と言いながら、携帯電話を開いた。

香奈の携帯電話に、そのメールの文章が展開された。

『差出人 羽並<sup>はなみ</sup>』

添付 なし

件名 夕食

本文 まだ？」

それを見ただけで、なんとなく香奈は、羽並の言いたがっていることが分かってしまった。ただの憶測ではあるが、その可能性は、かなり高いものだった。

「羽並からみたい」

香奈は言った。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は楽しそうに、携帯電話の画面を見つめている。そんなに携帯電話は、楽しいものなのだろうか。たとえ見ているだけでも、楽しいのだろうか。

黄龍は、見ているだけで楽しいという概念が、よく分からなかった。

「羽並：？何でこんな時間に」

黄龍は言いながら、部屋にかかっている淡いピンク色の時計を見た。その淡いピンク色の時計は、香奈の女子寮の部屋の中で、着実に時間を刻んでいた。

現時刻、二十時五十二分。

つまり、もう夜だ。夜なのに、メールが来るなんてどういうことなのか。それが、黄龍には分からなかった。

羽並、こみさき個岬 はなみ羽並は、以前はDEP（Dragon Erase Project）の一員だったが、今ではごく普通の、香奈の友人だ。術師で、黄龍を見る事が出来る。

香奈は、黄龍の方に視線を向ける。

「夕食まだ？だって」

聞いた黄龍は、更に訳が分からなくなった。

こんな時間に、しかも夕食まだ？なんて聞くのはおかしい。黄龍は思った。そもそも、そんなことを聞くこと自体おかしい。黄龍はそう思っている。そもそも、二十時に食事をとっていないなんてことは、香奈の部屋の中では、ほとんどありえない話だった。

「何でそんなことを…？」

それを聞いた香奈は、「多分ね」と黄龍に言った。  
聞いた黄龍は、少しばかり首をかしげた。

「また、パスタの残りを食べてほしいんだと思うの」  
香奈は言った。

その人物は、ただ単にベッドの上でうなだれていた。

中間試験なんて言うただでさえ面倒くさいものがあるというのに、その前に学園祭なんて言う関門があるから、だからその人物はうなだれていた。

その人物の部屋は簡素で、ベッドとテーブルと椅子、それからテレビが置かれている以外、リビングにはほとんど何の変哲もない場所だった。しかし、そんな簡素な部屋にも、やはりおかしい部分があった。

そこには、赤がいた。

その赤は、椅子の上でピコピコと、自分の手に持っているゲーム機『oro』で遊んでいた。だから、うなだれていたのかもしれない。今になって、その人物はそう考え始める。

「おい、赤龍<sup>せきりゅう</sup>」

その人物は、その赤、赤龍に言った。

その赤も、いわゆるドラゴンだった。蝙蝠のような翼、真っ赤に全身を覆っている鱗、頭からちょこんと目立たない程度に生えている角、すべてが龍そのものだった。つまりは、ドラゴンだ。

「何じゃ、東海林<sup>とうかいりん</sup>」

その人物は、東海林と呼ばれた。

聞いた東海林は、赤龍に言った。

「一つ聞くんだけどさ、お前、これまでやってきた勉強、一通り頭ん中に入ってたんだろ？」

それを聞いた赤龍は、ゲーム画面から視線を逸らさない。東海林の方になんて、絶対に視線を向けたりしない。つまりは、そういうことだ。



「うむ…」

どこか中身がない返事だった。赤龍は、ゲーム画面の中の視線と、指に集中していた。

聞いた東海林は、「よかった、」と赤龍に呟いた。聞いても赤龍は、全く何も言っではこない。そもそも、何かを考えられるほど、赤龍の行動に余裕なんてものはない。

「なら安心だ…」

東海林は言った。しかし、赤龍は全く何でもないことのように、ゲームにだけ集中を費やしている。

「…、」

何も言わない。

東海林はそんな中、赤龍へと声を向ける。

「これで、また中間は赤龍に頼めるな」

東海林は言った。

赤龍は聞いているのかいないのか、そもそもその声に気付いているのか、返事さえしていなかった。そんなことは無いも同然で、赤龍はただ、自分のゲームにだけ集中していた。それだけで、赤龍の中はいっぱいだった。

「でも、数学はどうだ？お前、数学は基礎がないからなんとかって…」

東海林は言いながら、赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、そんな声には反応も見せず、ただゲームの中に飲み込まれている。

それを見た東海林は、一瞬答える言葉を忘れる。その代りに、思考が東海林の頭の中を巡る。さっき、全部聞いてなかったのか？

そう考えると、東海林は思わずため息を吐いた。

その時だった。

「東海林、ため息はするでないぞ」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、もう一度ため息をするかしないか考える。さて、

どうしようか。そんなことを考えて、またベッドの上でうなだれる。なんとなく、面倒くさいような、面倒くさくないような感覚が、東海林の中に広がっていた。

東海林、寺山てらやま 東海林は、器であり、天野下学園中学高等学校の生徒であり、トラブルにいつも巻き込まれている。そして、いつも図々しい赤龍の面倒を見ている、面倒見のいい器ともいえる。

「赤龍、」

東海林は言った。

聞いても赤龍は、ゲームの中に吸い込まれていく。

「聞いてるか？」

東海林は赤龍に聞いた。

それを聞いた赤龍は、面倒くさそうに「何じゃ」と東海林に聞いた。聞いた東海林は、赤龍へこう言った。

「 $5 + 13$ は？」

数学、と言うか算数。

赤龍は、算数の基礎が出来れば、絶対に数学も楽々こなす。東海林はそう考えている。しかも赤龍は、こう見えて非常に飲み込みがいい。教えたことはすぐに頭に入る。しかしその代りに、図々しいともいえる。

「十…、」

それ以降、赤龍の声が聞こえなかったのは、きっと東海林の気のせいではない。

聞いた東海林は、赤龍の方に目を細める。

「赤龍、お前、わざとそう言ってないか？」

東海林は聞く。

赤龍は、ずっとゲームをしている。東海林の声を聞いているのかいないのか、赤龍はさつきから、ゲーム機をかちゃかちゃと弄っているだけだ。

返答はない。

東海林は目を細める。

「赤龍、聞いてるか？」

東海林は聞いた。

聞いた赤龍は、少ばかり目を細めて、画面から目を離さずに、東海林の方へと言った。

「うむ…、鬱陶しいの…」

それは、赤龍の中では正論だった。東海林の中では、ただの抵抗にしか見えなかった。「は…」と東海林は小さく呟いた。どうしようか、また赤龍のゲーム機（本当は東海林の物）を取り上げて、またゲームを強制終了させようか…。

思ったその瞬間だった。

負けのBGMが、東海林の部屋に鳴り響いた。その音源は、勿論赤龍の持っているゲーム機だった。

「あー…」

赤龍はどこか不憫そうに、ゲーム機に言った。東海林は、ベッドの上でうなだれている。

「東海林のせいで、気が散ってしまったぞ」

しかも、東海林のせい。

一瞬、反論しようか迷うが、東海林はしないことにする。こんなところでそんなことをしても、はつきり言って何にもならない。それが、東海林の中でははつきりしていた。

東海林は赤龍に言った。

「ちようどいい、5 + 13は？」

尋ねた。

聞いた赤龍は、東海林の方に目を丸くする。「ちようどいいとはなんじゃちようどいいとは」と東海林へ言ってくる。そんな事、東海林にはどうでもよかったりする。

「赤龍、答える」

東海林は言った。

赤龍は言った。

「嫌じゃ」

反応に困る反応だった。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、どこか怒っているような、そんな雰囲気です。東海林から目をそらしている。何なんだろう、としか、東海林には捕えられない。赤龍は、摩訶不思議、と言うか、よく分からない。

赤龍は続けた。

「東海林のせいで、赤龍のゲームが滞ったのじゃ。あと少し言うところで、東海林は自分の計算の事ばかり」

聞いた東海林は、赤龍に目を細める。

「それだったら、お前のゲームはどうなるんだよ」

東海林は赤龍に聞いた。

聞いた赤龍は、「これは、」と即答する。

「赤龍の娯楽じゃ。赤龍は東海林に様々なものを提供しておる。じやから、赤龍の娯楽の時間ぐらい、与えてはもらえないかの」

聞いた東海林は、「それじゃあ俺がまるで何もお前にやってないみたいじゃないか」と声を張らせた。「東海林は赤龍の辛さが分かっているだけじゃ。もつと赤龍のことも考慮してほしい物じゃな」赤龍は悠然と言う。「お前な、」東海林は目を細める。

「それじゃあお前は、俺に本当にそんなにいろんなことを提供しているのか？」

聞いた赤龍は、即答した。

「勿論じゃ。はつきり述べるが、赤龍がここにいなかったら、東海林はもうとつくに殺されておったぞ！」

赤龍は声を張り上げる。

「もともとお前が来たからそんなことになってるんだろ！お前の気まぐれで来さえしなきゃ、こんな事にはならなかったんだ！」

それを聞いた赤龍は、「な…ッ」と声を詰まらせる。

「赤龍がいなければこんなことにはならなかったじゃと…、ふざけたことを！赤龍がいなかったら、試験でろくに点数も稼げなかった分際で何をほざいておる！」

聞いた東海林は、ベッドから起き上がって赤龍に言った。

「お前だって、普段はぐーたらしで、俺の手伝いなんて何にもしないのに、何そんな口利いてんだよ！」

東海林は怒鳴った。

「分かっているのは東海林の方じゃ！東海林は赤龍がいなかったら、何も出来んくせに！！」

赤龍も怒鳴った。

聞いた東海林は、赤龍の方に顔をしかめる。赤龍は立ち上がり、東海林の方に睨みつけてくる。

「もう一回言ってみやがれ！！」

東海林は言った。

赤龍は言った。

「何度でも言つてやるぞ！東海林の木偶の棒！！」

「何だとテ前エ！！」

東海林と赤龍の視線がぶつかりあった。にらみ合つて、お互いがお互いを罵り合った。

東海林は叫んだ。

「お前なんて、出でつちまえ！！」

一瞬、

赤龍の視線が揺らいだ。しかし、赤龍は「フン…」と鼻で東海林を罵った。

「言われるまでもなく、出て行つてやるぞ」

そして、赤龍は窓の方に足を運ばせる。開き、ベランダの方に行く。そして翼を広げる。一瞬、東海林の視界が揺らぐ。

「…赤龍は出て行くぞ…！！」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、一瞬声に詰まった。しかし、「…ツチ」と舌打ちで掻き消した。

「どこえなりと行つちまえよ…！！」  
言った。

そして赤龍は、更に顔を歪めた。

翼を広げて、一瞬四肢を着けると、赤龍は涼しくなってきた秋の夜の空へ、大きく羽ばたいた。

部屋には、東海林だけになった。なんとなくだが、東海林はベランダの方に視線を向けていた。それ以外に、何もできなかった。

東海林は、一瞬言葉に詰まった。そして、その代わりに、ため息を吐いた。「はあ……」と言って、それをとがめる声なんてものはなかった。

どーしょ。

東海林は思いながら、窓を開けっぱなしにしていた。

一瞬、何か声が聞こえたような、そんな気がした。

その人物は、バスーンを吹きながら、外の音に耳を傾けていた。

その音が、何か今までの音とは異様で、どこか、引つかかっていた。その人物は、寮の一室で、ただバスーンを吹いていた。テーブルと椅子とベッドしかない、それ以外に何もないリビングで、その人物は、ただバスーンを吹いていた。

途中で、その人物はバスーンから口を離した。

その人物の椅子の近くで、綺麗な姿勢で『おすわり』の格好をした、青い龍がいた。その龍に、その人物はこう言った。

「何か、聞こえなかった？せいりゅう青龍」

聞いた青龍は、その人物の方に視線を向けた。どこかその人物の顔に、心配そうな色がうかがえた。

青龍は、その名の通りドラゴンだ。つまり器にしか見えない。それか術師。青龍は赤龍よりもほっそりとした体型をしていて、どこか、冷たい感覚を雰囲気<sup>ふんき</sup>に孕んでいた。常に、その雰囲気は保たれていた。

その人物を見た青龍は、小さく言った。

「……、どうした、雄大<sup>ゆうだい</sup>」

聞いた雄大は、青龍の方に視線を向ける。そして小さく、「うん」

と青龍に言った。

「何か、誰かが叫んだような、何か、そんな声が聞こえたり聞こえてなかったりゲシュタルト崩壊してたり鼻血ドラゴンだったり……」  
はつきり言つて、後半のゲシュタルト崩壊の意味が、青龍には全く分からなかった。しかし、雄大の中で、その言葉に意味がないことを知ると、少しばかり考える。

「……、珍しい」

小さく青龍は言つと、雄大から視線を逸らした。

それを聞いた雄大は、青龍の方に視線を向ける。「それということ？」と、青龍に尋ねる。しかし青龍は、特に何も言わない。

雄大、おきた沖田 ゆうだい雄大はこの学校、天野下（略）の生徒だ。天野下の吹奏楽部に所属していて、雄大は見ての通り、バスーンを担当している。学校でも一、二を争うほどうまく、この調子で練習すれば、プロにもなれる気が本人にはしている。雄大は、東海林や香奈と同様、器だ。

雄大は面倒くさそうに、青龍から視線をそらす。そしてただ、バスーンのボーカル（吹き口）を啜える。

譜面通りに、雄大は演奏し始める。内容は、『The Year Of The Dragon』だ。和訳すると『ドラゴンの年』、第三楽章のFinaleだ。非常にテンポが速く、非常に指がせわしく動く曲。しかし、雄大はそれを悠々とこなしている。その曲は、聞いている客も鼻血を吹きそうなくらい速い、と言つことで、『鼻血ドラゴン』とも、世間では呼ばれている。

そこまでは分かるのだが、その作者の名前が、どうも読めない。雄大には、はじめの一文すら読めない。

「……、雄大が」

青龍が言い始める。

雄大は、そもそも演奏を中断する気がない。

青龍は、バスーンの音の中で、雄大に言った。

「……人のことを心配すること」

聞いた雄大は、何を言う気も起きなかった。そもそも、雄大にとって今は、バスーンタイムに他ならなかった。それ以外の時間ではなかった。バスーンを吹くためだけに、その時間が存在している。そんな雰囲気だった。

青龍は、雄大がバスーンを止める気がないということも、分かっていた。

だから青龍は、ただ眼を閉じた。

最近、ポータブルプレイヤーの電源の持ちが悪いと、その人物は思う。

そもそもその人物は、ポータブルプレイヤーなんて使う機会は少なかった。しかし、最近になって急に使い始めた奴がいたから、段々と電源の持ちが、悪くなってきたのだ。

その人物は、コンビ二弁当を箸でつまみ、白いご飯を口の中に放り込む。唐揚げに少し塩を振って、ご飯と一緒に食べる。それがうまくてしょうがないと思っていた。その人物の向かいにいる緑も、その人物と同じ意見のはずだ。

しかしその緑は、弁当ではなく、そのポータブルプレイヤーに視線を向けていた。画面の中では、主人公やらなんやらが、中で大活躍を繰り広げている。

その人物はそれを見ると、小さく言った。

「お前本当にそれ好きだな、りょくりゅう緑龍」

それを聞いた緑龍は、「うん…」と小さく答えるだけで、その後はポータブルプレイヤーの中に意識をゆだねて行った。見たその人物は、少しばかりため息交じりに、その緑龍に言った。

「食事の時くらい、普通に食えないか…？」

聞いた緑龍は、「うん…」と答える。

ここはもう恒例の、あれを質問するしかない。その人物は心の中で、笑う準備を整えた。

「緑龍、」



その人物は言った。

「1+1は？」

聞いた緑龍は、「うん…」と期待を裏切らない。

つまり、緑龍の意識は、今その人物の目の前にあるわけではなくて、今日の前にあるポータブルプレイヤーの中にあるということだ。なのに、緑龍の箸は、どんどんと進んで行く。それがどこか、おかしいようなそうでないような、そんな気がその人物にはした。

緑龍は、その名の通り緑色の龍、ドラゴンだ。赤龍や黄龍や青龍と同じく、龍だ。赤龍よりも少し大柄で、最近ポータブルプレイヤーでの映画鑑賞にはまっている。

つまり、今その人物の目の前で起こっていることだ。その人物は思いながら、緑龍の方に視線を向ける。そして、箸を進める。弁当の唐揚げがなくなっていく。

少し経った時だった。

急に緑龍は「はー！」と言いながら、箸を持ったまま伸びをした。「終わったー…」

どこか満足げな表情で、その人物に言った。それを聞いたその人物は、「面白かったか？」と緑龍に聞いた。

「うん、とっても。でも最後がなー…、何だかしっくりこないというか…」

緑龍は言いながら、どこか考えるような視線で、その人物に言った。

「だいすけ大介はどう思う？」

緑龍はその人物、大介に聞いた。

大介、かざと風戸 だいすけ大介は、天野下（略）の生徒の一人で、器だ。つまり、緑龍を見たり、緑龍とコミュニケーションを取ったりできる。しかし、そんなことはどうでもよくて、今どうでもよくないのは、緑龍のポータブルプレイヤーの事だった。

「俺もあのシーンはちよつとあれだったと思うな。何か、一気に俺たちを否定されたような、そんな感じ」

聞いた緑龍は、「だよな」と相槌を打つ。

「でも大介もそう思うんだね。やっぱり僕とおんなじ意見」

それを聞いた大介は、「まあ、お前はセンスがいいからな」と、緑龍に言いながら箸を進めた。そして、箸を止めてテーブルの上にある緑茶を、一口呷る。緑龍も、同じように緑茶を呷った。

「でもよく飽きないよなー、お前」

大介は言った。

聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。

「へ？」

緑龍は、大介に聞いた。

それを聞いた大介は、緑龍の方に、箸を進めながら言った。

「その映画見るの何回目だよ、緑龍」

聞いた緑龍は、同じように箸を進める。鱗まみれの手で、器用に箸を進めていく。「うーん」と緑龍は考える。

そして、緑龍は言った。

「多分、二十五回くらいだよ」

聞いた大介は、「だろ？」と緑龍に聞いた。緑龍は、「うん」と一度、大介の方に頷いた。頷く必要はないかもしれないが、一応頷いておく。

「普通そんなに、同じ映画何度も見ないって」

大介は言った。

それを聞いた緑龍は、「そうかなー…」と首をかしげる。そして、箸を進めながら考える。大介は、テーブルの上に置いてある緑茶を一口呷る。

「普通だよ、このくらい」

聞いた大介は、なんとなく緑龍と言う物を、理解出来たような気がした。つまり、こういうことなのかもしれない。

「お前、ヲタクだったのか…」

聞いた緑龍は、大介の方に視線を細める。

「そんなわけないよ」

少し面白くなさそうな声で、緑龍は大介に答えた。それを聞いた大介は、そうか？と思う。

ある一つの映画 ある一人の人間あるいはある一匹の龍（映画を見る 映画を見る 映画を見る 映画を見る 映画を見る）×5 執着 ヲタクだともう。

「いや、そんなことある。と言うかお前、何で最近その映画しか見ないんだよそれじゃあ」

大介は聞いた。

それを聞いた緑龍は、「だって、」と大介に言った。

「この映画好きなんだもん」

それは、緑龍の率直な意見だった。これ以上にないくらい、緑龍は綺麗に表現した。

それを聞いた大介は、「ほらな？」と緑龍に言った。少しだけ緑龍は、顔を赤くして俯いた。そして、色々と考えてみる。

緑龍は顔を上げる。

「で、でも、それは好きだからオタクってわけじゃ…」

それを聞いた大介は、「それじゃあよー」と言う。大介は、テレビの近くに山の様尾に積んであるディスクの箱を指さす。それを見て、緑龍はよく分からなくなる。

「あの映画は嫌いつてわけか？」

聞いた緑龍は、思わずはっとなった。

言葉に詰まって、口から声が出にくくなる。どこか酸っぱいような、そんな感覚が口の中に広がっていく。大介は、どこか悪魔的に笑っている。

「そ…、そんなことは…、無いんだけど…」

ぼそぼそぼそぼ、緑龍は呟いた。

聞いた大介は、「ほらなー」と緑龍に言った。緑龍は、口をむにゅむにゅと歪め、少しだけ俯いた。

「つまり、お前はヲタクってことだ、分かったか？」

それを聞いた緑龍は、「…、」と言う。

「分かりたくないけど…、分かったような分からないような…」  
それを聞いた大介は。「それじゃあもう一回言ってやろうか？」  
と緑龍を脅す。

聞いた緑龍は「理解しました十分わかりました完璧に把握しました」と、片言で大介に言った。

「そう、だろ？」

緑龍は、悲しそうに視線を沈めた。

大介は楽しそうに、弁当に箸を進める。そして再び、緑茶を一口呷った。

「でもよ」

大介は言った。

緑龍は、悲しそうな、素直な視線を大介に向ける。大介は、からあげ弁当の最後の唐揚げを、口の中に入れる。

「……」

緑龍は、少しばかり涙ぐむ。

「俺だってヲタクだから、」

一瞬、

世界が変わった。

そんなように、本気で緑龍には感じられた。まるで、ひっくり返ったものが、普通に戻るような、そんな感覚。

「え…、」

緑龍は、ぐすんと小さく涙ぐんだ。そして、手で軽く涙を払った。大介は、「ほら」と言いながら、箸で自分の後ろを指した。大介の後ろには、天井までもう既に届いている本の山が、三つか四つほどあった。ここまで山のように積んであると、どこか、爽快感に似たものがある。

「ああ…」

と緑龍は、気付いてはいたが、改めて知らされる。大介は本好きだ。

あれ？

ちよつと待てよ、と緑龍は自分の思考に一回歯止めをかける。そして、改めてさまざまなことを考えてみる。

緑龍 映画ヲタク（特にこの映画に関して） c f 大介 山のように積まれた本が大好き。

つまり、大介もヲタク？

本人も言っている。ヲタク。

「そっか…、」

どこか、大介に恍惚感を覚えた。緑龍は、目を見開いた。大介は、ただ単に、弁当に箸を進めていただけだった。

「大介は、ヲタクだったんだ…」

今まで気づかなかった、そっか、大介って、本が好きなだけじゃくて、ほんのヲタクだったんだ！

悟りに近い感覚を、緑龍は感じた。そっか、これが理解ってものなんだ！

「そっか…」

緑龍は、いつまでも笑っていた。

大介は、どこまで行っても普通に弁当を食べていた。

## 友人との帰り道

どこか気持ち悪いような、そうでないような感覚が、香奈と黄龍に取り巻いていた。どこか、妙な気分とも言えるし、ただ単に気持ちが悪いただけ、とも言えなくはなかった。

朝だった。香奈は、必ず朝食をとると決めている香奈も、その日の朝は、どこか朝食を食べる気がなかった。それは、朝食を食べる癖のない黄龍にも、同じことが言えた。つまりは、そう言うことだった。

香奈は、少しうなだれながら、床でとぐろを巻いている黄龍に言った。

「なんだか…、私、ちよつと気持ち悪い…」

聞いた黄龍は、「…うん」と香奈に言った。

「私も…」

いつもの大人びた口調はなく、そこには、重々しく倦怠に満ちた声が、代わりにあった。どこか、香奈はつられたように、気持ちさらに悪くなった。気がした。

「昨日の、ペペロンチーノソース…」

香奈は小さく言った。

それを聞いた黄龍は、「…、」小さく黙った。

「あれ、何だか怪しい気がしたのよ…、賞味期限もぎりぎりだったし…」

それを聞いた黄龍は、「ぎりぎりなんですよ…」と、息が詰まったような声で話す。香奈は、その日のことを思い出す。昨日の夜、羽並の部屋の台所で見つけたペペロンチーノソース。賞味期限は、ぎりぎり。

香奈はそれを見て、まだ食べられると思った。

だから、羽並には新しい方を渡して、香奈は、自分には賞味期限が早いペペロンチーノソースが来るようにしておいたのだ。

そうしたら、こうなった。

本当にそうか？と香奈は考える。そして、更に思考を巡らせる。気持ちが悪くなったのは今日の朝、つまり昨日の夜食べたものが悪かったということ。もしかしたら、パスタの方に原因が？

香奈は思い、少しばかり羽並のことが心配になる。

「もしかしたら、ソースじゃなくて、パスタの方に原因があるのかも……」

黄龍に言った。

それを聞いた黄龍は、「……本当に……？」と香奈に聞いた。香奈は答えようとした。

その時だった。

ピーンポーン

ドアベルの音だった。

それは、香奈の部屋に響き渡り、倦怠に包まれた香奈の耳に、突くようにして響いてきた。香奈は面倒くさそうに、視線をインターホンに向ける。

そこに映っているのは、羽並の顔。しかも、どこかすがすがしそうだ。

真反対だ。

見た香奈は、少しばかり怠そうな表情をして、玄関の方に歩み寄った。そして、どこか動きが鈍い手で、玄関の施錠を解く。

玄関を開ける。

「おはよー！」

元気な声で、香奈に挨拶する羽並。

それを聞いた香奈は、怠そうな口調で羽並に言った。「おはよう……」どこかくらい、そんな口調に、必然的に口が動く。

それを見た羽並は、少しばかり目を丸くする。「どうしたの？」と、心配そうな視線で香奈を見つめる。

黄龍は見た時、確信した。原因はパスタじゃない。ペペロンチーノのソースだ。パスタだったら、羽並は今こんなにぴんぴんしてい

るわけがない。

「なんだか、ちょっと気分が悪くて…」

香奈は言った。今日の笑顔は、いつもより光がなかった。

「大丈夫、香奈？今日の香奈、何だか神々しい光がドロドロした闇になったみたいよ」

香奈には、よく分からない。

「まさに不調ね」

そう、つまりそう。

香奈は思った。一度、羽並に頷くと、香奈は腹のあたりをさすった。

「おなかの調子がね…、何だか悪くって、気持ちもちよっと、悪いの…」

香奈は言った。

それを聞いた羽並は、少しばかり考える。「何か悪いものでも食べたの？」と、羽並は聞く。聞かれても、香奈は答えない。

「…、分からないわ…」

と言っておく。

それを聞いた羽並は、「そう、」と小さく言うつと、顔を上げた。

「それじゃあ、いいものあげる！」と羽並は言う。

聞いた香奈は、少しばかり視線を細める。「いい物？」と、羽並に言う。

羽並は自分のバッグの中をあさる。そして、小さな一つのポーチを取り出すと、その中から、小さなクリアケースのようなものを取り出す。そして、その中に入っているものを、「はい」と言って香奈に差し出す。

香奈は手にそれを持って、すぐにそれが丸薬だと知る。

「それ、効くのよー結構。十八種類の漢方成分が入ってて、お腹からくる倦怠感を取り払ってくれるのよ」

それを聞いた香奈は、羽並の言うことに不信感を覚える。これが本当かどうか、ではなく、これの使用期限が過ぎているのかいない



のか、だ。つまりは、そういうことだ。香奈は考えた。

「…、せっかくだし、飲んでおくわ」

香奈は言うと、羽並に言った。

「これ、水なしでも飲める…?」

聞いた羽並は、「うん」と答える。そして続ける。

「軽く飲めるわよ」

香奈は、少しばかり考える。もうよく分からなくなってくる。それならこれを飲んだ方がよさそうだ。確か、漢方成分が十八種類の腹からくる倦怠感を取り払ってくれる丸薬、だったはずだ。

香奈は思うと、息を止める。そしてそれを一気に飲み下す。

瞬間だった。

香奈の気分が、一気に爽快になって行った。今までにない倦怠感が一気に取り払われて、そして、それが一気に爽快感に代わっていく。

「あ…、」

小さく香奈は言った。

香奈の雰囲気、すこし光を取り戻した。

見た羽並は、ちょっとした笑顔で、香奈にこう質問する。

「どう?」

聞いた香奈は、すぐに一度頷いた。

「とってもいい気分!ありがとう!」

香奈の本音だった。

それを聞いた羽並は、「いえいえ、どういたしまして」と笑いなから言った。

「そうだわ!」

香奈は言った。

羽並は一瞬、それを聞いてきよんとする。香奈は、羽並の方に向いて、少しばかり説明した。

「黄龍も私とおんなじなの、だから…」

そこまで聞けば、十分理解できた。

それを聞いた羽並は、「はいはい」と笑いながら言うと、「おじやましーす」と言いながら上がってくる。そして、床には黄龍が、気怠そうにとぐろを巻いている。視線が、どこか鈍い光を放っている。

「あなたも？」

羽並は聞いた。

聞いた黄龍は、小さく目を閉じる。そして一度、小さく頷いた。見た羽並は、「オッケー」と言うと、再びバッグの中から、さっきの丸薬を取り出した。そしてそれを、黄龍の方に手渡した。黄龍は、ふらふらとした視界にそれをとらえる。そして、手を差し伸べる。

「これ、よく聞く薬なのよ。漢方の成分が入っててね、十八種類、それで、すぐにお腹からくる怠さが消えちゃうの！」

そう、それは劇的に。

香奈は、心の奥底からそう思った。今、香奈の腹の中は、爽快感であふれている。

羽並はその丸薬を、黄龍の手の上に軽く置いた。黄龍はそれを軽く眺め、少しばかり目を細める。そして、臭いをかいだり、よくよく観察する。

「…、消費期限は…？」

黄龍は聞いた。一瞬、香奈は黄龍のことをすごいと思う。それをストレートに聞く、と言うのが、まずすごいと思った。

それを聞いた羽並は、「へ？消費期限？」と言いながら、目を遠めて考え始める。

「薬に消費期限なんてないわよ、それに漢方よ？漢方は長持ちするのよー」

そうなんだー。

香奈は初めて知った。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細めた。そして、頭の中で、気怠い思考を巡らせた。それは遅く、あまり煌めいてはいなかった。

漢方 人参や木の実やキノコなど 生物なまもの 傷み易い。

つまり、そう言うことになるのではないだろうか…。と考える。

「…、本当に…？」

現に、ペペロンチーノの賞味期限は、切れていなかったのに、こんなに腹に来ている。つまり、そう言うことになるんじゃないだろうか。黄龍は考える。

「本当よ！」

羽並は言った。

黄龍も、そこまで詳しい知識を持っているわけではない。だから、勝手な憶測で、物を判断するわけにもいかない。

黄龍は思い、少しばかり目を細めた。

「…、分かったわ…」

どこかけだるそうに、その丸薬を飲んだ。黄龍は、少しばかり目を細めた。

香奈は、ドキドキとしていた。黄龍がどんなふうに、爽快感を示すのか、見てみたかったからだ。

香奈は目を輝かせた。

黄龍は、固く目をつぶった。

そして、開ける。

香奈の視線が、きらきらと輝いた。

「…、何も」

黄龍は言った。

羽並は一瞬、「え…ッ」と驚いた。香奈は、不思議で仕方がなかった。

「何で？私は一瞬で治ったのに…」

香奈は言った。

羽並はそれを聞くと、少しばかり考える。「まあ、個人差つてもがあるしね」と羽並は言った。  
本当にそれだけなのだろうか。

香奈は、少しばかり不思議で仕方がなかった。

「それじゃあ、行くわよ！」

羽並は言った。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、床に突っ伏したままだ。ただ、その状況を保っている。

「黄龍は？」

香奈は聞いた。

最近、黄龍も学校に行くようにはなっていた。黄龍も一緒に学校に行つて、他の龍と同じように、少しばかり勉強するような勢いで、香奈と一緒に学校に通っていた。しかし、学校と言う物にも限度がある。勉強よりも、個人の体調を重視しなければ、それは本末転倒だ。それが人であれ、龍であれ。

「…行くわ」

黄龍は言つと、立ち上がった。二足で立ち上がると、少しばかり視界がふらふらと揺れるのを感じた。倦怠感は、さっきよりも取れた…、のかな？

そんな雰囲気。

「大丈夫…？」

香奈は心配そうに、黄龍に聞いた。黄龍は聞いても、「このくらいならね」と答える。

羽並は、「頑張るわねー」と黄龍に言った。

聞いた黄龍は、小さく鼻で笑った。

「こんな程度で寝込んでるようじゃ、龍として失格よ」

本人がそう言うということは、つまりはそう言うこと、と言うことだろう。

羽並も香奈も、そう思った。

はあ、どうしよう。気分が、それ以外になかった。はあ、どうしよう、天井が真っ白だ、日の光がまぶしい、窓は開けっ放しなのに、かの一匹も入って来ない。東海林は思った。ましてや、赤い龍なん

て、入ってくるわけもなかった。

「…、どうしょ…」

東海林は言いながら、小さくため息を吐いた。はあ…、と言っても、言い咎める奴はいない。いつもそのことで言い咎められていると、逆に妙な気分になってくる。そもそも赤龍が、自分勝手だからいけないんだ。東海林は考える。しかし、だからと言って、東海林は赤龍との別離を望んだわけではない。つまり、こんなことは、誰も望んでなんかいない、と言うことだ。それは、簡単なことだった。東海林は思うと、ベッドでうなだれながら、ソファの方に視線を向ける。そこにはベージュと、一部黒しか見えない。赤なんて、ベージュからしたら浮いた色は、配色されているわけもなかった。東海林は床を見る。そこには茶色一色のフローリングが広がっているだけで、赤い、ざらざらした鱗なんて、広がってはいなかった。ため息をしても、それを言い咎められることもない。

食事をねだられることもない。そして、まだ眠いと言って、眠たがる奴もいない。つまり、東海林は一人、と言うことだ。それは、この部屋においてだ。いつもにおいてではない。

「…腹が減ったら、帰ってくるか…？」

思いたかっただけだ。

出もはつきりと考える。

赤龍と顔を合わせて、東海林はどうする？考える。俺は、どんな顔をして赤龍と向かい合えばいいんだ？

考えても、思いつけない。頭の中だけで考えられる領域を、とうに超えているような気分がしてならない。

東海林は、小さくため息をしようとした。

言い咎める奴はいない。

しかし、東海林はため息をしなかった。だから、東海林はため息をしなかった。代わりに、東海林は目を閉じた。そして、小さく呟くだけだった。

「どこにいるんだよ…」

心配だったことは、否定できない。しかし、それ以上に東海林は、心のどこかに、何か大切な空白があることに気付いたような、そんな気がした。

帰ってくるのか？この空白は。

東海林は思いながら、簡単な朝食を済ませた。そして、残りの一つが、何故か東海林の感覚を鈍化させた。どこか、強制できない何かが、飛んで行ってしまったかのような、そんなサムズアップだった。

東海林は小さくため息をすると、リビングに放り投げられているバッグを取った。そしてそれを肩にかけると、思わず、東海林はベランダの方に視線を向けてしまう。そこには、何も存在しない。

赤いものはない。

赤い龍はいない。

赤龍は、いない。

思いながらも、東海林は視線を沈めた。そして、少しばかり口を紡ぐ。東海林は振り返り、玄関の方から寮を出て行く。

声が、空に響いていた。どこか陽気で、どこか何も考えていないような、そんな声が、響いていた。

「だんだん涼しくなってきたねー青龍」

それは、雄大の声だった。

それを聞いた青龍は、雄大を背中に乗せながら、空を翼で扇ぐ。

青龍の、大きな翼が、空に浮き彫りになってあらわされる。どこか、それには美しさがある。

「…、涼しいのはいいい」

青龍は言った。

それを聞いた雄大は、「だよなー」と青龍に言った。そして雄大は、目を閉じて、小さく息を吸った。この爽快感がいいね。雄大は心の底から、本気で思った。

「このいい空気、いい感じだねー」

雄大は言った。

訳が分かるような、分からないような。雄大の言葉には、どこか二重の意味を兼ねているような、そんな気が青龍にはしくもなかった。

青龍は少しばかり視線を細める。そして、「…、」ただ沈黙を保つ。

「…、でも」

青龍は口にした。

「ん？」

雄大は青龍に言った。青龍はそれを聞くと、ただ飛びながら、雄大の方に声を放った。

「…寒いのは…、」  
言った。

聞いた雄大は、少しばかり考える。確か、青龍は寒いところが苦手だったはずだ。雄大は思う。それじゃあ、冷蔵庫の中になんて、絶対に入れないじゃん！

「それって、ブリザードよりもひどいじゃん！」

雄大は言った。

青龍は、小さく目を細めた。全く意味が分からない。と言うか、その言葉に意味を持っているのかすら、青龍には分からない。

「…、かもしれない」

そう答えておく。

それ以外に答えられない、とも青龍には言える。そもそも、そのブリザードが、一体何なのか、それがそもそも、青龍にはよく分かっているなかった。

「でしょ？ やっぱりはなぢドラゴンだよー」

もう分からない。

青龍は思うと、少しばかり視線を細めた。ただ、そこにはすがすがしく、青々しい世界が広がっている。ただそれだけのように見える。

「…、まあ…」

言ってみる。

はなぢドラゴン 鼻血ドラゴン 『ドラゴンの年』。つまり、ドラゴンの年はいいなー。

訳が分からない。

「でもさ、その曲作った人、他にもいっぱい曲出してるんだよね」

聞いた青龍は、視線を細める。雄大は、楽しそうに青龍の背中の上で語る。ただ、ぺちゃくちゃと語るだけだ。

「で、聞いてみたんだけどさ、それが壮絶で、まさにフィボナッチ数列って感じだった！」

雄大は言う。

青龍には意味が分からない。そもそも、雄大にはフィボナッチ数列の意味が、ちゃんと理解できているのだろうか。青龍は思いながら、少しばかり頭の中で考える。1 1 2 3 5 8 1 3 2 1…。考えて、すぐに飽きる。

「…、それは…、いいこと」

なのか？

青龍は考えない。もう、それは過ぎたことだ。過ぎたことは考えても仕方がない。そんなことは、もう分かっている。

青龍は思いながら、空を翼で扇いでいた。

その時だった。

何かが、青龍の感覚に引っかった。龍の感覚に引っかかる何か、それが青龍には、よく分からない。しかも、これはどこか、歪んだような、そんな感覚だ。

何だろう。青龍は思う。

そして、その方向に視線を向ける。その方向は、地面だ。アスファルトの上で、とぼとぼと歩く二足歩行の生き物。

つまり、人間。

あれは…

青龍が考え始めた、その時だった。



「東海林…？」

雄大は、地面の方を見ながら言った。

そこには、東海林が一人で、裏道を歩いている光景が、静かにがつていた。

「…、」

妙な感覚。

青龍は思いながら、少しばかり視線を細める。そして、その方向に沈黙する。「ねえ、」と雄大が言う。

青龍は、雄大の方に耳を傾ける。

「東海林の方に行こうよ！」

意味が分からない。

そもそも、何故今東海林のところに行く必要があるのか、それすら青龍には分からない。しかし、雄大が行きたいというのなら、青龍は飛んでいくしかない。雄大が青龍の食費と寝床を提供してくれているのだから、そのくらい当たり前だ。

青龍は、空中で体を傾け始める。そして、東海林の方に体を近づけて行った。

その感覚は、殆ど唐突と言っても過言ではなかった。東海林は思い、その空を扇ぐような音に気付く。

そして、視線を上に向ける。一瞬、東海林の視線が輝く。

太陽で、よけい輝いたようだった。

そこには、青龍と、背中に乗った雄大がいた。

青龍はアスファルトの上で四肢を突くと、雄大は元気よく、青龍から降りる。そして東海林の方に走って行く。

「おはよー」

どこまでも元気な返事が、東海林の耳の中に響いてきた。

それを見た東海林の目は、どこか冷めてきたような、そんな、いつもではありえないような雰囲気を見せていた。

「…、ああ、雄大か。おはよ…」

東海林は言った。

雄大は目を丸くする。「どったの…？せんせー」と雄大は東海林に聞く。青龍は、東海林の方に視線を向ける。

「あ、ちよつと、な」

東海林は言った。

雄大は、「ふーん」とつまらなさそうに言った。それ以上追及する気はなかったし、それ以上、何かを言う気はなかった。

青龍が、東海林に聞いた。

「…、赤龍は」

一瞬、

東海林は驚いた。これが、龍の鋭さ、と言う物なのだろうか。龍は、色々な意味で鋭い。感覚的にも、感情的にも。

「、流石青龍」

東海林は言った。

雄大は、「へ？」と小さく声を出す。そしてあたりを見回してみる。

「そう言えば、赤龍いないねー」

言った。

聞いた東海林は目を細める。「今更かよ…」と、少しばかり呆れたような声を出した。

青龍は、少しばかり、東海林を睨み様な視線で言った。東海林は、どこまでも活気がない、いつもとは全く違う視線を放っていた。

「…赤龍は」

青龍は言聞いた。そして、二足歩行に戻る。

聞いた東海林は、「あ、まあ…、その…」声を詰まらせる。

そして、東海林は少しばかり考える。どうしよう、ここで赤龍と喧嘩したって言うべきなのかな…、どうかな。でも言いたくないよ。うな気もしなくはないんだよな。でもな、どうしよう、どうすればいいんだろう…。

「どったの？」

雄大まで、東海林にそう聞いてきた。

それを聞いた東海林は、少しばかり目を細めた。あーあ…、言わないときつと納得してくれないぞ、これは。

東海林は思った。

そして、東海林は小さくため息を吐いた。「はあ…」今までよりも数段粘っこい、そんなため息だった。それは。

「ちよつと、赤龍と喧嘩した」

東海林は言った。

それを聞いた雄大は、「おー」と声を出す。何が「おー」なのかは分からない。

聞いた青龍は、少しばかり視線を細めた。

「…、今どこに」

それを聞いた東海林は、きつと赤龍のことだ、と頭の中で考える。そして、東海林は青龍に言った。

「知らない…、あいつ出て行っちゃって、ちよつとつまんないことで喧嘩してさ…、はあ…」

ため息の頻度が、一気に高くなった。それを、東海林自身理解していた。青龍は、少しばかり視線を細めた。

「ふーむ、それはいけませんな」

雄大が、どこか分かったような分からないような、そんな口調で東海林に言った。聞いた東海林は、雄大の方に視線を細めた。雄大は、どこか誇張するように、笑みを顔に浮かべている。

「喧嘩は、よくありませんわけがあるんですぞー」

つまり、喧嘩はよくない。そう言うことだろうか。

東海林は考えた。雄大は口でそう言うてはいるが、それが本当に雄大の真意かと聞かれると、それは東海林にもわからない。

「…、赤龍は、何て…」

雄大の隣で、青龍が言った。

聞いた東海林は、昨日の夜のことを思い出す。うまく思い出せない。赤龍がなんて言っつて、東海林の寮を飛び立っていったのか、そ

れは、覚えてもいないし、思い出したくもないことだった。

東海林は聞くと、青龍に言った。

「ごめん、あんまりよく覚えてない…」

聞いた青龍は、少しばかり視線を伏せた。

雄大は、「それって、」と東海林に聞く。雄大の口調は明るいが、

東海林は今、沈んだような、そんな気分だ。

「赤龍がなんで怒ってるのかは分からないってこと？」

聞いた東海林は、少しばかり視線を俯ける。はっきり言って、理由は分かっている。これかなー、程度だが、赤龍が起きている理由は分かっている。

でも、それをどう表現していいのか分からない。

「…いや、でも、俺にも言い分がある」

それを聞いた雄大は、「ふーん」とつまらなさそうに、東海林のほうに言った。

「それに、よく考えるとあいつが悪いんだ。あいつが、あんな凶々しいことばかり俺にするから…」

東海林は言いかけた。

その時、青龍の視線が、東海林の方に突き刺さった。そんな気が、東海林にはした。

「…、きつと」

青龍が言った。どこか穏やかな視線だった。

聞いた東海林は、青龍の方に視線を向ける。青龍はどこか堅実で、どこかまともそうな視線を、東海林の方に向けていた。

「…、赤龍も、同じことを言う」

東海林は、一瞬言葉を失った。

確かに、でもそんなのは間違ってる、でも、確かになんか…。ジレンマ。

「で、でもやっぱり…、でも…」

東海林は、自分の中で話が完結しないことを理解する。東海林は、頭の中で、色々なくちゃぐちゃとしたものを整理しようとする。整

理しようとするだけで、何がどうなっているか、東海林自身、よく分からなかった。

赤龍 図々しくってわがままでなんだかいつも偉そうで頭に来るやつ いつも？ いつも！ 本当に…？ …、

あーもうやんなってくる。

東海林は思い、思わず目をつぶった。小さく吐息をついた。「はあ…」

そして、東海林は空の方へと視線を向けた。その圧倒的な青の中に、赤い龍は飛んでいるだろうか。思いながら、東海林は視線を空の方へ仰ぐ。

「…、」

青龍は、東海林の方へと小さく黙っている。それが、今の東海林のためだ、そう分かっているからだ。

雄大は、どこかよく分からない、と言うような視線で、東海林の方に視線を向ける。東海林は、ただ茫然と、その蒼の中にあると思いたくなる赤を、目を動かして探していた。

少しばかり、変な気持ちになった。

どうやら、遅刻気味らしい。大介は、時計を見て確認した。

現時刻、八時五分。

まだ急げば間に合うが、そもそも、大介は急ぐ気なんてさらさらなかった。そもそも、大介が今急いだところで、全く何も起こらない。それを大介自身が、よく理解していた。

「もうすぐ学園祭かー…」

緑龍は、どこか遠くを見るように言った。そして、片手に持っている箸で、弁当をつまむ。さっき買ってきたばかりの、出来たてほやほやのコンビ二弁当だ。これ以上においしいものはない、と緑龍はある意味の確信を持っている。

「どうしたんだ？ 急に」

大介が、緑龍に言った。

それを聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。緑龍は、どこか楽しそうな視線を、大介の方に向ける。

「だって、僕そんなのはじめてだもん！」

緑龍は言った。

聞いた大介は、少しばかり頭の中で、色々と考えてみる。そして、緑龍にこう聞いた。

「龍の世界には、学校ってないのか？」

聞いた緑龍は、少しばかり大介に目を丸くした。そして、緑龍は小さく笑い、大介にこう言った。

「そんな、学校は人間特有のものだよ。勿論、いくら僕らが龍であっても、学校はなかったよ。それに、学校があったところで、誰も来ないと思うし」

聞いた大介は、緑龍に目を見開く。

「どうしてだ？」

大介は聞く。

聞いた緑龍は、近くのペットボトルの緑茶を一口啣る。そして、大介にこう言った。

「必要ないからだよ、僕らには」

聞いた大介は、どこか納得できたような、そんな感覚に埋もれた。そうだ、確かに、龍っていう物が自給自足の生き物なら、そんな学校なんてもの、かえって足かせになるだけだもん。確かに、学校って、人間特有って言われれば特有な気も、うーん…。

少し、難しいところだ。

「それに、」

緑龍は言った。

聞いた大介は、俯かせた視線を、緑龍の方に向け直した。

「龍は他の物を持ってたしね」

どこか、意味深だった。

しかし、それを詳しく聞いたところで、大介には、理解できるような気が微塵も起こらなかった。

つまりは、そういうことだ。

聞いた大介は、「ふうん」と小さく言いながら、弁当を箸でつまむ。そして時々、テーブルの上に置かれている緑茶を、口の中へと流して行く。

そして、大介は満腹になる。弁当の箱は空になる。

「ふう、満腹……」

大介は言った。そして、寮の壁に掛けられている時計を、小さく見つめてみた。そこには、こう表示されていた。

現時刻、八時十七分。

普通なら、こんな時間に出て、八時半の学校に間に合うわけがない。しかし、大介は余裕だった。殆ど八時三十分に出て、間に合うかもしれない。ただ、タイムラグが生じるかもしれないが。

緑龍も、どこか満足げに、自分の腹をさすりながら、小さくこう言った。

「ふう、満腹満腹……」

どこか、幸せそうな顔をしていた。

それを見た大介は、「緑龍、」と声を上げる。聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。大介は、少しばかり光のある視線で、緑龍に言った。

「そろそろ、行こう」

緑龍は聞くと、自分の後ろの壁にかかっている時計を見た。時刻は、八時十九分を指している。今二十分になった。

ダッシュをしても、駅に着くからそこで待ちぼうけだ。

つまり、今から普通に行ったところで、間に合うわけがない。しかし、大介は確信していた。これは、絶対に間に合う。と言うか、こんなんで遅れていたら、それこそ奇跡だ。

見た緑龍は、「もうそんな時間だね」と大介に言った。

緑龍は、弁当の包装を元に戻す。大介も同じことをする。そして、それらを勢いよく、ごみ箱の方へと捨て去る。

緑龍は立ち上がり、大介はベランダの窓を開ける。

緑龍はベランダへ先に出て、四肢をベランダの床につけて、翼を広げる。大介は、「いいか？」と緑龍に聞く。「いいよ」と緑龍は、いつものように返事をする。それを聞いた大介は緑龍の横に立ち、そして跨ぐ。

大介は緑龍の肩を持ち、緑龍は足に力をためていく。勿論翼にも。「いい？」

緑龍は聞いた。

聞いた大介は、「ああ、いつでも」と緑龍へ言った。

聞いた緑龍は、四肢に力を込める。

空を縦に割らんばかりに、緑龍は勢いよく舞い上がる。そして、青い空に、緑色の点が浮遊した。

やっぱり英語は大切だと、香奈は思った。英語ですべてを稼いでる人だっているくらいだし、やっぱり英語って大切なんだな。本当に、そう思える。

香奈は思うと、黒板に書かれている文字を、必死に頭の中で和訳する。黒板には、『I have been sick since yesterday.』と書かれている。和訳をすると『私は昨日から病気である』だ。これなら簡単な文章だ。

香奈は思いながら、その和訳をノートの下に書く。

黄龍は、小さく香奈のノートを覗く。香奈は必死に、こまごまとさまざまなことを書いている。先生の言った重要語句、関連話などが、綺麗に色分けされて書かれている。しかも字が非常にきれいだ。「…すごい…、きれい…」

黄龍は言った。

それは、香奈を小さくほめるものでもあった。しかし、その声は香奈には届かなかった。届くというよりは、反響される、と言った方が近い。



黄龍は、その香奈の集中力を見て、思わず驚いてしまう。香奈つて、意外と人の中ではすごい部類に入るのかもしれない。

そんな雰囲気を見せてしまうような、そんな真剣で真っ直ぐな視線だった。

黄龍は、どこか鼻が高いような、そんな気分になった。

だめだ、何も頭に入って来ない。これなら保健室に行つて、色々と考え事をしていた方がましかもしれない。

東海林は考えた。それ以外に、考えられることがなかった。なんとなく、どこことなく眠い、と言う感覚を持ちながら、東海林は黒板の方に視線を向ける。黒板には、『I have been sick since yesterday.』とかなんとか書かれている。はつきり言つて、読んでも読まなくてもどうでもいい。そもそも、『have』の後に『been』て何だ？そもそも、『been』って何だ？マメか？

東海林は考える。そして、どうでもよくなつてくる。

机に突つ伏して、どこかのなにかに打ちひしがれる。いつも後ろで聞こえてくる、かちゃか茶と言うゲーム音が、全く聞こえてこない。これがいつもの、日常の粹なのかもしれない。そう考えるが、いきなり戻つて来られると、逆に非日常が恋しくなる気がする。そんなもんな気がする。

「つまり、この『since』が『く』から」と言う意味なので、この後の『yesterday』にかかつて、『昨日から』と言う風な文になる。と言うことは、この文は…」

英語の先生のぺちやくちや攻撃。

東海林にスリープの呪文がかけられる。東海林は、頭の中で今の感覚を思い描いてみる。東海林は耐えた。

眠くなってくる。東海林は本気で思う。どんどんと、眠りへといざなわれていくような、そんな雰囲気が東海林にはある。

「…、」

机に突っ伏しているからか、黒板がさっぱり見えない。はつきり言って黒板が見える見えないはどうでもよくて、東海林にとっては別の何かがないことが重要だった。それを否定するかどうかは、東海林が考えられる範疇を越えている。

「…、赤龍…、いない…」

東海林は、小さく呟いてみる。それでも、後ろから聞こえてくるはずのないゲーム機のかちゃかちゃと言う音は、やはり聞こえてこない。

妙に、息が詰まるような、そんな雰囲気は東海林にはあった。その息が詰まる雰囲気は、何があるから息が詰まるのか、そんな難しいことを、東海林が知っているわけがなかった。

…、

考えてみる。

考えても、よく分からない。

考えて、それでも答えがない。

仕方がないと思う。思いたいのが、それは通用しない、と言うことを東海林は知っていたりする。

もしそこで妥協したら、恐らく、いや絶対に、東海林は赤龍に会えなくなるような、そんな気がする。

東海林は思う。

そして、少しばかり体を起こす。そこにある、黒板の封家を、真っ白なページに埋め尽くしていく。

このページを埋め尽くすところには、赤龍は帰ってくるだろうか。このノートを使い切るころには、赤龍は帰ってくるだろうか。何のフラグを立てれば、東海林のもとに赤龍が帰ってくるフラグが立つのだろうか。

考えて分かるものだったら、そんなものは苦労しない。

そういえば、青龍がいないな。雄大は思った。いつも授業中でも雄大の隣にいるのに、今だけは違う。どこか別の場所に、この時

間帯は行っている。いつもの事ではない。これは今日が初めてだ。雄大のもとを離れる時があったが、部活中のたった一回だけだ。授業中に離れるなんてことは、今日が初めてだった。

「えー、この『have』は勿論、主格によって変わるから、もし主語が『I』じゃなくて『He

』だったら……」

正直、雄大は英語なんてどうでもよかった。雄大にとって、英語なんてものは二の次でもなんでもなかった。ただそこにある言語だった、日本語と同じだ。日本語だって、雄大にとってはただの道具に過ぎない。というか、それ以上でもそれ以下でもない、本気で思っている。

そんな事より、バスーン吹きたいなー。  
本気で、雄大は思っていた。

学園祭が近いから、と言うことで、最近の文化部は何気に忙しい。鉄道研究部はいつもの倍以上のスピードと丁寧さでジオラマを作っているし、美術部だって、完成している展示品の何を展示しようか、色々と考えている。

雄大たち、つまり吹奏楽部も、それは同じだった。夜までずっと演奏を続ける。つまりは、そう言うことだ。

雄大は、小さくあくびをしようか迷う。英語の先生は、長々と説明をしている。続けている。雄大からは目を外している。

雄大は、小さくあくびをした。

それを言い咎める人なんてものは、勿論いなかった。そして、それを言い咎めようとする龍も、そこには存在しなかった。

バスーン吹きたーい、青龍どこー。

青龍は、バスーンの次だった。

青龍は、中庭にいた。

「……話は聞いた」

その声は、いつも通り淡々としたものだった。その口調そのもの

が、青龍を表しているような、そんな感覚もあった。

青龍は続けた。

「…、どうするつもり」

青龍は、赤龍に聞いた。

中庭にいるのは、青龍と赤龍、二人（二匹）だけだった。サボっている生徒何ていう物はいないし、ぼうつと空を見上げている人物なんて言うのも、悪と戦っているヒーローもいない。いつも通りの中庭だ。

「うむ…」

赤龍は、少しばかり困ったような、そんな表情で小さく言った。困っているのは、赤龍も同じだった。赤龍も、はっきり言って、こんなものはすぐにでも終わらせたいと思っている。と言うか、思わないほうが変だとも思う。こんな感覚は、赤龍は嫌いだった。つまり本当は、東海林と席の後ろにいて、そこでゲームをやりたかった。そして、いつも通りに、ただ時間を浪費するだけのほうが、赤龍にとって好ましかった。

しかし、なんとなく、出来ない。

なんとなく出来ないものは、出来ない。東海林のことを考えると、喉の奥が妙に酸っぱいような、苦いような感覚になる。

「…、」

青龍は、そんな困り果てた、悲しそうな赤龍の顔を見ながら、ただ淡々と視線を送っていた。そこにあるのは、いつもの赤龍ではなかった。いつもの赤龍は、もっと明るくて、元気があって、図々しい。ここにいる赤龍は、何か黙りこくっているだけ取り柄の、空気みたいな存在だった。

「…、うむ…」

赤龍は、更に困り果てる。赤龍は、少しばかり考える。そもそも、東海林がいけないんじゃない。東海林が赤龍のゲームを邪魔するから、こんなに変な感覚になるのじゃ。でも…、いや、そんな、でも…。分からなくなる。そしてごちゃごちゃになる。嫌になってくる。

「…、どうすれば、いいのじゃろうか…」

赤龍は青龍に言った。

聞いた青龍は、赤龍の方に視線を細める。赤龍は、視線を細めているだけだ。地面へと向けて、息を少しばかり詰まらせている。大きく吸うと、それがため息になりそう。赤龍は怖かった。

「…、どうすれば、って…」

青龍は言った。

赤龍は、青龍の方に視線を徐に向ける。青龍は、少しばかり黙りこくっている。ただ、黙っているだけだった。

「じゃから、赤龍がこれからどうするべきかと言っことじゃ…」  
言った。

しかし、青龍は答えない。赤龍は、自分の中にもやもやとなっている感覚があることに気が付く。

「…、」

青龍は、答えない。

赤龍は、まるで問いたただすかのように青龍に聞く。

「どうするべきなのじゃ、赤龍は！」

赤龍は声を張り上げる。

青龍の目が、冷たく赤龍に当たる。赤龍は、小さく口を紡ぐ。何も言えなくなる。考えは出来るが、どうしても、妙な気分になってくる。

「…、仲直り」

青龍は言った。それしか言えなかった。

「そんなことは分かっておる…」

赤龍は声を、床の方に向かって張る。声が、中庭にだけ響いていく。教室には届かない。少なくとも、東海林がいまいる教室には届かない。

「…、分かってるのじゃが…」

赤龍は言う。

青龍は言った。

「…分かってない」  
はつきりと。

聞いた赤龍は、青龍の方に声を張り上げる。赤龍の目が、いつもよりうるんでいる。秋風が、吹きつけてくる。

「どこが分かっていないというのじゃ！」

赤龍は、青龍を見張った。青龍が、一体何と答えるのか、それは赤龍には分からなかった。だからこそ、青龍に視線を張る必要があった。

それを聞いた青龍は、赤龍に言った。

「…、全部」

意味が分からなかった。

そもそも、赤龍の今の気持ちを理解できるのは、赤龍本人だけだ。つまり、青龍に分かるわけがない。

しかし、青龍の言葉は、どこか自然と、信じ込んでしまいたくなるような、そんなものがあつた。

「ぜ、全部じゃと…、」

赤龍は、小さく言った。聞いた青龍は、赤龍の視線をまっすぐに覗く。赤龍は、目を背けなくなる。そむけられるなら、の話ではあるが。

「…、そう」

青龍は静かに言った。

赤龍は、口を紡いだ。視線を下して、青龍の声だけを聴く。声が、赤龍の中に響いてくるようで、少しかかり気持ちが悪かつた。

「…、ここにいる時点で、まだ赤龍には、分かっていない」

はつきり言つて、青龍が言っている言葉の意味が、よく分かっていなかった。ここにいる時点でダメ？どういうことじゃ？それ…。

赤龍は考える。考えてどうにかできることでもない。

赤龍は、青龍に言った。

「どういう、ことじゃ。もっと、分かりやすく言わんか…」  
喉が渴いてくる。

赤龍の中で、どんどんと水のようなものが失われていくことを感知する。何故だかは分からないが、赤龍は、水がほしいと思っている。

青龍は、赤龍に言った。

「…、」

青龍は黙る。何故かは分からない。ただ、青龍の中で、思考が渦巻いているような気がしたのは、確かだった。だから、赤龍は何も言わなかった。何を言っても、無駄だったからだ。ここでは、何を言っても無駄だ。

「…、赤龍が、東海林の隣にいないから」

青龍は言った。

意味が分からなかった。

分からなければ、東海林の隣にいられないのだろうか。

赤龍は考えた。考えるだけで、赤龍にはそれ以外、何かをできるわけではなかった。赤龍は、ただ黙っているだけだった。

昼食の時間になった。昼食と言ったら、勿論弁当だ。香奈は専ら、弁当派だった。勿論、自分で作ったお手製だった。

「昨日のおかずの残りね」

香奈の隣で立っている黄龍が、香奈に言った。聞いた香奈は、「うん」と声を明るく張り上げた。

昨日、羽並に食事を誘われる前、軽めにとった夕食の残りだ。その時は満腹で、香奈は食べきれなかったおかずを、明日の弁当の分に回したのだ。つまり、今香奈が笑いながら持っているそれだ。

香奈は、楽しそうに弁当を箸で食べていく。美味しいのか美味しくないのか、と聞かれても、はっきり言って困る味だった。自分が作ったから、と言うのもあるかもしれない。

「そうだけど、これしかなかったしね」

香奈は言った。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細めた。そして、「確かに…」

と小さめに呟いた。

香奈は食べながら、「そういえば」と黄龍に言う。聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、黄龍に聞くように言った。

「今日って部活よね？」

聞いた黄龍は、少しばかり目を細める。「ええ」と、黄龍は軽く答える。

「学園祭が近いからって、もうみんな学園祭に向けてまっしぐらじゃない」

黄龍は言った。

聞いた香奈は、「だったら、」と黄龍に言った。

「今日は帰りも遅くなっちゃいそうだし、どこか、食べて帰っちゃう？」

それを聞いた黄龍は、少しばかり目を細める。「夜間のコンビニ以外の飲食店の出入り禁止は…？」言っても無駄だと分かっているが、黄龍は言った。

それを聞いた香奈は、

「大丈夫よ、ね？」

やはり、言って無駄だった。と黄龍が思うような、そんな言葉が返ってきた。

黄龍は小さくため息を吐きながら、香奈は笑いながら弁当をつまんでいる。楽しそうに、弁当を食べていく。

その時だった。

香奈の机の上に、急に手が現れた。

手は、まるでドアをたたく辰みたいで、そんな形に整えられて、

香奈の机を軽く数回、叩いた。

コンコン…

聞いた香奈は、その腕の主に視線を向けた。そこにいたのは、女子だった。

「あら、畔ちゃん」

顔立ちが整った女子の名前は、火蔵 畔だった。畔は、香奈の班



と同じ班で、香奈とそこその関係を持った人物だった。別に、香奈は嫌いではなかった。勿論、畔もきらいではない。

それを聞いた畔は、香奈の方に声を放った。何処か微かで、しかし芯がしっかりしたような声。

「香奈ちゃん、今日一緒に帰ろうよ」

いきなりだった。

はつきり言つて、香奈は驚いてしまった。

黄龍も、畔の存在は知っていた。しかし、中がそこそいいだけで、そこまでいいというわけではなかった。つまり、いきなり「一緒に帰ろう」なんて普通言わないものだった。しかも、この頃は学園祭ムードだ。畔だって、学園祭が吹奏楽部にとって、大変ではないはずがないことは、重々承知のはずだった。

しかし、そこであえて聞いてくる。

何だろう、香奈は思った。黄龍は、驚いただけで、それ以外の感情は特になかった。

「えっと、いいけど…」

香奈は言いかけた。小さく、香奈は黄龍の方に視線を向ける。黄龍は首をかしげる。

聞いた畔は、嬉しそうに「やったー！」と言った。目を開く。その眼は、まっすぐかなをとらえている。目の中に、しっかりと香奈が映っている。

「でも、私今日部活よ？だから一緒に帰るとなると…」

香奈は言った。

そこまで言えば、普通は分かる。香奈はそう思ったからだ。そして、普通ここまで言えば、自信の損得勘定で、先に帰るのと待つのを天秤にかける。そして普通なら、ここでその天秤が、先に帰る方が傾く。

それは、あくまで香奈の経験だった。しかし、それは常に事実だった。

「いいわ」

その事実が、今覆された。

一瞬、何なのかよく分からなくなった。一瞬、畔が何を考えているのか、よく分からなくなった。先に帰るよりも、一緒に帰ることを畔は選んだ。それほどの仲なら、まだ分からなくもない。東海林に同じ台詞を、畔と同じ境遇だったら素直に喜んでいたはずだ。しかし、香奈はその言葉に、喜びを感じることは少なかった。

疑問。

それだけだった。

黄龍は、少しばかり意外そうな顔で、畔の方に視線を向けている。畔には黄龍が見えるはずがないから、黄龍が見ているだなんて、畔には想像もつかないはずだ。

「私、香奈を待つ」

それを聞いた香奈は、さっきチャイムが鳴ったような、そんな気がして、黒板の上にかかっている時計を、視界に入れた。まだ、チャイムが鳴る時間には早かったことを、香奈は覚えていた。

「部活でしょ、知ってるわ」

畔は言った。

聞いた香奈は、少しばかりよく分からなくなってくる。何故畔が、今香奈にこんなことを言っているのか。全くとっていいほど、分からなかった。

「でも、私香奈ちゃんと一緒に帰りたいわ」

聞いた香奈は、少し困った。

ここでどう答えようと、香奈の勝手だ。そもそも、いいけど、と言ったばかりだ。それに、その考えは今でもわかることは無かった。変わったのは、何か全く別の物だ。香奈は、それを全ては理解していなかった。

香奈は、少し困っていた。

しかし、今聞かれているものが何だかを思い出すと、香奈は言った。

「…、いいわよ」

聞いた畔は、「それじゃあ、」香奈に嬉しそうな表情を向ける。  
「待つてるから、帰るとき教えてね、教室にいるから」

何か、香奈はその台詞に取っ掛かりのようなものを感じた。何だろうか。考えてみる。分からない。

まあ、いつか。

香奈は思った。

畔はどこか満足げに、香奈の方へと視線を向けた。そして、少しばかり楽しそうに、香奈に言った。

「それじゃあ、一緒に帰ろうねー」

言いながら、どこかに行く。

香奈はそれを見ながら、畔に声を張った。

「うん、待っててねー」

どこか、力のない声だった。香奈自身、その声に力が入っていないことを、重々承知していた。

聞いた黄龍は、畔の方に視線を向ける。香奈は、顔では笑っている。顔でしか笑っていない、と言っべきだろうか。

「なんだか、妙ね」

黄龍は言った。

聞いた香奈は、少しばかり笑いながら、若干目を細めた。誰にも分からない程度に、しかし黄龍には、しっかりと分かる程度に。

「…うん」

小さくではあるが、呟いた。

さっぱりと言っているほど、香奈には分からなかった。畔は、ただの班員だ。香奈にとっては、それ以上でもそれ以下でもない、ただの班員。畔にとっても、それは同じではないだろうか。

考えてみたが、途中でよく分からなくなった。

途中で、妙な考えが浮かんできた。

「そっか！」

香奈は納得したように、声を張り上げた。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、目に確

信を持ちながら、黄龍の方に声を張り上げた。

「畔は、実は私と仲良しになりたいのよ！」

…？

黄龍は、沈黙した。

香奈は、明るそうに語った。

「だから、まず第一歩として、一緒に帰ることを選んだのよ。いいと思うな、それ」

香奈は自分から、ひとりでに語って行っていることを知らない。

黄龍は、香奈にただ語らせているだけだった。

香奈は、黄龍の方に真っ直ぐな、よどみのない視線を向けた。

「私も畔と仲良くしなくちゃね！」

香奈は言った。

黄龍には、意味が分からなかった。

しかし、明るいということがいいことだということとは、黄龍には分かっていった。だから、黄龍は何を言い咎めるでもなかった。

黄龍は、少しばかり香奈へと笑顔を向けた。

香奈は、笑顔だった。いつものように、輝かしい笑顔を放っていた。

吹奏楽部は、そんなに変わったところはなかった。学園祭へ向けて、曲をただひたすら練習して、そして駄目な部分を指摘される。そして、一つ一つ、修正がなされていく。一つ一つ、みんなの意志が一つになって行く。そこに、雑念なんてものがあったら、天野下の吹奏楽部は、きっと金賞なんて取れないだろう。香奈は思った。香奈は、思いながらあたりを見回した。楽器を持って規則正しく並べられた椅子に、みんなは座っている。きらきらと光るものから、厳かな輝きを放つものまである。楽器は、そういう物だ。消耗品のシャーペンとはわけが違う。

「それじゃあ、もう一A'から」

撥を持った顧問の先生、下滝先生しもたきが、中学生と高校生の部員に言った。部員たちはまじめそうに、『はい』と声を落着かせながら響かせる。勿論香奈も、返事をしている。

それは、練習番号だった。いちいち、この小節は何小節目だから、なんて数えていられないから、共通の区切りとして、練習番号が設けられている。しかし、その中でA'を見ることは初めてだった。それは香奈にとっても、恐らくみんなにとっても同じだった。

しかし、まだ分からなかった。

香奈は、自分の手の中にあるテナーサックスを見ながら、小さく思った。近くには黄龍がいて、香奈の演奏を聞いている。そしてたまに、「こうした方がいいんじゃない？」と言うようなことを言ってくれる。そしてその通りにしてみると、香奈にとって、音楽がよい良い方向に行くような、そんな感覚がある。黄龍は、「私の感性を言ってみただけ」と、どこか謙遜したような様子で言う。

テナーサックスが、妙に気怠く感じられた。

香奈は、音楽室の窓から、自分のクラスの方に視線を向ける。クラスにはまだ、電気がともっている。この学校は設備がよく、人がいる部屋には明かりがつき、いない部屋は暗くなるという機能がついていた。つまり、明るいということは、まだあそこに、誰かが残っているということだ。

下滝先生の撥が、空中を横切った。

みんなは息を吸った。

香奈は出遅れた。しかしそれでも、香奈は演奏を続ける。その曲は、香奈は結構好きだった。ノリがよくて、非常に吹きやすい。少し早いのが難点ではあるが、それでも、ノリの良さは、いあつまでの曲よりは、一番よく思えた。吹奏楽の曲だからって、別に陰気くさい音楽や、あまり知らない音楽、と関連付けられるのはただの偏見で、実は様々なジャンルがあった。そこにあるのは、どちらかと言うと、J-POPに近かった。

「そこ、」

下滝先生は、いつもは寡黙な先生だ。寡黙で、どこか厳かで、どこか暗いような、そんな印象を持つ先生だ。しかし、いくら寡黙だからとはいえ、合奏中に何も言わないというのは、問題がある。

「そのスタッカート、もう少し」

スタッカート 区切る。

確か、そんな意味があつたはずだ。香奈は思い出す。そして、音楽的なスタッカートは、やはり他の音とよく区切る、と言うことになっっている。

『はい』

みんなの声が、音楽室に響き渡った。

どこか、香奈は乗り気ではなかった。しかし、そんな気分は、すぐに香奈の中で吹っ飛んで行ったのを覚えている。

だめだ、ため息をしてもし甲斐がない…。何処にいろんだよ…、本当に。

東海林は思いながら、バスクラリネット（バスクラ）を持ちながら、少しばかり目を細める。いつもなら、音楽室の壁に寄りかかって、腕を組んでそこにある音楽をひたすら聞いているだけの赤龍が目につくはずなのに、音楽室の壁には、白や茶色と言った標準職しか目につくことは無く、そもそも赤の要素なんてそこには全く存在しなかった、と言うことは、答えは簡単だ、と東海林は思う。

赤龍が、まだいない。

それは、簡単な結論で、それ自体結論になってほしくない結論だった。赤龍がいないというのが、こんなにも違和感があるものだと、東海林には想像もつかなかった。

「そのスタッカート、もう少し」

スタッカート 切り離す 今の東海林と赤龍。

つまり、そう言うことだ。

スタッカートこそが、今の東海林と赤龍の関係だ。それ以外に、

何があるわけでもなかった。空と言ってもいいような、そんな空白を東海林は、スタッカートに持っていた。

『はい』

声が、一斉にその音楽室に響く。東海林は小さく返事をする。そして隣にいる雄大は、バスーンから口を離そうともしない。問題あり、と言っても過言ではない。そもそも、下滝先生の声が聞こえてもなお、雄大はすっと、バスーンの練習をしている。つまり、下滝先生の言葉は聞く気がない、ということだ。それはいろいろな意味で問題ありだ。

「それじゃあ、もう一A'から」

さつきと同じ場所だ。

東海林は思うと、下滝先生の方に視線を向けた。下滝先生は、タクト代わりの撥を片手に、右手でそれを上げる。みんなは一斉に、その撥の方に視線を向ける。流石は吹奏楽部、東海林は思う。

そして一気に奮われる。

東海林は、簡単なメロディーを吹きながら、隣にいる雄大を見る。雄大は、いつもよりかはゆっくりめな指の動きで、バスーンの音を奏でていた。いつもはもつと速い。速すぎて、みんな驚いてしまうくらいだ。

それを吹いているうちに、いつの間にか曲が後半になった。譜面の半分まで行くと、クラリネットのソロになる。そこは、東海林の所属しているクラリネットパートでも、もつとも腕が立つと言われている憶羅先輩おくらがやっている。憶羅先輩は、それを軽々と吹きこなす。ソロのはずなのに、そこにただ風が吹いているだけかのような、そんな爽快感がそこにはあった。

「…、流石だな…」

小さく、東海林の隣で声が聞こえた。その声は、雄大の物ではない。雄大の方ではない東海林の隣の、先輩の声だった。

あきさた  
秋沙汰先輩だった。

あきさた  
秋沙汰 ちか 千華先輩は、部内でもうまいレベルにいる先輩で、その

実力で、学校に一つだけあるバセットホーンを、その実力で勝ち取った、クラリネットパートの先輩だ。つまり、秋沙汰先輩が言う「流石」がどの程度の物なのか、はつきり言って東海林には分からなかった。

下滝先生にも、何を言われることもなく、曲が進んで行く。ソロは全て終わり、みんなと合わせ、そして曲は、いい雰囲気で閉じた。それでも、東海林の心が晴れることは無かった。その部屋には、赤の要素が少なすぎた。からだ。

楽器を片付けている最中だった。その声が聞こえたのは。

その声はどこか軽快で、それでいて、どこかおどけたような、そんなような口調だった。

「だーいすけ」

大介は、ピッコロを演奏している。吹奏楽部の中でピッコロの存在は、はつきり言って大介は、あってもなくてもどちらでもいいような気しかしない。特定の曲には必要だが、それ以外には、別に対応して必要がない物。だともう。

それは、雄大の声だった。

雄大は、もうバスーンを片付け終えたのか、大介のもとにやって来ていたのだ。大介はそれを聞くと、「お前もう片付け終わったのか」と少しばかり驚く。簡単に、「うん」と雄大は答える。

聞いた大介は、少しばかり考える。そして、少しばかり雄大の方に視線を細める。雄大は、少しばかり意外そうな表情で、大介のを見る。

「お前、もしかして適当に片づけてるんじゃないだろうな」

適当 テキトー ちゃんとしてない感じ。

楽器に適当なんて、そんなことは許されない。

大介は思った。大介はそもそも、ピッコロのプロを目指していた。だから、楽器の手入れには、人一倍敏感だった。

「そんな事ないよ大介」



雄大は、はつきりと大介に言った。雄大の目は、まっすぐ、大介の方に向いている。大介はそれを見ると、少しばかり目を細めた。雄大は、楽しそうに微笑んでいる。何が楽しいのかは、全く分からない。

「どうだかな…」

大介は、雄大に言った。

「そつえばさ、」

雄大は言った。

聞いた大介は、雄大の方に視線を向けた。雄大は、大介に続けた。

「青龍知らない？」

聞いた大介は、一瞬、何のことがよクラからなくなる。

「青龍？」

考えても、分からない。

「が、どうした？」

大介は言った。

それを聞いた雄大は、「だから、青龍！」と大介に言う。聞いても、大介にはよく分からない。理解できないのではなく、情報が少なすぎる。

「ちよつと待て、」

大介は雄大に言った。

聞いた雄大は、大介にじつと視線を向ける。

「青龍だけじゃなんだかないから、ちゃんと答えてくれ、青龍がどうしたんだ？」

聞いた雄大は、「あのね」と笑いながら言う。

「青龍がどっか行っちゃったんだよねー」  
笑って言えることではない。

大介は小さく、そう考える。しかし、雄大に常識と言う物が通用するかという点を考えてみると、それは限りなく、否、と言うことになるかもしれない。

「どっか行ったんならどっか行ったらしく、ちゃんと慌てる」

大介は雄大に言った。

聞いた雄大は、少しばかり視線を細める。そしていろいろと考える。

「…、何で？」

そう聞かれるのは非常に困る。

大介は思うと、少しばかり目を細める。「だって、普通はな、」と大介は、語り始める。

「そう言う、失踪みたいなきことが起こったら、慌てるもんなんだ。分かったか？」

大介は聞いた。

雄大は言った。

「分かんない」

元気がいい返事だったことは認める。それ以外は断固却下する。大介の心の中で、雄大に思ったことだった。

「…、まあ、お前だもんな」

雄大は、そう言われても笑っている。そして雄大は、大介に言う。  
「それで、大介…、じゃなかった、青龍知らない？」

雄大は、間違えた部分を訂正した。

大介はそれを聞くと、少しばかり目を細めた。「青龍か…」と、自分の記憶を手繰ってみる。

緑龍が、水伸び場から帰ってくる。そして、「あれ、」と雄大に言った。雄大は、その方向に視線を向けた。

「雄大さん、どうも」

緑龍は、礼儀正しくそう言った。

聞いた雄大は、「うん、どうも」と等閑だった。  
「どうしたんですか？こんな時間に」

緑龍は言った。

聞いた雄大は、緑龍に返した。

「ちよつと、部活に来ててね」

雄大は言った。

緑龍はそのサイクルに、若干の違和感を感じた。しかし、「まあいつか」となる。そして、大介の方に視線を向ける。

「お前、青龍がどこにいるか知らないか？」

大介は、緑龍に言った。

聞いた緑龍は、「へ？」と、よく分からない、と言うような表情をして、大介の方を向いている。

「青龍が、どうかしたの？」

聞いた大介は、こう答えた。

「いなくなったらしいんだ」

聞いた緑龍は、目を大きく見開いた。口の中に、無意識に空気がたまっていくのを、緑龍は感じた。

「えー！」

大声だった。

それを聞いた大介は、「お前、うるさいぞ」と緑龍に言った。

「それで、知ってる？」

雄大が、緑龍に聞いてきた。

聞いた緑龍は、「うーん…」と自分の記憶を手繰ってみる。確か、

青龍は無言で、どこかに行ったはず。

「合奏中に、どこかに行ったのは覚えてますけど…」

聞いた雄大は、「場所分かる？」と緑龍に聞く。

場所、場所、場所…。

緑龍は考え始める。しかし、どうしても分からないものは、分からない。考えて分からないのなら、その道筋が必要だ。

「ちよつと、やってみます」

緑龍は言った。

聞いた大介は、なんとなく緑龍が、何をしようとしているのかわかった。

緑龍は、目を細めた。

あたりの音が、風を伝わって、緑龍の耳に、どんな些細な音でも届く。みんなの声、楽器の音、先生のキーボードのタイピングの音、

外で走っている車の音、木々が奏でる葉の音。

風が、揺れた。

声だ。

緑龍の耳に、一組の会話が、聞こえてきた。はっとなった。

『じゃから、どうすればいいんじやろうか…』

それは、赤龍の声だった。

非常に小さいが、それは赤龍の声だった。赤龍の声は、多分どこに行っても聞き間違いはしないと思う。緑龍は思った。

『…、東海林のところに行けばいい』

それは、青龍の声だった。

よく分からなかった。しかし、緑龍はその会話をよく聞いていた。『でも、東海林に会って何をすればいいのか、分からのじゃ…』

赤龍は、どこか不安そうに、青龍に言った。

青龍は、少しばかり呆れながら、赤龍の方に声を放った。

『…、話せばいい』

言い放つような、そんな適当に近い言葉だった、そんなような気が、緑龍にはした。

赤龍と青龍は、暗い裏道に立っていた。そもそも、龍は器か術師でないと、見ることは出来ない。だから、そもそも龍がいるなんて認識はされず、ただそこは、普通の道として処理される。普通の人には。

「何をじゃ…！」

困ったような表情で、赤龍が青龍に言った。

青龍は、少しばかり顔をしかめる。言うことなんて、決まっている。

「…、謝罪の言葉」

聞いた赤龍は、「何で赤龍が謝らなくてはいけないのじゃ！」と言い始める。青龍は、小さく吐息を吐く。

「そもそも、東海林が赤龍のゲームの邪魔をしたから悪いのじゃ！」

東海林がそんなことで赤龍を責めてきたりしなければ、赤龍は普通に過ごせたのじゃ！じゃが…、赤龍は何故、東海林の寮から飛び出して行ってしまったのじゃろうか…」

赤龍は考え始める。

こついうのは、勝手に考えさせるのがいい。

青龍は、分かっていた。だから何も言わなかった。何を言っても、ここでは雑音になるだけだ。

「…うーむ…」

赤龍は唸る。

「…、」

青龍は沈黙する。

街灯だけが、そこにある光だった。そこにある光は、そんなに明るくなく、しかし不十分ではない光だった。

赤龍は、「うーむ…」とうなった。

「…、」

青龍は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、どこか全く別の方向を向きながら、違う方向を見て考えている。

「…、つまり、どういうことじゃ…？東海林が悪いのかの？それとも、勝手に出て行つた赤龍が悪いのかの…？」

赤龍は言つた。

そんなことを言われても、はっきり言つて青龍には困るだけだった。そんなことは、個人の勝手だと思う。青龍は少なくとも、そう考えていた。

「そもそも、何がこの場合悪いことなのじゃろう…」

赤龍は小さく言つた。

聞いた青龍は、「…、」と沈黙した。

「…東海林は悪い…」

青龍は言つた。

その雰囲気は、肯定ではなく、疑問だった。

聞いた赤龍は、青龍の方に視線を向けた。青龍は、二つの目に、

しっかりと赤龍を映し出していた。

「う…、む？」

赤龍は、小さく青龍に言った。

青龍の目に、引き込まれていくような、そんな感覚に近かった。

「…、それとも、赤龍がわるい」

青龍は言った。それも、肯定でなくて、疑問に他ならなかった。

それ以外の、何でもなかった。

赤龍には、よく分からなくなる。

青龍は、少しばかり目をつぶった。

「…、赤龍には…」

小さく言いかけた。そして、赤龍は小さく口を紡いだ。

青龍は、赤龍にこう言うだけだった。

「…、俺からすれば、」  
言う。

「…、二人とも悪い」

赤龍は聞くと、青龍の方に目を少しだけ丸くする。青龍は、どこまでも冷淡で、それでいて、どこまでもまっすぐな、そんな視線をしていたことは、確かだった。

「それは、赤龍も…、と言うこと、かの…？」

赤龍は聞いた。

それを聞いた青龍は、一度目を閉じる。何も言いはしない。言うだけ無駄だ。

赤龍は、少しばかり俯いた。そして、街灯に体を寄せた。小さく吐息を吐いた。ため息ではない。

「…、うむ…」

青龍は、更に赤龍に言った。

「…、どうするつもり」

疑問だった。

そんなことを言われても、今の赤龍に、それをどうこうできるほどの物がないことは、重々承知していた。赤龍自身も、青龍もだ。

「…、どうする、と言われても、の…」

赤龍は小さく言った。

目を遠くしながら、少しばかり東海林の顔を思い浮かべてみる。喉が、妙に、乾いたような感覚と同じような、そんな感覚になってくる。

「…、どうする…、と言われても…、の…、」

赤龍は、小さく呟く。

考えたりない。

まだ、納得し切れていない。ともいえるかもしれない。

赤龍は思うと、飛び立った。

ただ、それだけだった。

青龍は、それをただ、見据えているだけだった。ただ、沈黙がその場に残って、その場に、青龍が残っただけだった。

聞こえた音は、それだった。

ただ、それをどう解釈するかは、緑龍自身の勝手かも知れなかった。だから、緑龍は口を紡いだ。

「どうだ？」

大介が、緑龍に聞いてきた。

どう答えればいいかは、よく分からない。しかし、その後の音に、羽音のようなものが二つ聞こえた。一つは遠くへ行って、もう一つはこちらに向かってきた。

赤龍か、青龍かは知らない。

しかし、あの会話の内容を考えると、もしかしたら、青龍の方が確立としては高いかもしれない。

緑龍は思った。

「大丈夫です」

緑龍は雄大に言った。

聞いた雄大は、何が大丈夫なのかよく分からない。

緑龍は、雄大の方に、続けて言った。

「青龍は、今こっちに向かってきているようですから」

口が、妙に乾燥してくるような、そんな感じ。

「おー、帰ってくるかー」

雄大としては、帰って来ても帰って来なくても、そんなに生活自体に支障はない気がする。しかし、やはりいいないと、何か違和感がある。

「よかったな、雄大」

大介は雄大に言った。雄大は、いつもどおりの表情をしながら、「うん」と空返事をする。別に雄大は、青龍がいてもいなくてもすることは変わらない、と思っている。実際そうだし、そもそも、生活で青龍に影響されていることなんて、ほとんどない。

「やっと帰ってくるよー」

雄大は言った。

緑龍は、さつきから妙な気がしてならなかった。妙な気分で、何か、おかしい気分がする。あの会話の内容が、何か引つかかるような、そんな気がしなくてもないから、だろうか。

青龍 雄大 良好。

赤龍 東海林 …？

東海林に、色々と聞かなければいけないことがありそうだ。

緑龍は、少しばかり考えた。

教室に寄った。そしてやはり、そこにいるのは畔だった。それ以外に、誰もいなかった。

畔は、少しばかり暗くなっている教室で、一人本を読んでいた。光が、畔だけに照らされているような、そんな風にも香奈は見えた。そこまでして、一緒に帰りたかったの？

香奈は考える。しかし、考えたところで分かることは少ない。

香奈は教室の中に入る。がらがらがら、と、ガラス張りのドアが



開く。

畔はその音を聞くと、すぐに香奈の方に視線を向ける。「香奈ちゃん」と言いながら笑い、本にしおりを挟む。本をバッグに入れてそれを肩にかけると、すぐに香奈の方に近寄ってくる。違和感。

「それじゃあ、一緒に帰りましょ」

畔は言った。

聞いた香奈は、一瞬黄龍と視線を合わせた。

「ええ」

どこか、力のこもっていない声で、香奈は返事をする。畔は一人、元氣そうに廊下をリードする。

まあいつか。

そう思いながら、香奈は畔の方に近寄る。別に、本人が何かをたくらんでいるわけでもないし、別に、何か悪いことをしようとしているわけではない。ただ、一緒に帰りたがっているだけだ。

大丈夫。

香奈は思う。

「…、何なのかしらね、畔って」

黄龍が言った。流石に、畔の前で黄龍と話すことは出来ない。そんなことをしたら、怪しまれるだけだ。

香奈は思い、畔に言った。

「ところで、何で私と帰りたいと思ったの？」

聞いた畔は、学校を出る。香奈もそれに続き、ドアから学校を出る。

「それは、もう少ししたら教えてあげるね」

愛想がいい。ただそれだけ。

それだけで、十分な気がする。

香奈は思い、小さく疑問げに笑いながら、畔について行く。黄龍は、何か引つかかるような、そんな気分しかない。

二人（と一匹）は校門を抜けて、裏道に入っていく。夜の裏道は、

どこか暗くて、薄気味悪い。香奈も、何回かこの道を通って帰ったことがあったから、道を知っていた。

「こっち、」

畔は言いながら、香奈の先に行く。

香奈は、あれ？と一瞬思う。あんな道、通ったっけ？

思うが、聞いた話を思い出す。

裏道からだど、ある程度天野下のことを知っていれば、どんな道を行っても、すぐに天野下学園前駅に着く。

そっか、と香奈は思う。

そして、香奈は畔について行く。

街灯が少なくなる。

そこは、川だった。小さな川と、小さな橋がある、そんな場所だった。

こんな場所があったなんて、香奈は知らなかった。夜だからか、水はほとんど見えない。街灯が、極端に少なくなる。しかし、かろうじてそこには、街灯があった。申し訳程度に、それは光っていた。

「こんな場所があったのね…」

香奈は言った。

畔は立ち止まる。「うん、」と、さつきと同じ声で香奈に言った。

畔は香奈に振り返った、笑いながら、香奈の方に視線を向けている。どこか、全く別物を見ているような、そんな気が香奈にはする。黄龍は目を見開いた。

「香奈！伏せて！」

瞬間。

「それじゃあ…、」

死んで。

？

一瞬の出来事だった。

黄龍が、香奈の体を川の方へと倒した。その直後、さっきまで香奈がいた場所に、青白い閃光が、通り抜けて行く。

何…？

「あら…、随分と鋭いのね…、て、」

香奈は、上に乗っている黄龍の、更に上に顔がある畔の表情を見る。手に持っているものを、香奈はしっかりと見た。

畔は、香奈を睨んでいた。

手には、ペン型のスタンガンを持っていた。

「何…、これ」

畔は言いながら、黄龍の方に視線を向けた。

雄大と青龍は、寮にいた。寮には明かりがともっていて、いつもならそこで、バースンの音が聞こえてきてもいいはずだった。しかし、聞こえてきたのは、ただの声だった。

雄大は青龍に言った。

「どこ行ってたんだか」

聞いた青龍は、何を答える気も起きなかった。しかし、何も答えないわけにはいかなかった。

「…、散歩」

嘘だ。

雄大は聞くと、青龍に笑った。

「だうとー」

雄大は言った。

ダウト doubt 疑念。

つまりは、どういうことだ。青龍が、すぐに察しがついた。

「どこ行ってたのー」

雄大は言った。

聞いた青龍は、更に考える。ここは、何とっておくべきだろうか。考える。まあ、考えてみると、本当のことを言っても、別に支障はない。

青龍はあきらめる。

「…、赤龍に、会っていた」

聞いた雄大は、「だーかーらー」と青龍に言った。

「そんなことはどうでもいいの！どこ行つてたの！」

青龍は、もうよく分からなくなってくる。

「…、裏道の方…」

青龍は言った。

雄大はそれを聞くと、ふーん、と思う。それはどうでもよくて、やっぱり青龍がどこで何をしていようと、雄大はどうでもよかった。

「ふーん、」

雄大は言った。

青龍は、雄大の顔色をうかがう。だめだ、何も分からない。

「まあなんでもいーやー」

雄大は言つと、すぐにバスーンの準備を始める。青龍は、目を少しばかり雄大に凝らす。雄大は、本当にいつも通りの、何でもないと云つような表情しかない。それ以外、何も読み取れない。

「…、」

青龍は沈黙する。

雄大は、バスーンを組み立てながら、ボーカルでチューニングする。いつも通り、チューナーの針は緑色を表している。チューニングは、完璧なようだった。

青龍は、少しばかり目をつぶった。そして、床の上でとぐろを巻いた。

雄大は、何時もの夜と同じで、バスーンを吹き鳴らしていた。ただそれだけだった。音が、雄大の部屋に飽和した。

訳が分からなかった、としか言いようがなかった。

そもそも、こんな状況をいきなり目の前で見せられて、訳が分かる方がどうかしている。そう香奈は考えた。

考える余裕もなかった。

「この子が、あなたのお付きつて訳ね」

スタンガンを片手に持った畔が、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、香奈の上からどくと、畔の方に振り返る。視線はもちろん、睨みだった。

「あなた、私が見えるのね」

黄龍は、畔に言った。

香奈は、何がどうなっているのか、全く分からなかった。そもそも、畔が黄龍を見えるということ自体、信じられない話だった。畔は器？一瞬、香奈は考える。いや、そんなはずはない、と香奈は思う。もしそうなら、黄龍が学校に来る前から、龍と言う存在に気付いていたはずだからだ。

しかし、今、少しばかり意外そうな、そんな視線を黄龍に、一瞬だけ向けていた。

つまり、黄龍を見るのは、初めてかもしれない、と言うことだ。

「ええ、見えるわよ」

畔は言った。

つまり、術師…？

香奈は考えた。そう言うことかもしれないが、香奈は考えを巡らせた。だめ、何も考えられない。

畔は一步、香奈に近づく。正確には黄龍に近づく。黄龍は、畔の方を見て、少しばかり歯をむき出す。小さく唸る。

畔の持っているスタンガンが、若干青みを帯びている。バチバチと、嫌な音を立てている。

「でも、そんなことはどうでもいいの」

畔は言った。

黄龍は、じつと畔の方に視線を向けている。

香奈は、視線を畔から離すことが出来なかった。実際の状況にならないと分からないが、恐怖心が煽られる物に対して、目をそらすことが出来ないのは、何かの本能からかもしれない。

畔は、香奈の方に、スタンガンの端を向ける。もし、さっきみた

いな電撃が来たら、ひとたまりもないかもしれない。

香奈は思った。

「私はね、あなたを殺せって言われてるのよ、」

畔は言った。「残念ながらこれは仕事ね？」とも、畔は言った。

黄龍は、畔の方から目を離さなかった。

「理由は言えないし、誰からの命令かっていうのも、はっきり言うて言うことは出来ないわ。でも、これだけははっきり言うておける」

畔は言うど、目を細めた。

スタンガンを持つている指先に、少しばかり力がこもる。

「私は、あなたを殺すために、一緒に帰ったってこと」

どこか笑っているような、睨んでいるような、そんな表情。

畔は、香奈の方に視線を向ける。突き刺さるようにまっすぐで、それでいて冷え冷えとした視線が、香奈へと突き刺さっていた。香奈には、それ自体に耐えられるかどうか、頭で考えても分からなかった。

「でも、私腕が立つのよ」

畔は言う。

スタンガンが、香奈から逸らされることは無い。ずっと、まっすぐと、香奈はスタンガンに狙われている。ボタンを押せば、香奈はたちまち電撃を直で受けることになる。

香奈は考える、それしかできなくなる。そもそも、何で自分が狙われているのか、そんなことは分からない。分かっていたらこんなに苦労はしないし、そもそも、こんな状況でそんなことを考えもしない。香奈自身、恨まれるようなことをしたような覚えはないし、もし相手にとって不愉快なことをしてしまったとしても、そこまで執着を抱く人物がいるとは思えない。世の中は確かに分からない。些細なことで、何かのスイッチを入れたかのように、所構わず怒り散らす人物だっている。しかし、そんなのは比ではない。ここまで恨みを抱かれるような、そんなことを、香奈がしたとは、自身でも思えなかった。どうしても、それは分からなかった。どうしても、

分からないことは分からなかった。

それを前提にして考えてみる。もしかしたら、誰かが香奈に恨みを抱いていて、誰かが畔に、香奈を殺すように言う。仕事として畔は受け、そして香奈の近くに寄って、それから香奈をスタンガンで殺す。そこまでは単純な気がしなくもないが、どう考えてもおかしい。どうしてその誰かは、わざわざ自分で香奈を殺そうとはせず、依頼として、仕事として畔にその仕事を言い渡したのか。それははつきり言って、考えてもわからない気がする。もしかしたら、その誰かは、非常に非力なのかもしれない。香奈ひとり、女子一人殺せないほどの非力な人物なのかもしれない。

二つを組み合わせて、可能性を考えてみても、おかしいと思えるものはやはり井岡氏以外の何物でもなかった。

畔の視線が、香奈の方に向いている。

「だから、」

畔は口を開いた。

一瞬で灰にしてあげる…ッ！

ボタンが押される、

その須臾。

黄龍が、ものすごい勢いで、畔の近くに潜り込んでくる。畔は一瞬目を丸くすると、黄龍の方に視線を向ける。

黄龍は、畔の鳩尾に、一発、殴りを入れる。グルギ、と畔の鳩尾から、嫌な音がする。しかし、黄龍は気に留めている暇もない。

ほんの一瞬の出来事、と言うのはまさにこのことで、何が起こったのか、香奈にはさっぱりわからなかった。そもそも、スタンガンのボタンが押されたのかさえ、香奈には分からなかった。

畔は気を失う。悶絶すると、アスファルトに体を崩す。スタンガンが地面に落ちると、畔も一緒に、地面に衝突する。バン！という嫌な音が、そこに響き渡る。

黄龍はそのスタンガンを取ると、まず、スタンガンの電源を切った。バチバチと唸るスタンガンが、静かに光を失っていった。

何が起こっているのか、本気でわからなかった。分からない、と言っレベルではない。そもそも、理解に及ばないレベルだった。

「…、何が、どうなってるの…？」

香奈は小さく言った。

畔が、答えるわけもなかった。ただ、畔は地面に体を崩しているだけで、香奈に、何かを語ることは無かった。

スタンガンと言い、畔と言い、訳が分からなくなってくる。思い出す。

仕事として、香奈を殺しに来た。

つまり、これは仕事であり、これは業務であり、これは任務。

「…それは、分からないわ」

黄龍が、香奈に言った。

片手に持っているスタンガンが、妙に重々しく感じたのは、黄龍だけではないような気がする。黄龍だけではなくて、それは、空気を伝わって、別の誰かにも伝わっているような、そんな気が、黄龍にはあった。

「でも、」

黄龍は言った。

「一つ、行ってみるべきところがあるわ」

黄龍が言った。

聞いた香奈は、涙目だった。黄龍の方に視線を向けて、ただその方向を、凝視していた。そこには、黄龍の確信に満ちた表情が、広がっていた。



## 門限と疑惑

その日は、香奈が初めて門限を破った日になった。そもそも、門限を破ったことのない生徒は、ほとんどいないとされている。香奈はその中の一人としてあり続けたい、と考えていた。しかし、それは無理な話だった。

そもそも、門限なんて気にしていられる場合でもなかった。

香奈は、少しばかり沈みながら、ホテルの一室にいた。そこはスイートルームで、非常に豪華なつくりで、しかしどこか質素と言えなくもない雰囲気をもった場所だった。

現時刻、八時三分。ホテルグランドセンチュリー1050号室。

天野下には、何故かたくさんホテルがある。そのホテルの一つに、香奈はいた。そしてその横には、黄龍もいた。それはあたりまえと言えば、当たり前な話ではあった。

椅子の方に、畔はガムテープでがんじがらめにされている。動けない状況にある。しかしそれは、香奈にとってみれば、少しばかり心休まるものだった。

目の前には、ドイツ系の顔立ちをした、栗毛の人物が座っていた。「この子が、急に……？」

その人物は、香奈に聞いてきた。一見外国人に見えるが、その口調は流暢な日本語だった。

「はい。それで、他に頼れる人もいなくて、友達に、こんな事言えるわけもなくて、だから、ハンスさん、お願いしたんです。ハンスさんなら、何かわかると思って……」

嘘ではない。ただし、用意していた台本ではある。

香奈は言っと、ハンスの方に視線を向ける。ハンスは紅茶を一口、カップから小さく呷った。香ばしいにおいが、香奈の方にまで伝わってくる。

ハンス、ハンス・シュローツは、術師の友人だった。もともとは

DEPに所属していて、東海林たちといざこざを起こしたが、今ではとてもいい関係になっている。ハンス自身も、それを求めている。「でも、これは…」

ハンスは言いながら、テーブルの上に置かれているスタンガンを見る。

横から、そのスタンガンに手が伸びる。それは、ピンク色の髪をした、十行くか行かないかくらいの、少女だった。

「これ、歪んでるな」

少女は言った。

聞いた香奈は、その少女の方に言葉を向けた。

「ユーカちゃん、何かわかる？」

ユーカはそれを聞くと、そのスタンガンを片手で持ち、少しばかり視線を細める。そして、目を閉じて行く。

「…よく、分からない…」

ユーカは、少しばかり弱気に答えた。

ユーカ、ユーカ・ドリーは、ハンスとずっと前から一緒にいた少女で、術師なのか、器なのかは分からない。しかし、龍を見ることが出来るのは確かで、それでいて、ピンク色が印象的な少女だ。目までピンク色をしている。

聞いた香奈は、少しばかり視線を潜ませる。「そう…」と、少しばかり悲しそうな、そんな声でユーカに言った。

ハンスの隣にいる、もう一人が言った。

「それ、何かを纏ってる」

それは、青い狼だった。正確には、洋服を着た、椅子に座っている狼だった。

聞いた黄龍は、その青い狼の方に視線を向ける。ユーカは、その狼にスタンガンを渡す。狼は、目を細める。

「何か、分かるのかい？ライカン」

ライカンはじっと眺める。そして、ボソツと呟く。

「何かの半分だと思う」

意味が分からない。

しかし、ライカンが意味のないことを言うとは思えない。つまり、スタンガンは、何かの半分なのだ。

そう思うと、黄龍は少しばかり視線を細めた。

「半分だけじゃ、何だかわからないわよ」

それを聞いたライカンは、「だったら、」とガムテープで椅子に固定されている畔の方に視線を向ける。ライカンは直立二足で立ち上がり、その椅子の方に足を向ける。重々しい足取りが、ライカンの中で響いていく。

ライカンは、スタンガンをいろいろと眺めまわす。そしてスイッチを見つけると、カチツと電源を入れる。

スタンガンが、青白く光を帯びる。

ライカンは、それを迷うことなく、畔の方へと向ける。

「この方が簡単だよ」

誰も、ライカンを言い咎めることはしなかった。

ライカンは、どこまでも真っ直ぐな目をしながら、畔の方へと視線を向けていた。畔が起きているのか気絶しているのかなんて、ライカンには分からなかった。

「…、荒いけどね…、それは」

ハンスは、乗り気でない雰囲気で、ライカンに言った。

ライカンはそれを聞くと、スタンガンを床の方におろした。そして、ハンスの方に視線を向ける。

「あくまで、手段の一つだよ。速い方法だと思うけど」

ライカンは言った。

それは決して間違いではない。そう香奈も、ライカンに同意した。

どこか、さびしいような、何と言つか。

東海林は、もどかしい気持ちを整理しながら、一人でカップラーメンを食べていた。カップラーメンは、いつもならうまいと思える味のはずなのに、今日は、どこか味気ないように感じる。それもそ

のはずで、つまりは東海林はさびしかった。

一人で食べる食事は、やっぱり味気ないんだな。

東海林は本気で思った。

最近、一人で食事をとるなんてこと、ほとんどなかった。大介や雄大と一緒に食べるか、そうでなくても赤龍が、ほぼ常に一緒だった。食事を一人で食べることが、最近なかった。だから、いきなり一人になると、味気なく感じるものだ。

東海林は思いながら、タイマーなんて気にせず、ラーメンを啜っていた。それだけで、それ以外に何もなかったと言っても、東海林にとっては過言ではなかった。

ため息を吐こうとしても、どこか途中で、喉の奥で止まってしまふ。言い咎められてもそうでなくても、東海林はため息をする気が、どこか失せてしまったような、そんな気分になんかった。

少しばかり目をつぶって、ラーメンのにおいを嗅いでみる。そこから連想されるのは、赤い龍。

赤龍…

東海林は思う。そして、小さく吐息を吐いた。わざと、吐息だと自分の中で思ってから、吐息を吐いた。

どこにいたんだよ…

東海林は、ラーメンをかきまわす。ラーメンは、さっきよりもいっそうふやけてきている。それ以外、何も起こっていない。

早くしないと…、ラーメン伸びちゃうよ…。

東海林は、自分のラーメンが伸びていることに、気付かなかった。それでも、東海林はラーメンを食べ続けた。ラーメンの良し悪しが、今の東海林には、変わらないようにしか思えなかった。

赤龍の存在が、東海林の中でここまで大きなものとは思わなかった。つまり、よくある言葉の通りだということだ。そこにあるときには、それが大切なものだと気付けない、しかし、それがなくなったら時初めて、それが大切なものだと気付く。

はあ…、と思う。

だから、はあ…、と言い咎める。

そして、はあ…、と返す。ただそれだけのプロセス。

東海林は、ラーメンの汁を、一気飲みした。気持ちが悪くなった。気にしなかった。もうその前から、東海林は妙に突っ掛るような気持ち悪さに、さいなまれていたからだ。

東海林は、ソファアーの上にうなだれた。

ベランダの外に、小さな影があった。その影は翼を持ち、少しばかり悲しそうに目を細め、東海林のことを見守るような、そんな影。赤龍だった。

赤龍に、勇気なんてものはなかった。持ち合わせていなかった。つまり、赤龍は何もできなかった。せつかくベランダにまで来られたのに、そこからの行動に、踏み出すことが出来なかった。そもそも、赤龍には、それからの行動と言う物が、全く分からなかった。おそらく青龍に聞いても、きっと「…、」だけ返ってくるだろう。

赤龍は思い、ベランダの死角に隠れる。まるでこれだと、赤龍が東海林から隠れているみたいにも見えなくはない。

そもそも、東海林が悪いような、そんな気が赤龍にはする。それだけを赤龍は考える。そう、そもそも赤龍は悪くない。悪いのは東海林じゃ。

考えても、どこか納得がいかないような、そんな感覚にさいなまれる。

暗さと、寮の中の明るさが、どこか入り乱れた場所のような、そんな気がしてならなかった。そこには赤龍しかない。そこにいるのは赤龍で、東海林は寮の中にいる。

ガラス一枚、窓が一つ以上の壁が、赤龍と東海林の間に立っているような、そんな感覚に近い。その厚さが、何ミリ、何センチ、何メートル、それか何キロメートルあるのか、そんなのは分からない。はあ…、と赤龍は吐息を吐く。赤龍はそもそも、ため息と言う物

が嫌いだった。だから、自分の中で、これは吐息だと思えば吐息になる。赤龍はそう思いながら、吐息を吐く。そもそも、吐息を吐くようになってしまったのも、東海林のせいではないか。赤龍は考えた。

はあ…、とか思う。

だから、はあ…、とか帰ってくる。

そして、はあ…、と言う気分になる。そんなのは当たり前で、赤龍の中で今の気持ちを表すなら、はあ…、以外の何物でもなかった。もしかしたら、

赤龍は少しばかり考える。ゲームがしたいとは、今は思えなかった。それ以上に、何か空腹のような、そんな気分だった。

さっきの吐息は、

赤龍は、秋の星空を眺めようとした。そこにあったのは、星空と言っよりは、満月に近い空だった。どこか、赤龍の意見とは合わない、そんな空だった。

ため息だったのかもしれない…。

これは東海林の影響だ。

東海林の影響は、すべて悪い影響だ。

違う、赤龍は考える。それは間違いだ。それでいて、赤龍もどこか間違っている。赤龍は、心の中で思った。

何かがもどかしくなってくる。

もどかしいよりもたちの悪い何かが、赤龍の中で渦巻いて行く。

空腹かもしれない、と赤龍は考える。

赤龍は仕方がなく、飛んでいく。

大介は、緑龍と一緒に弁当を食べていた。緑龍の最近のマイブームは、映画を見ることだ。つまり、緑龍は映画をひたすら見ていた。大介は、仕方がなく緑龍と一緒に、ポータブルプレイヤーで映画を見ていた。何故テレビにつながらないのか、それは、大介にもわからない。ただ。大介たちはポータブルプレイヤーで、映画を見なが

ら黙々と弁当を食べていた。

息をのむ。

お茶を飲む。

喉に少し食べものを詰まらせる。

息を詰まらせる。

その繰り返しだった。とことんせわしく、二人は映画を見ながら弁当を食べていた。

その時だった。

コン コン…

音が、ベランダの方から聞こえてきた。

それを聞いた大介は、「ん？」と思いながら、ベランダの方に視線を向ける。緑龍は、映画に釘付けになっている。

窓には、カーテンが閉まっている。誰がベランダをたたいたのかは、座っているだけだと分からなかった。

仕方がなく、大介は立ち上がる。そして大介は、カーテンを開けた。

そこにいたのは、窓ガラスに張り付いた赤龍だった。

「うわ…ッ！」

大介は、一瞬驚いた。

赤龍は、コンコン、と窓ガラスをたたきながら、大介の方に視線を向ける。緑龍は、さっきからポータブルプレイヤーから、視線をそらそうとしなかった。

大介は、窓の鍵を開ける。そして、外にいる赤龍に、こう聞いた。「ど、どうしたんだ…？こんな夜中に…」

大介は聞いた。

聞いた赤龍は、「ちょっと、頼みごとがあつての…」と、どこか小さく、大介に言った。

聞いた大介は、少しばかり赤龍の方に、視線を細めながら言った。「何だ、その頼みごとって…？」

聞いた赤龍は、大介から少しばかり、目を逸らした。

「その、食料を…、分けてほしいと、思つての…」

どこか、たどたどしい口調だった。

大介は、少しばかり目を丸くする。しかし、明日の分の弁当が、まだ大介の冷蔵庫の中に入っている。一食分くらいなら、分けることもできた。

「…今日一食でいいのなら」

大介は言つた。

赤龍は、元気がなさそうに、こう、小さく大介に呟いた。

「礼を…、言うぞ…」

赤龍は、どこか俯き気味だった。

赤龍は大介の寮に上がると、すぐに大介から、弁当をもらった。しゃけの弁当だった。赤龍はどこか、申し訳なさそうな視線を、大介の方に向けていた。大介は、赤龍の方ではなく、ポータブルプレイヤーの方に向けていた。

赤龍はしゃけ弁を食べる。その間に、テーブルの向かい側では、ポータブルプレイヤーの、映画らしき音が聞こえてくる。

赤龍は、少しばかり不思議になる。しかし、あえて何も言わないでおく。

再生されている映画が、終わったような、そんな雰囲気になった。「ふー、終わったー」

大介は、椅子の上で伸びをする。緑龍も、大介とまるつきり同じしぐさで、椅子の上で伸びをした。

「やっぱりこの映画は面白いねー」

緑龍は言つた。

どこか赤龍は、蚊帳の外のような、そんな気分で仕方がなかった。それは、確かに蚊帳の外、とも言えなくはなかったかもしれない。大介は緑龍のその言葉を聞くと、「甘いな緑龍、」とかなんとか言ってくる。緑龍は少しばかり顔をしかめる。

「まだ世の中には、面白い物語がたくさんあるんだぞ！」



大介は、誇張するように、そう緑龍に言い張った。聞いた緑龍は、少しかり驚いた表情で、「え！」と大介の方に視線を向ける。大介は、にやにやと笑いながら、緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、大介に聞いた。

「それって、どんなの？」

赤龍は、どこか傍観的に、しゃけ弁を食べているだけだった。塩っ辛いような、味が薄いような、そうでないような。

「それはな、例えば…」

とか言いながら、大介は、自分の椅子の後ろにある、山のように積み上げられたほんの一つを、緑龍の方に取り出して見せた。

「こんなのとか、それとか、こんなのとかな」

次々と、大介は本を取り出していく。その一つの本の題名が、『The Blue Of The Sky』とか書かれている。

「面白いの？」

緑龍は大介に聞く。どこか、緑龍の目はいつになく、きらきらと輝いている。「ああ」と大介は即答する。

「切なかったり、笑えたり、悲しかったら、もう多種多様だ！」  
言い張った。

緑龍は、「おー」と言いながら、その本の山を見つめている。赤龍は、箸でしゃけ弁を食べ進めて行く。

しゃけが、どんどんしょっぱくなっていく。

「どんなのがおすすめ？」

緑龍は、本を読む意欲にあふれていると言わんばかりの口調を、大介の方に放つ。聞いた大介は、「どれもお勧めだけだな、」と言いながら、一つの本を取り出した。

「この『ジムノペディ』なんてお勧めだぞ！」

緑龍は、「おー…」とどこか、恍惚感を覚えたような、それに似た感覚を得る。そして、本の方に視線を向ける。緑龍には、本が輝いているように見える。

「これが…」

緑龍は言う。

大介は頷く。

そして、赤龍はただ食べ進めて行く。

食べ終わる。

赤龍は、一言も口を出さない。と言うか、出せない。この会話に、赤龍はついてこれなかった。来れる方が、これはすごい、とすら赤龍は思った。

ジムノペディ、どこかで聞いたような。

赤龍は思いながらも、しゃけ弁のふたを閉める。二人は、何かを熱く語っている。

「今度読んでもいいぞ」

大介は言う。

緑龍は、「やったー！」と、どこかわざとらしいような、それでいてそうでないような歓声を上げた。

赤龍はそれを見ながら、「あのー…」と大介に呟く。「ん？」と

大介は、赤龍の方に視線を向ける。

聞いた赤龍は、少しばかりたじろぐ。

「…、今日、ここに泊めてくれんかの…？」

どこか謙虚そうに、赤龍は大介に言った。赤龍の、謙虚と言うこと自体、大介にとってはおかしなものに見えなくもなかった。

しかし、どうでもよかったのも事実だった。

「いいぞ」

大介はそれだけを答えると、赤龍から目を離した。

「今から読んでいい…？」

どこか、胸を躍らせながら、緑龍は大介に言った。聞いた大介は、「ああ、いいぞ」と緑龍に言う。「やったー！」と再び、緑龍は喜ぶ。

「ただし、」

大介は言った。

聞いた緑龍は、大介の方に視線を向けた。大介は、緑龍の視線を

探るように、こう小さく呟いた。

「本は静かに、読むんだ」

どこか、暗示的な一言だった。

赤龍は、どこか居心地の良さを感じなかった。

香奈が寮へ帰るのは、別にそんな苦労はなかった。ただ黄龍に乗って、ただ帰ればいいだけなのだ。それがホテルからだろうと、学校からだろうと。

夕食は、昨日の作り置きだった。

作り置きではあるが、そんなにまずくなく、それでいて、別にそんなにおいしくないものだった。

香奈はただひたすらに、考えた。沈黙しながら、どこか深く、そして、大きなことを考える。

何故、畔が香奈を襲ったのか。それは、仕事と言っていた。つまり、仕事は仕事だ、それ以外のなんでもない。

と言うことは、必ず何かを成し遂げようとする意志が、どこかしらにあるということだ。そして、その仕事の一つに、香奈の抹殺と言う物があつた。

と言うことは、香奈はその何かのたくらみに、非常に邪魔な存在だということになる。となると、それはいつたいどういうことなのか、と香奈は更に深く考え始める。

寮の部屋には、食器の音しか響かない。

つまり、香奈は何かに狙われている、と言うことだ。しかも、龍が見える人物を派遣した、ということは、とにかく普通ではない物だということしか分らない。しかし、香奈自身、そんなことをされる覚えもない。誰かの恨みなら、こんなに回りくどい方法はしない。

畔は、龍を見ることが出来た。

つまり、他の龍も見ることが出来る。

龍関係で、何かあるかもしれない？

考えて行く。その思考は、どんどんと自分の中で広がっていく。しかし、途中で押しと泊まる。

つまり、香奈は狙われている。つまり、香奈が動けば狙われるということ。つまり、香奈が狙われるということは、周りに危害が加わる可能性も十分にある、と言うことだ。周りに危害が加わるかもしれないということは、つまり、友人も、先生も、

東海林君も。

考えた瞬間だった。

箸を、テーブルの上に落としてしまう。どこか、ぼうつとしているような、そんな雰囲気だった。香奈は小さく、あゝ、と言うと、テーブルの上に落ちた箸を少しばかりティッシュで拭いて、それから食べ始める。

「…、大丈夫…？」

黄龍は聞いた。

聞いた香奈は、返事をした。

「うん、平気」

空返事。

中身がなかった。それどころか、それを隠そうとしなかった。

ただ、香奈は言ったただけだ。言葉なだけだ。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり視線を細めた。

香奈が、いつもと違うのは仕方がないかもしれない。しかし、何かを心配している風にも見えるし、でも、怖がっている風にも見える。

少しばかり、黄龍は情けなかった。

「…、私、」

香奈は言いかけた。

聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、黄龍にこう、はつきりと言う。

「戦わなくちゃいけないと思う」

黄龍は、一瞬目を開く。

香奈は、まっすぐ黄龍の方に視線を向けている。黄龍は、少しばかり沈黙を紡いだ。

「だって、私が頑張らなきゃ、だめな気がするの。それに、私が襲われたってことは、もしかしたら、また襲われるかもしれない」

香奈は言う。

「その時に、私は他の人を巻き込みたくない。だから、私は戦う、手伝って、くれる…？」

黄龍に、聞いた。

聞いた黄龍は、一瞬口を紡いだ。

香奈が何を言っているかは分かっていた。そうではなく、黄龍はどこか自分が情けなくなってくるような、そんな気分になってきたような、そんなよく分からない、つんとした感覚にさいなまれていく。

「…、」

黄龍は、香奈と目を合わせていられなかった。

しかし、はつきりと黄龍は、香奈に言った。

「当たり前よ」

それが、黄龍の答えだった。

聞いた香奈は、安堵した。それが、香奈の率直な気持ちだった。それ以外に、何もないような、そんな気分さえあった。

「…、ありがとう…」

香奈は、少しばかり涙目になりながら、黄龍に言った。

食事が、ほとんど進まなかった。

眠い、いや眠くない。眠いと眠くないを、足して二で割ったような、そんな感覚だった。つまりは、そういうことだ、と東海林は納得した。

つまり、赤龍がいないとこんなにも、自分は腑抜けなのだ。自分

が眠いのか眠くないのかすらわからない、そんな腑抜け。

東海林は天井を眺めた。天井は、外から入ってくる街灯の光で、少しばかり明るく、薄暗く光を纏っていた。落ちてきたりなんてことは、しそうにもなかった。

東海林は、ベッドの上でうなだれていた。つまり、そういうことだ。どっちにしてもうなだれるのだ。赤龍がいよいよといまいと。

しかし、何かが違った。

東海林の中で、大切な何かがなくなったような、このままだと、それを失くしたことにすら忘れてしまいそうな、そんな気分だった。もうどうなるかなんて、東海林には分からなかった。分からない、と言うのは違う。分からないのではなく、分かりたくない。分かったら、本当に自分が何をしたいのか、分からなくなりそうだった。それに、考えると何か、頭のどこかがもによもによと、くすぐったくなるような、そんな辛さがある。

東海林は目を閉じたり、開けてみたりする。東海林のしている明暗が、ほとんど変わらない。違う、ほとんど何も起こらない。聞こえる音は、外の道路を車が通ったりするそんな音だ。ガチャガチャとボタンを押したり、詠嘆をしたりなどの声ではない。

悲しい、か…？

初めて考えた。

そう言えば、最近一人でいることなんて、ほとんどなかった。食事だけではなかった。そうだ、最近はずっと、一人になることなんて何もなかったんだ。つまり、そう言うことなんだ。

東海林は思った。

考えて、分かるようなこともなかった。東海林は少しばかり考えて、再びベッドから、ソファの方に視線を向ける。そこに誰かがいるわけでも、ゲームが置かれているわけでもない。東海林はため息を吐く。はあ…。だめだ、うまくため息が出来ない。

東海林は、視線をベランダの方に向ける。ベランダに、影なんてものはなかった。

東海林はベッドから起き上がり、窓の方に近づいていく。寮に据え付けのカーテンを、東海林は開ける。

そこに、何がいるわけではなかった。

東海林は一瞬落胆する。そして、その落胆に、妙な怒りを覚える。何に対して怒っているのか、はつきり言っただけで東海林には分からない。

東海林は窓ガラスを、小さく叩いた。拳だった。

「…、畜生…、バーヤロ…」

東海林は言った。

外にあるのは、街灯と、それ以外の鬱陶しい光だけだった。何も、そこにはなかったような、それと全く同じと言ってもいいような、そんな空気。

東海林は落胆した。

何にそう言ったのかすら、東海林にはもう分からなかった。

そこにあるのは、どうでもよくなってくるような、そんなよく分からない、もやもやとした空気だけだった。

何か、起きたりない、と言っただけで、遊び足りないような気が、赤龍にはしていた。明らかに、赤龍の中で望んでいる何かが、その部屋にはなかった。大介の部屋にはなかった。

真っ暗で、寝息が二つ聞こえてくる。一つはベッドの上、もう一つは赤龍の隣り。

赤龍は、少しばかりあくびをしてみる。そして、とぐろを再び直し、少しばかり目を沈ませた。意識は全く沈まなかった。それは、もしかしたらこの辺りは、赤龍の寝心地に合わない場所なのかもしれない。赤龍派の奴には、合わない場所なのかもしれない。赤龍は考える。考えるが、ろくな考えが浮かんでこない。

唸ってみようかどうか、考えてみる。

赤龍は、隣で気持ちよさそうに眠っている緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、どこかぐっすりとしたような、そんな表情で夢の中で浮かんでいた。

少しばかり、うらやましくなってくる。

馬鹿らしくもなってくる。どうして赤龍が、こんな場所で眠っていないければならんのじゃ…。

思うが、今さら東海林のところに行つて寝に行くだけだなんて、赤龍はなんとなくではなく、かなり嫌だった。そもそも、赤龍は今、東海林の顔なんて見たくもなかった。

見たくもない？

赤龍は、目をつぶつて見せた。真っ暗だが、そこに何かあるのが見える。まぶたの裏だろうか。

赤龍は思った。

ただ、闇に似たものが目の前に広がっているような、そんな感覚だった。一寸先は闇で、歩いたら、電柱にぶつかりそうな、そんなよく分からない恐怖感が、そこにはあった。

もとはと言えば、東海林のせいなのじゃ！

赤龍は考える。それは赤龍の中では、正論でしかなかった。それ以外の何物でもなくて、それは、赤龍の中でただ、正しいだけだった。簡潔で、どこか空しくなってくる、そんな正論だった。

赤龍は、眠くはなかった。

むしろ、まだ赤龍は疲れたりなかった。一日中、東海林に対して怒ってはいたが、それほどの物でもない、と赤龍は自分で理解していた。つまり、簡単に言うと、赤龍は遊びたかった。

この部屋には、本が山のように積み重なっている。そして、映画のポータブルプレイヤーなんかもある。

そう言う問題ではなくて、と赤龍は思う。

赤龍は、本を読みたいわけでも、映画を見たいわけでも、アニメを見たいわけでも、ましてやドラマを見たいわけでもなかった。

ゲームがしたかった。

赤龍は、無性にゲームがしたいような、そんな気分だった。それ以外の何も、赤龍には無かった。

確かに、この部屋にはゲームがある。テレビもある。しかし、赤



龍はやる気が起きなかった。そもそも、今やっているゲームと違うということもあるし、赤龍がやりたそうなゲームでもない、と言うのは一つ、理由として存在している。

たかが理由だ。

赤龍は、赤龍のデータのゲームを、心からやりたかった。それがかなうなら、もしかしたら、赤龍は何でもするかもしれない。喉が渇くみたいに、赤龍はゲームがしたくなっていた。そこに、赤龍のデータがあるゲームは、無かった。

あるわけもなかった。

赤龍のデータがあるゲームは、今、東海林の寮のどこかだ。つまり、一度東海林の部屋に戻らない限りは、ゲームをすることが出来ない。

赤龍は、心の中の靄のようなものを、どこかもどかしく思った。鬱陶しくて、どこか、何でもないうような、頭に来て、それでいて、ただそこにあるだけの靄。

「…、はあ…」

赤龍はため息を吐いた。

赤龍は呆れて、自分の尻尾で、軽く自分の顔をたたいた。痛くはなかった。それだけで、重々しく尻尾の音が、赤龍の中で響くだけだった。ただ、それだけだった。

どっちなんじゃろう、な。

赤龍は、妙な感覚に陥っていた。無限連鎖にも似た、その妙な感覚。

赤龍は目を閉じて、明かりを自分の中から遮断した。そして、小さくあくびをした。それ以外、赤龍に何かできるかと聞かれても、赤龍はきつと、はつきりとかう答えただろう。

ない、それにあつたとしても、やりたくない。

やる気文でもない。

それだけのことだ。

気が乗らなかった。気が乗らないだけで、赤龍の中では、妙な靄

が広がっているだけだ。たったそれだけだった。

赤龍は、呆れかけていた。

赤龍は、眠いような、眠くないような、そんなよく分からない感覚を持っていた。

だから、あくびをして、意識を床の方に集中する。なんとなくではあるが、床に沈んでいくような、そんな感覚がそこにはある。

赤龍は、自分でも眠ったのか、よく分からなかった。

変な歪みに似た、それでいて、じれったいような、そんな感覚だった。

青龍は、とぐろを巻きながらベッドの近くにいた。ベッドの上には珍しく、雄大が入っている。もちろんバスーンを持ったり、バスーンを吹きながらベッドの中に入っているわけではない。

雄大も、ただ眠いだけだった。眠くて仕方がなくて、それでただ眠った。珍しいことだ、青龍はつくづく思った。

雄大が寝るなんてこと、最近はめったになかった。そもそも、青龍には雄大が、別に眠らなくてもいいのではないのかと思えてくるぐらい、眠らない時は眠らなかった。授業中はよく眠っているが、それでも起きているときは起きている。

とても不思議と言えば不思議だった。

しかし、不思議ではなくて、それは何でもないような気がしなくもなかった。

青龍の耳は、緑龍ほどよくはなかった。だから、違和感だけで済んだ。しかし、赤龍の声と、東海林の声が今日は聞こえてこない。つまり、まだ仲が直っていない、と言うことだ。じれったいような、歪んでいるような、それとも、ただ何でもないことなのか、青龍には分からなかった。

雄大に何かを言う気はなかった。言ったところで、雄大の反応が薄いことぐらい、青龍には分かっていた。言う気を削ぐ、そして、眠いという感覚にのまれていく。

もしかしたら、今の赤龍もそんな感覚なのかもしれない。青龍は思った。

しかし、問題はそんなことではなかった。

「…、」

音が、そこに全く何もなかった。夜だから、と言うのもある。夜はみんなが寝静まる時間帯だ。つまり、そう言うことだ。

青龍は思った。そして、どこか妙な感覚で、青龍は目をつぶった。そこに、音が一体何を意味したものになるのか、少しばかり、青龍には興味があつた、あくまで、興味があるだけで、それ以上ではなかった。たつたそれだけのことだった。

青龍は、自分のしたいように、ただ目を閉じて行つた。

まだだ、

なんとなく、そんな感覚になつて、青龍は目をぱちりと開ける。そして少しばかり体を起こす。そして、耳を立てる。赤龍の声は聞こえてこない。しかし、どこかからではあるが、小さく声が聞こえてきた。

ため息。

青龍は面倒くさそうに、立ち上がると、ベランダの方に歩み寄つた。ベランダのドアを開けて、青龍はベランダの真ん中に立つ。

小さく呼吸をすると、「はぁ…」と小さく息を吐いた。

青龍は、大介の寮の部屋まで、飛んで行つた。

これから君は、海の底を覗くことになるよ

目を覚ましたのを見ると、ハンスは少しばかり、その人物、畔の方に視線を向けた。その視線は、決していいものではなかった。

畔は、少しばかり目を細める。そして、自分が今どういう状況におかれているかを把握すると、自分にまわりついているガムテープをはがそうと試みる。しかし、そんなことは無駄だった。無駄に終わった、と言った方が、この場合は正解かも知れない。

「やあ、起きたかい？」

ハンスは、優しそうに聞いた。

畔はその声を聞くと、目を細めて、ハンスの方に視線を向ける。

ハンスは、にこにこ笑いながら、畔の方に視線を向ける。

「…、」

もともと、畔が何かを言う気があるとは、ハンスとしても思っていないかった。

ハンスは一瞬、視線を細めた。鬱陶しそうに、畔の方に少し睨みつけた。しかし、それは本当に一瞬で、畔は気づかなかった。

「すっかり夜になっちゃったけど、門限は、確か八時だったよね？」

ハンスは言った。

話して、そして交流を深める。それが、ハンスの方法だった。もう誰も傷つけたくはないし、ハンスだって、傷つけられるのは嫌いだ。痛いし、辛い。それを、ハンスは嫌っていた。

「…、」

何を言うこともない、と言わんばかりの表情を、畔はハンスに向けてくる。

ハンスはどんどん困っていく。そもそも、どうして何も答えてくれないのかすら、ハンスには分からない。

こういう場合は、

ハンスは少しばかり思うと、畔に言った。

「畔ちゃん、だったね？」

ハンスは言った。

畔は、否定も肯定もしなかった。

「聞いたことに答えてほしいんだけど、いい？」

ハンスは言った。畔は、ずっと黙り続けている。「…、」ハンスの耳に、その沈黙が重々しい響きを立てる。

「…、言っておくけど、僕らはフェアじゃない」

ハンスは言った。

嫌だった、もうやるしかなかった、と言う感覚に近かった。

「僕らは、君とは平等じゃない。それは、理解してもらえるかな」

「…、」

畔は何も言わない。ただ、現実から目をそむけている様には、到底見えない。違う、そうではなくて、何かもつと別の、特別な感情が畔の中に渦巻いている。それを読み取るなんてことは、ハンスには出来ない。

それを見たハンスは、小さくため息を放った。「はあ…」と言うと、畔の方に言った。

「聞いたことに答えてもらうよ、何でも」

ハンスは言った。

どうするべきか、なんてことは、ハンスには分からなかった。ハンスに分かるのは、自分のしななければならないことが何かだけだ。

「…、」

何かを見据えるでもなく、何をするわけでもなく、ただそこに存在しているような、そんな存在だった。畔は、何を考えているわけでもなかった。

「何で、香奈を襲ったのかな」

ハンスは、畔の目をじつと見つめた。

見つめた先にあったもの、それが何だか、ハンスには分からない。しかし、声もない。そこには、歪んだ光が映し出されている。

「…、」

答えることなんて、何もない。

畔は確信していた。

ハンスは少しばかり目を閉じると、「どうしても、答えてくれない……？」と畔に聞いた。何を聞かれても、畔が何を答えるわけでもなかった。つまり、何でもなかった。畔は、ただそこに流れている時間を、過ぎて行く風に眺めているだけだった。

「……、そう言うことだね」

ハンスは、少しばかり悲しそうに、そう小さく呟いた。

ハンスは立ち上がり、畔の方に視線を向ける。畔は、何も無い場所をただ淡々と見つめている。ハンスにはそう見える。少なくとも、ハンスには。

ハンスは畔に近づいていく。一步一步の足取りが、重かった。

ハンスは、畔の目を間近で見つめる。そこには、歪んだ光もないような、そんな闇に引き込まれた、真っ暗な空間が広がっているように見えた。

「これから君は、海の底を覗くことになるよ。容赦は、しないからね……」

息苦しかった。

ハンスだつて、こんな事をしたいとは思わなかった。そもそも、ハンスは穏便に解決したいとだけ、考えていたのだ。

それがかなわないのなら、仕方がない。

ハンスは両手を、畔の手にそつと触れた。

## ちよつとした心配事

次の日に、畔が来ることはありえなかった。なんとなく、心の中が辛いような、そんな気が、香奈にはしていた。少なからず、自分は畔に危害を加えてしまったことになるからだ。直接的にはないにしても、やはりそれは、気分のいいものでは決してなかった。

察した黄龍は、授業中、香奈の方に視線を向けていた。香奈は、いつもどおりノートを取ってはいえるものの、それをいつも通りに理解している様には、見えなかった。

「だから、この『 $y = x^2 + 4x - 2$ 』のグラフを平方完成すると、 $y = (x + 2)^2 - 4 - 2$ 』と言うことになって……」

淡々と進んでいく。それだけだ。ただそれだけで、香奈の頭の中に、その式の意味や、その黒板に大きく書かれているグラフの意味が、分かっていくわけがなかった。

香奈は、少しだけではあるが、罪悪感のようなものを感じていた。罪悪感、とは少し違うような、そんなよく分からない感覚。しかし、しっかりと香奈に違和感を持たせる、そんな厄介な物。

香奈は少しばかり、目を細めていた。いつの間にか、ノートに向かって目を細めていた。睨みつけるような、そんな感覚に近かった。黄龍はそれに気づくと、目を丸くした。

「……大丈夫……？」

香奈に聞いた。

聞いた香奈は、一瞬はつとなった。そうだ、平方完成しなきゃ……。

「香奈、」

その声は、黄龍の声だった。

聞いた香奈は、少しばかり驚くと、その黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、心配そうに香奈の方に視線を向けている。

「……疲れてるんじゃない……？」

黄龍は聞いた。

香奈はそれを聞くと、少しばかり目を沈ませた。確かに疲れている。疲れているだけで、他は何もない、と言うと嘘になる。

「…、ええ、多分…」

小さく、香奈は言った。

聞いた黄龍は、悲しそうな、心配そうな視線で香奈を見つめる。

香奈は、淡々としているだけでなく、いつもの明るそうな雰囲気すら、どこか削がれているような、そんな感覚があった。黄龍の不安感と、心配をおもっただけだった。

黒板に、数字が書かれていく。

黒板に、世界が広がっているわけではない。香奈のすべきことが書かれているわけではない。ただ、そこに香奈がいるだけで、香奈は、ただやるべきことがあるだけで、しかし、香奈には、罪悪感に似た何かがあった。

知らない、なんて思えない。

畔は、まがりなりにも、香奈の班員の一人なのだ。その一人がかけただけで、一体どれだけ掃除が大変になるか。一体どれだけ、これから班員行事が大変になるか。いったいどれだけ、心がしめつけられることか。

香奈には分からなかった。

気持ちが悪くなってきた。

それは、嘘でもなんでもなかった。ただ、香奈が今思っていることだった。

やっぱり、おかしいと思う。東海林は思った。赤龍がいけないということに違和感を感じつつ、さっきの黄龍の台詞も、少しばかり気になるものはあった。

最近赤龍の事ばかり考えているからか、少しばかり、心配することには慣れてしまった。赤龍が今どこにいるのか、東海林は昨日一晩で考えた。もしかしたら、赤龍は新しい器をどこか別の場所で見つけて、そして、そこで楽しく暮らすのかもしれない。それを考え



ると、なんとなくではあるが、東海林の心の中が締め付けられ、また軽くなった。赤龍は、赤龍が幸せだと思えば所に行けばいい。たったそれだけのことだ。

東海林は思うと、少しばかり目を細めた。赤龍の事ばかり考えていても、つまり、仕方がないということだ。

東海林は視線を、香奈の方に向けていた。黒板の方を見ても、面白くない。そもそも、東海林には黒板に書かれていることの大半が、意味不明で終わってしまう物だった。

香奈は、見た目はいつも通りに見える。しかし、さっき黄龍が言った言葉、「大丈夫？ 疲れてるんじゃない？」と言うのが、東海林の中では引っかけかかっていた。

疲れてる？

何で。

東海林は思う。もしかしたら、昨日の部活中に何かあったのか？

東海林は考えた。香奈が部活で疲れるなんてこと、東海林は知らなかった。香奈はいつも闊達で、明るい先輩だと、後輩からも結構な支持があった。男でも女でも、その意見は変わらない。

そう聞いていた。

しかし、その香奈が疲れている、となると、一体東海林はどうなるのだろうか。考えてみる。疲れているじゃなくて、過労死しそう、って感じだろうな。東海林は思った。

東海林は思うと、なんとなく心配になってくる。いろいろな意味で東海林も疲れてはいるが、頑張れてはいる。だから、香奈も頑張れるはずだ。東海林は考えた。

あーもういやになりそう。

考えることが多すぎて、東海林には、また別の意味で心配事が出来そうだった。もう少し、分かりやすいものが現れないだろうか。

東海林は思うと、黒板の方を見つめた。

黒板には、よく分からない式と、グラフがあちらこちらに書かれていた。もうよく分からない以前の問題で、不明、としか東海林に

は分からなかった。

東海林は思うと、小さくため息を吐いた。はあ…。

今頃赤龍、いいやつ見つけれられたかな…？

東海林は考える。もしかしたら、赤龍は言葉であたふたしているかもしれない。しかし、ある人物が中国で、一週間中国語が分からないまま他の人とずっと話していて、それで中国語をマスターしたという話を聞いたことがある。

それぐらいなら、赤龍にもできる気がした。そもそも、赤龍は龍だ。人とは違う。だからさらに、言葉のマスターが早いかもしれない。そう考えると、赤龍に言葉の壁なんてものは、ほとんどないも同然なような、そんな気がしなかった。

考えながら、ため息を吐いた。

「そして、この放物線の解が、以前やった『 $b^2 - 4ac$ 』で求まる、と言うことは、この放物線がx軸と交わる、その交点こそが、この放物線の解、と言うことになるから…」

やっぱり、意味が分からない。

違う。今分かる気がしないだけなのかもしれない。

もしかしたら、やろうと思えば理解できるのかもしれない。東海林は考えた。赤龍には出来なかったが、もしかしたら、東海林には出来るかもしれない。考えた。

少しばかり考えるが、考える材料がそもそもなかった。

ノートが、白紙だった。

考える考えない以前の問題で、ノートに何が書かれているわけでもなかった。それを見た東海林は、すこしばかり、自分の怠慢さを呪った。

そして、怠くなってくる。

はあ…。とかため息を吐いてみる。

そして、結果的に空の方を眺めやる。青々として、少しばかり乾燥したその透き通った空気は、どこか、東海林の中で悲しげなものに、置き換わって行った。それが何故かは分からない。しかし、東

海林にはやる気もない。

中間試験、俺駄目だろうな…。

東海林は心の底から思った。

全く別の場所に、赤龍はいた。

赤龍は、未だに大介の寮にいた。大介たちには、東海林には自分の居場所を伝えないでほしい、と言うことを伝えてある。つまり、そう言うことだ。赤龍は、一人だけで寮の中をごろごろとして見る。やはり、大介の部屋に、赤龍のやりたくなるようなゲームはない。つまり、そう言うことだ。しかし、赤龍がやりたいゲームとなると、今東海林の部屋にしかない。

そう考えた時だった。

今なら、東海林は丁度外出中じゃから、見つからんかもしれん。考えただけで、少しばかり尻尾と翼が揺れた、うれしかったということなのかもしれないが、赤龍には、自分の心が何よりだった。尻尾が揺れているとかは、その次の、後付の話に過ぎなかった。

赤龍はベランダの方に出ると、東海林の部屋の位置を考える。そして少しばかり翼を広げて、赤龍は小さく飛ぶ。そんなに強く羽ばたいていないからか、巻き付くような風も、そんなには強くなかった。

赤龍は、東海林の部屋のベランダに付くと、軽く翼をたたむ。そして窓から、初王子の部屋の中を覗こうとする。

カーテンがかかっている。

…、うーむ。

赤龍は少しばかり考える。もういい、どうせ東海林はいないはずだから、このまま中に入っても変わらない。

思い、赤龍はベランダのドアに手をかけた。

がちゃ…。

その窓は、開かなかった。

「…、うむ？」

一瞬、赤龍にはどうなっているのか分からなかった。手元を見て、その窓を見つめる。そして、もう一度その窓を引いてみようとする。がちゃ…、ガチャガチャガチャ…、ガチャ…。

どれだけやっても、乾いた金属音しか、そこにはそんな座愛しなかった。

赤龍の耳に、その音が、妙な風に響いてきた。

赤龍は考えた。

つまり、窓が開いていない。そう言うことだ、と赤龍は思う。つまり、東海林はそもそも、赤龍をベランダから入れるつもりはない。つまり、東海林は赤龍が、帰って来ようが帰ってこまいが、関係がない。それどころか、赤龍がいないほうが、食費が浮く。

そう言う存在なのかもしれない、と初めて、赤龍は無言で実感した。無言の圧力が、窓から赤龍へと、掛けられていた。

一瞬、その窓を割ろうか、本気で赤龍は考えた。その窓を割って入って、ゲームだけ取って帰る。いろいろな意味で最悪だ。おそらく、それは赤龍にも被害がある、と赤龍は考えた。だから赤龍は、特に何もしない。

ジレンマ。

「ううううううむ…」

赤龍は、妙な気分を自分の中で蓄えながら、ただ唸っていた。それ以外に何かをするとしたら、おそらく、窓を割る、くらいだろう。赤龍は思った。

帰るしか、無いのかの…。

赤龍は考えた。少しばかり、癪だった。今ここで帰ったら、東海林に負けたような、そんな気分になりそうだった。もしここで窓の中に入れたとして、そしてそこからゲームだけを取り出して帰ってきたら、きつと東海林は悔しがるはずだ。しかし、このままだと赤龍が悔しいだけだ。

赤龍は思いながら、色々と考える。そして、あるものにピンとくる。

外には、ハンガーが掛けてあった。  
そのハンガーは、ワイヤーだった。  
見た赤龍は、「うむ…？」と小さく呟いた。そうじゃ、確かハンガーで、こう言った鍵を開けることが出来ると聞いたことがあったの。

思うと、赤龍は一本の、青いハンガーを手に取った。それだけで警報なんて鳴ったりはしない。

赤龍は、そのハンガーを少しばかり睨みつける。そして、窓に据え付けてある鍵に、一瞥をくれた。

よし…。

赤龍は頷きながら、鍵の方にハンガーを向かわせた。

ハンガーは、隙間を通って鍵のところまで到達する。しかし、到達するだけだ。何もできない。

思いながら、赤龍は少しばかり目を細める。

一度赤龍はハンガーを取ると、入れ方をいろいろと変えてみる。

ななめ、横、縦。

赤龍は、目を細めながら、ハンガーと鍵と窓の間を、延々と睨んでいた。ただそれだけだった。

休み時間になると、東海林はすぐに、香奈の方に足を運んだ。香奈はそこで、静かそうに本を読んでいた。一体何の本を読んでいるかは分からない。ブックカバーがかかっている。きっと、知的な本なんだろうな。東海林は勝手な考えを巡らせた。

「やあ、香奈さん」

東海林は言った。

聞いた香奈は、少しばかり驚いたような、そんな表情で東海林の方に視線を向ける。しょぶじは、香奈の方ににこやかな視線を送っている。そんなににこやかになれる状況でもないが。

「…あら、東海林君」

違和感。

口調に、東海林は違和感を持った。しかし、いつもの香奈はいつもの香奈でしかなかった。いつもの香奈はいつもの香奈で、その隣に黄龍がいた。

黄龍も、どこか雰囲気が違うような、そんな感覚だった。東海林は見ていて思った。

東海林は少しばかり、照れくさそうに香奈へと言った。

「あのさ、さつきちょっと聞いたんだけど」

…。

一瞬ではあるが、

香奈が、凍るような沈黙を紡いだ。なんとなくではあるが、東海林にも少しは理解できた。

東海林は、あえて話を続けた。

「最近疲れてるって…、香奈さん、部活でも疲れない体質だったのに、どうしたのかなーって…、ちょっと心配になって」

東海林は言った。

言葉が紡げなかった。

香奈は、自分の口の中が、どんどん乾いていくことを実感した。今までにないような、ぱさぱさとした、そんな不快感が口の中に広がっていた。

「…、」

東海林は、小さく心配を持つ。

「…だ」

大丈夫？と東海林が言いかけた、その時だった。

「平気よ」

そう答えたのは、どこか大人びた口調をした、黄龍だった。

東海林はそれを聞くと、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、まっすぐとした、しかしどこかあわただしいような、そんな雰囲気を醸しだして、少しだけ、目を泳がせた。

「…最近、ちょっと寝不足なだけよ…。中間試験がもうそろそろだし…」

聞いた東海林は、「あ、そっか…」と小さく言った。

どこか、東海林は納得してはいなかった。

こんな理由で、納得できるわけがないと、東海林は思った。

「だから、ちよつと疲れてるのよ…」

引つかかるような、突っ掛り。

それを東海林は、今大いに感じていた。それが一体何なのかは分からないとして、しかし、それがあるということは確かな実感があった。

東海林は、少しばかり考えた。

もしかしたら、香奈さんは何か、俺のために何かをしてくれてるのかもしれない。もしかしたら、自分自身のためよりも、俺のために、何かを言わないでくれているのかもしれない。

考えると、さらに東海林はもどかしくなった。

喉が渇くような、そこにイガイガとした、そんな不快感。

「…、ほどほどに、ね」

東海林は言った。

聞いた香奈は、何も言わなかった。ただ一度、軽く会釈をした程度だ。

中間試験は、学園祭の後だ。学園祭の丁度一週間ほど後。何でもんな時期に学園祭をやるのか、正直言って東海林には不思議でたまらない。しかし、それが学校の仕様なのだ。仕方がない、と言ってしまえばそれで済むまいだ。

東海林は思いながら、自席に戻ろうとする。戻っていいのかすら、東海林には分からない。もしかしたら、ここで戻ったら何か、大切なことが出来なくなるかもしれない。何か非常に大切なことが、出来なくなってしまうかもしれない。

考えるが、それだけだ。

東海林は、自席に戻って行った。

せめて、赤龍がいてくれたら、もつといろいろと話せたのにな…。東海林は頭の中で、そう考えた。しかし、そこに赤龍がいるわけ

ではない。そこに赤龍はいなくて、そこにあるのは、ただの東海林の願いだっただけだ。

席に座った。

次の時間が何だか、東海林には分からなかった。

どこことなく、辛かった。

チャイムが、乾いた音だった。

赤龍は、そんなに物理が得意と言うわけではない。はっきり言って、ハンガーを入れて鍵が開くか、何て考えても、開くかどうかすらわからない。ただ話に聞いたことがあるだけで、そのハンガーで鍵を開けた人は、もしかしたら数学が出来たのかもしれない。赤龍は考える。数学と言うよりも、物理。

物理が出来て、摩擦やら力の方向やらが、頭の中でいろいろと計算出来て、その上で、もしかしたら効率よくハンガーを使ったのかもしれない。

赤龍は、適当にハンガーを入れるだけだ。

ため息が出そうだった。しかし、赤龍はもう十分、ため息を出したと思っている。赤龍は、一生のうちに一度、ため息があれば多い方だと思っている。だから、東海林なんて論外だ、論外。

赤龍は思いながら、頭をひねった。どうやった、このベランダ用の鍵が開くのか、それは全く分からない。しかし、ハンガーを使って開けたという話は知っている。たかがそんな程度だった。

赤龍は、ただハンガーを使っているだけだ。ただ、既存をなぞっているだけだ。ただそれだけだった。

思いながら、赤龍はハンガーを見る。ハンガーの先の塗装が、少しばかりはがれかけている。それを見ると、赤龍は少しばかり、目を細めた。

呆れてくる。

赤龍は思った。

本気で、呆れてくるの。



どこか、泣きたくなくなるような、そんな気分だった。たかがそれだけなのに、そんな気分になってくる。

何故、赤龍は東海林の寮の部屋に入るために、こんな姑息な手を使わなければならんのじゃ…。

思って、呆れてくる。

改めるわけではない。ただ、呆れているだけだ。どうすればいいかなんてことは、分かっていた。

ただ、残念ながら赤龍には、行動力がなかった。

赤龍は、その青いハンガーを元あった場所に掛けると、どうしようか迷う。

ベランダは、以前赤龍が見たままだった。そこには洗濯物がほしえていなくて、それでいて、東海林の部屋には洗濯物がたまっていた。東海林は面倒くさがって、なかなか干そうとはしない。

その繰り返し。

ぷつつりと、その繰り返しがなくなったような、そんな気分だった。

「…、」

赤龍は、ただ沈黙するだけだった。悲しいような、そんな気分、赤龍は打ちひしがれていた。

たかが、それだけしかないともいえる。

もしかしたら、赤龍は東海林に、結構な迷惑をかけているのかもしれない。色々な面で…。

どうしようか迷う。

しかし赤龍には、まだ行動するための決断が、足りていなかった。だめだった。どうしても、赤龍には踏み出せないものがあつた。

怖い、かの…？

赤龍は自問自答した。それ以外、出来ることがなかったともいえる。赤龍はただ、自分の中で、自分に出来る限りの自問をした。

怖い…、かの…？

答えることすら、赤龍は怖いかもしれない。

つまり、それが答えかも知れない。不本意だったが、それが答えなようだった。

赤龍は翼を広げる。赤く、被膜と鱗が張った翼があるのに、赤龍は、自身でどこに行けばいいのか、全く分からない。それが、赤龍だった。

「…、うーむ、」

赤龍は、どこまでも正直ではなかった。

赤龍は四肢を着くと、翼を思いっきり羽ばたかせた。

その日は生徒総会の様だった。そう担任の清原先生きよはらが言っていた。清原先生は、担任の先生でもあり、吹奏楽部の顧問でもある。いい人と言うか、どこか飛んだような、そんな雰囲気の人だ。

生徒総会だったが、東海林は香奈の方に視線を向ける。香奈は俯きながら、何か、思いつめたような、そんな表情をしていた。東海林には、それが酷く、悲しいような、そんな風な印象を受けた。

「と言うことで、号令」

清原先生は、香奈に言った。いつもならここで、香奈が、起立、気を付け、礼、の三段階の挨拶をする。三段構えだ。

しかし、教室は、静かだった。

一瞬、東海林も何が起こっているのか分からなかった。東海林は、数秒経つても号令がかからない教室の中心を見た。

香奈が、俯いていた。

それを見た清原先生は、少しばかり目を丸くした、しかし、すぐに香奈に言った。

「号令よ、春潮さん」

聞いた香奈は、はっとなる。そう、春潮は香奈の上の名前だ。

すぐに香奈は、少しばかりあわてながら、「き、起立」とおぼつかない声で言った。

その声は、さっきの沈黙よりも、響かなかった。

「気を付け」

声が東海林に届いた、あくまで、届くだけだ。

東海林は心配そうに、香奈の方に視線を向けた。香奈は、何かを思いつめたような、そんな雰囲気醸しだしながら、最後の構えの号令をかける。

「礼」

そして、『さ…よ…』としか聞こえないみんなの挨拶。東海林は小さくではあるが、ちゃんとあいさつをしている。雄大は勿論、何も言っていない。

東海林はすぐに、香奈の方に足を運んだ。香奈はどこか、物を詰まらせたような、そんな風な表情をしていた。

東海林は香奈に聞いた。

「どうしたの？香奈さん、やっぱり、具合が悪いの…？」

聞いた香奈は、一瞬細い視線を、東海林の方に向ける。東海林は、それを見なかったことにする。

「…少し、風邪気味みたい」

香奈は言った。

聞いた東海林は、「えッ…」と小さく声を張る。香奈は、何か辛そうな表情で、どこか遠くを見つめていた。その遠くと言うのが、東海林の手に届きそうな場所ではないことは、確かなようだった。

「…そう、なの？」

東海林は香奈に聞いた。

聞いた香奈は、小さく答えた。「ええ…」それ以外に、きつと答える言葉はない。

思うと、東海林は少しばかり考える。

風邪、ということは、本人もかなり辛いはずだ。それなら、さっきの雰囲気も何となく理解できるし、今日の少し気分が落ち込んでいる理由も納得がいく。つまり、香奈は風邪なのだ。正確には風邪気味。

「だから、東海林君に風邪をうつしたくないから…」  
ドキッと、

一瞬んではあるが、東海林の胸が擬音を放って、大きく脈動したのを、東海林は実感していた。

そうか、香奈さんは俺の事、心配してくれてるんだ…。思っただけで、天にも昇りそうな、そんな気分にはなった。

東海林は聞くと、胸の中がカツと熱くなるのを必死に抑えて、なるべく静かに、東海林は香奈に言った。

「分かったよ、香奈さん。と言うことは、部活は出ないの？」

胸がどんどん熱くなっていく。

顔が、どんどんとほてってくる。

「…ええ、そう言うことになるわね」

どこか残念そうな、そんな雰囲気では香奈は言った、つまり、残念そうということは、みんなと一緒に楽しく出来なくて、と言うことだ。

なんて堅実なんだ…。

東海林は心の底から思った。思って、東海林はぽつと、温かい気持ちになって行った。何だか、それ以外のことが吹っ飛びそうな、そんな気分になって行った。

「それじゃあ、俺が、香奈さんの事言っとくよ。だから香奈さんはそのまま、寮に帰って休んで」

東海林は言った。

聞いた香奈は、少しばかり目を丸くしていた。しかし、どこか悲しそうな視線で。

「…ありがとう」

中身があったのかどうかは、東海林には分からない。

聞いた瞬間、東海林の中で、何かが冷めたような、そんな気分に見舞われた。東海林は、どこか気分が、静かになって行くような、そんな気分になった。

「…、うん」

気づいたら、そこに香奈と黄龍がいなかったのを、東海林は覚えていた。

一体、何だっただらう、さっきの妙なの。

東海林は、本気で考えた。考えるだけで、それ以外、何も思っていないかった。

ここまでは来られる。あくまでここまでは。

赤龍は思いながら、目の前に広がる学校を、どこか遠くの物に見ていた。手を伸ばせば、すぐ近くに学校がある、そんな距離だった。あくまで、自分で手を伸ばさなければ、手が届くわけがないのだ。

赤龍は思いながら、どこか、口の中が酸っぱくなって行くのを感じた。どうしても、赤龍の中で赤龍は、素直になれないような、そんな感覚があった。しかし、その反映された表情が、赤龍の本意だと、赤龍自身理解できてしまうことが嫌だった。

つまり、赤龍は今の自分が嫌だということだ。今の気持ちを考えると、そう言うことになる。

なんとなく、東海林がため息ばかり吐く理由が、分かったような気がする。

赤龍は思いながら、東海林のクラスの窓の近くまで飛んでいく。すこしばかり息を潜めながら、その教室の中に視線を向ける。

一瞬、

東海林と目が合いそうになった。

咄嗟に、赤龍は身を屈め、東海林の視界から外れる。東海林は座っている。その教室から、担当の先生の清原先生の声が聞こえてくる。

『と言うことで、号令』

東海林はそれを聞くと、清原先生の方に視線を向ける。赤龍は、すぐに視線が外れたということを認識すると、少しばかりの視線を、東海林の方に向けた。東海林は赤龍と、ま反対の方向を向いている。『号令よ、春潮さん』

再び、清原先生の声。

それを聞いた香奈は、どこかおぼつかない口調で『き、起立』と

教室に響かせる。聞いた赤龍は、一瞬視線を細める。

「うむ…？」

赤龍はおかしいと思う。本気でそう思う。

いつもの香奈なら、先生の言葉を一言一句聞き逃さない、秀才のような雰囲気を書かせる行動をとる。つまり、こんな、先生の話を聞き逃すようなことはまずしない。それが顧問の先生で、担任の先生の清原先生なら尚更だ。

赤龍は思った。

思ったが、すぐに東海林の方に視線を向ける。東海林は赤龍に気付いていないのか、全く別の方向を向いている。

うれしいような、どこか緊張するような。

または、悲しいような、そんな気分。

そして、教室に号令が放たれた。

『礼』

そして、例によって例の如く、『さ…よ…』しか、他の生徒の挨拶が聞こえない。東海林は小さいながらも、ちゃんとあいさつはしている。青龍はそもそも、礼すらしない。

東海林はそのあいさつを終えろとすぐに、赤龍ではなく香奈の方に足を運ばせる。赤龍は、どこか、もやもやとした気分を覚える。しかし、東海林に謝る機会を、赤龍は求めているような、そんな気分でもあった。

東海林は、香奈に何かを呟く。流石の赤龍でも、それを聞きとることはかなりの困難だった。

そして、東海林は香奈に対して、よく分からない、としか言いようのないリアクションを取り始める。急におどおどしたり、それでいて、急に静かになってみたり。

そして、顔がどんどん赤くなっていく。

…、  
…む…。

赤龍は思った。そして、頭の中だけではあるが、赤龍は、自分

の考えを自分なりに、展開させてみた。

東海林 香奈に顔を赤らめる 東海林は香奈のことを大きく考えている。

赤龍 香奈のことを考えている東海林 あまり考えていないかもしれない いや、もっと悪いかもしれない。

香奈のことを考えている東海林 赤龍 × それだけのところ。

東海林と赤龍 大したことではない 東海林にとって。

赤龍 怒る。

赤龍は目を細めた。あたりまえな話だった。東海林は赤龍よりも、香奈のことに心を動かされているように、赤龍には見えるからだ。

赤龍は、また呆れてくる。

これも、自分に対して呆れてくる。赤龍は、自分に、さっきと同じような、似たような意味で呆れてくる。

似ているが、全然違う理由。

それを見た赤龍は、一瞬だけ、ほんの一瞬、悲しそうに俯いて見せる。それを東海林が見ていたら、きつとまだ、許せたかもしれない。

赤龍は、東海林の方に視線を向ける。

東海林は、香奈の方に視線をぼうつと向けている。アホみたいに、香奈の方にたたじつと、視線を向けている。

赤龍は納得した。

これが、東海林の答えと言うことだ。赤龍は納得した。

つまりは、東海林は赤龍の存在よりも、香奈の存在の方に心を動かされている。赤龍は解釈する。

そして、悲しくなってくる。

あたりまえな話だ。人間が人間に心を動かされる。たまにはあるが、自然にも、人間の心は動かされる。しかし、人間同士よりも、影響力は小さい。

それは、人間と龍でも同じだ。赤龍は思った。

東海林が、香奈に対して心を動かされるのはあたりまえな話だ。

東海林が人間で、香奈も人間なのだから、それはどこまでも、当たり前な話だ。それに人間同士の方が、きっと話も通じやすいんだろ  
う。

赤龍は、本気で悲しくなってくる。ゲームのセーブを忘れるなんて目ではないくらい、赤龍は悲しかった。

仕方のない話なのかもしれない。

思った。考えた。それが、いたった結論だった、ということなのだから、赤龍は、それに納得しなければならぬ。あくまで、自分でもとめた答えなのだから。

赤龍は、否定しなかった。むしろそれは、赤龍自身よりも正論だった。

赤龍は翼を広げた。そして、赤龍と東海林の見えない場所へ、赤龍は飛んでいくことにした。それがどこかは、赤龍には分からない。

今日、生徒総会に出るわけがなかった。香奈はそんな気分でもなかったし、そもそもいまするべきは、そんな事でもなかった。そう、いまするべきなのは生徒総会ではなく、ハンスのところに行くことだ。

「やっぱり、行くのね」

黄龍が、どこか心配そうに香奈に聞いた。

当たり前だった。

「だって、畔ちゃんが、どうしてあんなことをしたのか分からないと、私だって、どうしたらいいか分からないもの」

確かに、それは正論だった。

正しかった。

本当にすべてが正しいかは別として。

「…確かにそうね」

黄龍は言った。

香奈は屋上のドアを開く。そこには、誰かがいるわけではなかった。いつも通り、そこには誰もいない。誰かがいるわけがなかった。



天文部も、今日は外での観察をする様子はなかった。

つまり、ここにいるのは香奈だけ、と言うことだ。

「飛ぶわよ、」

香奈は黄龍に言った。

黄龍は、どこか乗り気ではない雰囲気で、四肢を着いた。香奈はベンチのように黄龍に座り、肩をしっかりと握る。

「…、本当に、」

黄龍は、香奈に聞いた。本当に、小さな声で。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、どこか迷ったような、それか、どこか思いつめたような、そんな表情をしている。「香奈は、ハンスのところに行くのね？その前に、行く場所はないのね？」

念を押しているような、そんな感覚。

聞いた香奈は、少しばかり目を見開いた。何を、黄龍が言いたいのか、そんな事、香奈には分からなかった。

あれ？

香奈は一瞬思った。

黄龍の思っていることが、分からない？

考えてみる。それは、いつもならありえない話だった。

香奈は少しばかり黙る。黄龍の考えていることを、少しばかり考えてみる。もしかしたら、まだ、行くべき場所があるかもしれない、と言うこともかもしれない。

しかし、香奈には分からない。

だから、こう言うしかない。

「…、私には、それ以外にやるべきことが何か、分からないから」  
黄龍は、少しばかり俯いた。そして、小さく言った。「私は、あくまで香奈の居候。それに、私は自分の意志で、香奈について行きたいの」

聞いた香奈は、別に目を細めるでも、見開くでも、何にもしなかった。

「だから、私は香奈が言った道に行くわ」  
黄龍は、迷わずにとんだ。ただそれだけだった。

風邪か……。東海林は思った。思いながら、バスクラリネット（バスクラ）を片手に、どこか空しいような気持ちで、それを吹いていた。

東海林は吹奏楽部の、クラリネットパートに所属していた。クラリネットパートのリーダーは、この人だ。

「シヨウジン、何かいつもと、足りなくない？」

そう聞いてくる、この人物。

聞いた東海林は、座りながら、バスクラを片手に持っている。そのリーダーは、東海林の方に視線を向けてくる。

聞いた東海林は、「まあ、はい」としか答えようがない。

「やっぱり」

そのリーダーの先輩は言った。

聞いた東海林は、そのリーダーの先輩に、少しばかり細目を向ける。

「それで、憶羅<sup>おくろ</sup>先輩、練習は……」

聞いたその瞬間だった。

「今日は何か、疲れたから自主れーん」

そう言う先輩が、憶羅先輩だ。

東海林の隣に座っているバセット・ホーンの秋沙汰先輩が、どこか呆れながら、憶羅先輩の方に、小さく言った。

「全く、等閑なんだからな」

そう言いつつ、勝手に練習を始める。

秋沙汰先輩は、どこか眠そうに、バセット・ホーンを吹き鳴らす。それを合図にしたかのように、みんなも自分の楽器を吹き鳴らし始める。

東海林はそれを聞くと、バスクラのマウスピース（吹き口）を咥えようとした、その時だった。

「ショウジン」

その声は、憶羅先輩の物だった。

ショウジン 東海林＋君 東海林＋ン 東海林。

聞いた東海林は、憶羅先輩の方に、視線を徐に向けた。少しばかり力がこもっていないような、そんな表情。

憶羅先輩は、東海林に手招きする。それを見た東海林は、少しばかり視線を泳がせる。そして、バスクラを静かに床に置くと、立ち上がり、憶羅先輩のいる前のリーダーの席まで歩いていく。

「何ですか…？」

聞いた憶羅先輩は、東海林に聞いた。

「赤龍君はどうしたの？」

聞いた東海林は、一瞬きよとなった。しかし、確かに憶羅先輩が、それを気にしないとは思えなかった。

これはある意味、当たり前な質問なのかもしれない。

東海林は思いながら、「ええっと…」と言いながら、少しばかり考える。どこから説明すればいいのかな…。

思ったが、東海林は言った。

「ちよつと、喧嘩しちゃいました」

聞いた憶羅先輩は、少しばかり目を大きく見開くと、「喧嘩…、ねえ」と東海林に、意外そうに言った。何が意外そうなのは、東海林にはさっぱりわからない。しかし東海林は、そのまま続けた。

「それで、赤龍怒って、どっか行っちゃって」

その時だった。

「ちよつと待った」

そこで、東海林の説明に歯止めがかかった。

少し歯止めをかける場所が違うような、そんな気もしなくはないが、東海林は特に何も言わなかった。

「それって、今ショウジンは赤龍君がいる場所を把握してるってこ

と？それともしてないってこと？」

聞いた東海林は、頭を横に振った。

「いいえ、知りません」

聞いた憶羅先輩は、「…、」驚いたような、意外なような、それか、ありえない、とでもいうような表情を、東海林の方に向けていた。そんなに驚かれるようなことでもない気が、東海林にはしていた。

「それって、携帯電話とかでも応答がないってこと？」

憶羅先輩は俺に聞いた。

聞いた俺は、憶羅先輩に答える。

「赤龍は携帯電話を持ってません」

聞いた憶羅先輩は、「あ、そうなの」と言いながら、少しばかり悩み始める。東海林は、どこか心の中で、突っ掛りのようなものを覚える。

憶羅先輩は、少しばかり息を詰まらせながら、東海林の方に視線を向ける。

「でも、ただの喧嘩、だよな」

憶羅先輩は、心配そうに東海林に言った。

少しばかり、目を遠めた。「だと、思います」と東海林は、自分で思っているのかそうでないのか、よく分からない言葉を放つ。

憶羅先輩は、「ふーん…」と小さく息を吐く。

「それじゃあ、なるべく早く、仲直りしないとね」

憶羅先輩は言った。

聞いた東海林は、少しばかり目を見開いた。床に、憶羅先輩の顔はなかった。

「早くしないと、どんどん隔たりが大きくなるだけだよ」

憶羅先輩は言った。

聞いても、東海林には分からなかった。分からなかったし、分かたくなかった。それに、東海林にとっては、それが重要な意味を持つたなんて、思えなかった。赤龍は確かに重要かもしれない。し

かし、いなくなったからって、そこまで東海林の生活に支障が出るわけでもない。確かに、成績は少しばかり落ちるかもしれない。しかし、その代わりに食費が浮くのだ。

つまり、東海林はかなり、金に余裕ができる。そのはずだ。少しばかり、どうすればいいのか分からなくなってくる。

俺は、何を天秤にかけてるん？

東海林は一瞬、心の中で問いただした。そこに東海林がいるとは思えなかったが、東海林は、問いただした。

俺は、何を天秤にかけてるんだ、金と赤龍を天秤にかけてるのか？  
思った。

どうしよう。

それは再び、思ったことだった。

思っただけで、東海林は何をすればいいのか、全く分からなかった。

「シヨウジン」

憶羅先輩の声が、東海林の中で、はっきりと澄み渡ったような、そんな響きを持った言葉に思えた。

東海林は聞くと、憶羅先輩の方に視線を向けた。憶羅先輩は、東海林の方に、まっすぐと、しっかりとした視線を向けている。東海林は、少しばかり息をのんだ。ただ、それだけだった。

「それが、悩むほどの事ではないと思うよ」  
どこか、

とてつもなく、優しい響きを持った、そんな声だ。

聞いた東海林は、憶羅先輩の方に視線を向けた。憶羅先輩の声が、クラリネットよりも、はるかに響き渡る、そんな声に聞こえたのは、きっと東海林の気のせいなはずがない。それはきっと、この部屋の中で、一番きれいな音、かもしれない。

「俺は、シヨウジンを信じてるよ」

声が、聞こえた。

憶羅先輩の声だった。

もう外は、暗くなりかけていた。秋だからと言うこともあるのかもしれないが、どんどんと、昼の時間が短くなってきていた。

香奈は、昨日行ったホテルグランドセンチュリーに、再び足を運んでいた。

1050号室。そこは、ハンスの泊まっている部屋だった。

香奈は少し黙りながら、ハンスの方に、静かに視線を向けていた。ハンスは畔の方に視線を向けながら、少しばかり黙りこくる。

近くには、ユーカとライカン。そしてもう一人、黄色の髪をした、ユーカと顔立ちがそっくりな女の子。

その子は、見事なオーボエを持っていた。そこらにある普通のオーボエではない。見た限り、特注品の、高価なオーボエだった。オーボエも、黒一色ではなく、木の温かみが残った、茶色に近い黄色をした色をしていた。その黄色の髪に、よく似合った色をしていた。キーも、金でメッキをされているような、輝かしい光沢があった。

ハンスは言った。

「耳をふさいで」

静かな声だった。

聞いた香奈は、一瞬なんなのかよく分からなくなる。しかし、ハンスとユーカ、ライカンはもう既に、耳をふさいでいる。

ふさいでいないのは、香奈と黄龍だけだ。

二人（一人と一匹）は目を合わせると、お互いの疑念を行き来させた。しかし、ハンスが何か妙なことを企てるとは思えなかった。

それは、香奈の勝手な解釈、とも言えなくはない。

香奈は耳を、両手でふさいだ。

それを見た黄龍も、香奈に続いて耳をふさいだ。そこから、全く音がなくなっただけではなかった。

すると、ハンスが一度、黄色の髪をした少女に会釈をする。何かの合図のようで、黄色の髪をした、ユーカに顔立ちがそっくりな女の子は、オーボエのリードを、厳かに、軽く口に咥えた。それだけだ。

息を、軽く入れる。

音が鳴るのは、勿論のことだった。

ただ、それはどこか、オーボエなのか、それともそうでないのか、よく分からない響きだったことは確かだ。確かにオーボエではある。しかし、耳をふさいでいてもわかる。いつも聞いているオーボエの音とは、どこか根本的に、音の質が違う、まるで、本質的に似た音のする楽器、のような。

畔が、充血した目を見開いた。

苦しそうに、ガムテープが巻かれたままもぐ。それ以外に、出来るようなことは無さそうに見える。しかし、それが香奈には、少しばかり息が詰まるような、そんな風に感じられる。

そっか。

香奈は思った。簡単な話だ。

あのオーボエの音が、畔を苦しめているのだ。

普通なら、きっと香奈はここで「やめて！」と叫んだはずだろう。それがいつもの香奈なら、の話だ。

しかし、香奈は何も言わなかった。何も言えなかった。そこにあるのはあくまで、香奈を『一度襲った』畔でしかなかった。

香奈にとっても、畔はいろいろな意味で、厄介だった。

だからって、あんなに苦しんでいる畔を、ただ眺めるだけでいいの？ただ、オーボエの音を聞かないために、耳を手でふさいでるだけで、本当にいいの？

香奈は思う。

答えなんて、帰ってこない。

香奈の心にあるのは、今は、どこか空ろで、虚ろな空白だけだった。

畔が、すごい顔でもだえ苦しんでいる。口からは涎が垂れ始め、目はどんどん乾いていき、そして、さっきよりも体の動きが激しくなってくる。ガムテープは、それでもはがれる気配がない。

香奈は、咄嗟に目を離した。

もう見ていられなかった。見ているこっちにも、畔の、そんな痛々しさが伝わってきそうな、そんな感覚があったからだ。

黄龍は、それをどこか、心配そうなまなざしで見つめていた。

それしかできなかった、とも言い換えられる。

東海林は、寮で、一人で食事をとっていた。テレビをつけたいとは思わなかった。そもそも、テレビなんてつけても、きっと東海林は聞き流すか何もしないか、その二つのどちらかで、きつと無駄になるだけだから、なるべく電気代は削減したくなる。貧乏性だからなのかは分からないが、東海林には、もったいないことはしない、と言う感覚が身に付いていた。

一人で食事を食べることに、段々慣れて来たな。

東海林は思った。そして、思いながらカップの中のラーメンを啜った。ラーメンは、最後の塩味だった。

まあ、赤龍が来る前あたりも、俺は一人で食べることに慣れてたか。

東海林は考えて、それから再びラーメンを啜る。そして、テーブルの上に置かれている、水の入ったコップを一口啣る。再びラーメンを啜る。その繰り返しだ。

東海林は食べながら、そこに音が乏しいことに気が付いていた。音が乏しい、と言うよりは、そこには全く、音なんてものが存在しなかった。そもそも、音なんてものは、東海林の部屋には必要なくて、必要なものは、食事とテレビと、ソファと椅子と、ベッドだけだ。東海林はそもそも、部屋の付属品ではない。赤龍は、もう既に東海林のもとにはいない。

それが、悲しいのか悲しくないのか、東海林には分からなくなっていた。昔にも、こんなようなことがあった気がしてしまう。何故かそこで突っ掛って、そして東海林は、いつも通りのような、そんな雰囲気に戻っていく。もしかしたら、赤龍が帰って来ても、俺は同じ行動しかできないんじゃないか？東海林は思わず思った。



赤龍が、その部屋にいるわけがなかった。そもそも、赤龍なんてそこに、いるわけがなかった。

東海林は思いながら、最後の塩ラーメンを嚙っていた。小さくため息を吐きながら、携帯電話の方に視線を向ける。

憶羅先輩が、早く仲直りした方がいい、と言っていた。

しかし、と東海林は思う。そもそも、早く解決する問題のラインは、軽く超えた問題になりかけている、そんな感覚。

東海林は、携帯電話を使おうかどうか迷いながら、小さくため息をしようとする。しかし、東海林はやめる。どうせ、それは音になって空中に消えるだけだ。詰まるような雰囲気にはなりはしない。それが、分かっているからかもしれない。

東海林は思いながら、左手に携帯電話を持ち、右手で箸をつかんでいた。東海林は携帯電話を開けて、メールを作成しようとする。その時だった。

ピンポン、と言うのは、ドアベルの軽い音だ。その音は、さつき東海林が思った通り、空中に音になって、そして消えて行った。簡単な話だった。

東海林は聞くと、箸をラーメンのカップの中に入れる。東海林は立ち上がり、玄関の方に足を運ぶ。どこか重々しいような、重々しくないような、どちらでもないような、そんな足音だった。

東海林は玄関の、のぞき穴を覗く。そこにいるのは、緑龍と大介だった。

見た東海林は、そこから目を離し、すぐに鍵を外して、そしてドアロックを外す。

ドアノブを下げて、玄関を開いた。

そこには、見た通り、二人（一人と一匹）がそこにいた。つまり、大介と緑龍だ。

「…、どうしたんだ？」

東海林は言った。そして今の時間を、頭の中で思い出そうとして見る。確か、八時を過ぎていたことは確かだ。しかし、寮内の移動

は、午前零時まで可能なはずだ。東海林は思うと、二人の方に視線を向ける。

「いや、それが、」

大介が言った。

聞いた緑龍は、その大介の後の言葉を継ぐ。

「消えたんです、忽然と」

聞いても、東海林には一体何の話なのか、全く分からなくなってくる。どんどん話が見えなくなってくる。

「…、消えたって、何が？」

東海林は緑龍に聞いた。

緑龍は、どこか申し訳なさそうな表情で、東海林から視線を離す。その代りに、東海林に突き付けられたものは、別の物だった。

それは、一枚の紙だった。

と言うよりは、一通の手紙だった。字が下手ではあるが、読めな  
くはない文字で、そこには書かれていた。

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ!!』

怒っているのか、そうでないのか、よく分からない口調、としか  
言えない手紙だった。

東海林はそれを見ると、少しばかり目を細める。これは、何か最  
近はやってる、ブラックジョークってやつか？

東海林は思うが、すぐに違うと思う。

この二人（一人と一匹）が、東海林に対して、そんなことをする  
はずがなかった。そもそも、他人に対してそんなことをする人物で  
はなかった。大介と緑龍はどういう奴らだ。真っ直ぐで、そして相  
手に対して謙虚な部分があって、必ず尊敬を忘れない。大介だって、  
少なからずはそれを心掛けているはずだ。

思いながら、東海林はその手紙を、軽く手に取った。

「…、何だ、これ？」

東海林は、少しばかり声を詰まらせた。

あたりまえな話だった。つまり、それはそのままを意味していた。

「……」

緑龍は、口を紡いだままでいた。言葉と言う物を、緑龍は放って  
いなかった。そもそも、そんな気が、無いようにも思えた。

「……俺たちが今日、帰ってきたときに置いてあったんだ」  
ふーん。

東海林は思う。そして、一瞬引つかかる。あれ？となる。

「何で赤龍は、俺じゃなくてお前たちの方に、この手紙を送ったんだ？その方が絶対に確実だろうに」

考えてみれば簡単な話だ。

赤龍 居候 東海林の部屋。

緑龍 居候 大介の部屋。

赤龍 居候？大介の部屋 緑龍？？赤龍。

つまり、そう言うことだ。

赤龍がこの手紙を見せたいのなら、東海林の部屋に送れば簡単なことなのだ。しかも、紙をどこで手に入れたか、と言うことだって問題に上がってもいい話題だと、東海林は心から思った。

「えっと……」

大介の目が、泳いだ。

緑龍の方に向いた。

それを見た緑龍も、どこか困ったような、そんな風な表情をしな  
がら、大介を目を合わせていた。

東海林は、少しばかり視線を細めた。

大介は「その……」と言いながら、東海林の方に視線を向けた。  
「……」

東海林は、冷やかな視線で、二人の方に視線を向けていた。そ  
れは、色々な意味であたりまえな話だった。

「……多分、俺たちの部屋の窓だけ空いてたからだ！」

大介は言った。

それを聞いた緑龍は、「あ、そう言えばそうだったね!」と、強引に大介へとついて行く。しかし東海林は、大介たちについて行くとは思えなかった。

「それなら、ポストから入れればよかっただろ」

そう、考えれば簡単な話。

それを聞いた大介は、「そう言えば…、そうだな」と、脂汗をかく。手が、汗で滲み始めている。額に、汗らしき水玉が、浮かんでいた。

緑龍は、再び大介の方に視線を向ける。

「…た、多分な…」

大介の、再び破綻しかけた論が、東海林の耳に突く。

「多分、これを書くために俺たちの部屋に入ったけど、でも東海林の部屋の窓が開いてなくて、風が強かったから、面倒くさくて、俺たちの部屋にこれを置いてったんだ」

「お前のその考えには矛盾点がたくさんあるな」

東海林は言った。

一つ一つあげていくときりがない。東海林は思うと、少しばかり目を細めた。

核心だけを、東海林は告げた。

「それに、何でその部屋が大介の部屋だって、窓を見ただけでわかったんだ？本がたくさんあったからか？それだけで、大介の部屋だって、本当に確信が出来るのか？」

赤龍の鼻がいいのは、ないしょ。

聞いた大介は、更に勢いを増して、脂汗を輝かせる。だらだらと襟の中に、汗の水玉らしきものが入っていく。

「…、」

大介が、緑龍と目を合わせようとした。

緑龍は、俯いていた。ただ、床の方をじっと見つめていたとも、東海林には見えなかった。

「…、いいでしょう」

そう、緑龍は言った。

聞いた東海林は、少しばかり視線を緩和させた。

大介はそれを聞くと、少しばかり焦る。「おいおい、あの約束は……」言いかけて、緑龍は小さく言った。「仕方がないじゃないか。それに、」

言うつと、緑龍は東海林の方に、顔を上げる。「もう嘘は、通用しないよ」

それは本当の事だった。

聞いた東海林は、ただ口と沈黙を、無意味に紡ぐばかりだった。東海林は、少ししつかりとした視線で、二人（一人と一匹）を見つめた。

「やっぱり、何か知ってるんだな」

東海林は言った。

聞いた大介は、もう何も言うことは無い。ただ、口を紡ぐばかりだった。それだけだった。

緑龍は、「はい」と東海林にはつきりと言った。

「本人からは口止めされていたんですけど……」

少しの前置きをすると、緑龍は、大介の方に視線を向ける。大介は、どこか居心地が悪そうな、そんな雰囲気あたりを醸し出していた。少しだけではあるが、そんな大介に、緑龍は小さく、目を細めた。

「……」

少しばかり、東海林は黙った。

二人は、小さくおこっているのか、呆れているのか、反省しているのかよく分からない顔色で、ただ沈黙していた。または、お互いを見あっていた。

東海林が、沈黙を裂くように言った。

「あ、……あのさ」

その声は、音のなかったその場所に、じんと染み渡る。

二人（一人と一匹）は、東海林の方に視線を向ける。東海林は、

一瞬口をふさいだ。しかし、言葉を続けた。

「…立ち話もなんだから、部屋に入って、話さないか？」  
常套句みたいなものだった。

オーボエの音がなくなった。

黄色い髪をした、オーボエを持った少女が、さっきまで吹いていたそれを口から離し、ハンスの方に一度、軽い会釈をした。

それを見たハンスは、ふさいでいた耳を、すぐにゆっくりと、開いていく。ハンスは、そこに何も害のある音がないと知ると、香奈たちの方に一度、軽く頷いた。それを見た香奈は、少しばかりの疑念を押しとどめて、外の音を聞いた。

音が、そこにはなかった。

確かに、小さな音なら聞こえてきた。外でなっている車のクラクション、水道管に水が流れる音、ほんのかすかではあるが、音はあった。

しかし、異質な音は何一つなかった。

たとえば、オーボエの音。

「…、今のは…？」

香奈は、ハンスの方に、真剣なまなざしを向ける。ハンスは聞くと、一度、考えるように、小さく頷いた。

「うん、畔ちゃんね、どんなことを聞いても、どんなことをしても、自分のことを殆ど何一つ明かさなかったんだよ。殆ど何一つねだから、さっきのオーボエで、音の魔法、音魔おんまを使って、畔ちゃんの頭の中を読み取るうってものだったんだけど…」

ハンスは言った。

ちよつと待った、と香奈は思う。

「あの…、何をしても何も言わないって、何をしたんですか…？」  
聞いたハンスは、少しばかり視線を逸らした。ライカンは、そんなハンスをただ見据えている。ただ、それが本当にただ見据えているだけなのかは、分からない。

ユーカも、視線を少しばかり逸らしたことは、事実だ。

「…、聞いちゃいけないこと、聞いたかしら…」

香奈は小さく呟いた。

聞いたハンスは、少しばかりため息交じりに、こうはつきりと、  
香奈に言った。

「…、海の底を、見せてあげたんだ」

ハンスは言った。

香奈は「え…？」と小さく声を放った。海の底を見せてあげる、  
その意味が、香奈には理解できなかった。

香奈は黄龍の方に視線を向ける。それを聞いた黄龍も、少しばかり疑問を浮かべながら、視線をハンスに向けていた。黄龍も、その意味が分かっているわけではなさそうだった。

見たライカンは、淡々と言った。

「海の底に行ったら、どうなるかわかるよね」

それは、疑問ではなかった。

聞いた香奈は、ライカンの方に視線を向ける。「海の底に行ったら…」小さく、ライカンの方に言った。ライカンは、ただ真っ直ぐで、どこまでも真っ直ぐな視線を、香奈にやっているだけだった。

「どうなるの…？」

香奈は言った。

それを聞いたライカンは、少しばかり目を細めた。

「分からないの？」

ライカンは、香奈に聞くようにそう言った。

それを聞いた香奈は、再び少しだけ考えてみる。海の底に行ったら、どうなるのか。

そんな事、実際に行ってみないと分からないと思う。でも、そもそもしけない、と香奈は思った。そもそも、そんな海の底になんていけない。海の底に行ったら…、

底に行ったら…？

香奈は、納得した。

黄龍は、香奈の方に視線を眺めやっていた。

それを見た香奈は、黄龍の方に聞いた。「分かった…？」と、小さく、不安げに。

黄龍は、頭を横に振った。

香奈は、沈黙するだけだった。

「…、」

沈黙しながら、香奈はライカンの方に視線を向ける。しかし、ライカンから視線を逸らせ、香奈はハンスの方に視線を向ける。ハンスは、どこか落ち込んだような、そんな雰囲気で、床の方に視線をやっていた。床に、何が落ちているわけでもない、香奈は見ないで思った。ただの勘だ。

「もしかして、」

香奈は言った。

ハンスは、目を静かに閉じた。

「ハンスさんは、畔を」

殺そうと

「したんですか…？」

ハンスは聞くと、少しばかり息を詰まらせた。

ユーカは、目を逸らせた。

リビングのドアが開き、ワゴンが押されながら、きゅっきゅきゅと音を立てて、香奈の座っている横まで来た。それを押しているのは、私服の、長身の女性だ。

「セイロンティーです」

そう言いながら、その人物は香奈の方に、紅茶の入ったカップを、温かいソーサーの上に置いた。黄龍にも、その人物は入れる。

「…、ありがとう…、はるか、春香」

ハンスは言った。

聞いた春香は、ハンスの方に視線を向ける。どこか張りつめたような、そんな雰囲気だった。

春香は同じように、ハンスにもカップを、温かいソーサーの上に



置いた。ソーサーは、無意味に白くて、無意味にきれいだった。

ハンスは言った。

一瞬だけ、

見た春香は、こつ言つしかなかった。

きゅつきゅきゅつきゅと、ワゴンのタイヤから音が聞こえる。ただ、その音が嫌な音には聞こえなかった。不思議なことに、妙な満足感に似た、どこか、虚ろな音だった。

ハンスは、床の方に視線を向けるだけだった。

ハンスは言った。

瞬間だった。

それは、畔の声だった。目を充血させた、狂ったような、そんな表情をした畔の声だった。悍ましく、おどろおどろしい、叫ぶような、そんな、よく分からない強引な声だった。そんな畔だった。しかし、と香奈は思った。

何を言いたいのか、それは香奈にもよくは分からなかった。

そんなことは、きっと誰にもわからない気がした。

別の、ユーカそっくりの声が聞こえてきた。それは、ユーカの声ではなかった。

「一つだけ、」

それは、黄色の髪をした、そのオーボエの少女の声だった。

聞いた香奈たちは、その方向に視線を向ける。オーボエを持った少女は、小さくではあるが、確実な声で言った。

「それを、聞けばいいのよ」

その少女は、はつきりとそう言った。

ハンスに渡された地図には、新宿と書かれていた。この場所を、香奈は知っているような、そんな気分に見舞われていた。

ただ、飛んでいた。香奈は黄龍の背中に座りながら、その地図を見つめていた。地図の目的地の場所に、五芒星らしきものが書かれている。それが何を意味しているのかは、香奈には分からない。

「黄龍、」

香奈は言った。

聞いた黄龍は、「ん？」と香奈の方に声を張った。「この地図に書いてある場所なんだけど、」と黄龍に言った。

ハンスは、この地図を素早く書いて、香奈に渡したのだ。簡単な地図ではあるが、はつきりしていて、簡素な地図だった。しかし、そんな中に一つ、似合わないマークが書かれていた。そのマークは、誰もが一度は目にしたことのある、そんなマーク。しかし、地図で

はめつたに見かけないような、そんなマークだ。何故、丸やバツではなかったのかが、香奈には不思議でたまらなかった。

この地図を渡すとき、ハンスは言っていた。『この場所に行つて、この地図を、店長に渡せば、きつと言いたいことがすぐに伝わるはずだ』と。

店長、と言うことは店のはずだ。

「どんなお店なのかしらね」

香奈は言った。想像としては、服なんかが売っているショッピングモールだ。

黄龍は言った。

「ゲーム屋よ」

はつきりとした、簡潔な答えだった。

聞いた香奈は、少しばかり驚く。黄龍は、全くなんでもない、と言った風な雰囲気で、ただ翼で空気を扇いでいる。

「ゲーム屋…って、」

香奈は言いかける。そして、少しばかり考える。

「香奈も一度、言ったことがあるはずよ」

黄龍は言った。

そんなことを言われても、香奈は知らなかった。少しばかり驚いた。「私も、行ったことあるの…？」と、少しばかり声を張り上げた。

聞いた黄龍は、小さく香奈に答えた。

「今年の入学式」

それを聞いた瞬間だった。

聞いた香奈は、「あー、」となんとなくではあるが、全貌を思い出したような、そんな雰囲気を持った。確かに、入学式の夜に、東海林の家に行つて、それから今日みたいに飛んで行つて、そしてそこが、ゲーム屋だった。

あのゲーム屋？

香奈は、疑問しかなかった。

「あのビニール張りのゲーム屋さん？」

聞いた黄龍は、少しばかり思い出す。ビニール張りとはまでは覚えていないが、しかし、確かそんなような雰囲気もあった、気もしくはない。

「多分だけど、そう」

黄龍は言った。

聞いた香奈は、少しばかり息が詰まるのを感じた。そうだ、これはあくまで、自分自身の息が詰まる感覚だ。

そう考えると、少しだけではあるが、安らかに近い、そんな気持ちになって行った。つまり、その気持ちは、香奈だけの物であって、他人の物ではない。つまり、こうともいえる。

この苦しみは、香奈だけの物だ。

黄龍の物ではない。

つまり、香奈の物なのだ。

それだけが、慰めなのかもしれない。香奈はすこし、悲しそうに、しかしどこか満足げに、思うしかなかった。

やはり、気になると思えるものが、そこにはあった。気になる、ではなく、気にしなければならぬ物。

東海林は、赤龍のメッセージを片手に持ちながら、テーブルの上に置いてあるコーラを呷った。反対側には、大介と緑龍がいる。三人（二人と一匹）とも、あまりいい表情をしているとは思えなかった。

東海林は二人（一人と一匹）に聞いた。

「それで、赤龍がどうして、このメッセージを、お前たちに残したんだ？」

それは、話の核のようなものだった。核すぎて、大介には少しばかり、重いような響きを持った声に聞こえる。

「実は、」

緑龍は言った。

聞いた東海林は、緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、東海林に真っ直ぐな視線を向けている。少なくとも大介よりは。

「赤龍が、一度僕らの部屋に来たんです」

一瞬ではあるが、東海林の思考が停止した。

…、何？赤龍が、大介の部屋に来た…？

東海林はそれを聞くと、大介の方に視線を向ける。大介は、さっきのまま、俯いているだけだ。東海林とは、目を合わすに合わせられないような、そんな雰囲気を持っていた。

これは、多分本当だな。

東海林は思うと、小さく吐息を吐いた。ふう…。

「そりやまた、何で」

東海林は聞いた。あくまで緑龍ではなく、二人（一人と一匹）に聞いた緑龍は、「さあ、」と答える。そしてこう、東海林の方に続ける。

「そこまでは知りません。赤龍はいきなり来て、それで一晩だけ泊まっていただけですから」

東海林は、少しばかり視線を細める。そして、赤龍が残したらしき、そのメモを見つめる。メモには、さっきと同じ言葉が書かれている。赤龍の殴り書きが、そこに大きく展開されている。

「全く…、世話焼かせる奴だ…」

東海林は小さく、ぼやくように言った。

「それで赤龍は、僕らが学校に行ってから、出て行ったようなんです。その伝言だけを残して」

聞いた東海林は、「これな」と小さく言った。

つまり、この伝言に、俺の名前があったから、俺のところになぜわざわざ来たって訳か。東海林は思った。そして、大介の方に視線を向ける。大介は、どこか張りつめたような、そんな視線を床に向けている。ただそれだけだった。

「…、全く」

東海林は小さく、本当に小さくこう呟いた。「馬鹿って何だよ、

馬鹿」もしかしたら、緑龍には、聞こえたかもしれないかった。

大介は、少しばかり東海林の方に、申し訳なさそうな、そんな口調で言った。

「すまない東海林……！赤龍に口止めされてて、言えなかったんだ……ッ！」

何だか悪者扱いだな、赤龍。

東海林は思うしかなかった。それ以外に、思ふべきこともないよ  
うな、そんな気もしたのだ。

「大介……」

緑龍は、少しばかり緩やかな、そして穏やかな視線を大介に向けた。大介は、深々と東海林の方に頭を下げている。東海林は、別に大介に対して、何を思っているわけでもない。別に謝ってほしいわけでもない。

「いいんだ、大介。お前は別に悪いことしてないんだ」

東海林は言った。

続けた。

「……悪いのは、赤龍なんだよ」

とても小さな声で、もしかしたら実際行つた訳ではなくて、途中からは、心の中で思っただけかもしれないかった。

しかし、そうではないようだった。

「……東海林さん」

その声は、真っ直ぐとした、緑龍の声だった。東海林は緑龍の方に視線を向ける。緑龍は尋ねる。

「、もしかして、なんですか……、赤龍と、何かあったんですか……？」

それは、東海林の核をついていた。

さっきの、大介の気持ち、少しばかり分かった気がした。東海林は重々しい響きを持ってもいないその言葉に、小さくせき込んだ。  
「……赤龍と、か」

東海林は言った。

そして、顔を上げる。そこには、真っ直ぐな視線をした緑龍と、光がいつもより籠っていない目をした大介がいた。

二人は、正直に話してくれた。なら、こっちだって正直に、話さないとな。

東海林は思った。

「実は、赤龍と、喧嘩したんだ」

東海林は、しっかりとした声で言った。視線は、どこを向いていたのか分らない。目が、合わせられなかった。

大介はそれを聞くと、小さくため息を吐く。東海林には、その音自体が、重々しく感じられた。重々しい響きを持った、重々しい音なるほど、と東海林は思う。赤龍が何であんなにため息を嫌うのか、少しではあるが、分かった気がする。

「道理で、赤龍の様子が、少しおかしかったわけだな。しかも夜なんかに尋ねてきて…、」

聞いた東海林は、「面倒かけたみたいだったら、謝っとく…。ごめん」小さく言った。それしか言うべきことを、見つけられなかったような、そんな気が東海林にはする。ただ気がするだけだ。もしかしたら、他に言うべきことがあったのかもしれないが、もう東海林は、口に出して謝ってしまった。もう、一度口で謝ってしまったことは、いくら戻したくても、それは戻っては来ない。

「…、」

一瞬、大介は啞然となった。東海林が小さく謝ったのだ。普段間違ったことをしない代わりに、全くと言っていいほど謝ることがないから、こんなことを言われるのはレアだ。

大介は思った。

「いや、お前は謝る必要ないだろ」

大介は言った。

聞いた東海林は、どこか息を詰まらせるような、そんな感覚に見舞われながら、体を起こすだけだった。ため息を吐きたい気分だったが、東海林は我慢した。

「でも、俺たちのせいで、迷惑かけたことになるんだし…」

東海林は言った。

聞いた大介は、「お前な」と、東海林の方に軽く言った。東海林はどつとも、軽くなれそうにはない気分だった。

「確かにそうかもしれないけど、でもそう言うよりも、考えた方がいいぞ」

大介は言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。大介は、真つ直ぐな視線を東海林の方に向けている。

「そうです、東海林さん。まずは考えなくてはいけませんよ」

緑龍が、東海林に言った。

緑龍の視線と、大介の視線が、ぶつかるような、そんな感覚に近かった。東海林は小さく咳払いをした。

「考えるって、何を」

東海林は言った。

聞いた二人（一人と一匹）は、声を張り上げた。

「赤龍と同よりを戻すか、」

「考えなくては、先に進めません」

聞いた東海林は、伝言の方に視線を向ける。赤龍は東海林のことを馬鹿と言っている。それは、俺が赤龍を止めなかったからか？

東海林は考える。

そして、考えるよりも、口に出した方が早いかもしれない、と言うことに気が付く。東海林は思ったことを口に出す。

「それじゃあ、何で赤龍は、俺を馬鹿なんて言ったんだ…？」

東海林は言った。

それは、この部屋にいる二人（一人と一匹）が、答えられるはずもないものだった。答えられるのは、赤龍だけだ。つまりそう言うことだ。

東海林は、少しばかり目に力を込める。その力は、どこか何もなくて、虚ろなような、そんなものがあつた。しかし、虚ろはうつろ



なりに、そこにはちゃんとした、力のこもった眼と言う物があつた。  
「でも、」

東海林は言った。  
続ける。

「俺も謝らなきゃいけないことがある」  
確証だつた。

さて、どうしたもんかの…。

赤龍は思うしかなかった。あの伝言を書置きして、そして今は、よく分らない場所にいる。

よく分らない場所と言うのは、文字通りよく分らない場所だ。信号もなければ表札もない。何もない場所だ。あえて言うなら、そこには水が、山のように存在していた。違う、そこは海だつた。ただの海でしかなかった。

海の上に近い、どこか暗い、そんな場所に、赤龍は飛んでいた。そこはどうも、赤龍がさっきいた場所ではなさそうで、なおかつ、見た限りでは、日本を通り過ぎてしまったようだった。赤龍は思う。思いながら、赤龍はため息を吐くかどうか迷う。

ため息を吐いたところで、たった一回なら、この大きな海が吸い込んでくれるはずじゃ。

赤龍は思った。海はどこまで行っても海で、それ以上でも、それ以下でもなかった。広くて青い海は、たったそれだけ、と言ってしまえばそれだけなのかもしれない。所詮は海、と言うことになるのかもしれない。

しかし、赤龍にとっては、海はいい破棄捨て場にはなるかもしれない。なかった。

「…はあ…、」

赤龍はため息を吐いた。いつもなら絶対に吐かない、そんな単調な音だつた。

赤龍は、少しばかり気分を落ち着かせると、海の方を向かずに、

翼をはためかせながら、考えていた。

さて、これからどうしたもんかの。

考える。頭を働かせる。

もしかしたら、日本以外にも器がいるかも知れんな。

赤龍は思った。思う以外、他がなかった。あんな手紙を書いてしまつて、もう東海林には顔向けできない。赤龍は、小さくではあるが、顔向けしたくないとも心の中では思った。たったそれだけのことなのかもしれないが、それは赤龍にとって、大きな意味をなしていた。

東海林から離れる、と言うことは、食料確保をちゃんとしなければ、死ぬ、と言うことだ。赤龍は思った。

ただ、そこに何かが流れていくのと同じような流れが、そこにはあった。海面に、少しではあるが、漣が立っていた。これと同じだろうか、赤龍は考えてみる。分らない。しかし、それが無意味と同じくらいな意味を成していることは、赤龍にも理解が出来た。ただそれだけのことだ。

赤龍は考える。

海外に行けば、もしかしたら他の器がいて、それで交友関係が、結べんこともないかもしれん。

それはおそらく確かなことで、赤龍も、少しではあるが、確信を持っていた。赤龍にとって、器は器でしかない。そう、赤龍は、赤龍が見える人間に出会いたかった。しかし、器は器に過ぎない。

東海林は器に過ぎない？

赤龍は、頭がもやもやしていることに気づき、考えるのをやめてしまった。面倒くさいと怠いの間ぐらいの感覚が、赤龍を苛んでいた。

ただそこには、暗い海が広がっていた。ただそこには、赤い龍がぽつんと、一匹だけで飛んでいた。ただそれだけだった。

あれ、と雄大は思った。バースーンを吹きながら思ったことだが、

バースンのキーが、少しだけではあるが、妙に違和感のある押し心地になっていた。さっきまで、こんな風ではなかったような、そんな気が雄大にはする。しかし、もう一度押してみると、そのキーがそうあるべきなのか、雄大には分からなくなる。

雄大は、バースンを口から離す。そして、ピアノニッシモキーを押してみる。

「…、…？」

雄大は顔をしかめる。

青龍は、床に寝転がりながら、雄大の顔を見つめている。雄大は、どこか心配そうな表情をして、バースンのキーを押していた。

パコ…パコ…パコ…

音は同じだ。いつもと同じ。押したときの音は、いつもこの音程の、この音色だ。雄大は分かっていた。

しかし、押し心地と言うか、感触が違った。

「…どうした」

青龍は、とぐろを巻きながら雄大に言った、淡々とした口調は、どこかその部屋には、透き通るように響き渡った。

「ん？あのさ、何か変」

だけで分かるわけがない。

青龍は目を細め、雄大に言い放った。「…、何が」

雄大は、別のキーをパコパコと弄りながら、青龍に、親指のピアノニッシモキーを見せる。そして、パコパコと、押して見せる。

青龍は、目を細める。

「…、」

はつきり言って、雄大が言いたいことは、ごくたまに、意味不明なことがある。それがどんな時であれ、青龍を困らせることに変わりはない。

青龍は、雄大の顔を見る。雄大は、真剣そうにピアノニッシモキーを押す。

「…、それが、どうかした」

青龍は言った。

聞いた雄大は、「うん」と声を張り上げる。「だって、何か変な感じがするー」と、青龍に言う。そして、雄大は青龍に、ピアニツシモキーを空ける。青龍は、そのピアニツシモキーを押してみる。

……パコ……

…、

分からなかった。それはいつも、聞く側に回っているからかもしれない。青龍は思った。はっきり言って、この感触が変と言われても、そんなことは青龍に分かるわけがなかった。分かるのは、ちょっとばかりキーの感触が、こりこりとしている、と言うことだけだ。こりこりしていて、少しばかり雄と気持ちがいい。

「でしょ？」

雄大は言った。

聞いた青龍は、「…、このままの方がいい」と呟く。勿論、雄大は反対するだろう。青龍は思った。

「やだよ、だって変な感じー」

雄大は言った。

ほらね、やっぱり。

青龍は思いながら、小さく呆れる。そして雄大の方に視線を向ける。雄大は、ただピアニツシモキーを弄っているだけだ。ピアニツシモキーと言うのは名前だけで、別に、押したらピアニツシモになる、なんて代物ではない。音を変えるときに必要なもので、全くピアニツシモは関係ない。

しかし、ピアニツシモな感覚が、そのキーにはなかった。ちょこんとしている割には、親指にフィットする変な感覚があつて、それはそれで嫌なものがあつた。

「でもさ、何か変なんだよなー」

雄大は言った。

青龍は視線を細めた。

「なんかさ、こう、ピアニツシモって感じが出ないんだよなー、ど

うしたらピアニツシモって感じが出るんだろう…」

言った。

聞いた青龍は、目を細めた。そして、雄大のバスーンに目をやった。

「知らない」

答えた。

簡単なものだった。

黄龍は覚えている。そこは以前と、何も変わっていない。黄色いビニールが張られていて、雨風をただ避けるだけに見える、簡素なビニールハウスとも取れなくはなかった。

新宿の裏。

限りなく『アンダーグラウンド』と呼ばれる世界に近い場所。そして、限りなく白と黒が行きかつて、灰色が実にシビアに映し出されるところ。

今日の香奈は、白でも灰色でもなかった。おそらく、黒だ。それは本人でも、理解が出来ていた。自分で来たくてこんなところに来たわけじゃない、と言ったら嘘にはなるが、来たかったわけでもない。こんなことが起こらなければ、きつと行きたいとすら思わなかったし、そもそもこの店の存在すら、覚えていなかったかもしれない。香奈は考えた。

「ここのお店の、店員さんね」

香奈は言った。

それを聞いた黄龍は、記憶をたどってみる。

「まあ、いるのはたった一人だけだね」

それでも、香奈は入るしかなかった。足取りを重くして、香奈はその店の中に入る。黄龍も、ただそれに続く。それに、ただ続くだけだ。

そこは、黄色と白に近い世界だった、としか言いようがなかった。

そこは、ただ異様で、どこまでも異様な物しか存在しない世界のよう  
に思えた。ガラスケースの中にすらりと入っている、どこかで見た  
ことのあるようなフィギュア。普段見かけないような、ちよつと  
おかしなゲーム。それからゲーム機本体に、ハッキングツールまで  
売っているように見える。

香奈は見ると、少しアばかり、何か恍惚感に似た、そんなものを  
覚えた、美しいと異様の間を、香奈はどこまでも見つめているよう  
な、そんな気分があつた。そこはまだ、入り口に過ぎないような気  
も、しなくてはなかつた。

「ほら、あそこ」

黄龍は言つた。そして、店の奥にあるカウンターを、指で指した。  
カウンターと言うよりも、それは長机に近かつた。この店にはどう  
見ても似合わない、似つかわしくないような、少し洒落た木製の長  
机。

その奥に座っているのは、少しばかり胴回りが太い、すごいＴシ  
ヤツを着た、三十代半ばの人物だつた。何かの本を読んでいるよう  
にも見えたが、そばにあるラジオを聞いているようにも見えた。聞  
いて驚いたが、そのラジオは、オーケストラだつた。たしか、『L  
a G a z z a L a d r a』だ。確か日本語訳があつたよな、そ  
んな気もしなくはないが、しかしそこに流れているのは、間違いな  
く管弦の音だつた。それはか打楽器。

普通、この手の店だと、香奈のイメージでは、何かのアニメの曲  
とか、ゲームの曲とかを聞いている人の方が普通だと思う。その方  
が、まだ違和感だらけの中の違和感で、あたり違和感がない。しか  
し、この違和感だらけの中に、際立つた優美な音楽で、違和感と優  
美が生み出すのは、少なくとも、香奈の中では、妙なものしかなか  
つた。それ以外に、何があつたわけでもなかつた。

「あの音楽聞いている人？」

香奈は聞いた。

それを聞いた黄龍は、一度小さく頷いた。

「そう、ほら、早く」

黄龍は言った。

それを聞いた香奈は、少しばかりおぼつかない足取りで、「え、でも…」とか言いながら、少しずつではあるが、カウンターに近づいて行った。やはり、龍の方が人よりも力が強い。それは、摂理のようなものだった。

そのカウンターに座っている人物が、香奈の方に目をやった。ラジオから流れてくる音楽が、その場に、異様なまでに優美に漂っていた。

「あ、あの…」

香奈は、おぼつかない口調で言った。

ただ、真っ直ぐな視線で、その店員は香奈を眺めているだけだった。香奈は、少し口の中を乾かしながら、「えっと…」と言葉を紡ぐ。

まっすぐとした視線に感じられたのは、ただの視線だった。

香奈は、地図をポケットから、綺麗に折りたたまれた状態で出すと。それを広げる。手のひらを二つ並べたくらいの、メモ用紙ぐらいの大きさに、それは広がった。

「…、これを…」

その人物は見ると、少しばかり目を細める。香奈は、カウンターには置かずに、手で渡すことにした。カウンターに、置きたいとは思えなかった。そこは、人がいるにもかかわらず、埃が積もっていた。

その人物は、その紙をただじっと、見つめている。ここまでの地図が描かれているだけなのに、それを、その人物は凝視した。もしかして、あの地図に何か、暗号のようなものでも隠されていたのだろうか。香奈は考える。しかし、思い当たる節がない。あのメモに、妙なことが書かれていたかどうか。

いた。

香奈は思った。思いつき書かれていた。そうだ、地図に似つか

わしくない、お気に入りの場所でもないのに、五芒星のマークが書かれた場所。

もしかしたら、あの近くに、細かく何か書かれていたのかもしれない。香奈は思った。

「…」

その人物は、小さく息を吐く。そして、香奈の方に視線を向ける。「いらつしゃい」

どこか、実務的な声が聞こえてきた。その声は、黄色いビニールシートには、あまりにも似合わない声をしていた。その声は、透き通りもしないし、別になんでもない声だった。ただ何でもないわけでもなく、その声は、軽いようなものが、含まれていた。それを、香奈が理解できるわけがなかった。

その人物は、香奈の方に視線を向ける。そして、呟いた。

「春潮香奈、だね」

その人物は言った。

香奈は、目を丸くするしかなかった。

「と言うことは、黄龍も近くに？」

その人物は言った。香奈は、黄龍の方に、小さく横目を向けた。「いるんだね」

その人物は言った。

「この人が、ハンスが言ってた情報屋よ。以前より肥えてるみたいだけど」

黄龍は、小さく呟いた。香奈が、小さく黄龍の方に小さく笑った。「すこしだね」

香奈は驚いた。黄龍は、ただその人物をまっすぐ見つめている。

「私、何も言っていないのに」

香奈は言った。

黄龍は、少しばかり目を細めた。

「貴方も、術師なのね。ごめんなさい、知らなかったわ」  
小さく言った。



もう、はっきり言ってそれだけだったら、香奈は驚かないかもしれない。むしろ、それを聞いたら納得してしまう。ああ、なるほど、だからか。

「知ってる」

簡単な返事だけが、帰ってきた。

聞いた香奈は、小さく息をのんだ。そしてこう、その人物に尋ねた。静かな口調で、とても慎重に。

「あの…」

香奈は言った。

聞いたその人物は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、少しばかりたどたどしく、しかしはっきりと、こう言った。

「貴方の、名前は…？」

その人物はそれを聞くと、つまらなそうに立ち上がる。さっきからラジオから流れてくる『La Gazza Ladra』が、後半の華々しい音楽を演奏している。何度も同じものが繰り返し返されるような、そんな感覚がそこにはある。

「俺の名前は、ながみや長宮 しゅうれいこうき秋冷高貴」

よく分からない名前であることは、確かだった。

黄龍は、少しばかり視線を丸くして、長宮の方に視線を向ける。

長宮は、ただ淡々と、物を口にするだけだった。

「こっちに」

長宮は言つと、店の奥に足を向かわせた。

それを見た香奈は、言葉を慎みながら、得体のしれない場所へ、足を運ぶしかなかった。

カウンターの奥は、段ボール箱でいっぱいになっていた。段ボール箱は山の様にあり、その中には、発売が思いつき来月の物まであった。ラベルに『11月発売！』と書かれている。つまり、ここはどこまで行ってもゲーム屋で、それ以上でもそれ以下でも、はたまた、それ以外の物でもなかった。

長宮は、段ボールの中から鍵を取り出すと、香奈の方にそれを見せる。鍵だ。テンブルキーでない、ごく普通の鍵。何処にでもありそうな、そんな鍵だった。

長宮はそれを、更にその部屋の奥にある鍵穴へと差し込んだ。ガチャガチャ、と言う音を立てて、開錠される。そのドアは、どう見ても黄色いビニールには不釣り合いの、木製の扉だった。ドアノブは、回すタイプの物。

長宮はドアを開けると、ギギギギ、と嫌な音をドアが立てるのを気にせずに、香奈の方に視線を向ける。

「中へ」

長宮は言う。先に入る気配もない。

はつきり言って、少しだけ困った。どうすればいいのか、よく分からなかった。しかし、長宮が入れと言っているのだから、きつと入らなければ、ことは起こらない。香奈は、そんな事、起こってほしくもなかった。

しかしそれは、もう無理な願いだ。

もう既に、色々なことが起こっている。

香奈は一瞬、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、疑問を持ったような視線はせずに、ただ真っ直ぐな視線を、香奈の方へ向けていた。大丈夫。

そう、黄龍の目が言っているような、そんな気がした。

香奈も、大丈夫だと思う。

少しばかり詰まらせた息を、香奈は飲み下した。そして、めまいがしそうなほど、鼓動を早くさせた。

足を、そのドアの奥の、闇の方へと向かわせた。

もう、『La Gazza Ladrà』は聞こえない。

そこは、ただの暗闇ではなかった。ただの暗闇なら、こんなに埃っぽいわけがなかった。そこは非常に埃っぽく、それ以外に表現するなら、空気がこもった場所だった。淀んでいて、暗くて、殆ど最

悪な場所。

長宮も、その部屋の中に入ると、電気をつける。  
かちゃっ

その音とともに、小さな裸電球が、天井の上で揺れた。そこは、絶対に黄色いビニールハウスなわけがなかった。そこにあるのは、少し古風な壁と、長机と、椅子だった。そして、ひどい埃。

それから、山のようにある本棚。

山のようにある本ではなくて、本棚が、その部屋にはたくさんあった。列になって、奥の方へと長々と続いている。それが、ここからではどこまで本棚が続いているのか、そんなことは分からなかった。しかも、本棚にはぎゅうぎゅう詰めになれた本が、こじんまりと陳列していた。

長宮はドアを閉めると、机の方に歩み寄る。そして香奈と黄龍に言う。

「さ、座って」

どこかやる気のないような、力のないような、そんな声だった。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向けようとする。椅子は二つ。黄龍と座れないこともない。

香奈は思うと、慎重に、その椅子に腰かけた。

長宮は反対側の椅子に腰かけると、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、小さくため息を吐きながら、椅子に座った。

「それで、ハンスの紹介？」

長宮は聞いた。

それを聞いた香奈は、「はい」と無機質に答えた。ただの他愛のない会話のような、そんな風にも思えなくはなかった。

「それで、」

黄龍は言った。

それを聞いた長宮は、黄龍の方に視線を向ける。

「まず聞きたいことがあるの」

黄龍は言った。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、真剣そうな視線を長宮に向けている。

「何」

あくまで、長宮の仕事と言えるのは、情報の管理だった。誰かにやめろと言われるまで、情報の管理をする。それが長宮の仕事の一つだ。

そして、許された人に、情報提供することも、長宮の仕事の一つだった。

「この部屋」

黄龍は言った。

香奈は一瞬、黄龍が何を言いたいのか分からなかった。しかし、長宮は別になんでもないといった風な、そんな表情で黄龍を見つめていた。

「空間が歪んでるわ。さっきのお店の近くじゃないわね」

聞いた香奈は、「え？」と小さく声を張った。

「さすが龍、そこまで見抜かれるなんて」

長宮は顔を上げる。そして、黄龍の方に言った。

「ここは確かに、あの店の近くじゃない。でも、その詳細を俺は知らされてない。調べようと思っても、多分ブロックされるだけ」

聞いても、黄龍にはよく分からなかった。しかし、その内容が大切でないのは、黄龍には分かり切ったことだった。

「それで」

長宮は言った。

小さな紙の地図を、長宮は持っている。向いている方向は、黄龍と言うよりは香奈の方にだった。

「君は、襲われたみたいだね。火蔵…、畔、かな？」

きつと、その地図に書かれている内容を読んでいるんだろう。

香奈は思った。

「はい…、急に襲ってきて、何とか応戦したんですけど…」

香奈は言った。

黄龍は、香奈の方に目を向ける。香奈は、どこか息苦しそうな、そんな雰囲気ですべての情報を欲しているだけだった。

「でも、聞いたところだと、何かの集団らしくて」

長宮が、視線を変えるわけがなかった。

息が詰まる。香奈は思うと、少しばかり気管の方に、埃が吸い込まれたことにせき込む。「ぐふ、ぐふぐふ……」

長宮は聞くと、「なるほど」と小さく答えた。そのなにがなるほどなのか、香奈にはよく分からなかった。

「つまり、その情報が欲しい、と言うわけだね」

力がこもっていない、どこか無感情に近い、そんな声。

一度、香奈は頷いた。

「とりあえず、」

黄龍が長宮に言った。

聞いた長宮は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は続ける。

「畔に関するすべての情報が欲しいの。特に、」

一体畔が、どんなものに関与しているのか。

黄龍は、香奈の代わりに言った。

それを聞いた長宮は、少しばかり目を細める。「分かった」と小さく呟くと、椅子から立ち上がり、体の向きを変えて、その本棚の間の、闇の中へと消えていく。

静寂も何も、そこには何もなかった。何かあるとすれば、それは埃程度だった。そんなものは、お話にも何もならなかった。ただ咽るような、そんな苦しさで気持ち悪さを、そこはあわせもっていただけだった。

どうしても、プレッシャーに似た何かが、香奈の中でとどまっている。そんな気分だった。それが、ただ何もなさに近い、そんなものだったことは言うまでもない。しかし、中身のないプレッシャーは、香奈を圧迫するような、そんな感覚しか生み出さない。

声が、聞こえた。

「香奈」

それは、黄龍の声だった。

聞いた香奈は、若干空の視線で、黄龍の方に視線を向ける。香奈は、いつもよりも格段に、光と言う物を放ってはいなかった。

「どうしてそんなに、思い悩んだみたいなの顔をしてるの……」

心配そうな、そんな声だった。

それを聞いた香奈は、小さく呼吸を整える。肺の中に溜まった重々しい空気が、香奈の中で循環される。

「…私」

小さく、香奈は言った。

黄龍は、何を言うわけでもなかった。

「…、ちよっと、プレッシャー感じてるのかもしれない。いつもなら、そんなの何にもないんだけど、でも今は、何だか違うの。いつもと全然違って、それに、あんなことがあったの、初めてだったから。それで、もしかしたらきつと、私の近くにいる人が、もしかしたらみんな畔ちゃんみたいなのかもしれない、って思ってた。だから、いてもたってもいられなくなって。その中で、一人だけになったみたいで、もしかしたら、違うかもしれないけど、でも可能性はあるでしょ。だから、怖いよ。プレッシャーなのよ。とっても」

香奈は言った。

黄龍は、黙っている。

「でも、でもね。ちよっと違うかもしれないの」

香奈は続ける。

「もしその逆だったらって、思ってるの。もしかしたら、私の近くにいる人たちが、もしかしたら畔ちゃんみたいな人たちに、けがをさせられちゃうんじゃないかって思ってた。もし私が狙いのならだけど、でも一度狙ってきたってことは、そう言うことなんですよ？だから私、もしそうだったら、私のことにみんなを巻き込みたくないの。だって、みんな痛かったり、そうだったの嫌いだから。だから、私も嫌なの。みんながもしそうになったら、って思うと。だから、プレッシャーを感じてるのかもしれない。でも、私は、みんなに痛

い思いをしてほしくない。だから、みんなから離れるの。今日みたいに。ハンスさんには、本当に申し訳ないと思うわ。でも、あの人は強いって、羽並から聞いたことがあるから。だから、ね？」

それはおかしいことだった。

聞いた黄龍は、香奈に言った。これは言うしかなかった。

「それじゃあ何で、香奈は」

東海林を

「頼りにしないの？」

言葉に困る質問だった。

確かに、それはそうだった。羽並から聞いたことは、ハンスも東海林も強くて、もしかしたら東海林の方が強いかもしれない、と言う物だった。だから、二番目のハンスを頼りにするのは、少しおかしい話だ。

香奈は小さく口を紡ぐ。そして、小さく言葉を紡ごうとする。

その時だった。

バサン！と、机の音から音が聞こえた。それと同時に、ひどい埃が、香奈の方に舞い上がって行った。

「これ」

長宮は、どこか力のこもっていない、感情的でない目を、香奈たちの方に向けていた。香奈は、少しばかり視線を上げる。そこには、ファイルのようなものがたくさん、積み上げられている。

長宮は椅子に座る。ギィ、と言う音が、椅子から聞こえてくる。

椅子は、相当古い様子だった。そして、無感情そうな視線が、香奈たちの方に向けられた。

「何から知りたい？」

疑問符は、しっかりした声だった。

それを聞いた黄龍は、どこか不満そうに、しかし、どこか仕方なさそうに、長宮の方に視線を向ける。「何の資料があるの？」と、黄龍は静かな口調で尋ねた。「ええっと」と言いながら、長宮は数個のファイルを取る。そして、目を細めてそれを読み上げる。

「まずは、表向きのプロフィール。それから裏向きのプロフィールと、それに関する資料もろもろ」

聞いた黄龍は、すぐに長宮に言った。

「裏向きのプロフィールから、聞かせて」

聞いた長宮は、少しばかり目を細める。一つのファイル以外を、さっきの資料の山に返した。そして、その中身を取り出した。

「この中にも、いろいろとあるけど」

長宮は言った。

黄龍は、少しばかり香奈の方に視線を向ける。香奈は、さっきから一言も口を利いていない。何か、さっきとは違う、落ち込んだような、それとは全く違うような、そんな表情をしていた。黄龍には、それが何なのか、どのみち分からなかった。

「…、それじゃあ、なるべく概要が分かる奴をお願い」

黄龍は言った。

それを聞いた長宮は、「了解」と小さな声を放った。そして、そのファイルの中から、紙の資料を取り出した。そこに、たくさんの文字で埋められていた。一文字一文字に、意味がなさそうな文字だった。

「『火蔵 畔 天野下学園中学高等学校に通う中学三年生。本職は

…』うわ…」

長宮は言った。

聞いた黄龍は、顔を上げる。さっきまで無感情そうだった長宮の視線が、少しばかり丸く、大きく開かれていた。

「どう、したの？」

黄龍は、長宮に尋ねた。

長宮はそれを聞くと、「…うん」と小さく言いながら、その紙の方に視線を向ける。そして続ける。

「『…、殺し屋』」

しっかりとしていない声だったということとは、言うまでもない。



## いい出会いではない

結局、分かったことは、畔が殺し屋だったということだ。つまり、何かからやとわれて、香奈を殺せと言われたから、香奈を殺そうとした。そう考えるのが筋だと、香奈は考える。考えたくはないのだが、それを考えざるを得ない状況になっている。それが今であることも、香奈は十分理解している。

結局、また門限を破りそうだった。これで減点は免れない。香奈は思いながら、重々しい空気を、体の中へ吸い込んでいた。どこか、排気ガスに似た、そんな息苦しくて、咽かえるような、そんな感覚に近かった。

「…」

何を語ろうとも思っではいなかった。

しかし、そこは明らかにおかしかった。

ゲーム屋のビニールハウスから出て、通りに出た、その時だった。まだ今は、七時半ごろだ。この時間帯は、まだ人々が活発で、そのあたりを歩き回っていてもおかしくはない。

むしろ、こっちの方がおかしいのだ。

香奈でなくてもそれは分かった。

「…、嫌な予感がするわ」

それは、あながち間違っではいなかった。

その道には、そもそも人なんてものが存在しなかった。普通、そんなことはありえなくて、誰かしらがこの道を通るはずだ。そのはずなのに、そこには香奈たち以外、誰もいなかった。つまり、そう言うことだ。

普通じゃない。

「とにかく、普通じゃないわ…」

黄龍は言った。

少しばかり、怖くなった。

香奈は、怖くなった。はつきり言って、怖くならないわけがなかった。プレッシャーでもあって、それが何だかも、よくはわかっていなかった。得体のしれない物を怖がらない人なんていない。香奈は考えた。

黄龍は、辺りに視線を向ける。気配が、どこからするのは確かで、その気配が、あまり友好的でもないことを、黄龍は察知していた。

「また何か、出るわね」

黄龍は言った。

香奈は、困ってしまった。困ったことは困ったことで、黄龍にも関係があるが、それを言うことも、香奈には出来なかった。もしかしたら、ビニールハウスの中にいる長宮だって関係があるのかもしれないし、それは分からない。

しかし、なんとなく分かっていた。

「あら、随分と余裕なのね」

その声が、聞こえてきていた。

聞いた二人（一人と一匹）は、はっと顔を上げた。通りの向かい側だ。

さっきまでいなかったはずの人が、そこに佇んでいた。

香奈は、困ったような視線を向けた。

「貴方は？」

黄龍は、警戒を崩さずに、その人物の方に視線を向けていた。その人物は、どこか強気そうな顔をしていて、どこか笑っているような、嘲たような視線をしていた。

「私はジェーン、ジェーン・エリザベータ」

黄龍は、ジェーンを視界から離しはしなかった。そんなことをするわけがなかった。そもそも、そんなことをしたら命とりだった。歩幅は小さく、少しばかりテンポが速い歩調で、香奈たちに近づいてきた。

「貴方が、もしかして畔が連れ損ねた、春潮香奈？」

黄龍の方に、ジェーンは尋ねた。

困った。

それを勘違いしているとは、黄龍は思えなかった。そもそも、香奈の名前を知っている時点で、この場合、顔まで知っている、と考えた方が賢明だ。つまり、ジェーンはわざと、黄龍に尋ねている。

「貴方が、畔をよこしたのね」

聞いたジェーンは、歩調を緩やかにしながら、少しばかり距離を取る。間は、およそ十メートルほど。

「もしかして、貴方は香奈が連れてるっていう奴の方…？」

ジェーンは尋ねた。

なにかをとぼけているような、そんな口調だった。そんなことも分からないかと思うということは、つまり、こちらを見下している、と言うことだ。

「馬鹿にしないで」

黄龍は言った。

聞いたジェーンは、「あら、馬鹿に何てしてないわよ？」と黄龍の方に返した。

「私はあなたたちを馬鹿にするために、ここに来たんじゃないのよ？ 私はまだ、私がやるべきことをしに、ここに来ただけ」

黄龍は、少しばかり身構えた。

香奈は、視線を上げた。

「…あの」

香奈は言った。

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。勿論、ジェーンの視線も、香奈の方に向いている。

「何かしら」

ジェーンは言った。

聞いた香奈は、少しばかり、喉が渴いてきたことに気が付く。声が、うまく出なくなっていく。それは、確かなことだった。

「…、貴方は、何で私のことを狙ってくるの…？」

香奈は尋ねた。

一瞬、ジェーンは目を丸くした。「あら、知らないの？」ジェーンは軽く、香奈の方に言ってくる。香奈は聞くと、ジェーンが何を言いたいのか、よく分からなくなってくる。

「知らないって、何を」

香奈は、ジェーンの方に視線を向ける。

黄龍は、警戒を解いてはいない。

「あら、本当に知らないのね、貴方の両親の事」  
え？

両親の事？

香奈は考える。両親の事なら、いくらだって思いつくことがある。むしろ、今ここで会った奴に、そんなことを言われたくはなかった。と言うか、何でそんな、初対面の人物が、自分の両親を知っているのかすら、香奈には分からなかった。自分と同じ年ぐらいに見えるから、おそらく、十五、六歳辺りだろう。香奈は見ていて思う。それなら、両親と仲がいい関係、と言うことでもないだろう。

それじゃあ、何？

香奈は考えた。

「…、何よ、それ」

香奈は尋ねた。

黄龍は、足に力を込めた。

「うーん、教えてあげなくてもないけど、でも、一つだけ条件があるわ？」

聞いた香奈は、「何？」とジェーンの方に声を放つ。

どこか、ひんやりとした冷たい笑みが、ジェーンの方から、香奈の方に降り注がれた。それは、恐らく気のせいではない。

ジェーンは、どこから取り出したのか、銃を片手に持ち、それを香奈に向けた。一瞬の出来事だったが、黄龍はそれに反応した。

「私に勝ったら、教えてあげる」

その銃は、どこまでも黒光りしていた。

黄龍は叫んだ。

「下がって！」

黒光りしたそれが向いていた方向は、香奈だった。

香奈の方に、銃口が向けられていた。女性でも扱えそうな、そんな小柄な銃ではなかった。

それに、香奈は反応できなかった。

ジェーンは、ただ引き金を引いた。装填をしていなかったところを見ると、自動装填式のように見える。だから、引き金を引いただけ、ただそれだけだった。ジェーンの持っている銃の銃口から、弾らしきものが飛んでくる。

それは、緩やかな、しかし殆ど角度のない放物線を描いて、香奈の方に押し寄せてくる。香奈は、見てはいたが、それをよけることは出来なかった。そこに、時間なんてものがあつたのかすら、香奈には疑わしかった。

バン！

音が、遅れて聞こえてきた。

香奈の胸部に、弾が当たった。

否。

「え……」

小さく、香奈はつぶやいた。

目の前にいるのは、ジェーンとか言う銃を持った女ではない。黄龍の、黄色い背中だった。黄色い背中と、大きな黄色い翼。

黄龍の前が、見えなかった。

「香奈、私が何とかするから、動かないで」  
嫌だった。

そんなことを言う暇はなかった。

ジェーンはすぐさま走り出す。黄龍の後ろにいる香奈を、確実に狙うためだ。

黄龍は、香奈とジェーンの直線上にいた。そこにいるしか、黄龍には出来なかった。

ジェーンは、自分がいくら走っても、香奈が見えなくなっていることを知る。「あら」と、どこか滑稽そうに、黄龍に言った。

「貴方、そんなに香奈を守りたいの？それとも、ただ殺されたいの？」

ジェーンは、平然と言い切った。

聞いた黄龍は、何も答えない。目が、口で言わない分の物を、ジェーンへと言い切っていた。

「…、まあいいわ」

ジェーンは言うつと、視線を細める。そして、銃口を黄龍の方に向ける。黄龍は、何も言わずに、ただ香奈の前に立っている。

引き金が弾かれた。

黄龍の腹部に、それは命中する。その弾は、龍の皮膚を突き破ることは無く、しかし、確実なダメージを、黄龍に与えていく。

黄龍は考える。

銃は、必ずいつか、リロードをしなければ弾が打てなくなる。弾切れになるから。その一瞬さえあれば、何とか行けるかもしれない。黄龍の体に、数個の弾が食い込んでいく。それは、確実に黄龍をむしばんでいく。黄龍の体のあちらこちらから、血のようなものが流れ始める。息苦しくはない。ただ、目の前にやるべきことがあるだけだ。

ジェーンは視線を細める。黄龍の目は、どこまでも真っ直ぐと、ジェーンの方に向いている。

背中では、何か寄り添うような、そんな感覚が黄龍を包む。そして、次の瞬間、胸のあたりに痛みが走る。

「もう、もうやめて…」

しゃがれた声だった。

それは、香奈の声だった。

黄龍は、一瞬何が、自分の中で揺らいだような、そんな感覚に包まれた。温かくなつた瞬間、冷たい感覚が黄龍を襲う。

その振動は、寄り添っている香奈にまで伝わってくる。

「黄龍が私の代わりに傷つくなんて…、だめ…！」

プレッシャーが、吐き出されていく。そして、それと同じか、それ以上のプレッシャーが、香奈の中であふれだしてくる。どこまでも。

「私、黄龍が傷つくところなんて、見たくない！」

揺らぎはしなかった。

それが、自分の守っている物なんだと思うと、黄龍は逆に、安心感に似た何かに包まれていった。そうだ、香奈はこんなにもあたたかくて、こんなにも、自分のことを思ってくれる。

そんなことは、当たり前だった。

「香奈…」

黄龍は言った。

ジェーンは引き金を引き続ける。

「私も、」

香奈には傷ついてほしくない。

何があったのか、香奈には分からなかった。

しかし、黄龍が言うことは、香奈の中で、プレッシャーに近い物になって、それは重く沈んでいく。

香奈は、涙を流す。

「…ッ、頑丈ね」

ジェーンは言うつと、マガジンを地面に落とす。

今だ！

黄龍は思う。そして、痛みなんてものを忘れて、ジェーンの方に勢いよく走る。このスピードを、人がとらえられるとは思わなかった。

あの銃さえ壊せば…ッ！

黄龍は思いながら、マガジンが抜かれたその銃に、自分の爪を突き立てようとした。

ジェーンが、うれしそうに笑った。

黄龍は、一瞬何だかわからなくなった。

ジェーンは、その銃口を香奈の方に向けた。マガジンの入っていない拳銃を、香奈の方に向けたのだ。

黄龍は考える。あの拳銃は自動装填式のはず、だからマガジンが銃に入っていないと、弾倉には弾も、何も入っていないはずだ。それじゃあ、一体ジェーンは、何をうとうとしているのだろうか。

黄龍は考えた。

引き金が引かれて、打ち出されたものは、弾ではなかった。

弾ではない、何かの、力の塊のようなもの。

はっとなった。

バン！

乾いた破裂音のような音が、その場所に響いた。

その『弾』の直線状にいるのは、香奈だった。香奈以外の誰でもなかった。黄龍は、それが簡単に分かった。

！

言葉を発さなかった。

黄龍自身、自分がこんなに走るのが速いなんて思わなかった。

しかし、黄龍は走った。拳銃から出た弾を追い越して、香奈の前に立つ。

肩に、弾が食い込んだ。

「……ッ」

声は、出さなかった。

ただ、そこに痛みが走っただけだった。

ジェーンは、「あら」と黄龍に、少しかり皮肉そうに言った。

「残念だったわね、弾がないと思ったから、大丈夫とか思ったんでしょ？でも残念でした。この銃に弾なんてものは必要ないのよ。いるのは銃本体と『私』だけ」

向けられる。

はつきり言って、黄龍にはどうすることも出来なくなってくる。



そこにあるのは、さっきまでと同じ現状。ただそれだけだった。つまり、何も変わってはいなかった。

ただ、黄龍は撃たれるだけで、ジェーンはただ撃つだけ。たったそれだけだ。それだけで、それ以外何もない。

「…」

でも、いいかもしれない、と黄龍は思う。

私は、私の守りたいものを守るだけでいい。私と一緒に暮らしてくれて、一緒に食事をしてくれて、温かい言葉をかけてくれる、香奈を守っているだけでいい。

そう、一瞬思えてしまう。

それなら、死んでもいいかもしれない。

その瞬間でもあった。

足の方の痛みが走った瞬間、黄龍はさっきの、香奈の言葉を思い出す。香奈は言っていた。

『私、黄龍が傷つくところなんて、見たくない！』

つまり、黄龍と同じと言うことだ。

香奈は、今も黄龍の背中で、息を潜めて、しかし力強く、黄龍の心をつかんでいる。ただじっと、待っているだけだ。

このいざこざが終わるのを。

黄龍は、目を見開いた。

それだけでよかった。ただ、それだけでよかったのだ。

「…？」

ジェーンは、黄龍の目が変わったことに、すぐ気が付いた。そして、引き金を引くのをやめて、黄龍の真っ直ぐとした視線を、ただ覗きこんでいた。

「私は、」

守る。

そう言葉にした。

黄龍に、もやもやとした、しかし重苦しいものではない物が、取り巻いた。それは、黄龍の気持ちと同じように、自在に動いた。た

だそれだけだった。

それは地面にしみわたり、黄龍の一部のように、地面を揺らぎ動かしていく。

ジェーンの立っている場所のアスファルトが崩れ始める。

「…、」

ジェーンはそれにすぐに気付く。アスファルトは、ジェーンを落とせるぐらいに、大きく口を開く。そこにあるのは、土と闇だ。

「あら…」

ジェーンは軽く言うと、その闇の中に落ちて行っただ。

そもそも、黄龍がジェーンの死を望んでいるわけがなかった。

そのアスファルトの口から、高い塔のように地面が盛り上がっていく。そこには、バランスを保っているジェーンが立っている。

黄龍は走り出す。

さつきと同じか、それ以上のスピードで走る。そして四肢を着いて、飛び上がる。大きく、翼が宙を扇ぐ。

黄龍は、盛り上がっていく地面の上に立っているジェーンを見つける。ジェーンは黄龍の方に、うまく狙いが定まらない黄龍へ銃口を向ける。乱射するが、それは黄龍にかすりもしない。

黄龍はジェーンに飛んでいく。そして、手の中にある銃を、一瞬にして粉々に砕く。爪が、銃を砕く感覚が、黄龍には確かにあった。「あら」

ジェーンは言った。

黄龍はただ、満足感に包まれた表情で、空中を飛んでいく。ジェーンの立っている地面が安定して地面に近づき。香奈は黄龍の方に歩こうか迷う。黄龍がその前に、香奈の前へ戻ってくる。

ジェーンの足場が、普通の高さにまで戻る。そして、地面は動かなくなる。

黄龍は、ジェーンの方に睨んでいる。

「…、貴方、案外面白いのね…、って…」

ジェーンは言って、辺りを見回す。黄龍は、少しばかり目を丸く

する。

「あの黄色のドラゴン、どっか行っちゃったわね」

黄龍には、意味が分からなかった。

しかし、簡単に答えが出た。

つまり、ジェーンは、あの銃がないと龍を見ることが出来ない、  
と言うことだ。それだけ理解出来れば十分だった。

それは、香奈も同時に理解できたことだった。

「今日はもう攻撃手段がないから、帰るわ」

ジェーンは、少しばかり残念そうに言った。「貴方は、簡単に引き下がるの…？」香奈は、ジェーンに言った。

それを聞くと、ジェーンは「うーん…」と考える。どこかまじめでないような、そんな表情で、ただ冗談めいた風に、考えていた。

そして、冗談めいた口調で、香奈にこう言った。

「私はあなたを殺したいと思ってるわけじゃないのよ？わたしはただ、貴方に興味があるだけ」

意味が分からなかった。興味があるんだったら、そもそも殺そうとはしないのではないだろうか。

香奈は考える。しかし、考えても考えたりない。それに、どう考えていいのかすらよく分からない。

「だから、それじゃあね？」

そう言うと、ジェーンは歩いて、どこかに行ってしまった。道をただ歩いて行っただけだ。追いかけることもできなし、殺そうと思えば、殺すことだってできた。

でも、と香奈は思う。

ここでそんなことをしても、意味がない。

それを、香奈は十分理解していた。

東海林は、一人でうなだれていた。そもそも、東海林には問題が多すぎた。赤龍とは喧嘩をしてしまうし、香奈は風邪気味だというし。東海林には、どちらも重要なことに思えた。そして、東海林に

はどちらも、無視できない問題だった。特に赤龍は。

赤龍は携帯電話を持っていない。以前ハンスからもらったGPSも、赤龍は持っていないかった。調べてみると、この部屋のどこにある、と言うことは分かった。だからなんだ、とも東海林は思った。はつきり言って、東海林にはもう既に、問題が多すぎて、困るべきことがよく分からなかった。うなだれながら、天井を見つめているだけだ。そう言えば、そろそろ試験もあるな。東海林は思った。これで考えるべき問題が三つになった。

はあ、と東海林は小さくため息を吐きたくなるが、やめる。東海林が今、ため息を吐いたところで何も解決はしない。それに、東海林はため息を吐く気分ではなかったし、ため息を吐く気にもなれなかった。ため息が、こんなに野暮ったく感じられたのは初めてだった。

東海林は少しだけ目を閉じる。少し疲れた気もするし、少し心配な気もする。そして少し、考えるだけで疲れそうな気もする。

東海林はベッドの上で横になり、天井でもなんでもなくて、まぶたの裏をじつと見つめていた。そこにあるのは、真っ暗闇ではない。さまざまなことが、浮かんでは消えていく。

そこに、香奈が現れた瞬間だった。

今日は風邪気味。

風邪気味、と言う言葉が、東海林には引っかけた。確かに、香奈はどこか怠そうで、どこか気持ち悪そうな、そんな表情をしていた。それに、東海林にあまり近づいてほしそうではなかった。移したくないから、と香奈が言っていたことを覚えている。

結構大変なはずだ。

東海林は考える。

しかし、東海林はそれを心配するだけで、それ以外に何ができるかと問われると、何もできないとしか答えられない。つまり、今の東海林には何もできない。残念なことではあるが、東海林に、香奈をどうにかするだけの力はなかった。つまり、風邪を治す力も何も

ないということだ。そう言うことだ。

東海林は黙りこみながら、少しばかり吐息を吐く。

「はあ……」

これはあくまで吐息だ、吐息以外のなんでもない。

東海林は自分にそう言い聞かせ、腕を目の前で組み、まぶたの裏に飛び込んでくる光を遮断した。今の東海林には、何もかも、野暮ったく感じられた。それは事実でしかなくて、それ以外、東海林にとっては何も無いような、そんな気しかなかった。

バースンの音は、聞こえない。流石絶対防音と学校が謳っているだけはある。何も聞こえない、と言うわけではないが、その部屋では、何も聞こえない。窓からも、音が聞こえてくるなんてことはなかった。

こんなことは言いたくなかった。しかし、それ以外に表現方法が見つからない。

東海林は仕方なく、心の中でほんの少し、小さな感覚で思った。

……さびしい。

赤龍がいなくなっただけで、こんなにも何もない空間が広がるだなんて、東海林には想像もできなかった。東海林に想像できたのは、喧騒がなくなることだけだった。

心の突っ掛りが、東海林の心の中で突っ掛けて、どこか突っ掛ったようなため息を、突っ掛った吐息だと思って吐き出すのが、なんとなく東海林の中では突っ掛けていた。

思うと、東海林は空腹も忘れていた。思っても、空腹感が戻ってくるなんてことは無かった。あるのは、ただの虚無感。

赤龍、大丈夫かな……？東海林は思った。

中間試験、やだな……。東海林は思った。

香奈さん、風邪大丈夫かな……？

そう思った時だった。

赤龍には連絡が取れない、中間試験も今さら何もしようがない。しかし、香奈のその疑問なら、何とかすることが出来る。

東海林は、不本意ながら目を開ける。そして、枕の近くに無造作に置かれている携帯電話を見る。充電器にも刺さっていない。

東海林はそれを手に取ると、すぐに新規メール作成を選択する。

東海林はすぐに、こうメールを打った。

宛先 香奈さん

添付 なし

件名 風邪

本文 大丈夫？』

内容が何も無いようで、それでいて酷く重苦しいような、そんな気分になった。でも、すごく軽いような風にも見えた。結局どちらでもないのかもしれないが、東海林はそれを、送信するしかなかった。

東海林は、送信ボタンに親指を押し当てた。

蒼空にあるのは暗い、底のないような闇で、そこには何もなくて、その部屋にも、何もないような、そんな風にしかとらえられなかった。

## 晴れ時々曇り

携帯電話は、なかった。

そもそも、夜中に携帯電話が一度もならないなんてことは、その人物には初めてだった。朝起きたら、まずダイレクトメールを削除して、そして再び寝るか、学校の準備をするかである。

土曜日だった。その日は土曜日で、空は晴れ渡っているように見えた。カーテン越しからでも、それがよく分かる光が差し込んでいた。その人物は、携帯電話をベッドの上で開くと、メールボックスを開く。そして、少しばかり目を細める。

受信メール。

その中には、未読メールなんてものはなかった。その方がその人物にとつては珍しいことで、そこには、読んでいないメールなんてものは存在しなかった。つまり、昨日送ったメールの返信も帰って来てはいない。それは、火を見るより明らかだった。

その人物は思いながら、少しばかりため息を吐こうとする。ため息が、妙に野暮ったく思えて、喉の奥で詰まったような感覚になり、その人物はため息が出来なくなる。

その人物は、部屋にあるソファーを見る。ソファーには誰も、何もない。そこにあるのは、昨日と同じ、同じすぎる、虚ろな空間でしかなかった。それは、その人物にとつてはあたりまえのことだった。

その人物は、土曜日も授業がある学校に通っていた。普通の学校なら土曜日ないはずなのに、その人物の学校には、明確な土曜日、と言う物が存在した。それ自体、その人物にとつては、どこか重々しいものに他ならなかった。

その人物は、昨日送ったメールの内容を考える。そして、少しばかり目を細める。光が、天井に注いでいる。天井は、朝の太陽の光に映えている。しかし、その人物はどこか、重苦しいものに包まれ

ている。

簡単な話だった。

その人物は思った。

もしかしたら、俺はやばい間違いをしたのかも知れないな。

考えても見る。はつきり言つて、それ以外の答えが見つからない。親友を失い、風邪で疲れている友人に何をすることもできない。最悪だ。しかも友人。

困ったもんだ、いやそれ以上だ。

その人物は思いながら、携帯電話を一度閉じた。そして、面倒くさそうなくびをすると、起き上がった。ベッドが軋むような音が出て、床がどうもひんやりとしていて、そして、どうも浮いたような感覚が、その人物にはあった。それ以外に何も無いんじゃないかと思えるくらい、その人物にはそれ以外がなかった。

つまらない、辛い、悲しい、以前の問題だった。

その人物は、選択を完璧に間違えたのだ。その人物にとっての向かうべき場所が、一気にガラッと変わったのだ。もうはつきり言つて、何でもよくなつてしまひそうな気分になつてきた。これからは友人は友人のままだし、親友は失われたままなのかもしれない。ベッドのぬくもりが、徐々に失われていくのは避けがたい。これと同じかもしれない、

思いながら、メールボックスをもう一度見直してみる。そこに、何があるわけでもない。何もない、と言うわけではない。しかし、その人物にとって、何があるわけでもない。つまり、何も無いと同義だ。

その人物は、少しばかり目を閉じる。色々考えるが、その考えは泡のように消えていく。泡のように消えて、そしてまた、ぶくぶくと、軽いものが浮かび上がってくる。どれもだめだ。こんなのありえない。

その人物は思いながら、テーブルの方に視線を向けた。テーブルには、一枚の紙が置かれていた。



不恰好な文字で、こう書かれていた。

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ!!』

東海林 その人物。

赤龍 親友。

困ったものだ。東海林は思った。

赤龍がどこかに行ってしまうというのが、もしかしたら、東海林にとって一番恐れていた結果なのかもしれない。今更だが、東海林は考えた。赤龍が、東海林の生活の中から、忽然と、唐突に消えてしまうことが、もしかしたら、東海林にとって一番恐れていた結果なのかもしれない。

笑えて来ない。

しかし、どこか皮肉な笑いは浮かんでくる。

「…はッ」

東海林は、東海林を皮肉そうに笑った。

もう、一番恐れてたことになってんじゃないか。

東海林は思った。

赤龍は、東海林の親友だった人物、と言うよりも龍で、文字通り、赤い龍だ。赤いドラゴン。伝説の生き物でもなんでもなくて、東海林の親友だったもの。蝙蝠みたいな翼があつて、鱗がいっぱいあつて、それでいて、ちよつと前かがみで、口が鰐みたいで、瞳孔がよく見ると縦に割れてて、それでいて、ラーメンが好きな、変な龍だ。龍は、器でないとみることが出来ない。また、術師と呼ばれる人間でないと、見ることが出来ない、らしい。これはただの受け売りだ。

東海林は、今さらもう何もならない、そんな思考を巡らせていた。もうどつちみち、悪い方に転んだものを、どうすることもできない。それに、悪い方に転がした要因が自分となれば、更にあたりまえな話だった。

あたりまえな話で、そこには何も無いような、そんな気分だった。ソファアの上でゲームやってるか、ベッドの横でとぐろを巻いてい

る赤龍の姿なんて、ここには無い。ない以前の問題で、そもそもこの東海林の寮の部屋に、赤龍の存在すらなかった。

空っぽなんじゃないかと思う。

空っぽ以外の何物でもないんじゃないかと思う。東海林は、ただ赤の要素が、その部屋に少なすぎることを、少しだけ悲しく思ってみた。

どっちみち、考えるべきことで頭がいっぱいで、中間試験の事なんて考えられない。そう、これも考えるべきことの一つ。

もうやだ…。

はつきり言つて、東海林はそうとしか思えなかった。もうはつきり言つて、何もすべきことがなくなったような、そんな気分だった。吹奏楽部にも行く気が失せて来たし、そもそも、学校に行く気すら失せてきた。食事をとる気も失せて来たし、起きる気力も失せてきている。

もう一度ベッドの中に潜り込もうか、考える気力もないかもしれない。

東海林は思うと、携帯電話を取った。この携帯電話で、赤龍に連絡が取れば、それだけでも謝れるかもしれないのにな。

東海林は考えた。

テーブルの上には、さっきと同じように、赤龍が書いた紙が置いてあった。不恰好な文字が、東海林の心を締め付けるようだった。

東海林、寺山てらやま 東海林は赤龍しやくりゆうと一緒に暮らしていた器で、今、一番恐れていたことと直面している人物だ。それでいて、東海林はライメン好きで、何をする気力もない。

テレビをつける気力くらいなら、東海林にはあった。もしかしたら、テレビに赤龍が移っているかもしれない。そんなわけのわからない期待が、東海林の中には存在していた。

東海林はテーブルまで歩いていく。面倒くさくて重々しくて、ただどこまでも響かない足音を立てながら、東海林は歩く。そして、気力のない手つきでリモコンの『電源』と書かれている少し形の違

うボタンを押す。それは押されて、テレビまで赤外線が行く。音もなく、薄いテレビが野暮ったく、光を放った。

天気予報だった。

『今日は一日、東京都は晴れの陽気で、セーターやカーディガンがなくても、なかなか過ごしやすいと思われます。洗濯物も、今日は湿度が低いので、乾きやすい一日です。明日になると、少しずつ天気が崩れ始めるかもしれませんので、お洗濯ものは今日の内に…』

そんなことを言われても困るし、そもそも東海林は洗濯物なんてどうでもよかった。洗濯物がたまっていないわけではない。しかし、洗濯をする気分でもない。明日天気が崩れるからなんだっていうんだ。嵐の中でも、俺は洗濯物を干してやるぜ。東海林は心にもないことを思った。

東海林は、昨日打ったメールの内容を思い出す。

『宛先 香奈さん』

添付 なし

件名 風邪

本文 大丈夫？』

風邪の友人だ。東海林にとっては、友人以上の関係を持ちたいとも思っているが、それを実際にこなせるほど、東海林は器用ではなかった。そもそも、香奈が風邪にかかるんだったら、自分が風になった方がよかった、とか東海林は思っているほどだった。

それほどまでだったのに、東海林には、こんなメールでしか励ますことが出来ない。風邪薬でもあげれば、少しは喜んでもらえるだろうか。

東海林は自分の馬鹿さ加減に飽き飽きしていた。そんな事しか思いつけないのか？もっと気の利くものを思いつけないのか？俺は。

あほらしかった。

しかし、何もできなかった。全てに対して、中間試験に対しても、香奈に対しても、

赤龍に対しても。

メールが返ってこないのと、東海林は赤龍がいないと点数を取れないことと、テーブルの上に置かれている手紙が、そのすべてを物語っていた。三つが連携して、東海林の馬鹿さ加減とあほらしさを証明しているようなものだった。

「…」

ため息は、出なかった。赤龍がいるときは、あんなにため息が出来たのに、東海林は思う。赤龍がいた時は、赤龍が嫌だと分かっていたりもため息が出来たのに。

今は赤龍がいないと、ため息が出来ない。

どこまでも、東海林は自分があほらしかった。それでいて、馬鹿らしかった。皮肉だと思ったし、ただの何もできないやつだとも思った。

ただ、そこに虚ろな感覚が広がっていただけだ。ただそれだけのことで、東海林にとっては、それがこれからの日常になる、と言うことを東海林は理解していたはずなのに、それを東海林が望んだわけではなくて、そもそも何もないようなこの部屋の中で、すべてが終わってしまうような、そんな気分しかなかった。

嫌だし、嫌だし、そんな風になるのも嫌だ。

でも、と東海林は思った。

この結果を招いたのはあくまで東海林であって、それ以外の誰でもない。

東海林は、だからこそもっと、嫌になってくる。いつそのこと学校をやめて、そもそも赤龍なんて自分の中でいなかったことにして、新しい生活を始める。

それも悪くはないかもしれない。

今の東海林には、そう思ってしまった。

それ自体が、また東海林には嫌だった。

「…」ただの沈黙に似た、ただのため息のような、そんなものだった。

東海林は仕方がなく、学校に行く準備を始めることにした。

## 結局のところ心配なこと

こんな感覚は、殆ど久しぶりだったと言っていいかもしれない。はつきり言つて、学校に行きたくないだなんて思う日は、ほとんどなくなっていた。しかし、東海林の今日は、その碑には、最近のその感覚からは逸脱していた。

はつきり言つて、学校に行きたくなかった。

空気が乾燥していて、どこか過ごしやすく、しかしまだ、少しばかり熱を持っているような、そんな気候。

普段の東海林なら、きつとこの気候を、言い気候だととらえるはずだ。過ごしやすく、何より暑すぎず、寒すぎない。最高だ。東海林は思った。

しかし、東海林ははつきり言つて、寮から出たくなかった。なんとなくではなく、はつきりと、寮から出たくはなかった。学校が、土曜日あるからって、東海林は学校に行かなくてはならなかった。それが、東海林にとっては少しばかり苦痛だった。特に、電車で行くのは嫌だった。気持ちが悪くなりそうだった。最近電車に乗っていないくて、と言うかそもそも、最近駅から学校まですら歩いていなくて、それを昨日は別に苦痛とも何とも思わなかったが、今は違和感どころの感覚ではない。むしろ、気持ちが悪くて、ぶっ倒れそうな感覚に見舞われた。

…

何を言う気にもなれなかった。

電車も足も、重々しかった。それに、寮から駅まで行くバスも、重々しく揺れていた。

東海林はため息を吐こうとしたが、つかなかった。ため息が、こんなに圧迫感のあるものだったなんて、東海林には分かっていなかった。

東海林はとぼとぼと、駅から学校までの道を歩く。道は長く、そ

れでいて長い。何処までも祖も道は続いていて、ため息が出るくらい長かった。

裏道だった。

東海林は表通りがあまり好きではなかった。臭いし、うるさいし、そもそも人が多すぎる。東海林は、にぎやかなのは嫌いではなかったが、うるさいのは好きではなかった。しかも、車の音までする。

ここには、聞こえてこない。

大通りとこの道が、まるで遠く離れた場所のような、そんな気が東海林にはした。それ以外、東海林には何も思うことがなかった。今思うことは、そんな程度だった。それしか東海林には、思うことが出来なかったともいえるかもしれない。

「…、」

ただ何も言わず、何もせず、携帯電話も弄らずに、裏道をとぼとぼと歩く。

そんな雰囲気だった。

少しばかりの風が、東海林を取り巻いた。優しい風が、そこに吹き抜けていった。東海林は、この風に覚えがあった。

後ろだ。

東海林は思いながら、振り返って後ろを見る。そしてそこには、一人の人物と、緑色の龍がいる。名前は赤龍と同じような名前、緑<sup>じよく</sup>龍<sup>りゅう</sup>だ。

「おはようございます」

緑龍は礼儀正しく、東海林の方に改まって言った。聞いた東海林は、少しばかりぼうつとしながら「ああ…、おはよう」と言った。ただそれだけだ。

緑龍は、心配そうに東海林に言った。

「あの、赤龍は、帰ってきましたか？」

そう、緑龍も龍。勿論、東海林のところにいた赤龍も知っている。龍はみんな仲が良くて、きっと俺と赤龍みたいに、喧嘩なんてしないんだろうな…。

東海林は考えた。

「…」

いや、と言いかけた時だった。

その人物が、緑龍に言い咎めた。

「おい緑龍、今それを言うべきじゃないんじゃないか？」

それを聞いた緑龍は、その人物の方に視線を向ける。そして「でも、」とその人物に言う。

「僕だって、赤龍のことが気になるんだよ、大介<sup>だいすけ</sup>。それに、今赤龍がどういう状況なのかも、僕には知りたいんだ。でも、風は何も運んでこないんだ。赤龍の声も、赤龍の音も、赤龍の話題すら」

赤龍の話題は、そもそも赤龍が見える奴じゃないと出来ない気がするのは、東海林の気のせいだろうか。

東海林は思った。

「でもよ、東海林は今否定と肯定の間にいるんだ、だからむやみやたらにそんな事聞くもんじゃないぞ」

大介は言った。

大介、風戸<sup>かざと</sup> 大介<sup>だいすけ</sup>は、東海林と同じ学校に通っている、東海林と同じ年で、同じ部活に入っている。そしてやはり東海林と同じ器で、東海林と同じく、緑龍を居候にしている。今東海林は、誰も居候にはしていないが。

大介はとことん否定が嫌いで、自分を『否定』と『肯定』ではつきり分けようとする。今の言葉みたいに。

「…でも、大介」

緑龍は言った。

聞いた大介は、緑龍に即答した。

「それじゃあ、お前は俺がいなくなったら、その質問を誰かにされたいと思うか」

どこか怒ったような、そんな口調だった。大介は、そう言う口調だった。

こんな口調もあるんだ…。

東海林は少しばかり感心した。

「…、それは、ないけどさ…」

緑龍は、渋々そう言うしかなかった。それがどこまでも正しいことだから、に他ならなかった。

「だろ？それは東海林も同じだ、な？東海林」

そう言われるのがかなりきつい気がするののはきつと東海林だけではない気がするのには東海林の気のせいだろうか。

東海林は一瞬、そう思った。

「…、それを俺に振るのもどうかと思うけどな」

東海林ははつきりと、大介に言った。

聞いた大介は、一瞬はつとなる。「あ…、ごめんな…」大介はすぐに、東海林に謝る。

しかし、それはそれでまだ許せた。東海林はそこまで心が狭いわけではないし、そんな細かいことを気にしている余裕もなかった。

「赤龍のことで、お前は頭いっぱいだもんな…」

大介は、申し訳なさそうに東海林へ言った。聞いた東海林は、少しばかり考える。確かに、七割ぐらい考えているのは赤龍だ。しかしもう三割は違う。

「いや、俺には赤龍以外にも、心配してることもある」

東海林は言った。

それを聞いた大介は、少しばかり意外そうに、東海林の方に視線を向ける。そして、「え…、そうなのか？」と東海林に小さく言う。それって、さっきの自分の台詞を否定してることにならないか？東海林は思わず考える。

「まあな」

東海林は言った。

多分二割ぐらいは香奈のことで、一割ぐらいは中間のことだ。

「それってどんなのだ？」

だから、さっき自分が言ったことをもう既に否定するんじゃないって。



東海林は思った。

「大介、その質問って…」

緑龍は、すぐに気付いた様子だった。

大介は、「あ…」と小さく声を潜めた。流石の大介でも、やっと気が付いた様子だった。東海林は小さく吐息を吐く。吐息に似たため息かもしれない物。

「べつにいいよ、俺はもう、考え慣れたからな」

東海林は言った。

二人（一人と一匹）は、少しばかり視線を顰めた。

東海林は二人に言い始める。

「香奈さんの、風邪のことも気になってる」

聞いた大介は、少しばかり驚いたような視線を向ける。しかし、質問は自重している様子だった。

「何だか元気がなくて気になってたんだ。それに、あんまりいい雰囲気じゃなかったし」

東海林は言う。

「それは…」

大介は、何かを言おうと必死に考えている。出ない。

「大変…、ですね…」

緑龍が、大介の代わりに俺に言った。聞いた俺は、少しばかり返事に困る。「まあね」なんて言える気に慣れない。

「それに、中間試験もあるし」

東海林は続けた。

それを聞いた大介は、「まあそれは、全員共通の悩みだからな」と、励ますように言葉を放つ。「そうですね、大介だって赤点取らないために必死なんですから…！」と子か頑張った風に、緑龍が言った。

「まあ…、そうなんだけど…」

東海林は言う。

大介が、勝手に続けていく。

「それに、お前には赤龍がいるだろ？普通に満点ぐらい取れ…」

緑龍は、大介の腕を肘で突いた。「へ…」と大介は小さく言う、すぐに「あッ…」となる。はっとしたような顔になり、また口を紡ぐ。

「…、まあ、そうなんだけど…」

東海林は、もうはつきり言っただけを言っているのか分からなくなってくる。

緑龍が、少しばかり怒ったような、そんな視線になる。

「全く、大介ったら、自分で言ったことを行動で否定するんだから、何やってるんだよ本当に、こっちが恥ずかしいよ」

緑龍は言った。

大介は、それに反論が出来ない。

「…、」

黙る。しかし、それが正しいことだとも、東海林には思える。

「でも、まあいいや」

緑龍は言った。「確かに、東海林さんには悪いけど、でも僕には、」と緑龍は続けていく。東海林は、少しばかり黙る。

「そう言うの、大介っぽくていいと思う」

自然な笑みで、緑っぽい風が、吹きぬけていくような。

そんな雰囲気だった。

「…、」

一瞬、緑龍が何を言っているのか、大介には分からなかった。しかし、それを理解すると、大介にも、風が吹き抜けていく。秋の、そんなすがすがしい、いい空気をした風が。

「かもな」

大介は、少しばかり大きめに笑った。それは、不自然なものではなかった。

あーあ、と東海林は思う。

いいよな、こういうの。本当に…。

思うしか、出来なかった。それが、どこかもどかかったような

気が、しなくもない。

でも、と東海林は思う。

この状況だから思えるが、東海林は本当に、何もできない。赤龍が言った通りだ。そうだ、東海林は思う。

俺、赤龍いないと何もできないじゃん…。

東海林は、一瞬啞然となった。

意味が、分かったような気が、しなくもなかった。

朝だというのに、そこにはバスの音があふれていた。バスの音は、その部屋には自然で、その部屋に、バスの音がない朝の方が、その方が気持ちが悪かった。その部屋には、どこまでも音楽が絶えなかった。

その人物は、何も気にせずにバスを吹く。キーを変えて、そして指を変えて、そして、雰囲気を変えて。

それが音楽の楽しさだ。音楽は、作っていく楽しさと、それらを一気に崩して壊して、ゲシュタルト崩壊させるのが面白いと本人、その人物は思っている。

「…、」

傍には、ただひたすら、黙っている青い龍がいた。勿論青い龍なのだから、青龍だ。それ以外の名前なんて、この龍にはありえない、と言うほど、その龍は青かった。そんなことは全く気にも留めずに、その人物は、ただひたすらバスを吹いていた。ただそれだけで、それ以外のなんでもなかった。

青龍は、少しばかり細めで、部屋に掛かっている時計を見る。時計は、もう既に八時近くを示している。普通なら、もう寮を出る時間だ。

青龍は、その人物に言った。

「…、雄大<sup>ゆうだい</sup>」

雄大は、バスをやめようともせず、ただ吹き鳴らしていた。しかし、視線はちゃんと、青龍の方に向いている。青龍は、真っ直

ぐと雄大の方に視線を向けている。雄大はそれを知っても、ただバスーンを吹き続ける。

「……そろそろ学校」

青龍は言った。

聞いた雄大は、バスーンを吹くことをやめない。吹いたまま視線を時計の方に向け、そして、少しばかり目を細める。時計は、八時くらいを示している。

「あ……」

雄大は言うつと、バスーンを口から離れた。そしてテーブルの上に置いてあるスワブ（布に紐をつけ、その先に重りをつけた物）を取る。バスーンの中に、それを通し始める。スワブは細長く、管の中に丁度納まってしまふほどの長さだった。

それが、いつもの雄大の朝だった。

朝と言えるかどうかは、それは微妙な線だった。

雄大、おきた沖田 ゆうだい雄大は、天野下学園中学高等学校に通う人物で、龍を見ることが出来る器の一人だ。器の一人で、青龍を居候している。しかし、どちらかと言うと雄大は何もしていなくて、ただ雄大は、バスーンを吹いているだけだった。雄大は、出来ることならずっとバスーンを吹いていたとも思っていた。

はつきり言つて、雄大はその晩眠っていなかった。と言うか、眠るという行動を、最近していなかった、ともいえる。ただ、バスーンを吹くだけだ。それ以外に何もない。夜から朝、ずっとバスーンを吹く。ただそれだけだった。

雄大にとっては、それはただそれだけのことだった。それ以外の何物でもなく、それ以外のなんでもなかった。ただ、晩から朝までずっと、バスーンを吹くだけだ、ただ寝ないだけだ。

勿論雄大も人間で、少しは眠らないと、身が持たない。だから雄大は寝る。授業中。勿論ノートも取らないし、そんなことをする気にもならない。そもそも眠いだけで、雄大は勉強をする気なんてものが、まるつきりなかった。そもそも、勉強意欲の言葉の意味すら、

雄大には危うかった。

ただバスーンをずっと吹いていただけ、とも言えた。

雄大は思いながら、別に面倒くさそうではない雰囲気で、学校の準備をする。どうせ、雄大にとっては寝に行くだけだ。それだけの準備をすればいいだけなのだ。つまり、そういうことだ。それ以外に意味なんてない。

「…今日は、土曜」

青龍は言った。

聞いた雄大は、「あっそつか」と小さく言った。

今日は土曜日で、そもそも今日はいつもより二時間少ない時間割だ。その後は、ずっと部活のターン。

雄大は思った。

つまり、学園祭が始まりそう、と言うことだ。

そもそも、部活が急に多くなった理由がそれだ。学園祭前だから、部活が急に多くなって、そして、聞かせられるものをつくらう、と言う意志で作られている。雄大は、どちらかと言うと、ただ楽しければいいと思う。それだけだ。

つまり、学園祭だろうが何だろうがどうでもよくて、バスーンを吹いている時間がこの上なく好きだった。恐らく、ほぼ間違いなく雄大はもうゲームをしないだろう。バスーンを吹きたいから。

そのくらい、雄大はバスーンが好きだった。

雄大は、ただ学校へ行くための準備をして、そしてただ、青龍にこういうだけ。

「そろそろ行こー」

そう、そう言うだけ。

それを聞いた青龍は、雄大の方に視線を向ける。雄大は、靴を持って、ベランダの方に向かっていている。青龍は少し面倒くさそうな視線で、雄大の方に立ち上がる。足を向かわせると、ベランダで四肢を着く。そして、青龍は翼を広げる。すがすがしい空気が、辺りに満ちていることが分かる。

雄大はベランダで靴を履くと、青龍にまたがった。そして、青龍は雄大の方に、ちらっとだけ視線を向ける。雄大は、青龍の肩をつかんでいる。いつも通りの事で、いつもこうやっているだけだ。

雄大は言った。

「それじゃあ、行こーか」

聞いた青龍は、ため息気味に翼を扇がせた。

東海林は大介に言った。

裏道だった。喋っているからかどうだかは知らないが、東海林の足取りは、いつもより数段遅かった。

「てかさ、俺香奈さんに、どう聞けばいいんだろ、風邪大丈夫？なんてストレートに聞く気にもなれないし、遠まわしに言うとかえって何かな…」

東海林は悩んでいた。

さつきと同じだった。

それを聞いた大介は、「そんなこと言われても俺が困る」と東海林に呟いた。それはどこまでも正論だった。

「でも大介、」

緑龍が言った。

聞いた大介は、緑龍の方に視線を向ける。

「少しぐらいは考えてあげようよ、今東海林さん悩んでること多いんだし」

悩んでること、と東海林は考える。悩んでいること、赤龍、香奈さん、そして中間試験。

確かに、悩んでることが多い。

東海林は思いながら、少しばかりため息気味に、吐息を吐いた。

「そうか？でも俺、何て言えばいいか分かんないしな…」

大介は、どこか困った風に言った。

「何でもいいから、東海林さんの役に立ちそうなこと考えてあげようよ。東海林さんにはお世話になりっぱなしなんだし」

緑龍は言った。

それを聞いた東海林は、少しばかり苦笑いをした。「どちらかと言つと、俺の方がお世話されてるような…」東海林はつぶやく。

聞いた緑龍は、即答する。

「いいえいいえ、僕たち、東海林さんには結構ありがたいこととしてもらってるんです。だから僕たちも、東海林さんに何かしないと、僕たちの気が治まりません」

聞いた大介は、「僕たち…、な」と小さく、不満そうに緑龍に言った。それに緑龍が反応するわけもなかった。

「たとえば、どんなこと？」

東海林は緑龍に聞いた。

それを聞いた緑龍は、「たとえば、」とすぐに言い始める。

「東海林さんに、あの時助けてもらいました」

あの時つてどの時だ？

東海林は思いながら、「いつのこと？」と緑龍に聞き直す。聞いた緑龍は、「ほら、あれですよ、」と東海林に言い始める。

「ホルンの人が急に来たときとか」

聞いた東海林は、「あー、」と納得する。そうか、あの時か。東海林は思い出す。

でも、と東海林の思考に歯止めがかかる。

東海林は、緑龍の方に視線を向ける。

「いや、あれは俺じゃないよい」

東海林は言った。

それを聞いた緑龍は、「あれ？」と東海林に言う。「東海林さんじゃなかったら、誰なんですか？」緑龍は言った。

大介は、さつき緑龍がしたように、肘で軽く、緑龍の腕を突いた。緑龍には、その意味が分かっていなかったようで、やられた後、一瞬ばかんと、大介の方に視線を向けていた。大介は、東海林のことが分かつていた様子だった。

「…、」

東海林は一瞬、言おうかどうか迷う。しかし、言わない気にもなれないことが、東海林を苛んだ。

「…赤龍」

大介は、ほらな？と言わんばかりの視線を、緑龍の方に向ける。その『ほらな？』は、決しているものではなかったことを、緑龍は知っていた。

緑龍は、「…、」小さく沈黙を保つ。そして、東海林の方に視線を向ける。

「…、ごめんなさい…」

緑龍は言った。そして、真面目そうな雰囲気で、こう続ける。「僕が不謹慎でした…」

聞いた東海林は、「いや、いいよ」と、少しばかり咽かえたような気分になる。よく分からないすがすがしい空気が、東海林の周りに透き通りすぎて、気持ちが悪かった。

「それに、俺が悪いんだし」

それを聞いた緑龍は、東海林の方に視線を上げる。東海林はどこか、一人な雰囲気で、それでいて、どこか途方もないことを抱え込んでいるような、そんな雰囲気にもとれた。どうしても、それは心地のいいものには思えなかった。

「…、」

緑龍は息をのむと、大介の方に視線を向けた。「ねえ大介」と声を出す。聞いた大介は、緑龍の方に視線を向ける。

「やつぱり、僕東海林さんのために何かしたいよ。東海林さん、一人じゃつらそうだしさ」

緑龍は、どこまでも緑龍だった。

それを聞いた大介は、少しばかり面倒くさそうな視線を、裏道の樹の方へと向ける。樹はどこまでも樹で、それ以外の何物でもなかった。それは、樹であると同時に、空気でもあるような気がした。すがすがしくないのは、きっと気のせいではなかった。

「…はあ…」



大介は、小さくため息を吐いた。

それを聞いた東海林は「ため息はやめろ」と大介に小さく言った。聞いた大介は、少しばかり意外そうな、そんな視線を東海林に向ける。しかし、それは以外でもなんでもなくて、もしかしたら自然の成り行きなのかもしれない、とも、大介は思った。

「…ああ」

大介は言った。

そして、考える。

「お前、口癖移ったな」

大介は言った。

それを聞いた東海林は、「へ？」と一瞬、よく分からないと言わんばかりの視線を大介に向ける。大介は、少しばかり楽しそうな、そうでないような視線を東海林に向ける。東海林は、よく分からない気がする。

「…、」

黙ると、なんとなく、考えがまとまってくる。つまり、そういうことなのだ、と東海林は納得する。

東海林は、大介の方に苦笑いする。それ以外、何ができるわけでもない、と言う雰囲気であることには変わりがなかった。

「かもな」

少し憂鬱に似た、そんな気分だった。それは確かに、寂寥感に似た寂寥感が、東海林の隣には存在した。

もしかしたら、どこにでもあるかもしれない。東海林はそれすら思った。

もしかしたら仕方のないものに、東海林はため息に似た吐息を吐いた。そう心の中で、小さく思った。

「はあ…」

そのため息は、東海林の寂寥感に響き渡った。

「そんなんだったらよ、」

大介が言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。期待なんて籠っていない、ただ向けているだけの視線に近い視線。

大介は言った。

「俺に出来ることなら、何とかしてやるよ」

大介は言った。

東海林の目が見開かれた。

緑龍が、どこまでも緑龍なのと同じように、大介も、やはりどこまで行っても、大介の様だった。東海林の中で、響き渡ったからなのか、少しばかり、寂寥感が薄れたような、そんな気がした。

あくまで、そんな気がしただけかもしれない。東海林は考える。

そんな気がして、しかし、隣には赤龍の姿は無く、やはり、寂寥感は健在だった。

しかし、薄れた気がしたのは、確かなことだった。

「そうか？」

東海林は大介に言った。

それを聞いた大介は「ああ、勿論！」と東海林に声を張り上げる。すると緑龍も、大介の後に続く。「僕にも相談してくださいね」明るく、やる気に満ち溢れた声。

それを聞いた東海林は、「そうか…、」と小さく、考えるように二人に言った。そして、こう続けた。

「それじゃあ、早速」

東海林は言った。

聞いた大介は、「何だ？」とどこかやる気な声で、東海林に言った。緑龍は「何でしょうか」と大介に続く。

「俺は、香奈さんのために何ができると思う？」

聞いた大介は、「香奈さん、な」と東海林の方に視線を笑ませる。東海林は、少しばかり顔を赤らめる。

聞いた緑龍は、「たとえば、風邪薬をプレゼントするとか」と東海林に言う。その声と顔は、いたってまじめだ。視線は、東海林の方に真っ直ぐ向いている。その方が、東海林には困った。

聞いた東海林は、「あ…、そう…、か？」と困りながら言った。  
大介は緑龍に、「お前真面目にそう言うんじゃねーよな」と緑龍に言う。緑龍は聞くと、少しばかり顔をしかめる。

「え？駄目？」

緑龍は言った。

聞いた大介は、「ああ、だめだ」と決然と言った。

聞いた緑龍は、どこか悲しそうな視線で、東海林の方に向いた。

「駄目…、ですか…？」

ここで東海林が、だめだ、と言ったら、色々な意味で緑龍が壊れる気がする。きっとそれは間違いではない、と東海林は考える。以前、雄大に『緑茶』とあだ名をつけられて、それで落ち込むほど心が繊細なのだ。

つまり、ここでそんなことは答えられない、と言うことだ。あくまで、緑龍のために。

「いや、だめじゃないけど、」

東海林は言いかける。

緑龍の視線が、東海林の方に食い入るように向けられる。東海林はどこか話辛くなって行くが、それを口にしようとは思わない。

「でも、俺今金ないし…」

それはいつものことだ。

東海林は思うが、はつきり言つて、今は金よりも重要なものがある気がするの、きつと気のせいではない。それは気のせいなんかではなくて、恐らく、本当の事だった。

「そう、ですか…？」

緑龍は、少しばかり沈んだ声で、東海林に言った。緑龍は、俯きながら、小さくため息を吐いた。

「はあ…」

ため息を吐くしかない、と言う風な、そんな感覚だった。

それは仕方がない、と東海林は思う。はつきり言つてそれは、出してしまう物だ。ため息は、あくびと同じ、生理現象みたいなものだ。

東海林は思った。そうそう、そんな感じ。

「でもよ、」

大介が東海林に言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。大介は、真面目な視線を東海林に向ける。「ん？」と東海林が、大介に向かって言う。

「お前、香奈がどの程度風邪で大変か分かってんのか？」

聞いた東海林は、少しばかり考える。氷枕を使う程度？医者の方箋を使う程度？それとも、病院で隔離される程度？

分らない。

東海林は思った。

少しばかり視線を落とし、東海林は二回、頭を横に振った。

それを見た大介は、「なるほどな、」と東海林に言う。東海林に、大介の「なるほどな」の意味が分かるわけがなかった。

「つまりよ、まず相手が何を欲しがってるか知るべきだ。風邪薬でもなんでもいいけど、とりあえずな」

大介は言った。

聞いた東海林は、少しばかりその説明に、納得させられるものがある気がした。大介は、さらに続ける。

「つまりよ、それにはまず、相手の状態を知らなきゃいけないってことだ。例えば、ワクチンが必要とか、シアン化合物が必要とか」

東海林は納得する。そのシアン何とかと言うのが何だか分からないが、きつと体にいいものだろう。東海林は考える。

「な？」

大介は言った。

聞いた東海林は「かもな、」と、やはり大介の説明に、納得している部分があった。もともと、大介は文系だし、そもそも大介は、本の虫と言っても言い足りないほどさまざまなものを知っている。だから、東海林なんかよりも、きつと他人の気持ちと言うものを理解することが出来るのかもしれない。東海林は考える。

「そのためには、まずどうするか分かるか？」

大介は東海林に聞く。聞かれても、東海林は答えられない。東海林の中に答えがないのなら、東海林はただ答えを待つことしかできない。それが、東海林にはどこか、もどかしかった。

「つまりよ、まずは、香奈がどのくらい病気なのかってことを知る必要がある。だけど香奈は、東海林には移したくないとか言うものすごくかわいらしい乙女心で、東海林から、水から離れてる。てことは？」

東海林に話を振られても、東海林は困るだけだ。

緑龍は、さつきから「どうせ…、僕の意見なんて…」とかなんとかぶつぶつ言いながら、背中の方に黒いものを纏っている。まあ、いつものことかな？東海林は考える。

「…えっと」

東海林は考えて、言おうとする。

「遅い」

と大介に言われる。はつきり言って、何だかよく分からない大介の発言。

「遅い…、何て言われてもな…」

東海林は困ったように言った。しかし大介は、そんな事お構いなしに話を続けていく。話は、東海林の中に、ものすごい勢いで流れていく。

「つまり、香奈の身近なやつだ」

大介は言った。

聞いた東海林は、一瞬はっとなる。はっ！

「身近か！」

東海林は、納得したように言う。大介は聞くと、少しばかり嬉しそうに、爽快そうに二、三度頷く。

「そう、たくさんいるだろ？女の子っていうのは、ネットワークが俺たち男子よりも広大だからな、しかもメールがものすごい、たまに読めないと気がある」

それを聞いた東海林は、以前香奈から送られてきたメールの内容

を思い出す。確か、アルファベットしかなかったような、そんな気がしなくもない。

「まあ、そうだな」

東海林は言った。

それを聞いた大介は、「だから、」と話をつなげる。

「まずは男子に近しい女子から、香奈の情報を聞き出すんだ。なるべく、香奈とも親しくて、男子とも親しいやつ」

一人、思い当たる節がいるのは、きつと気のせいではない。

それは、きつと東海林の幸運の一つだ。東海林は、少しばかり思いながら、少しばかり、心の中で微笑んだ。

「なるほど、な…」

納得の嵐だった。

緑龍は、黒い物の嵐になりかけていた。

その部屋は、どちらかと言うと、淡い緑色で占められていた。淡い緑色で、どこかイタリアンな雰囲気醸し出されている、そんな感覚。

「ヤバイ遅刻！」

その人物が、声を放つ。髪に寝癖をつけて、携帯電話を片手に持ちながら、焦燥感に駆り立てられている人物。

「大変…」

とか思いながら、その人物は携帯電話のデジタル時計の方に視線を向ける。そこには『8:12』と表示されている。学校が始まるのは、今から約十八分後。

いくら一駅離れているだけだからって、それは難しいことだった。その人物は思った。はっきり言って、それは不可能に等しいとさえ思った。

その人物は面倒くさそうにテーブルの上に手をやると、そこから綺麗な、金属製の櫛を取り出す。上に乗っていたものを取るのではなくて、テーブルの成分の中の金属部分を抽出して、櫛にしたのだ。

その人物は髪を解かしながら、急いで脱衣所で着替えを済ませる。携帯電話に嘘はない。つまり、携帯電話の時間は、どこまでも正確だった。

個岬 こみさき 羽並 はなみ、羽並は術師の一人で、『解凍』と言う術を使うことが出来る。さっきのような、物の中からある特定のデータ（物質）を抽出して、それを具現化するものだ。

羽並は急ぎながら、増えすぎた櫛を適当に放り投げる。そして朝食をすぐさま済ませると、すぐに歯を磨き始める。そして急いで、学校へ行く準備をする。今日は土曜日なのに、学校がある、と言うのはかなり辛い、と思うのは、きっと羽並だけではない。

羽並は思うと、携帯電話をポケットの中にしまおうとする。その時だった。

ブー ブー

携帯電話の、バイブレーション。

それは、羽並の手の中で震え、そして、突然消える。いつものことだが、こんな時間に何かの着信が来ることは、珍しいことだ。

長さからして、恐らくメールだ。羽並は思いながら、携帯電話のメールのアイコンをクリクする。

メールボックスから、メールを開く。

「…、え？ 香奈？」

思わず、羽並は呟いた。

『差出人 香奈』

添付 なし

件名 今日は

本文 風邪で、学校に行けそうもないわ。だから、先生に伝えておいてくれないかしら…』

そのメールの内容から取れるものは、一つだった。

香奈が、風邪ではないということだ。

羽並は思った。そして、そのメールを見ながら、少しばかり視線を細めた。

香奈が、こんなにはつきりと、友人に大切なことを頼むことなんてまずあり得ない。自分のことは自分の事、他人のことは他人の事、でも分かち合えることは分かち合えること、それらを全て把握しているのが香奈だ。ある意味すごく、殆ど真似すらできないことだ。羽並は思う。

しかし、このメールの内容は、明らかにそれから逸している。羽並は思う。

この内容は、一方的に『伝えておいてね』という、ある意味命令形だ。いつもの香奈なら、こんなメールがあつたとしても、『伝えておいてくれる？』と打つはずだ。少なくともその前の文章に、『よかったら』くらいを添えて。

この文章から読み取れたことが、羽並には手に取るようだった。もしかしたら本人は、気付かない、と思つてこのメールを送つたのかもしれないし、十中八九そうだとも思う。だけど、とも羽並は思う。

きっと、それなりの理由がある、それを、羽並は理解しているつもりだった。

羽並は、一応ではあるが、香奈の友人だった。それに羽並は術師だ。他の人物では経験していないような経験をしていることだつてある。友人の嘘を見抜く程度だったら、羽並には出来た。ただそれが方便かどうかは別として。

羽並は思いながら、少しばかり面倒くさそうな、それでいておぼつかない指の動きで、香奈にメールを返した。

『宛先 香奈

添付 なし

件名 Re：今日は

本文 分かつたわ、清原先生きよはらに伝えておく。だから、ちゃんと月曜学校に来れるように、ゆっくり休むんだぞ』

なんとなく気が進まないまま、送信ボタンを押した。

それが本当か嘘か、ではなかった。問題はそんなところではなく



て、香奈が、どうしてそれを羽並に送ったかが、問題なのだ。

考えて分かるようなものではなかった。そこまで単純で、簡単なものではなかった。つまり、考えてもわからないかもしれない物、と言うことだ。羽並は、そう考えるしかできなかった。それ以外の考えなんてなかったし、それ以外の解決方法も思いつかなかった。つまり、こういうことだ。

羽並は、その問題を解決できなかった。

それは、どこまでもそうだった。

羽並は、少しばかり考えながら、ため息を吐く。自分がここまで猜疑心を抱いていることに、なんとなく嫌悪したくなる。香奈は羽並の良き友だ。そもそも、疑う要素、なんてものがないはずなのだ。羽並は思いながら、自分の職業柄を、少しばかり疎ましく思った。それ以外、何かを感じたような気分は、しなかった。

東海林は、やはりどこか、戸惑っていた。

戸惑うのも当たり前だった。東海林は、息をのみなながら、その清原先生の言葉を耳に傾ける。

「今日、春潮さんは休みです。それから、火蔵ひぐらさんも。二人とも風邪だそうだから、お見舞いに、こっそり行ってあげてね？」

とか言われて、誰かがお見舞いに行ったのを、東海林は見たことがなかった。そんなことが起こるはずがない、とも東海林は思っていた。

つまり、そう言うことだ。

東海林は思いながら、少しばかりため息を吐きたくなる。やっぱり、休みなんだ、と東海林は思う。もう一人の火蔵と言うのには、東海林は心当たりが全くなかった。確か、バドミントン部に入ってたやつだっけ？

そんな程度だった。

「と言うことで、今日は号令がないから…、私が号令をかけるわ」  
そう言えば、清原先生の号令なんて、あんまり聞いたことがないな。

東海林は心の中で思いながら、清原先生の顔を直視しないようにする。直視したら、多分平常ではいられない。そんな気がするし、見なくても、少しばかり心の中で、もやもやと熱を持った何かが立ち込めていくのは間違いない。

現に、他の男子生徒の一部は、清原先生の方に視線を向けて、ただ茫然としている。東海林は部活の時も顔を合わせるから、慣れたと言えば慣れたということになるのかもしれない。東海林は思いながら、慣れって怖いな、とか心の中で思おう。

「起立」

大きな声、しかも、かなりはつきりしたような、そんな声。

それを聞いて、立ち上がらない男子生徒はいない。そのくらい、男子と女子の間には、暑さの差があった。温度差と言うよりも、これはもう、狂っているかそうでないか、と言う分類が出来るかもしれない。東海林は少しだけ思った。

気怠そうに、雄大が立ち上がるのは見える。雄大は別に、どうでもいいような顔をしている、それ以外、東海林には印象がない。大介は、平常を保っているように見えなくてもいい。東海林は隣を見る。緑龍がいる。

「気を付け」

そっか、と東海林は思う。

そう言えば、清原先生には龍が見えないんだ。東海林は思った。はつきり言っ、それが何故かは分からない。何か不思議なような、そんな気がしなくてもいい。しかし、それを追求しようとも思うほど、東海林はそんなに好奇心が旺盛、と言うわけではなかった。しかも、それはどうでもいいことで、東海林が今悩んでいるのは赤龍の事と、香奈の事と、中間試験の事だった。それ以外に考えるべきなんてことがある方が、東海林には不思議な気もした。例えば、

恋愛がうまく言っていないとか、ゲームが進まなくて行き詰っていると、はつきり言って、東海林にはそんなに、大きな問題には思えなくなっていた。それは、東海林にとってはどこまでも正論で、どこまでも正しいことに他ならなかった。それがきくと、東海林にとって正しいことだからだと、東海林は思う。

みんなが黙ると、清原先生の声が聞こえる。

「礼」

そして、男子生徒の声。

『ありがとうございました！』

非常に太く、どこか温かく、逆に蒸し暑苦しいような、そんな声でもあった。東海林はそんな風には言っていないし、そもそも東海林は、清原先生には興味がない。興味があるのは、あくまで赤龍と香奈だった。

清原先生、清原きよはら 美菜みなは、東海林の担任の先生でもあり、吹奏楽

部の顧問でもある。つまり、音楽の先生でもあり、担任の先生でもある。こんなことはめったになくて、担任の先生が、数学とかそう言った教科ではない先生がやる、なんてことは珍しかった。そもそも、珍しいだけで、少しならあるのかもしれないし、そもそもそれは、東海林の偏見かもしれないというのは、東海林には分かり切ったことだった。東海林は思いながら、少しばかり目をこする。そして座る。

東海林は、香奈の席の方に視線を向ける。そこには、いつもあるはずの神々しさが、かけていた。

東海林の中の空白感、とも呼べる何か白い、何もない空間が、そこには広がっていた。ただそれだけのことで、それだけのことでしかないとも割り切れなくはなかったし、しかし、それが正当な方法だとは、東海林には思えなかった。

大介が、さっき言ったのを覚えている。

まずは相手の周囲を知る必要がある。

それは、そう言うことでしかない、と言うことを、東海林は理解

していた。つまり、香奈の周りを理解していて、しかも、男子生徒と仲がいい方の、女子。

東海林は一人だけ知っていた。

今は次の時間の準備をし終えて、少しばかりの復讐をしている生徒。つまり、羽並だ。個岬 羽並。

東海林は思うと、立ち上がる。次の時間の準備をするために、口ッカーの方に歩み寄るような、そんな雰囲気でもあった。しかし、東海林には明確な目的があった。つまりは、羽並だ。ただそれだけだ。

東海林は、次の時間の教科が、一体何なのかすら、知らなかった。東海林は思いながら、羽並の方に歩み寄る。羽並は途中、東海林が近づいてきていることに気付く。東海林の方に視線を向けて、「あ」と東海林に言う。聞いた東海林は、少しばかり声を詰まらせる。「おはよ、東海林君。どうしたの？」

羽並は聞いた。

それを聞いた東海林は、「あ、おはよう、個岬さん」と、少しばかり改まった風な、そんな風な口調で言った。

「あのさ、個岬さん、聞きたいことがあるんだけど…」

東海林は言った。

それを聞いた羽並は、少しばかり視線を細めた。東海林は、少しばかり喉の渇きがいえないまま、声にした。

声にしただけだった。

「香奈さんが、何か雰囲気おかしかったっていうの、知らない？」  
聞いた羽並は、少しばかり黙る。

少しばかり、鼻で笑うような、そんな声を放つ。どこか皮肉なような、どこか、深いことを知っているような。

「流石、東海林君」

どこか、感心しているような、しかしそれでいて、皮肉そうで、面倒くさそうな声。

東海林はきつと、その声を忘れないだろう。

どうしてもだかは分からないが、東海林はそう考えた。

いつもと同じ位置に、その人物は座っていた。いつもと言うのは語弊がある、その人物は、捕まっただけで、その椅子に座っている。ガムテープのようなものでぐるぐる巻きにされて、それをはがせないでいる。

はがす気なんてものはそもそもなくて、そもそも、海の底なんてものも、段々ではあるが、耐性が出来てしまってきた。海の底の息苦しさを、自分の物に出来たような、そんな気分だった。しかしあれは、どこまで行っても苦しくて、ただ、自分の体が動かなくなっていく感覚しかない。本当の海の底ではないことを、その人物は知っていた。

海の底に行けば、きっと誰でもわかる。

私は一度、海の底に行っただけから。

その人物は思った。

それを見ているのは、香奈と黄龍と、西欧系ゲルマン系外国人の容貌をした、ハンスだった。それ以外に、ホテルのリビングにいる人物はいなかった。あえて言うなら、もう一人が、椅子の上で、何かを思考の中で嘲笑っていた。もしかしたら、万物をあざ笑っていたのかもしれない、とその人物は、少しばかり考える。少しばかり考える程度で、それを完璧にものにすることは、きっとできない。

香奈は、その人物を見ながら、少しばかり目を細めた。

「何か、あれから分かったことはありますか？」

それを聞いたハンスは、少しばかり目を細める。考えるような、どこか、申し訳なさそうな、そんな雰囲気だった。

「……いや、何もなかった。彼女は、よっぽど海の底に、慣れきっているようだね」

ハンスは言った。

海の底に慣れきっている、の意味が、香奈にはよく分からなかった。しかし、よく分からなくてもいいような、分かっているはいけない

ような気がする。

「海の…、底…。畔が…？」

香奈は聞いた。

椅子の上に座っているのは、火蔵 畔だ。畔は、術師の一人だと思われるが、はつきり言つてよく分かつてはいなくて、香奈が知っている畔は、『殺し屋』としての畔でしかなかった。それ以外に、考えられることは無かった。

「そう、海の底」

ハンスは言つた。

香奈は、そこで沈黙をする。それが一体どういったものなのか、香奈には想像もつかなかった。

「…、」

聞いたハンスは、説明する。

「海の底っていうのは…」

言いかけた。

それを聞いた香奈は、「いいです…」とハンスの言葉を止める。

聞いたハンスは、香奈の方に言葉を止める。香奈の方に一瞬視線を向けると、そこに、何かさびしいような、孤独なような、そんな雰囲気しかないことを知る。

少しばかり考えて、ハンスは畔の方に視線を向ける。畔は、ただ視線を下に向けて、ただ視界をうつろにさせて、そして、ただその場に存在していた。今の畔は音であり、何でもあるような感覚があった。

「…、」

一瞬ハンスは言葉を止める。そして、小さく息をのむ。少しだけ、考えが伝わったような、そんな感覚でもあった。そんな感覚で、ハンスは、少しばかり目を閉じた。目を閉じて、再び現実を見つめ始める。

「妥当な、答えかもね」

ハンスは重々しく、そう答えた。それはハンスの本意だった。

そしてハンスは、香奈の方に質問する。

「それで、そっちで得た情報は？」

それを聞いた香奈は、少しばかりはつとなった。

「そっか、確か、まだハンスさんに調べた結果を言っただけだったんだ。」

香奈はそう思って、少しばかり言葉を詰まらせる。どう言っているのか、香奈には分からなくなってくる。

「ちょっと、信じられないです…、けど…」

香奈は、そう言った。

それが一番、妥当だと香奈が思ったから、かもしれない。香奈は、本気でそう思った。

「信じられない？」

ハンスは言った。

それを聞いた香奈は、ハンスの方に視線を向ける。そして二、三度小さく頷いた。ただそれだけだった。

「だったら、君は黄龍君がいる時点で、信じられないと思わないかい？」

ハンスは言った。

つまり、こういうことだ。

もう、それが常識か、一般的か、普通か、ことは関係がない。そこにある現実こそが、そもそも全てを物語っているのだ。それ以外なんてものは、必然的に存在しなくなる。確かにそれは荘だった。

それ以外のなんでもなかった。つまり、この際そんなことは関係ないのだ。そんなことは関係なくて、関係があるのは、今、目の前がどうなっているか、と言うことだけだ。ただそれだけなのだ。

「…そうです、よね…？」

香奈は、どこか悲しそうに、ハンスに言った。それだけが、その場では正論な気がして、香奈にとっては、それがどうも突っ掛りのある者のようにしか取れなかった。

「うん、そうだよ」

ハンスは言った。

小さく黙る。そして、沈黙だけが、その部屋を覆っていく。香奈には、畔のことはよく分からないし、畔の義務なんてものもわからない。そんなのは関係なくて、畔が一体、何なのか、そもそもそれが、香奈には分からなくなっていた。

「…香奈」

黄龍が、小さく香奈に言った。香奈は聞くと、少しばかり黄龍の方に視線を向ける。悲しそうな、それでいて、どこか、何かを耐えているような、そんな視線。

「、大丈夫よ」

香奈は言った。

それが、本当の言葉なのか、それを黄龍が理解できることは、恐らく来ない。黄龍に出来ることは、香奈を守ることだけだった。それだけだったのだ。

少しだけ、もどかしいような気もしなかなかった。

「ハンスさん…」

香奈は言った。どこか、聞くような雰囲気で、ハンスにそう話しかけた。

聞くと、ハンスは「…、」視線を香奈の方に向ける。香奈は、畔の方を見ているのか、それとも遠くを見つめているのか、どこかよく分からない風な視線で、ハンスに言った。

「…、ハンスさんは、誰かを守りたいって思ったこと、ありますか…」

香奈は聞いた。

ハンスは聞くと、少しばかり驚いたような、そんな表情で香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこか空ろなような、しかし、真っ直ぐな視線を、どこか遠くへ向けていた。真っ直ぐすぎる視線は、ハンスには、どこか痛いような、そんな気がしなくもなかった。

「…、あるよ」

ハンスは言った。



香奈は、少しだけ心の中が、晴れ渡ったような、そんな感覚がしなくもなかった。完璧に晴れ渡ったわけではないけれど、曇り空から、陽がさすほどには、なっていた。

「そんな時、」

香奈はハンスに聞く。

聞いたハンスは、香奈の方に、優しいな視線を向ける。

「ハンスさんなら、どうします？」

香奈は聞いた。

それを聞いたハンスは、少しだけ、視線を細めた。そして、香奈から視線を離れた。少しだけ沈黙する。

そもそも、香奈にはその答えが、帰ってくるような気がしなかった。そもそも、それに答えがあるのかどうかすら疑わしかった。それは人それぞれの考えで、人それぞれの動き方で、そして、ひとそれぞれ、正解がある。だからそもそも、答えなんてものは存在しない。あるのは自分だけなのだ。

そんな気がしなくもなかった。

分かっているけど、不安だった。香奈は本気でそう思った。分かっている。しかし、それが分かったところで、香奈のこれからすべきことが、すべてわかるわけではない。つまり、そう言うことだ。それ以外のなんでもなくて、そう言うことに他ならないのだ。

ハンスが、次に言った言葉は、これだった。

「今日は、学校があるんじゃないの…？」

聞いた香奈は、少しだけ、うかない顔をする。浮かなくなるのは当たり前で、香奈には、その質問をされたいとは思わなかった。

「…、はい、」

香奈は言った。

ハンスは、視線を香奈の方には向けなかった。ただ、どこまでも悲しそうな視線を見るのは、少し、心に来るものがあった。

香奈は、ハンスに続けるように、こう言った。

「ちよつと、休んじやいました…」

そのちよつと、と言うのが、ハンスには分からなかった。

香奈は、自分で言った言葉あの意味が、少し曖昧であることに、気付けなかった。気付いたところで、何かできるわけではない、と分かっていたからかもしれない。

香奈は思いながら、少しばかり、目を細めた。

それ以外、出来ることがなかったともいえる。

東海林は、少しだけびっくりした。羽並が、まるでその質問を、東海林からくるのを期待していたような、そんな言い草だったからだ。東海林は、さつき、この質問を羽並にしようと考えたばかりなのに、羽並は、その先を考えていた、と言うことになる。

そもそも、東海林が頼れる、男子に親しい香奈に近い女子なんて、羽並しかいない、と言うことも、容易に予想できなくはない。

「分かってたの…？」

東海林は羽並に聞いた。

それを聞いた羽並は、「いいえ、」と東海林に答える。

その言葉に、東海林は一瞬戸惑う。どういうことだ？羽並は俺の質問を、前もって予想してたわけじゃないのか？

羽並は東海林に続ける。

「私も、妙だと思ったのよ」

そう言いながら、羽並は自分のポケットから携帯電話を取り出す。そして、指をばばと動かすと、メールボックスの中にある一通のメールを、東海林に見せる。

「今朝、こんなメールが届いたのよ」

羽並は言った。

東海林はそれを聞くと、そのメールの内容に目を通す。やっぱり、風邪、なのかな…？

東海林は思う。しかし、どこかこのメールの内容には、引つかかる部分があるような、そんな気がしてならなかった。

「香奈さん、から？」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「ええ」と東海林に呟いた。そして羽並は、すぐに携帯電話を自分の方に寄せると、待ち受け画面にして閉じる。

「変だと思わない？」

羽並は、真剣な表情で東海林に聞いた。

一瞬、「え…」と東海林はつぶやく。確かに、変だと言えば変な、そんな部分がないわけでもない。しかし、それとはまた違う、何か全く別の気分も浮かんでくる。

「…、引つ掛かりなら…」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「具体的に言える？」と東海林に聞く。さすがにそれは、東海林には難しいかもしれない。

「…、ちよつと、無理」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「まあいいわ」と東海林に向かう。「ちよつと変だつて分かったことだけでも、この際すごいことだもの」

言つと、羽並は東海林の方に視線を向ける。

「ところで、赤龍君は？」

羽並は聞いた。

一瞬、

東海林の目が泳ぐ。

「あ…、えつと…」

東海林は言葉を詰まらせる。何と言つていいのか、東海林には分からなくなる。しかし、羽並の目は、東海林の方に向かっている。

真つ直ぐ、東海林の方に。

「…、えつと」

東海林は言う。羽並は、「もしかして、」と東海林に言う。

東海林は、少しばかり手が汗ばんでくることに気付く。

「喧嘩した…？」

鋭すぎだ。

東海林は、羽並に思った。羽並はどこかいたずら気な、そんな表情を東海林に向けている。そのいたずら気な表情が、東海林を少しばかり苦しめる。

「…まあ…」

東海林は言った。

それを聞いた羽並は、「なるほどねー」とどこか納得したように言っと、すぐに真面目な顔で、東海林の方に視線を向ける。

「早く赤龍君と、仲直りした方がいいわよ？」

羽並は、はつきりとそう言った。

聞いた東海林は、少しばかり目を見開いた。以前、おんなじことを言われたからだ。しかも、どこか焦ったような、そんな雰囲気です。…、何で…」

東海林は羽並に聞いた。

聞いた羽並は、真面目そうな顔で、ただひたすら東海林の方に視線を向けている。東海林は、少しばかり口を紡ぐ。

「東海林君、赤龍君と仲直りしたくないの？」

羽並は東海林に、質問で返した。

聞いた東海林は、少しばかり困る。質問を質問で返されるのは、少し困るものがある。

「…それは、…赤龍の好きだから…」

東海林は言った。

羽並は視線を細める。しかし、まだ何かを言う気配ではない。羽並は、東海林の方に視線を、ただじっと、まっすぐ向けているだけだ。

「…、赤龍が帰ってきたかつらったら、帰ってくると思うし…」

聞いた羽並は、はつきり言って、幻滅しそうになった。

「…、まさに幻滅ね」

聞いた東海林は、「へ？」と羽並の方に声を放った。羽並は、ただ自分の、本当の気持ちを口にしたまでだった。ただそれだけだった。

「あなた、赤龍君と寄りを戻さないで、」

死ぬわよ？

「確実に」

その声は、冗談めいてはいなかった。

「……」

東海林は、一瞬啞然となった。その声が冗談の様には聞こえなかったし、きっとそれが冗談ではないということを、東海林は少なからず、理解していた。

思考で理解していたのではない、感覚で、理解していた。

「どうしてだか分かる？」

羽並は聞いた。

聞いても、東海林から声が出るわけがなかった。東海林よりも、羽並の方がそう言ったことに詳しいことを、東海林は理解していた。だから、東海林は何も言えなかった。何を言っても、ここでは答えにならないからだ。それにそもそも、東海林にはその答えを持っていなかった。

「……」

東海林は息をのんだ。

羽並は、はつきりと東海林に言った。

「あなただけじゃ、非力だからよ」

はつとなった。

赤龍が東海林に言った、その言葉を、東海林が忘れられるわけもなかった。

『はつきり述べるが、赤龍がここにいなかったら、東海林はもうとつくに殺されておったぞ！』

そう、それは本当だった。

「あなただけじゃ、きっと私にも勝てないわ」  
本当だった。

どこまでも、それが本当だった。それが本当のことすぎて、東海林には少し、息が詰まるような、そんなかんくしかなかった。

しかし、本当の事だった。

「……」

東海林は、息をのむしかできなかった。

情けないに近い、そんな感覚。忸怩たる思い、とはまた少し違う。どちらかと言うと、寂寞たる思い。

羽並は東海林へ、無慈悲に続ける。

「帰ってくるのは赤龍君の好き、って言ったわよね」

東海林は黙る。ただ、肯定したくないだけだし、否定できないだけだ。ただ、東海林は黙っただけだ。

東海林は肯定も否定もしていない。つまり東海林は肯いている。

「そんなこと言って、本当に赤龍君が帰って来なかったら、どうするつもりなの？」

羽並は問いたです。

東海林は、何だかよく分からない物が、頭の中で低徊していくのが分かる。よく分からない考えが浮き出て、そしてよく分からない暗い底へと落ちていく。音もなく、それは東海林の頭の中で、繰り返される。

もしかしたら、その途中で東海林は、何か大切なものを見落としたのかもしれない。そんな事、東海林にはもうどうすることもできない。その思考は、低徊の深い奥底へと、沈んで行ってしまった。

「東海林君、本当に赤龍君と寄りを戻したくないの？」

東海林はそれを聞くと、羽並の方に視線を向ける。

「……そこまでは言っていない、けど……」  
言いかけた。

羽並が、東海林の言葉に割り込んだ。

「言ったのと同じよ」

東海林には、よく分からなくなってくる。しかし羽並の視線は、東海林の方に、真っ直ぐ、突き刺さる。

「…、」

東海林は、何と云っていいか分からなくなる。

羽並は、東海林に続ける。

「確かにそれは、赤龍君の意志でもあるわ。赤龍君が東海林君のところへ帰ってきたくないって云ったら、それは仕方がないってことになるわ」

羽並は言った。

そうなんだろうか。

東海林は考える。本当に、赤龍はそんなことを言うだろうか。考えたくもないし、そのことについて、考える必要もない。これはあくまで仮定の話だ。しかし、東海林はその中に、妙な息苦しさを感ずる。

もし、赤龍が帰ってきたくないって、東海林に言ったら？

俺に、言ったら？

東海林は、あの紙に書かれていた文字を思い出す。不恰好だが、それが東海林の喉を、変に詰まらせた物。

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ！』

本当なのか、嘘なのか、冗談に似た本当。

東海林にとっては、そう言う存在に他ならなかった。つまり、そう言うことだった。東海林は思った。

少しばかり、東海林は口を閉ざす。羽並は少し、東海林の方に視線を細める。

「でもね、それは東海林君がそうさせたのよ」

羽並は言った。

東海林は、喉の奥が渴くような、そんな感覚に似たものを、その言葉に覚えた。それが正確に、どんなものなのかは、はっきり言って東海林には分からない。はっきり言って、東海林には、本当に分からない。

「俺が…？」

東海林は小さく呟いた。

羽並は、「そうよ」と東海林にはつきり言った。考える。俺が？俺が何をしたって言うんだよ、赤龍に。赤龍は勝手に…。

勝手に、俺の部屋を出て行った？

考えた時だった。

「…あ…」

東海林の声が、思わず言葉に表れた。その「…あ…」は羽並の耳に届く。そして、羽並は東海林に続ける。

「覚えがあるのね」

やっぱり、と言わんばかりの口調だった。

東海林はそれを聞くと、反論できないような、そんな感覚で視線を伏せる。仕方がないが、それが事実だった。

「…まあ、ちよつと」

そう、本当にちよつとだ、ちよつとだけ。考える。

「…、」

羽並は、東海林の視線をじっと見つめる。東海林は、何か妙な、靄のようなものを感じる。しかしそれと同じくらい奇怪なものも、東海林の中で立ち込めてくる。妙に、かゆくなってくる。

「…、な…何…」

東海林は羽並に言った。

聞いた羽並は、東海林の方から視線を外すと、「嘘ね」と東海林に言った。

聞いた東海林は、言葉を詰まらせる。口の中が、狭くなったような感覚になってくる。

「東海林君は、赤龍君と離れる原因を作ったのよ」

それは不定じゃない。

事実だった。

それと同時に、羽並の一言一句は、東海林の現実でもあった。なんとなく、気持ちが悪くなってきた。

「…、まあ、そうかもしれないけどさ…」



東海林は言った。

あの時、東海林が赤龍に言った言葉を、おぼろげながら覚えてる。

お前なんて、出でっちなまえ！！

東海林は、そう言ったことを覚えている。勿論、赤龍に向かってそれが意味していることは、はっきりとその言葉に表れている。

つまり、『出て行け』と言うことだ。確かにあの時、東海林は赤龍にカッとなっていた。東海林の居候のくせに、東海林の言うこともろくに聞かずに、ただ自分のゲームの事ばかりだった。しかし、考えてみると、赤龍は確かに、東海林のためになることをたくさんやってくれて、なおかつ、東海林の命を救ってくれたと言っても過言ではないくらいのことを、東海林にたくさんしてくれている。東海林はもしかしたら、赤龍から、たくさんすることをしてもらっているのかもしれない。もしかしたら、東海林がただ、それに気づけなかったから、と言うことなのかもしれない。そして、もしかしたら、東海林がそれに気づけるのを、赤龍は待っているのかもしれない。だから、あんな手紙をよこしたのかもしれない。

東海林は思う。

「…、いや、そうだね」

東海林は言った。

認めるわけじゃない。

ただそれが、東海林に遭った事実だ。

## 鏡

結局のところ、心配とも言えないけれど、その赤い龍、赤龍は、ただ世界を飛び回っていた。きつといつか、赤龍の姿を見ることが出来る人物が赤龍を見つけ、きつと「ドラゴンだー！」みたいなことを言うに違いない。ただ、それがヘブライ語だったら困ったことに分らないが。

きつと、ニュアンスで伝わる。赤龍は考える。それに、赤龍は龍だ。町中で人の会話を聞いているだけで、日本語くらいは覚えられたのだ。だったら、少し時間をかければ、すべての国の言葉を理解することも、赤龍には可能かもしれない。それは、もしかしたら、赤龍が思っておうそこでうまく暮らして、そして、東海林よりもうまくやって行けるかもしれないかった。

しかし、赤龍にはそんな気がしなかった。

そもそも、赤龍が知っているのは、『あの国に器が六人いる』と言うことだけであり、それ以上の事なんて知らなかった。そもそもそんなことを知っているわけもなかった。ただ赤龍が知っているのは、東海林が器であるということであって、そして東海林が、どうしようもない馬鹿で、どうしようもなく素直でなくて、そしてどうしようもなくお人よしで、どうしようもなく自分勝手と言うことだった。

どうしようもない、赤龍は思う。今考えても、本気でそう思う。本気で、どうしようもなく思えてくる。東海林は赤龍のことを理解しているわけではなくて、ただ、理解なんてものをそもそも必要としていなくて、あったのはただの、意思伝達だけだったような気もしなくはなかった。もしかしたら、赤龍にとって一番意思伝達しやすいのは東海林かも知れないし、その東海林が、ものすごく馬鹿で、どうしようもないことばかりだということは、赤龍にもわかったのだ。

そう言う問題じゃなかった。

そういうもんだいだったら、きっとものすごく簡単に、この問題は解決する。そんなに簡単だったら、それは東海林が心を改めるだけで済んで、それを赤龍が、ただ見つめているだけで、ただ傍観しているだけでいいのだ。

そう言う問題ではない、と言うことを赤龍は理解していた。

海に映る赤龍の姿は、いつもよりも青かったような気がしなくもない。しかし、赤龍が青になることなんてなくて、赤龍は、どこまでも赤龍だった。どこまでも赤龍は赤龍で、それでいて赤龍は、どこまでも東海林を、下に見すぎていたかもしれないかった。

赤龍は考える。

そして、こんな言葉が人の言葉にあるということ思い出す。何でこの時、赤龍がその言葉を思い出したかなんて、赤龍には分からなかった。

『他人は、鏡、自分を映し出す』

赤龍は思いながら、海の方に視線を向ける。

海には風もなく、ただ光が反射していた。波がなく、海だけ、時間が止まってしまったような、そんな風にも見えなくなかった。もしこれで、星空が背景にあったら、きっと綺麗に映し出されることだろう。赤龍は考える。

そして、赤龍はこの時も、妙に思う。

その星空を、赤龍の背中に乗って覗き込みながら赤龍に笑いかけている、馬鹿がそこにいるということ、赤龍は不思議にしか思えなかった。

東海林が、海面に映っているような、そんな気がしたのだ。

何故かなんてことは分からない。赤龍は、ただ昼間の空の下を、ただ飛んでいるにすぎないのだ。ただ、海の上を飛んでいるにすぎないのだ。

そこには、風なんてものは、きっと存在しなかった。赤龍は飛んでいて、体に風を受けているような、そんな気もしなくなかった。

しかし、その風は妙に野暮ったくて、赤龍には、どうも、潮の香りと言うよりも、どこか汗臭いようなにおいにしか、感じ取れなかった。

分からなくなってくるし、きつとこのまま、分からないのかもしれない。

赤龍は思う。そもそも東海林が悪いのじゃ、東海林があんなことを言うから。

思いながら、海面が揺らぐ。

赤龍の中にいる、背中に乗った東海林が、笑いながら、海に映っている星空を指していることは確かだった。東海林は、赤龍の中ではどこまでも馬鹿で、どこまでも、馬鹿正直だということしか分からなかった。

でも、と赤龍は思う。

底に映っている東海林が、どこか別の場所を指しているような気がしなくもないのは、赤龍の気のせいでもなかった。

赤龍は、海の方に視線を向ける。

海は青く、深く、そして蒼く、どこまでも赤龍とは真反対の、鮮やかな色をしていた。きつと今の赤龍の色は、あまり艶やかでない、不恰好な赤色だろう。塗り絵のクレヨンの線が、はみ出てしまったような、そんな感じ。

赤龍には、赤龍の赤が野暮ったく感じた。こんなことは初めてだった。蒼がいいかもしれない、なんて思ったのは、これが初めてだった。

赤龍は、自分の『赤』が好きだった。そもそも自分の体の色だし、それを嫌いになる奴は少ない、とも赤龍は思った。しかし、思わなかったのが、どこまでも海に映る赤龍の色だった。どこまでも映し出したようで、どこまでも写真のようにくつきりとしていて、ピンボケしていなくて、赤龍には困ったことになっていた。

まるで、海面が鏡になったような、そんな風にも見えなくはない。でも、赤龍にとって、そんなものは、鏡でもなんでもなかった。

鏡と言うよりは、むしろ、『鏡の入口』と言うような、そんな感覚に近かった。

ただ、そこにあったのは、赤龍と、東海林の影だった。ただそれだけだった。

どこまでも、東海林は馬鹿だった。

赤龍には、そんな風にしか見えなかった。だから赤龍は、そんな風にしか考えられなかった。

## ちよつとした時間割

次の時間割なんて、東海林は考えてもいなかった。考えてもいなかった、と言うのは、別に全く考えていないわけではなくて、少しだけ、別のことを考えていたと言った方が正確だ。つまり、東海林は違うことを考えていた。

そもそも、東海林が考えるべきなのは次の時間割なんて言う簡単で明白で、どこまでもわかりやすいことではない。もっと、東海林には、考えなければならぬことがたくさんあった。しかし、授業のことを考えなくていいのかと聞かれたら、それは違う。そう分かっているのだが、東海林には、それがどうも、今は納得できそうになかった。東海林にとって、今一番やるべきことは、勉強ではない気がしたからだ。確かに勉強も大切だ。否定はしないし、否定はできない。ただ東海林はそれをしない。

それをしてくれるのは、赤龍だった。

赤龍は、ゲームをやりながら授業の内容を覚えるとか言う滅茶苦茶なやつで、そんなあいつがうらやましくて、でも、赤龍なしでは、東海林はろくに、点数も取れなかった。つまりそう言うことに他ならない。

東海林は、どこまでも『非力』だった。色々な面で、東海林は様々なことで非力だった。今東海林が、何かで、誰かに勝てること、と考えてみても、東海林には何も浮かばない。つまり、東海林一人に出来ることなんて言うのは、全く持つて何もなかったのだ。ゲームもあまりしないし、勉強だって、読書だってしない。やるのは、赤龍との会話くらいだ。

そのくらいしか、東海林には取り柄がなかったのだ。

つまり、そう言うことなのだ。

考えてみれば簡単なことで、気付けてしまえば容易なことで、そしてそれは、かなり重々しく、辛いことでもあった。つまり、東海

林はどこまでも、辛かった。

自分一人では何もできないことに？

東海林は考える。東海林はそれを、容易に否むことが出来る。違う。

東海林は思う。

それは、もしかしたら何か大切なものを、見失った考え方なのかもしれない。東海林は思った。東海林が少しだけ、そんな考えをしていることを、東海林は遺憾に思った。それでいて、幻滅だった。

東海林は幻滅した。

しかし、それと同時に、妙な皮肉感も生まれてきそうな、そんな気分だった。しかし東海林に必要なのは、皮肉でも、遺憾でも、妙なもやでもない。授業は大切だが、この際あまり関係がない。

東海林に必要なのは、赤龍かも知れない。

東海林は考える。

「つまり、この『had had』はいつも通りの『持つ』と言う意味ではなくて、『ずっとなになにを持っている』と言うことになる。少し慣れない形だけど、『have + p.p.』だからね、ちよつと仕方がない」

英語だった。

訳の分からない言葉の羅列が、黒板の中で踊っている。そしてそれは、東海林は全く持ってどうでもよくて、今必要かもしれない物は、羽並の助言だった。

羽並は、何かと言っているのと分かっていた。そして、何かと言って様々なことを理解していたし、何かと言って、色々なことを冷静に受け止めていた。口癖はいつも通りだったが、それ以外は、特に何でもなかった。

つまり、そう言うことだったのだ。

今東海林に必要なのは、プロの意見だということだ。そして羽並は、プロだった。東海林の知る、一人のプロだった。

そう、つまり羽並だ。

東海林は思うと、いつの間にか、羽並の方に視線が向いていたことに気が付く。別に気が合うわけでもないし、特に何がどうと言うわけでもない。ただ東海林に、用事と言う物があっただけだ。その方向に。

羽並に聞けることはたくさんある。例えば、赤龍とどうやって寄りを戻せばいいのか、とか、そう言ったことだ。

勿論、香奈のことは非常に気になる。樹になりすぎて、眠れるかどうか分からないほどにだ。しかし、赤龍のことは、もしかしたら東海林にとって一とも二ともつかない、火にならないほどの物なのかもしれない。

何だか、不思議な感覚だった。

そう言った物事に、順位なんてものを付けることは出来なかった。それに、そんなことに順位をつけることは、逆に自分を混乱させることに他ならなかった。

ただ東海林は、実行すればいいのだ。

それが、東海林に出来る唯一のことかもしれない。

チャイムが鳴る。あまり耳に入らない、もうなじみ過ぎて、今では存在すら、ただの時計代わりの物でしかない。

「お、終わつたな、それじゃあ起立！」

この先生は、委員長に号令を言わせることは無い。

「気を付け！礼！」

しかも早い。

しかも、みんなごちゃごちゃと何かを言つて、もう既に解散状態になる。それでもその先生は、職員室に帰って行く。

東海林は、ただ羽並の方に足を運ばせる。

羽並は、英語の授業の片づけをしている。教科書やノートを、一つにまとめていた、丁度その時だった。

「個岬さん」

東海林は言つた。

聞いた羽並は、「ん？」と言いながら、東海林の方に視線を向け



る。東海林は、どこまでも真面目で、どこまでも真っ直ぐな視線を羽並に向けている。

それ以外にすることがなかったし、多分それ以外は、東海林の中でも、誰のなかでも、ありえないことだった。

「どうしたの？東海林君」

羽並は、いつものきはきした口調で言う。さっきのことは、まるで何もなかったかのような、そんな口調だった。

東海林は聞くと、羽並に言った。

「聞きたいんだけど、いい？」

東海林は言った。

羽並は、少しだけ視線を細める。東海林は、どこまでも真っ直ぐと、羽並の方に視線を向けている。時間がゆったり流れて行って、そして、東海林と羽並の間で、徐々にそう言ったものが、なくなっていく。

「何かしら」

羽並は、どこか試すような、そんな視線を東海林に向ける。

東海林は、ただ羽並の方に答えた。

「赤龍と、どうやったら寄りを戻せるか」

聞いた羽並は、少しばかり微笑んだ。

また、手掛かりがなくなった。

でも、また一つ手掛かりが増えたことも事実だった。その手掛かりは、殆ど手がかりとは呼ぶことのできない物だけれども、ちゃんとした形が存在することは事実だった。それには、ちゃんとした形が存在していた。それを、香奈は見たのだ。

ちゃんとした形があるということは、ちゃんと存在しているということだ。つまり、それについての情報が、この世界には存在している。

情報なんてものは、今ではどこでも手に入れることが出来る。ネットだろうが、テレビだろうが、市場調査だろうが、世論だとか。

勿論、ゲーム屋でもだ。

もしかしたら、そっちの方が一番、情報屋、と呼ぶにはふさわしいかもしれない。そもそも、ゲーム屋以外に情報を、深く取り扱っているところなんてものはない。そもそもそんなものは存在しないし、そもそも、情報屋なんてものが存在するかどうかも、世間的には怪しいものだ。

しかし、それは実在する。それがボランティアなのか、それともちゃんと、どこから収入を得ているのか、それは香奈には分からなかった。はつきり言って分からなくてよかったし、分からなくても、そんなに問題はなかった。ボランティアだろうが何だろうが、香奈にはどうでもよかった。

香奈は、情報が得られればいいだけなのだ。

つまり、得られるのなら、ネットでも電話でも、何でも調べらるだろう。しかし、そんな薄っぺらな情報だけでは足りないから、香奈はあの店に行くのだ。

ゲーム屋。

香奈は、空を飛んでいた。正確には、黄龍に乗って、空を飛んでいた。しっかりとした黄龍の感覚が、香奈にはあった。しっかりとした感覚が、香奈の手に伝わって来ていた。黄龍のぬくもりかどうかは分からない。秋風の、涼しげな感覚だっただけかもしれない。しかし、それは確かに、黄龍の感覚だった。

「ハンスに、結局言わなかったわね」

黄龍が、香奈に言った。

聞いた香奈は、「でも、ハンスさんにも、これ以上心配を掛けたくなかったのよ」と弁明気味に、黄龍に言った。

黄龍は聞くと、「…、」少しばかり、考えるように黙り込む。

「それに、ハンスさんに言ったところで何も変わらないわ。私の、これからする行動にはね」

香奈は言った。

「確かに」と黄龍も呟いた。

それは確かなことで、黄龍の中で香奈が、華奢と言うよりも、どこか強気な風にとらえられた。あくまでも、強気なだけだ。

それか、みんなを守りたいと思う心、だろうか。黄龍は考える。さっきのハンスのことにしたって、香奈はまっすぐと、はっきりとした声で言っていた。黄龍の背中に乗っているせいか、目までは見ることが出来ないが、その声は、飛びながら聞いていても擦れず、そして、どこまでもはっきりとした、そんな真っ直ぐな声だった。

香奈は本気だ。

それ以外に、あり得なかった。香奈にとっても、黄龍にとっても、きつとそれは決まったことだった。香奈は、それほどまでに本気だった。本気以外の何物でもなかった。香奈は非常に本気だった。

そして、それに伴う物も、ちゃんと香奈には分かっていた。それにどれほどのものが伴って、どれほどのものが犠牲になるのか。香奈にははっきりと、手に取るより容易に分かっていた。しかし、それで香奈が得ることは、『守る』以外、外なかった。

それで、香奈は十分だった。

香奈は、守りたいのだ。自分の大切に思っているものを、全て。勿論黄龍もそのうちに入っている。しかし、黄龍は香奈のより理解者であり、よきパートナーだった。それは、すでに実感していたことだった。

お互いを大切に思いあっているからこそ、他の物を守りたいと思うのは、尚更あたりまえな話なのだ。

そう言うことだ。

香奈は、心の底から思っていた。そして、黄龍もきつと、心の底からそう思っているはずだ。そうでなかったら、今しようとしている香奈の所業に、きつと同行することはしなかっただろう。いくら居候と言えど。

「黄龍……」

香奈は言った。

黄龍は、飛んでいた。香奈を乗せて、新宿の方へ、高速で飛んで

いた。下手な車よりも、もしかしたらスポーツカーよりも速いかもしれない、しかしそれ以上に、香奈は黄龍とのつながりと言う物があることを、実感していた。

黄龍は、「ん？」と小さく香奈に言った。

それは香奈に向けられたもので、それ以外の誰に向けられたものでもなかった。それなりに、黄龍にとっても、香奈は大切な存在に他ならないのかもしれない。

香奈には、少なくともそう見える。それに、香奈はそう思いたい。そして、香奈はそれを信じている。

だから、香奈は黄龍に、こう言うしかなかったのだ。

そもそも言うしかなかったし、香奈自身も、その言葉を黄龍に言いたい気持ちでいっぱいだった。もしかしたら、言う場所が違うかもしれない。しかし、香奈はそれでも、黄龍に言いたかったのだ。

「……」

ありがとう……、

「……、黄龍」

香奈は黄龍に、はっきりと言った。

少しばかりの沈黙。思考の巡りが悪くなる。しかし黄龍は、すぐに香奈へ言葉を放つ。

「それは、香奈が今やろうとしてることが成功したら、言って頂戴」  
黄龍は言った。

香奈は、それでも言いたかったし、言うタイミングを誤ったとも思っではいなかった。香奈にとっては、その時間は貴重だった。

ただ過ぎていくだけの重要な時間が、風のように吹きぬけて行った。

すこしは、見込みがあつた、と言うことだろうか。羽並は、異獣いじゅうに侵されつつある思考を、自分なりに巡らせた。

羽並はその一言を聞いて、考えた。その話題を、あの話をされてなお、自分からしに来るということは、相当な『覚悟』と言う物が

あるはずだ。それがどんな結果であれ、それを受け入れるだけの覚悟が、本人にはあるはずだ。

まがいなりにも、それは自分の思考だった。

「聞きたいの？」

羽並は、脅すように東海林に言った。

それを聞いた東海林は、一瞬息をのんだ。その瞬間を見計らったかのように、更に羽並は東海林に言い詰める。

「もしかしたら、さっき東海林君が言ったみたいに、赤龍君が『帰ってきたくない』って言うかもしれないのよ？その可能性は、東海林君がよく分かってるはず、でしょ？」

いたずら気ではあるが、本気でもある言葉だった。

聞いた東海林は、「…、うん」と羽並に答えた。しかし、それだけが東海林の答えとは限らない。

「でも、俺も赤龍と寄りを戻したいし…、それに赤龍も…、」

東海林は言葉を詰まらせる。

自分が言いたいことは、あまりにも自己中心的だ。解釈だった。

「赤龍君も？本当にそうかしら？」

羽並は言った。

東海林は聞くと、「…、」寂寥感を孕んだ沈黙で、口を紡いだ。

「本当に、赤龍君は東海林君の下に戻ってきたと思うのかしら？」

羽並は言った。

それが問題なのだ。

東海林もそれを納得していた。つまり、赤龍が帰ってきたと思うか、それともそうは思わないか。それが問題だった。

はつきり言つて、それは恐怖と類似していた。類似と言うよりも酷似の方が近い。それは、裏切るか裏切られるかと言う問題に近い。

東海林はそれを、自ずから否定する。

違う、それはちよつと違う。いや、ちよつとでもない、すごく違う。

ただ、東海林が『思いたい』ことだけが、赤龍の『考えていること』と言うわけではない。それだけのことだ。

裏切るか裏切られるか 赤龍がまだ、東海林のことを受け入れてくれるのか。

置き換えと言うか、どちらかと言うと後者だった。

つまりそう言うことだ。

これはあくまで、東海林が招いた問題なのだ。東海林が招いた問題に、ただ東海林が直面しているだけなのだ。それはあたりまえな話だし、それ以外は、東海林だって『ありえない』と思えるほど、それは単純な話だった。

東海林の問題なのだ。

違う、東海林が作り出した問題なのだ。

それだけのことだ。それを解くのは東海林だし、赤龍ではない。

それに、赤龍はそれを、『正しい正しくない』ではなくて、『自分の氣にくう氣にくわない』で判断する。

赤龍が答えなのだ。つまり、赤龍にしか答えはない。赤龍にしか答えはなくて、つまり、東海林の中には答えがない。

本当に、

東海林は考える。

本当にそうなんだろうか。本当に赤龍は、俺にヒントも残してくれていないのだろうか。赤龍は、本当に、俺には何も残してくれていないのだろうか。

考えてどうにかなることでもない。

ましてや、考えなくては何もならない。

つまり、どうしようもない？

考えてどうにかなることではない 考えなくてはそもそも何もならない あきらめるわけにはいかない。

そう言うことなのかもしれない。

赤龍が、東海林に残したヒントなのか。

それとも、赤龍自身がヒントなのか。

東海林はふと思い出す。あの手紙の内容を、東海林は、快くなく、しかししっかりと、東海林はそれを見据えた。

心の中で、読み上げる。

東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ！！

それは、赤龍の本意かもしれない物。そして、大介の部屋に残されていたもの。

つまり、と東海林は考える。

つまり、それが意味することは、ヒントかも知れないということだ。しかし、それが意味するヒントなんてものを、東海林は理解できなかった。何かのアナグラムなのか、それとももっと、他の何かなのか、なんてことは、東海林には分からなかった。

しかし、

東海林は思った。

それが赤龍の思っていることなのだ。赤龍の思っていることが、『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ！！』なのだ。

だったら、東海林は答えを見つけたかもしれない。

「…確かに、あいつは、そうは思わないかもしれない」

東海林は言った。

一瞬、羽並の表情が真剣になった。真剣に、羽並は東海林の方へ視線を向けている。東海林は、東海林なりにしっかりとした表情をしている。東海林なりの答えと言う物を、見出している。

迷路みたいな出口なのか、外へ出るための入り口なのか。

「確かに、戻ってきたくないと思うかもしれないし、もしかしたら、もうどこかで、新しい生活を始めてるかもしれない」

東海林は続けた。

羽並は、東海林の方に、ただ真剣に視線を向けていた。東海林が、これからなんというのか、羽並には分からなかった。しかし、分かったら何もならない。そもそも、そこまで羽並は、人の心を読むことにたけているわけではなかった。

「でも、」

東海林は言う。

羽並の視線が、一瞬和らぐ。

「俺は、赤龍と一緒に、飯が食いたい」

本当の事だった。

続ける。

「俺は、赤龍と一緒に学校に行きたい。赤龍と一緒に勉強して、赤龍の力を借りて、そして、俺があいつをまた、寮に泊めてやりたい」

東海林は言った。

それは、はつきりとした感情に近い物だった。東海林にとって確かなものだったし、これ以上確かなものも、東海林にとっては珍しかったかもしれない。それは今までにないくらい純粹で、はつきりした意志だった。

「俺は赤龍と一緒にいたいんだ」

ただそれだけだ。本当に、ただそれだけ。

まとまっていて、簡潔で、それでいてはつきりして、そして純粹。

聞いた羽並は、少しばかり東海林の話を、頭の中でまとめ始める。少しだけ目を閉じると、すぐに開ける。東海林を、羽並は視界に入れる。

羽並は、東海林に微笑む。

「まさに、純真ね」

羽並は言った。

東海林には、その二字熟語を、うまく聞き取ることが出来なかった。でも、それでもいいと東海林は思った。

「……」

東海林は、少しだけ小さく息を吐くと、羽並の方に視線を向ける。羽並は、さっきよりも東海林を食い入るようには見ていない。しかし、今度は微笑んでいる。その理由を、東海林は知らない。今の東海林はあくまでも『純真』なのだ。純真で、それ以外なんでもない。



「もし、それ以外の理由だったら、理由にもとってだけで、考え物だったけど、まあいいんじゃない？」

羽並は言った。

東海林は聞くと、少しだけ顔を明るくした。

「じゃあ……」

と東海林は言いかける。

それに歯止めをかけるのも、また羽並だった。「ちょっと待って」と羽並は言う、東海林はぴたっと、言葉を止める。

「でもそれは、ぎりぎり合格点つてだけ、もう少し、東海林君は考える必要がある、」

羽並は言う。

東海林は、小さくため息を吐く。それでも結構考えた方なんだけどな。東海林は本気で思う。

「でも、合格点は合格点、男群の仲間にしては、結構いいセリフ吐くじゃない、コノコノ」

とか言いながら、羽並は東海林を軽く、肘でどついてくる。

東海林は、何だか変な気分になってくる。はつきりと、どうとは言えない、そんな気分だった。靄とは違う何かだった。

「あ、あはは……」

東海林は笑うしかなかった。

羽並はすぐに、東海林へと言った。「教えてあげるけど、ちゃんと自分でも考えてね？」どこか、いたずら気な、そんな口調だった。

羽並は、東海林にこう答える。告げる。

「ハンスよ」

東海林の思考が、一瞬迷った。

ハンスが、一体何なのか、そもそも東海林には分からなかった。

ハンスだから何なのか、と言うよりも、ハンスそのもののとの関係が、東海林には今一、つかめなかった。

「……ハンス？」

東海林は聞き直す。

聞いた羽並は、「そう、ハンス」と東海林に答える。それは、はつきりとした口調で、とてもしつかりとした視線で。

「何でハンス…？」

羽並は聞くと、少し幻滅そうに「もう…、ちょっと見直したと思ったら、男子ってこれだから…」頭を抱えるような、そんな仕草を見せる。東海林には、羽並が何を言いたいのか、はつきり言っただけでなかった。

「もうちょっと頭を柔らかくしてよ…」

羽並は言った。

東海林には、言われても、どこまでも分からない。

「…、」

東海林は少しばかり考えてみる。

ハンスと言ったら、幻術、DEP、それからユーカにライカンに春香に…、それから、えっと…、うーん。

分からない。

東海林は、結論に達した。

「分からないんだけど…」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「もう…」と小さく東海林に言った。それを聞いて一番困るのが、東海林だった。

「いい？ハンスに会えば、幻術を使ってもらえる。幻術は、『特定の人物に幻覚を見せる』術ってことは分かってるでしょ？」

東海林は頷く。

「もう分かったでしょ？」

羽並は言った。

東海林は、さっきの羽並の説明を、頭の中で繰り返す。幻術は、ある特定の人物に幻覚を見せる術。

ある特定の人物 赤龍。

あ、そっか、そう言うことか。

東海林は思いながら、羽並に尋ねた。

「あのさ、幻術って離れてても使えるの？」

東海林は聞いた。

一瞬、羽並はぼかんとする。東海林の言っていることが、あまりにも外れたことを言っているから、ある意味、何を言っているのか分からなくなる。

「…、知らなかったの?!」

ある種の驚きだった。

しかし、東海林は羽並ほど、そう言った術に詳しいわけではないし、そもそも東海林に分かるのは、幻術と音魔おんまぐらいだ。それ以外は分からない。それに、知っていても、そもそもその言葉を使う機会さえないだろう。

「…、知らなかったけど…、」

東海林は言った。

羽並は、少しばかり呆れた風な、そんな視線を東海林に向ける。その視線を向けられて一番困るのは、他ならぬ東海林だ。それ以外には誰もいない。

「よく私たちについて行けたわね…」

少し頭にくる。

東海林は思いながら、その気持ちを抑える。それ以外に、するべきことがなくなる。

「…、悪かったな…」

東海林は小さく呟いた。

それを聞いた羽並は、「まあ、いいわ」と東海林に言う。全く、いいのか悪いのか、本当にはつきりしない。

東海林は内心、本心から呆れてくる。

「つまり、ハンスさんの所に行けば、赤龍君とコンタクトが取れるって訳よ。ハンスの幻術を使って、ね？」

それは分かった。

東海林は一度、軽く頷いた。

「俺は、ハンスさんの所に行けばいいんだな？」

東海林は、確認を取るように言った。

聞いた羽並は、「ええ、私が思いついた方法だけど、でも、出来なくはないはずよ」と東海林に言う。

出来なくはない、じゃなくて、出来る、じゃないと困る気が、東海林には少ししてくる。しかし、特に何を言おうとは思わなかった。「それに、」

羽並は言った。

東海林は、羽並の方に視線を向ける。羽並は、どこか嬉しそうでどこか悲しそうで、それでいて、どこか気楽そうで本気そうな、そんな視線を東海林に向けた。

「私も、東海林君に、赤龍君と仲直りしてほしいし、」

羽並は言った。

別に、東海林は驚かなかった。

そう思うのは、東海林だけではなかった、と言うだけのことだ。別に驚くべきことでもない。そもそも、東海林には驚きすらこみあげては来ない。

「そっか、やつぱり、俺が非力なのは辛い……って感じ？」

東海林は聞いた。

羽並は、少しばかり目を閉じる。「ううん」と一度、頭を横に振った。いたずら気な視線を、東海林の方に見開く。

楽しそうで、どこか強気な目だった。

「もつと考えなきゃいけないぞ、東海林君」

本当に、いたずら気だった。

それが、一番東海林が驚いたものだった。

チャイムが、教室に鳴り響いた。

一番いい選択だと思ったし、それは今でも同じだった。その選択は、香奈にとっては正しいものだった。正しいものだったし、それ以外にありえない物だった。それに、もしそれ以外の選択肢なんてものがあっても、香奈はそれを、受け入れられるか分からなかった。

それが、今の香奈だった。

香奈は、長机と椅子の置いてある、あの埃っぽい部屋に来ていた。そこにいるのは香奈と黄龍と、そしてもう一人。

「長宮<sup>ながみや</sup>さんに、聞きたいことがあるんです」

長宮はそれを聞くと、面倒くさそうな、どうでもよさそうな、しかしはつきりとした口調で答えた。

「知ってる、だって、そうでなかったらこんなところ、来ないはずだからね」

分かっているような、そんな口調だった。

聞いた香奈は、おうっゆうお方に視線を向ける。黄龍は、いつまでも長宮に慣れそうもない雰囲気で、見つめていた。

そこは、とにかく空間が歪んでいた。物理的にも、他の様々な観点でも、その部屋は歪んでいた。普通に見ると歪んでいるようには見えないが、そこは、確実に『何か』が歪んでいた。空間は、その一つに過ぎない。

「それじゃあ、私たちが何を知りたいかまで、分かってる？」

黄龍は、試すような口調で、長宮に言った。

聞いた長宮は、その問いに即答する。

「分からないし、俺に直接関係ない」

黄龍は、どこか氣にくわなかった。

香奈は別に、気にしてない風な雰囲気で、長宮に言った。

「いいですか……？」

長宮は、香奈の方に視線を向ける。黄龍を見る時と同じような、お客を見るような視線でもない、ただの、どこまで行っても視線だけの視線。

「ここは情報屋」

そして、ここはどこまでも情報屋だった。

ゲーム屋の裏の、情報屋。

聞いた香奈は、少しばかり口ごもったあと、長宮に、はつきりと言った。

「あの、調べてほしい人がいるんです」

香奈は言った。

黄龍は、少しばかり視線を細めた。

聞いた長宮は、「また？」と香奈に、面倒くさそうに言った。香奈は聞くと、一度、はつきりとした返事をした。「はい」、それはどこまでも届くような、そんな真っ直ぐなものだった。

聞いた長宮は、少しばかり考える。そして、香奈の方に視線を向ける。

「名前は？」

聞いた香奈は、はつきりと答えた。

「ジェーン・エリザリータです」

はつきりとした声だった。

そう、ジェーン・エリザリータ。

昨日、このゲーム屋の表に出た瞬間対面して、そして何とか攻撃を躲しつつ、相手の攻撃手段を奪って、持ち越しにした人物。

明らかに、畔と使っている武器が違ったのだ。

使っている武器は、『拳銃』だった。

そう、拳銃に似た拳銃。

しかし、その『拳銃』はリロードを必要としない、どこまでも弾なんてものがない拳銃だった。

拳銃なのかどうすら、香奈には分からない。

しかし、それは確実に、何かの確信に近い物だと、香奈は確信していた。香奈は、それが香奈の差がしている物に近い物だと、分かっていたのだ。

「分かった」

どこまでも面倒くさそうな口調で、そう長宮は答える。椅子から立ち上がると、長宮は、埃だらけの底の空気を、少しばかり吸い込んだ。

咽はしなかった。

「探してくる」

長宮は言っと、埃だらけの本棚の間の、暗い奥を、縫うように進んで行った。

探しに行ったのだ。

香奈は、それを見てなんとなくほっとする。『情報』に『屋』までつくのだから、もしかしたらお金を取るのかもしれない、と考えたのだ。しかし、それは無いようだった。それは無いようで、どこまでもお金は取らない。そう信じたいし、もしお金を要求されても何も支払うことは出来なかった。

でも、お金は取りそうもないような、そんな雰囲気だった。

「ふう……」

香奈は小さく、安堵に似た息を吐いた。聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。

「やっぱり、香奈も苦手なの？」

黄龍は聞いた。

それを聞いた香奈は、「え？」と黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、どこか真っ直ぐな視線なのに、香奈は、どこかよく分からないような、そんな視線を向けていた。

「苦手って？」

どこか、明るいような、そんな口調だった。

少しだけ、ではあるが、香奈は笑っているように見えた。黄龍の気のせいではない、と黄龍は思う。

「……ほら、あの長宮っていう店主」

それを聞いた香奈は、長宮の顔を思い浮かべる。香奈は、少しばかり、長宮の一日のお行動を考えてみる。

朝起きる 店のカウンターに座る ずっと座ってる ただ座ってる ラジオが鳴ってる 寝る。

うーん、と香奈は思い浮かべる。

はつきり言って、長宮が送っていきそうな一日なんてものを、香奈は想像もできなかった。想像が出来ない、と言うよりは、いつも何をやっているのかわからないような、そんな雰囲気。

「苦手っていうよりも、不思議？」

香奈は言った。

黄龍は、少しばかり訳が分からなくなってくる。視線まで香奈に、訳が分からない風な目になって行く。

「不思議……って？」

長宮が不思議、と言つのを黄龍はうまく飲み込めない。確かに不思議かもしれないけど、そこまで不思議でないような気もする。そもそも、不思議な気がしないのは、黄龍だけだろうか。黄龍は、はっきり言つて不思議ではないと思つている。

「ほら、何だかそんな雰囲気じゃない？ 隠された黒い仮面、みたいなね？」

香奈は言つた。

黄龍には、もつと訳が分からなくなつた。

「……隠された、黒い仮面？」

黄龍は、尋ねるように香奈に言つた。聞いた香奈は、「うん」といい声で、黄龍に言つた。そんな声で言われても、分からない物は分からないし、どこまでも分からなかつた。

「ごめん、もつと分からなくなつたわ」

黄龍は、どこかあきらめ気味の口調で言つた。

「そう？」

香奈は、どこか不思議そうな視線で、黄龍の方に視線を向ける。

黄龍は、どこまでも訳が分からなさそうな表情で、長宮が情報を持つてくるのを待つていた。

東海林には、授業なんてものは無いも同然だった。先生の言葉が、東海林の目の前を通りすぎて、東海林の中に全く入っては来なかつた。東海林の中では、もうすでに、別の意識が出来上がつていた。そもそも、東海林は勉強をする気なんてものはさらさらないし、東海林に『ハンスの所へ行く』以外、何をしたいと思つてゐるわけでもなかつた。もしかしたら、今日は部活を休むかもしれない、と東



海林は思った。

「だから、このファンデルワールス力っていう力が働いて、ドライアイスが出来上がってるんだぞ。でも、ドライアイスの式、誰か言える人」

化学だった。

と言つても、東海林に化学をする気はないし、そもそも東海林は、化学以上の力の存在を知っている。それが理屈をどう弄つても、どうこねくり回しても、理論として成立することはおそらく決してない物。

東海林はそれを知っている。

器の龍を見る力と、術師の術を使う力だ。

そもそも、龍と言う物を見るためには器でなければならないし、術を使うなら術師でなければならない。ハンスの説明によれば、術師を人工的に作り上げることは可能らしいが、それはある種のリスクを伴う。

そう考えると、器って何だ？

東海林は考える。術師は『術を使う』奴らのことだ。術なら、つかえてもきつと損はない。東海林はハンスを見ていて思う。ハンスはよく、幻術を使つてぼろきれを『お金』に変えてしまう。そしてそれは誰にも気づかれることなく、どこまで行つても『お金』として処理されることになる。誰かが、『何かおかしい』と思わない限りは、きつとそうあり続けるだろう。東海林は考える。

それに、術なら、つかえて損はない。護身もできるし、相手を見抜くことだってできるかも知れない。無いものを、机から取り出す子音だつて可能になってしまう。それは羽並がよくやっているから知っている。

それだつたら、器はどうなるんだ？

東海林は思う。

そもそも、器と術師の違いって何だ？東海林は本気で考える。器は術師ではない。根拠は、術師は術をいう物を使えるが、器は

それを使うことが出来ない。また、術師は術を使用している間しか龍を見ることが出来ないらしいが、器なら、いつでも見ることが出来る。

これが違いだ。

東海林は思う。やっぱり、器の存在が、おかしい物だと思う。

術師なら、なんとなく分からなくはない。術を使えるし、かつこいいし、それに何だつてできる。龍だつて見ることが出来てしまう。しかし、器はどうか、と聞かれると、龍を見るだけだ。龍を見ることが出来るだけで、それ以外何もできない。それ以外は、ごく普通の、一般準と何も変わらない。

つまり、そう言うことだ。

なんとなく、そう考えるだけで器が、術師に劣っているような気がしてしまうのは気のせいか、と考えてしまう。

しかし、と東海林は思う。

何故か、器には『龍』が付きやすい。東海林には、以前赤龍がいたし、大介や雄大や香奈なんかは、龍を自分の居候んしてしまっている。以前の赤龍だつてそうだ。

もしかしたら、器は龍を『居候に出来る』能力みたいなものを持つてるのか？

東海林は考えてみる。

「それじゃあ、寺山」

先生の声が、東海林の耳を突いた。

「え…ッ！」

とか東海林は言う。

どうやら今は、化学の授業らしかった。東海林はそれすら、頭の中にはなかった。頭の中にあつたのは、赤龍と、その他もろもろの雑多なこと。

「ドライアイスの化学式は？」

先生は東海林に尋ねる。

そもそも、そんなものを答えられる人間がこの世にいる気がしな

いのは東海林の気のせいだろうか。東海林は考える。そもそも東海林には、何を聞かれているのかよく分からなかった。

何だって？化学式？

考えて出てくるものではない。

「えっと、」

そう言えば、ドライアイスってあつたな、なんか、ケーキに入れる奴だっけ？

東海林は考える。そして、少しばかり考えて言った。

「えっと、」

東海林は考える。そして、考えても出てこないことがはっきりする。

「それじゃあ寺山、ドライアイスって何からできてる？」

先生は東海林に聞く。

どこまでも真っ黒で、それでいて暗澹に陥れられそうな、そんな瞳。

東海林はどこまでも沈黙する。

「…あ！」

東海林は言った。

そうだ、確かあの白い煙の出る奴だ。

考えると、東海林はすぐに、今までの授業の内容が頭の中で鮮明に蘇って行く。

「お、分かったか」

先生は、どこか嬉しそうな視線で、東海林に言った。

東海林は聞くと、「はい」と呟くように、しかししっかりと、先生に言った。

「C10H8！」

東海林は言った。

その後、クラスにどっと、笑いが押し寄せてきた。

つまり、東海林は馬鹿だった。

つまり、東海林は『非力』だった、と言うことだ。

「えっと、…それはナフタレンだな、よくそんなもの言えたなんて気がするけど…」

先生は言った。

東海林は、よく分からなくなってくる。何が正しいかなんてことは、東海林には分からないし、東海林はそもそも勉強が嫌いだった。「まあ、寺山がナフタレンの式を挙げてくれたから、ナフタレンで考えてみようか…」

先生は、どこまでも慈悲深かった。

黒板に、訳の分からないことを書いていく。

東海林は、段々と目を外の方に向けていく。何処か遠くの、海が近そうな、そんな場所を眺めていた。

天野下は、そもそも海なんてなかった。接してさえいなかった。

しかし、東海林は、海を覗きこんでいるような、そんな気分になってきた。それは間違いではなかったし、東海林は海を覗きこんでいた。鏡みたいに淀みのない海に、東海林は顔を覗き込ませていた。他人は自分の鏡、と言う言葉がある。東海林はその言葉を、テレビや大人から、嫌と言うほど聞かされていた。はつきり言って、だから何なのか東海林にはよく分からなかった。しかし、なんとなく分かるような気がしてくる。

赤龍は、どこまでも東海林と一緒に、東海林だったのかもしれない。

東海林は考える。赤龍は、どこまでも自分の主張を曲げなかったし、東海林だって、どこまでも自分の主張を曲げようとはしなかった。けっか、突っ張ってしまったのだ。

お互い。

東海林は、海の中に映っている物を見つめている。ただそれだけだ。海には魚さえ泳いでいなくて、そこにあるのは、東海林の顔と、それから大きくて、なにか優大な影。

翼を持つその影も、東海林と一緒に映っていた。

違う、東海林がその影の背中に乗っていたのだ。東海林は、その

巨大な、大きな蝙蝠の翼を持つ生き物に乗りながら、海の中を、ただひたすら覗き込んでいただけだった。

どこを見てるんだ俺は。

東海林は思った、その瞬間だった。

「あ、起きた」

先生は、チョークをダーツの矢のように構えながら、東海林の方に、ある種の笑みを浮かべていた。

つまり、チョーク投げだ。

そんなものが実在するのかすら、東海林には怪しいものでしかなかった。しかし、今目の前にあるのは、まさにその一段階前だった。あとはチョークを、ただ目標に向かって投げるだけ、と言うような、そんな構えだった。

「あ、えつと……」

東海林は言った。

「授業中だからな、一応言っておくけど」

先生は言った。

東海林は聞くと、少しばかり口をもごもごと動かした。少しばかり、何をしていいのかわからなくなってくる。

「それに、多分このクラスで一番『ドライアイス』について分かってないのは東海林だから、ちゃんと起きてるんだぞ」

クラスに、若干の笑いがもたらされる。

もしかしたら、今日香奈がいけないのは、ある種、東海林にとって幸運なことだったのかもしれない。

東海林は考えた。

そう考えられるほどに、東海林は少し赤くなっていた。

「……はい……」

東海林は言いながら、資料集のページを開いた。

長宮の資料は、こう言ったものだった。

「ジェーン・エリザベータ。出身はイタリアで、学校は中退してる。

年齢は十五で、丁度同じくらい。性格は微妙なところだね、人の性格が好きで、色々な性格を知りたがる。それでもって、新しいものが好きで、さまざまなものを見たり聞いたりしたがる。日本語が出来て、属性は東海林君たちと同じ、火炎」

そこまでは、まだなんとなく分かっていた。

一つだけ、引かなかった単語があった。

「属性？」

香奈は聞いた。

黄龍は、少しばかり長宮の方に目を細める。「なんだかゲームみたいね」と、黄龍は長宮に、思ったことをそのまま告げる。

聞いた長宮は、「その方が、受け取りやすいと思って、」と黄龍に返す。やはり、黄龍はあまり長宮が得意ではない。思うと、黄龍はすぐに口を閉ざして、長宮の方を、ただ眺めるだけにする。

「とりあえず、属性っていうのは、その人の持っている波長みたいなもので、色々ながある」

長宮は言った。

それを聞いた香奈は、「ふーん」と小さく呟く。

「それで、他に何か」

長宮は、少し面倒くさそうな口調で、香奈に聞いてきた。

聞いた香奈は、「ジェーンは拳銃を持ってたはず、そのことについて、教えてほしいの」と長宮に言った。

長宮は聞くと、少しも鈍くない動きで、新しそうなファイルをめくる。そして、その部分を『翻訳』する。

「銃についての関係、えーっと、魔銃まじゅうの使い手で、本人は『魔銃リンドブルム（Lindwurm）0211』を使ってるみたい。それでもって、」

聞き逃せない単語を、長宮は確かに呟いた。

「マフィアの一員みたいだね」

それ以上に聞きなれない単語が、香奈の耳を突いた。

一瞬、何の事が全く分からなかった。全く分からなかったし、は

つきり言って何だかもよくは分からなかった。

「マファイ…ア？」

香奈は長宮に呟いた。聞いた長宮は、「ん？」と一度香奈に言う  
と、「うん」と言い直す。はつきり言って、何の事だか全く分  
からない。それに、何故そんな単語がここで出てくるのかすら、  
香奈には分からなかった。

聞いた香奈は、「…、」頭の中で様々なことを考える。それ以外  
に何もできないともいえるし、考えるしか、その歪んだ部屋にはな  
かった。どこまでもビニール張りではない、どこ高もわからないよ  
うなよく分からない場所の、埃っぽい空気をしたところには、それ  
しかなかった。

「派閥争いが激しくて、現在では大きく二つに、『ジェーン・エリ  
ザリータ』が所属してる『タンクラス（TANCLAS）』の一員  
みたいだね」

意味が分からなかった。

聞いたこともなかったし、はつきり言って何の事かもわからな  
かった。それが意味することも分からなかったし、分かるわけもな  
かった。

「タン…クラス…？」

香奈は、疑問的に呟いた。

黄龍は、小さく疑問げに言った。

「そんなマファイア、テレビで聞いたことないわよ、それに、色々  
情報を探ってみたりとかはしたけど、そんなの一言も聞いたことが  
ないわ」

それを聞いた長宮が、はつきりと答えた。

誰になんて、そんなことは分からなかった。

「それはあたりまえだよ」

二人（一人と一匹）は、その言葉を聞いた瞬間に、長宮の方に視  
線を向けた。長宮は、さっきと同じ、いつもと同じ表情をして、二  
人の方に視線を向けている。

言う、続ける。

「だって、」

表の情報でこんな『次元の違う』情報が流れたら、大変なことになるじゃないか。

言っている意味が、よく分からなかった。

長宮は更に続ける。

「タンクラス（TANCLAS）は、『ジェーン・エリザリータ』などから構成されてる。その目的は、そもその人間の『価値観』と、人間の『意志』の『統一』を目指してるんだ。それをするためには何だっしょうとする。一国の王や大統領だって、彼らは殺しかねない。それに、君たちはもう知ってると思うけど、この世界には、『人間が否定し、あるいは求めたがる力』が存在しているんだ」

長宮は言った。

香奈には、よく意味が分からなかった。

しかし、そう言うことなのだ。そう言うことでしかなくて、つまり、マフィアはマフィアでも、『そこら辺にいるマフィア』ではないのだ。

香奈は思いながら、息を飲んだ。

「たとえば、魔銃とかね？」

長宮は言った。「魔銃っていうのは、リロードを必要としない銃なんだ。撃ち出すのは弾じゃなくて、『次元の違う』力なんだ。まあある種、エネルギーそのものの弾、とも言えなくはないけど」と言う、長宮は資料を整理し始める。

これ以上言うことは無い、と言わんばかりの手際で、資料をファイルに、きちんとしまっていく。

「……」

何を言っているのか、ではなかった。

何も言うことがなかった。香奈の沈黙が、黄龍にはどうしても、



重々しく聞こえた。重々しくて、それは沈黙と言うよりは、むしろ叫喚に近かった。

「他には、無いかな」

長宮は、相変わらずつまらなさそうな表情をして、香奈に尋ねた。

土曜日に、長い授業をやる意味がない。そもそも土曜日は、普通の公立の学校なら、何もない、ただの平凡な一日なはずだ。ただパソコンを弄ったり、コーラを飲んだり、ゲームをしたり、時には友人とカラオケに行ったり。

つまり、休日であり、憩いの時間なのだ。

もしかしたら、そう言った日に部活が入ることもあるかもしれないが、そんなことは、全く問題ではなかった。むしろ、東海林にはそっちの方が望ましかったかもしれない。

とりわけ、今の東海林には問題が多かった。問題が多すぎて、何から取り掛かればいいのか分からないような、しかし、やることは分かったような、そんな雰囲気だった。

授業がすべて終わるということは、その第一段階に過ぎなかった。東海林は机の上でうなだれながら、ただ思考がとぐるを巻いたり、色々な方向に走って行くのを、眺めているような、そんな感覚だった。そんな、考えに耽るような、そんな感覚に近かった。

「おい」

と邪魔が入るのは、殆ど必然的なことなのかもしれない。

東海林は思いながら、横の方から聞こえてきた声の方に視線を向ける。その声は、どう考えても、東海林の中には大介の声だった。

大介の声が、東海林の中に響いてきたのだ。

「ん……？」

東海林は、少しばかり怠そうな、そんな視線で大介の方に視線を向ける。大介はそれを聞くと、東海林の方に言った。

「お前、今日はハンスさんの所に行くんだってな」

聞いた東海林は、少しばかり視線を細める。そして「ふーん…」となる。小さくうなだれながら、東海林は大介に答える。

「何で知ってるんだよ」

これは、東海林と羽並の、二人だけの理解なはずだった。東海林と羽並以外、東海林がハンスのところに行こうと思ってるなんて知らない。

「羽並が言ってた」

だよな。

東海林は思いながら、うなだれて、羽並の方に視線を向ける。羽並は、他の女子と、普通に話を続けている。本当に、ただ普通の友達のように見えるが、もしかしたら、術師智雄立ちとか、そう言う関係なのかもしれないと思うのは、東海林だけだろうか。

「なるほど」

東海林は思う。羽並はおしゃべりだ。

聞いた大介は、東海林に問いかけてくる。「何でハンスさんの所に行くんだ？」と、聞いてくる。

それを聞いた東海林は、少しばかり口を紡ぐ。しかし、すぐにその糸を解きほぐす。

「赤龍と、仲直りする」

東海林は言った。

それだけで十分だと思ったからだ。

それを聞いた大介は、「お、やつとか」と声を発する。そして東海林は、少しばかり視線を細める。

そう、やつと。

東海林の中でも思える。これは確かに遅すぎた、これは確かに、遅すぎたのだ。赤龍と仲直りするには、もっと早い段階からの方がやりやすかっただろうし、ましてや、そもそもあの夜、大声で相手の非を言わずに、そもそもその時に仲直りすればよかったのだ。それだけのことだったのに、東海林には出来なかった。

それが、東海林にはつらかったし、しかし、それは東海林にとって、ある種の試練の様才なものなのかもしれない。

東海林は思った。

「それで、赤龍との交流手段がないから、ハンスさんに頼る」

東海林は言った。

聞いた大介は、「なら、」と声を発する。聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。何処までもその視線には、好奇心に似た光のようなものしかなかった、ように見えたのは、きっと東海林の気のせいではない。

「え、大介も行くの？」

少しばかり驚いた風に、緑龍も大介にそう言った。

大介はそれを聞くと、「勿論」と東海林に言った。そして、東海林の方に、当たり前のように視線を向けた。

「いいよな」

聞いた東海林は、少しばかり困った風な、そんな視線を大介に向ける。「まあ、別にいいんだけどさ」と東海林は答える。なんとなく、恥ずかしい気がしなくもないし、それは東海林にとって、心の突っ掛りの一部になった。それは間違いなかった。

「何、もしかしてハンスさんっぽいところー？」

前にいる雄大まで、その話に絡んでくる。はつきり言って、なるべくからんでは欲しくないのだが、と東海林は思う。

思いながら、少しばかり喉に息を詰まらせる。「まあ、そうだけど…」と東海林は細々とした声で言った。

それを聞くと、雄大は「おー仲直りタイム」と意味の分からない言葉を発する。東海林には、はつきり言って意味が分からない。それどころではなくて、意味が分からないのではなくて、それは何か違和感のようなものがあつた。東海林はまた、何か突っ掛るような、そんな感覚を覚えた。

「んで、まさかお前まで…」

東海林は言いかけた。

まだ言いかけただけだった。まだ東海林の喋る順番だった。しかしそこに、雄大は躊躇もなく割り込んでいく。

「いいでしょーねー？」

雄大は、どちらかと言うと青龍の方に聞いてくる。青龍は、ただ腕を胸の前あたりで組みながら、ただいつもと同じように、静かにその喧騒を聞き流していた。

「…、」

そう、沈黙に近いそれで。

聞いた東海林は、「おいおい、」と小さく思う。あまりにも自分勝手な行動で、東海林には何と言っていいのか分からなくなってくる。しかし仕方がないとも思うし、それはありえないことではないと思う。

「…、全く、」

東海林は小さく言った。

大介と雄大は、「よしっ」と小さく声を合わせる。緑龍は少しばかり呆れたような視線で大介を見つめて、青龍は、ただ淡々と、沈黙を守っている。

「でも、」

と東海林は言った。

それを聞いた大介と雄大は、東海林の方に視線を向ける。東海林は二人に言う。

「今日の部活はなしになるからな。俺はそれほどまでに、今は急いでるんだ」

急がないと、赤龍がどこか遠くに行ってしまうそうで、東海林には怖かった。今はこわかった。さっきまでなかったその恐怖心を、東海林はひしひしと、しかし確実に感じていた。

東海林は、急いでいた。

聞きたいことはそれだけではなかった。それを聞いたから、それだけではなく、と言うべきだった。それは幾分、難しいもの

があつた。香奈の判断も、難しいところがあつた。はつきりと、無理かもしれないと思うこともあつた。そしてそれは、多分無理なのだ。それ以外の何物でもない。無理なのだ。

しかし、やるしかなかった。

香奈と黄龍で、それをするしかなかったのだ。

香奈は思いながら、長宮の方に視線を向ける。長宮は、香奈の方に真っ直ぐと、しかしどこか、ふざけたような視線を送っている。ただそれだけだつた。

香奈は答えた。

「あの、」

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、本気の目をしている。「そのマフィアって、今この辺りに溜まってるとるんですか？」

そう、つまりそう言うことだ。香奈を狙うということは、香奈に会わなければ話にならない。香奈がいるのは日本で、つまり、そのマフィア、タンクラス（TANCLAS）は日本に行かざるを得ない。

つまり、もし香奈を本気で狙っているのだつたら、タンクラス（TANCLAS）は日本にいるということだ。

そして、多分それは本当だつた。

聞いた長宮は、さっきの資料を、ファイルにとじたままの状態で、覗くようにして見た。資料の内容が、すぐに長宮の口から出てくる。

「…そうみたいだね」

それを聞いた香奈は、やっぱり、と言わんばかりの表情を、長宮の方に向ける。長宮は、さっきまで見ていた資料を、ファイルの中に閉じた。そして「もういい？」と聞くと、香奈は一度、少しばかり考えた。

「あの、それってどの辺に溜まってるとるんですか？」

香奈は聞いた。

それを聞いた長宮は、「どの辺…」と言いながら、面倒くさそうに資料を机の上に出す。埃が舞うが、この際気にしてもいられない。

「えっと…」

面倒くさそうな口調で、長宮は言った。そして、資料をめくって行く。香奈は、それを食い入るように見つめている。

長宮は、「あ、あった」と言いながら、資料に一通り目を通す。

聞いた香奈は、「どこですか、それ」と長宮に聞く。声が、少しばかり詰まっている。詰まっ<sup>じ</sup>まっていて、言葉がうまく出てこない。

「随分近いな…」

長宮は、独り言のようにそれを呟いた。

聞いた香奈は、「…」口をただひたすら、紡いでいた。少しばかり息が浅くな<sup>ひくたそがや</sup>って行くのが分かる。

「えっと、世田谷の、楽多祖ヶ谷の、小さな廃工場あたり、だね」

長宮は言った。

聞いた香奈は、ただ黙って行く。

やっぱり…

心の中で、小さく呟いた。

「…ありがとうございます」

香奈は言った。それだけだった。

長宮は、資料をしまいながら香奈に聞いた。「他に、何か聞いたことはある？」どこか、どこまでも面倒くさそうな声だった。

「…、えっと…」

香奈は言いかけた。この際だから、何か聞いておくべきだろうか。考えてもみたが、考えるだけ無駄だった。はつきり言<sup>い</sup>って、長宮に聞きたいことは一通り聞いたし、それに、もう頭の中から、きつと消えないと思う。それなりの内容だったし、香奈にとって、それは重大なものだった。

「…いいえ」

香奈は、はつきりとは<sup>は</sup>ないが、確実にそうつぶやいた。

それを聞いた長宮は「分かった」と言<sup>い</sup>うと、資料を片付ける。そして整えると、立ち上がり「本当<sup>ほんとう</sup>にないね」と二人に聞いてくる。

聞いた香奈は、「はい」と呟いた。

黄龍は、長宮に何かを言いたいわけではない。

それを聞いた長宮は、「分かった」と言うと、本棚の間の、暗い闇の中を歩いていく。長宮の姿が、見えなくなっていく。

ここに来て、結構な時間がたっている気もしなくなかった。しかし、香奈にはそこが、どこか慣れ過ぎた歪みな気がしてならなかった。あまりにも溶け込み過ぎていて、歪んでいるかどうかさえ、香奈には分からなかった。そもそも香奈は、こんなものの歪みなんて退官したことは無かったし、きっとこれから、それは変わらないだろう。香奈は思った。

「…、」

黄龍は、香奈の方に視線を向け始める。香奈は、何かを考えるような視線で、どこか遠くを見つめている。

黄龍はそれを見ると、小さく香奈の方に聞いた。

「…、香奈」

一瞬、香奈はそれを聞いて驚いた。そして、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、何か張りつめているような、そんな視線を香奈に向けていた。

「…、行くの？」

香奈は、考えない。

「楽多祖ヶ谷の廃工場って言ったら、あの古い廃工場しかないわ」

香奈は言った。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり、視線を沈ませた。香奈が、どこまで思っているのかは分からなかったが、香奈が考えていることはすぐに分かった。

それに、分からなかった。

まだ、黄龍には、香奈について分からないことも多い。それに、香奈はどこまで行っても香奈だ。香奈は、きっとまだ、自分みたいなんだ、黄龍は考える。

「…、一緒に行く」

黄龍は言った。

香奈は、「…、」少しだけ黙る。口が、うまく動かなかったといえる。

涙に近い何か、そんなようなものがこみあげてくる。

「…、ありがとう…」

香奈は、再びそう言ったみたいだった。

言葉が、そこに響き渡ったような気がするの、きっと香奈の気のせいではない。

香奈の中で、その余韻が音を残して、そしてどこまでも、香奈の中に残って行くような、そんな音だった。

「…、黄龍」

香奈は言った。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり驚いた。しかしそんな暇もなく、黄龍は香奈の方に視線を向ける。香奈の視線がどこを向いているのか、そんなことは分からなかった。しかし、その視線はどこまでも、真っ直ぐを向いていたことを、黄龍はきっと忘れないだろう。

「…」

黄龍は、何を言うわけでもない。

香奈が、黄龍に言った。

「私、今日絶対に、頑張って見せる。だから、黄龍も、頑張ってくれる？」

香奈は言った。

恐怖が、その声には孕まれていた。どこまでの物なのかなんてことは、はっきり言って黄龍には、全く分からなかった。

しかし、黄龍はその言葉を、嫌な物には感じなかった。ましてや、その言葉がなす余韻は、黄龍の中でのびのびとした、そんな余韻を残していく。

「…、それは、成功したら、ね」

黄龍は、はっきりと香奈に答えた。

結局、東海林は一人で行くことにはならなかった。大介と雄大と、



緑龍と青龍と一緒に、ハンスのところに行くことになった。東海林は、どこまでもうなだれるような、そんな感覚で染まって行った。そもそも、東海林にとって部活を休むことは、もともと実力がない上にさらに重なるハンデであり、東海林にとって得にはならなかった。しかも、もうそろそろ学園祭が近い。

学園祭のすぐ後に、中間試験と言うのもどうかと東海林は思う。はつきりと。

しかしそんなことを講義するよりも、今は赤龍の方が先決だった。赤龍がいなければ、中間試験も何もなくて、ただ東海林が終わるだけだ。学園祭に赤龍が必要だとは思わない。しかし、そんなのは重要ではない。

東海林に赤龍が必要なのだ。

いなくなってみると分かる。きっと大介も雄大も、香奈だってそうなるだろう。自分の龍がいなくなったら、きつとさびしくて、いつまでも泣き叫びたいような、そんな気持ちになるはずだ。東海林は思う、絶対にそうなる。

泣き叫んではないないが、東海林はひどく寂寥感にさいなまれた。それは否定しないし、そもそも否定が出来ない。そもそも、東海林と赤龍は、もしかしたら切っても切れない縁なのかもしれない。

そしてそれは、もしかしたら東海林の勝手な思い上がりかも知れない、と心の中では考えてみる。しかし、それを受け入れるのは、もう少し後でもよさそうだった。

そう言う問題でなく、東海林はうなだれていた。そもそも、仲直りとか言うある意味恥ずかしくて、一番プライバシーが守られなければいけないところに、プライバシー侵害が入っているような気がするの、東海林の気のせいだろうか。

考えながら、東海林はうなだれてくる。どんどんと沈みながら、東海林は胸の中に、妙な靄を覚えていく。

うなだれて、バスの中で揺られながら、東海林はため息を吐いた。

「はあ……」

赤龍がいたら、ここで「ため息は……」どーたらこーたら、となるはずだ。東海林は思う。しかしそうはならなくて、今ここにいる龍は、赤龍ではなくて、緑龍と青龍なのだ。つまりそう言うことなのだ。

「でもよ、ヤバイよな、絶対」

大介が、雄大に言った。東海林は会話に入っていない。そもそも、入る気も起きない。

「何が？」

雄大は言いながら、大介の方に視線を向けている。

「だってよ、学園祭のすぐ後に中間なんて、まず赤点取れてことじゃねえか」

大介は言う。しかし、雄大は少しかり考える。そして、「うーん」と軽く唸るだけで、別に何を考えているわけではない。ただ考えているように見えるだけ、になってくる。

「さあ？」

雄大は言った。

その「さあ？」の意味が分からないと思うのは、東海林だけではないはずだ。しかし、大介はそれをおかしいとは認識しない。それも、東海林は少しおかしいような、そんな気しかないのは東海林の気のせいだろうか。

「それで、本当に無理だって、絶対」

大介は言った。椅子の方に背を持たれかけ、揺れるバスの中で、声を張り上げる。バスに乗っているのは、何故か東海林たちだけだった。

天野下のホテルと言えど、ホテル群は天野下学園前の駅前にあるわけではない。その少し離れた場所に、ハンスのいるホテルがあるらしい。天野下が、何故こんなにもホテルがあるのか、そんなことは東海林には分からない。

「何が？」

雄大は大介に聞く。その台詞は、さっきまでの大介の台詞を、丸

々なかったことにするようなそんな台詞だということに気付いているのだろうか、雄大は。

東海林は思いながら考える。そして、雄大の方に視線を向ける。

雄大は、何かを考えていそうで、何も考えていないような視線を向ける。

「だから、中間試験」

大介は再びその話題を繰り返す。

「仲直り、か…、何か変な響きだよ」

緑龍は言った。青龍は座りながら、少しばかり目を閉じる。別に何も無い、と言うような雰囲気、青龍は揺れるバスの中で、ただ目をつぶっている。眠くならないのだろうか。

「…、」

しかも何も言わない。

こんな風だと、絶対に眠くなつて行く気がするのは、東海林の気のせいではないはずだ。東海林は思いながら、椅子に座りながらうなだれる。さっきからうなだれてしかない気がするのは、きっと気のせいではない。

ハンスからのメールはこうだ。

『差出人 ハンスさん

添付 なし

件名 Re：ホテルの名前

本文 ホテルグランドセンチュリーの、1050号室だよ。今はそこに泊まつてる。でも、何で？』

それはある意味、普通の反応だともいえる。いきなり『今泊まつてるホテルどこですか？』なんてメールを送ったら、そうなるに決まっているのだ。

それに対しての、東海林の答えはこうだった。

『宛先 ハンスさん

添付 なし

件名 Re：ホテルの名前

本文　ちよつと、ハンスさんに頼みたいことがあるんです。多分ハンスさんにしかできないし、俺はハンスさんに頼みたいんです』  
そう言っておけばいいと思ったのだが、帰ってきた答えも、また変なものだったことにはかわりなかった。

『差出人　ハンスさん

添付　なし

件名　Re：ホテルの名前

本文　いいんだけど、でも今はやめておいた方がいいよ。理由は来れば分かるかもしれないけど、でもとりあえず、今僕らのホテルに来るのはどうかと思う』

その内容が、いまいち東海林には理解できなかった。だからと言って、それで東海林の行動が変わるわけではないのだが。

東海林は、まずハンスに会わなければならぬ。それを東海林は、重々理解している。理科と言うよりは、それはある意味、流されるような、しかし自己決意に近い何かがあった。

羽並から聞いたハンスのことだって、羽並が許してくれなかったら、東海林に提案なんてしてなかっただろうし、そもそも羽並が東海林に助力してくれたことだってそもそもありがたいのだ。あのままでは、確かに東海林は何をすることもせずに、赤龍と、時間とともに広がっていく隔たりを、ただ見つめていくだけだったのかも知れなかった。

しかし、ほんの少しではあるが、打開策に似た光を、東海林は見つけたのだ。

東海林はある意味、期待をしていた。ハンスにも期待はしていたし、様々なものに、東海林は期待していた。

そう言う問題ではなくて、東海林は赤龍に、もしかしたら一番期待していたのかもしれない。そうでなかったら、赤龍に期待をしていなかったら、何もならない。赤龍が、東海林と一緒に暮らしてくれることを、まだ肯定的に受け入れてくれるのなら、東海林はハンスのところに行く価値があった、と言えるだろう。

しかし、もし万が一。

本当に、万に一つの可能性かもしれないそれに、的中したら。もし赤龍が、「いやじゃ」とか「断る」とか言ったら、もう東海林は色々な意味でおしまいかも知れない。東海林はもしかしたら、赤龍と言う物にいろいろな期待をかけすぎていたのかもしれない。本当に今思うが、東海林は、赤龍と言う龍に、自分の未来まで託していたのかもしれない。一生一緒にいてくれて、一生楽しく過ごせるかもしれない、だなんて東海林は思っている。それに、多分これからもその思考は変わらない。

東海林は、バスの中で揺られていた。ただそれだけで、東海林は本当に、何をするわけでもなかった。携帯電話も弄らなかったし、ゲームもしなかった。本を読むわけでもなく、ただ東海林は、バスの席に座っていた。どこまでもそれはバスの座席でしかなくて、それ以外の何物でもなかった。

そもそも、バスに乗っている理由だって、はっきり言って赤龍がないから、という極論に足り着く。

東海林は、小さくため息に近い吐息を吐いた。そして東海林は、そのため息が言い咎められることを、心の中で小さく願った。

ちよつと古風で、変な口癖の付いた、赤いラーメン好きの龍の、言い咎めるような声を、東海林は期待していた。

東海林は思いながら、外の風景を見つめた。どこか野暮ったくって、それでいて、空が曇り始めていた。

天気予報は、外れた。

少しだけ、満足していた。その人物は、心の底から満足していた。今日は部活だった。土曜日に部活がない部活なんて、逆にその人物にとっては、部活でもなんでもなくただの同好会に過ぎないものだった。しかし、吹奏楽部は違う。吹奏楽部はみんなが一丸となっ

て、一つの『音楽』と言う究極の存在に一步、近づくのだ。誰かが先に進み過ぎていたり、なんてことは存在しない。みんなでそろって初めてそれが『一步』になるのだ。

その人物は、少なくともそう考えている。

その人物は、東海林の入っている吹奏楽部の、東海林のは言っているパートであるクラリネットパートのリーダーだった。リーダーなんて名前だけで、殆ど普通の部員と変わらない。ただ少しだけ変わる場所は、みんなを指揮って、練習をさせるということだろうか。そして「どこそこが出来てない」とか「なにになにがずれてる」とか、そう言った簡単なものを言っていく。合奏に備えて、それは音楽を始めるにあたってのスタートラインに近い物になって行く。

「あ、ちよつと待った」

その人物は言うつと、机の上でカチカチとなっているメトロノーム（リズムを正確に刻む、振り子が付いた道具）の針を止める。それを見たクラリネットパートのみんなは、それに合わせてすぐにやめる。そういう時は必ず、何かが出来ていなくて、それを注意する、という合図のようなものなのだ。

「あのさ、」

その人物は言った。みんなは、別にいつも通りのような、そんな表情をしながらパートリーダーの方に視線を向けている。

「気付いた？」

そう、ここは注意を言うべき時。

「ショウジンがいけないことに」

こんなことは、普通この時間には言わない。

しかしその人物は、普通のようにそう言った。ショウジンは、東海林のことだ。愛称なのか、略称なのか、それともなにか、罵倒の言葉なのか。恐らく二番目と三番目はない。

「気付いた」

端に座っている、バセットホーンを持った人物がいた。

「勿論」

「多分」

「そうなんじゃないかとは思ってた」

「……」

みんなそれぞれ、独特な返事をしていく。それがこのクラリネットパートの、唯一のいいところだとその人物は思っている。それ以外は、少しではなくかなり駄目だ。音程も微妙に合わないし、和音と言う和音が、とことんその分だけずれているのだ。みんな気づかないだけで、みんなずれているのだ。つまり、そういうことだった。「でしょ？」

その人物は言った。普通は、この時間に言うべきことは、出来ていないところだ。しかし、今のところ何かが出来ていないということとは無い。ただ少しだけ、ずれているだけだ。それが何なのかは分からないが。

「みんな気づいてた？」

その人物は、クラリネットパートのみんなに聞いた。それを聞いた全員は、頷くか肯うかして、その人物の方に肯定する。

「ショウジン空気薄いから、気付かれてないと思ってたのにー」

その人物は言った。

東海林は、その日部活には来ていなかった。土曜日なんて言う中途半端な日に学校がある、と言うのも少しばかり変なのだが、それ以上に妙なことが、その人物にはあった。

今その人物は、無性にうれしかった。

うれしいというか、楽しいというか、とりあえず、そう言った正の感情であることには間違いない。

その人物は、赤龍を知っていた。赤龍を見ることが出来たし、赤龍と話すこともできたし、赤龍と親しくもあった。少しばかり意外な一面を見せる時もあったが、それでも赤龍とは親しかった。

東海林とも、その人物は親しかった。そもそも、パートリーダーが部員と親しくないわけがないのだ。部員と親しいのは当たり前で、その上で音楽を作って行く。ただそれだけのことだ。

つまり、何事もつながりが大切なのだ。

もうすぐ学園祭で、その準備でもあった。この土曜日は、殆どそんなようなものだった。それに本来は、来ないなんてことはありえなかった。

しかし、その人物は、東海林と赤龍が今、あまりいい雰囲気にはないということを知っていた。だから、少しばかりうれしかったのだ。

東海林が、やっと仲直りを図ろうとしているのだ。これほどうれしいと思えることは無い。

その人物は、小さく、しかし大げさにそう思った。

「何でいないんだろうな、」

眠たそうな視線が、その人物の方に降りかかってきた。

それを聞いたその人物は、「え…あ…」と言葉を詰まらせながら、少しばかり視線を逸らす。龍を見ることが出来るのは、特殊な人物だけだ。

それだけが問題ではなかった。この際、そう言う問題ではなかった。

「えっと、ね、まあいろいろね」

その人物は言った。

そう言うしか、出来なかったともいえる。



そこは、もう真っ暗になっていた。もしかしたら、赤龍がずっと飛んでいるからかもしれないし、もしかしたら、それはずっと赤龍が、考え事をしていたからかもしれない。とりあえず、辺りが真っ暗であることは確かだった。あたりは真っ暗で、海には何も映ってなくて、何が面白いわけでもなくて、逆に赤龍にとっては、その飛行自体、あまりいいものではなかった。いつもなら、飛ぶことは面白いこと、として処理できたかもしれない。しかしそう言う問題でもない。面白い面白くないで判断できないことだって、世の中には沢山ある。この飛行は、面白い面白くないではないし、そもそもこの飛行が面白いだなんて、赤龍自身思っではいなかった。ましてや、鏡となる海が見えなくなつて、さびしくもあつた。

しかし、それはうれしくもあつた。海が見えないということは、鏡状態の自分の姿も、うまく映し出されているわけではないということだ。今の野暮つたい自分を、見なくても済むということだ。

なんとなく、赤龍は嫌だった。自分が海にいることも、自分が今飛んでいることも、自分の近くに東海林がいないことも、そして、自分自身も、赤龍には嫌だった。嫌と言うか、そもそもあまりいいものではなかった。

言葉さえそこにはないし、そんなものは必要なかった。この際、言葉なんていらぬ、野生に帰つてしまおうか、そう考えてみるが、それが無理だと赤龍は思う。赤龍は別に、力が強いわけでも弱いわけでもなかった。龍の中では普通ぐらいの、そのくらいの体力をしていた。

そう言う問題ではなかった。

それは、赤龍が今どうしたいかの問題だった。今赤龍が、本当は自分の中ではどうしたいのか、長々と、延々と赤龍は、自分の中で自問自答を繰り返そうとする。しかし、それはいつも自問で止まり、

答えは返って来ずに、それはまた自問になる。そして、答え何て物はどこまで行っても見えてこない。そんなものが存在するのも怪しいし、そもそも、赤龍が探しているのが本当に答えなのか、と言う面でも、赤龍は自分自身を疑っていた。

どうしたいか、と言うよりも、鏡が見えなかった。

それどころか、自分の中ではよりいっそう、色々な物が見えてきた気がして、赤龍には嫌だった。赤龍の背中には、今なにもいない海には真っ暗な物しか映っていないし、昼間のように、魚が泳いでいるところを見ることも出来ない。

ため息をする。はあ…。

はつきり言つて、自分でもそんなものはしたくはなかった。しかし、ため息をしていないとやってられない、と言う気持ちで、赤龍にはよく分かった。今は、嫌と言うほどよく分かる。分かってしまふ。

東海林は、こんな気持ちでいつもため息をしていたのだ。

そう分かる、赤龍が微妙に苦しかった。ため息は赤龍の周りに取り巻いて、いつもの圧迫感に似た何かに代わる。赤龍は少しばかり視線を細めると、海の方に視線を向ける。どうせ前には何も無い。赤龍には分かっている。

東海林は、一体何をしているのじゃ。

考えながら、少しばかり嫌になってくる。よく見ると、海にうつすらと、赤龍の影が映し出されている。海は忠実に、赤龍の影だけを映し出している。それは、海がまだ、鏡としての機能を果たしている、と言うことに他ならない。

それはよく分かっているし、赤龍だって、急に海が鏡の様ではなくなつたとか、海が急に光を反射しなくなつたとか、そう言うことではないということが分かつていた。しかし赤龍は、ある意味その光景に、驚いたとしか言いようがなかった。

東海林の寮からでは見えなかった、たくさんの『星』と呼ばれる光り輝く粒のようなものが、海に、忠実に映し出されていたのだ。

色とりどりで、たくさん色がそこにはある。赤、青、黄色、よく見ると、それぞれ色が全く違って、ピンク色にも見える物もあったり、中には、真っ白に光り輝いているように見える星もあった。それは、いつも寮から見えている星とはまるで違って、そこにあるのは、恍惚に似た何かだった。

それが、少しだけ苦しい気もしなくなかった。

赤龍の所にだけ、その『星』はなかった。赤龍の所にだけ、その光は届いてきていなかった。そこにあるのは、どこまでも影だけだった。

あたりまえな話だ。

赤龍が、その星の光を遮っているのだから、海に映っている赤龍の影に、そんなものは映るはずがないのだ。光は直進する。何も無かったら曲がったりなんだりはしない。そして、それを遮っているのは赤龍だった。

赤龍は、なんとなく野暮ったく感じた。

しかし、赤龍にとって、それはどこか仕方のないような、そんな気分にもなってしまった。自分には星がない。自分には影しかない。今の自分に、星のような輝きは無くて、それはまるで、陰でしかなかった。

赤龍は息をのんだ。

もう、鼻が馬鹿になっていた。数時間、海の上を飛んでいれば、海の臭いなんてものは気にならなくなつて、もう赤龍にとって、無さも同然の感覚でしかなかった。それはいつものことで、慣れは、生き物には必須の物だった。

そこには、何もないような感覚しかなかった。

赤龍にとって、それは何もないというよりは、穴に近かった。真っ暗で、深くて、しかも寒い風が、そこから吹き付けてくるような、そんな穴のような感覚だった。そこには何もないし、そこには光もなかった。それは、赤龍が見た限りでは、影に似た穴だった。海にも、それと似たようなものが、確かに映し出されていた。誰かが赤

龍の背中から、星と一緒に影を見つめる姿を、赤龍は目を逸らして  
みることが出来なかった。

赤龍は、目をつぶった。翼の羽ばたきが、さっきよりもペースが  
落ちていた。それに、赤龍はどこか疲れていた。ずっと飛び続けれ  
ば、疲れるに決まっている。明日はきつと、翼の筋肉痛だ。赤龍は  
覚悟する。

でもきつと赤龍は飛び続けるかもしれない。赤龍は、新しい場所  
が見つかるか、それとも、自分が死ぬまですつと飛び続けるかもし  
れない、と考えたのだ。そこには何もなくて、ただあるのは、星の  
光と、それから穴のような影だけだった。

赤龍は、小さく深呼吸をした。

そして、その星が消えていき、段々と、明るい太陽が昇ってきた  
ことを、赤龍は理解していた。つまり、赤龍は飛び続けているとい  
うことだ。もう地球をきつと、何週もしている。それほどまでに赤  
龍は、様々なところに飛んで行っていた。

そこまで飛んでいるにもかかわらず、まだ自分の居場所が見つか  
っていない。

赤龍の居場所が見つからなければ、死ぬまで飛び続けるまでじゃ。  
赤龍は、妙な意地を張っていた。

それは赤龍にとって、楽しいことではなかったし、うれしいこと  
でもなかったし、辛いことでもなかった。

今となってはの話だった。

## 青いバスーン

東海林がハンスの部屋を訪れる理由は、簡単だった。赤龍とコンタクトを取るためだ。それ以外は、東海林に目的はない。目的は、ただ赤龍とコンタクトを取ること。

しかし、そこには妙なものがあつた。

妙なものと言うよりは、何か、見かけないもの。しかし、どこかで見たことがあるような気もしなくもないし、はっきり言って、それが正確に何なのかなんてことは、東海林には分からなかった。

しかし、少なくともただ事ではない、と言うことが、東海林にも見て取れた。

そこには、椅子にガムテープでがんじがらめにされた、やつれた少女のような、そんな風貌の人物が座っていた。制服は、ガムテープでがんじがらめにされていて、どこの学校のかはよく分からない。「ちよつと、訳ありでね」

ハンスが言った。

東海林たちはテーブルの椅子に座っていた。テーブルの上には、温かいソーサーと紅茶が入っているカップが置いてある。ハンスはそれを、慣れた風に飲んでいる。東海林には、少しばかり紅茶の味の良し悪しが分からない。

ハンスはどこか、東海林たちの顔色を窺うような、そんな視線で見つめていた。青龍と雄大は、それを見ても何も表情が変わらなかったが、流石に東海林と大介と緑龍は、それを見て目を見開くしかなかった。

「…、何が、あつたんですか…？」

東海林が、ハンスに口を開いた。

それを聞いたハンスは、「まあね」とよく分からない返事をする。ハンスの隣には、青い狼が座っている。狼と言うよりかは、人狼と言った方がしっくりくる、そんな姿をした生き物だった。

「雄大は、驚いてないみたい」

その狼は言った。

それを聞いた雄大は、「ん？」とその狼の方に言葉を返す。

「だって、こういうの見慣れてるもん」

一瞬、東海林は雄大の方に視線を向ける。雄大は、何でもないと  
いった風な、少しばかり笑ったような表情で、その狼の方に視線を  
向けていた。

東海林は補足した。

「：気にしないでいいぞライカン、雄大の言うことなんて：」

東海林は言った。

それを聞いたライカンは、東海林の方に視線を向ける。尻尾が、  
椅子の下で少し、揺れているのが分かる。

「そうかな」

ライカンは言った。

ライカンは、東海林たちがゴールデンウィークに、孤島へ行つた  
とき知り合った人狼だった。名前がないらしく、誰かに『ライカン』  
と言う名前を付けてもらったとのことだが、詳しいことは東海林も  
知らない。

「まあ、君たちに隠すことは無いかもしれないね」

ハンスは言った。

それを聞いた東海林は、小さく息をのんだ。

その時だった。ドアが、ノックされたのだ。

コンコンッ

乾いた清潔な音が、ホテルのリビングに響き渡る。そして、リビ  
ングのドアが開けられると、廊下から、ケーキの乗ったワゴンを押  
した、ハンスの知人の春香が入ってきた。東海林たちのテーブルの  
近づく、ケーキを並べていく。

「いつもありがとう」

ハンスは、自然な笑みで春香に言った。春香は、どこか何を言っ  
ていいのか分からなさそうに、はつきりと「いつもの事だからです」

と返す。少しばかり、ハンスは微笑みを増させる。「それもそうだね」とハンスは言う。

春香がワゴンを押して、廊下に出ようとした、その時だった。

「あ、そうだ」

ハンスは言う、「春香、」と引き留める。

聞いた春香は、ワゴンから手を離し、踵を返す。「何ですか？」と春香は、どこか無機質にハンスに聞く。

「ユーカの調子は？」

ハンスは聞いた。

それを聞いた東海林は、「え、ユーカどうしたんですか？」とハンスに聞く。

それを答えるかのように、春香がきちんと、分かるように説明した。

「まだ熱は七度以上ありますし、席とくしゃみと発汗が絶えませんあと数日、待たれた方がいいと思われます」

そうか、と東海林は思った。

ユーカは、ピンク色の神をした少女で、ハンスと一緒に暮らしている少女のことだ。ハンスはユーカのことをとても慕っていて、しかもハンスがユーカに対して、敬語を使うような相手だ。それほどの相手と言うことになる、のだが、東海林にはそこまで込み入ったことは分らない。

そんなユーカが今、風邪なのだ。

東海林はそれを聞いていて分かった。「なるほど、」と小さく東海林は言った。

「それじゃあ、なるべく水分補給と、栄養補給を絶やさずに、お願いね？必要なら、僕も行くから」

ハンスが言った。

それを聞いた春香は、頭を横に一度ゆっくり振った。

「畔の方を、見ていてください。確かにガムテープは術でほどけないようにしてありますけど、でも、物には劣化がありますし」

聞いた東海林は、この椅子にがんじがらめになっている人物の名前を、初めて知ることが出来た。そうか、畔っていうのか。

それを聞いた大介は、「それって、まさか……」と小さく言う。

聞いたハンスは、大介の方に視線を向ける。東海林は、驚いた風に大介へと視線を向ける。

「火蔵、ですか？」

訛りがそんなにきつくない、そんな口調だった。大介にしては珍しいことだった。

聞いたハンスは、「うん」と大介から目を逸らさない。「どうして知ってるの？」と、ハンスは聞いてくる。

それを聞いた大介は、「だって、」とハンスの方に言葉を進めていく。

「火蔵はうちの学校の生徒ですから」

聞いたハンスも、驚いていた。

はつきり言って、東海林も驚いていた。

驚かないのは、青龍と雄大と春香とライカンくらいなものだった。春香はそれを聞いたにもかかわらず、「それでは」と小さく言う一例をして、それから廊下の方へとワゴンを押して、リビングからいなくなる。残りは雄大と大介とライカンだけだ。

「そうだったのか?!」

東海林は、驚いた口調で大介に聞く。聞いた大介は、少しばかり呆れた風な視線を東海林に向ける。

「お前知らなかったのか？　と言うか、クラスの奴の名前くらい知っておけよ」

大介は言った。

東海林は聞くと、少しばかり思い出してみる。火蔵、畔、どこかで聞いたことがあるようなないような、と言う程度の認識はあった。しかし、それ以上ではない。

東海林には、そんなに重要な記憶の中に、その名前がないということだ。はつきり言って、何でもいいと思っていたし、誰がどう入



れ替わっても、女子であるなら、もしかしたら東海林は、全く気付かないかもしれない。勿論、香奈がいなくなったらすぐに気付くのも事実だと思うが。

しかし、その名前には、あまり覚えがなかった。ただ、香奈が数回口にした程度のような、そんな気がするのは確かだ。

しかし、やはりそれ以上でもない。

畔は今、白目を剥いてどこか遠くの方を、やつれたような表情で見つめていた。どうしてなのかは、東海林には想像もできない。

「香奈君の話を聞いてるとね、何だか、襲われたらしいんだ、畔に」  
ハンスは、東海林に言った。

東海林は、畔の方から目を離すことが出来なかった。まるで、生きるというそのものがそこから抜け出てしまったような、老婆にも似た、しかしそれ以上にひどい何かだった。そこにあったのは。

「おそ…、われた？」

東海林は徐々に、ハンスの方へと視線を向ける。ハンスはどこか、いつも以上に真剣な、そんな表情で東海林の方に向いている。東海林は、少しばかり言葉を失う。

「うん、どうやら、帰りの途中で襲われたらしくてね。それで、僕のメールアドレスを知ってたから、きつとそこにかければ、分かるかもしれないと思ったんだろうね。僕なら、龍を見ることもできるし、それに、どういう状況だったかっていうのを説明して、一番理解できると思うてくれたんだろうね。頼られてるのは分らないんだけど、でも悪い気はしなかったよ。でも、その説明によると、なんだけど」

ハンスが一度言葉を区切って、お茶を小さく口の中へ啜った。東海林は、それにならって紅茶を口の中を含む。味があまりしないように感じるのは、東海林の気のせいではないと思う。

「せっかくだから、ケーキを食べてよ。春香が作ってくれたんだし」  
それを聞いた東海林は、「あ、はい」どこか張りつめたような、そんな口調で、緊張気味に言った。空気そのものが張りつめていて、

緊張していた。

「いただきます…」

言いながら、大介が自分の分のケーキを、テーブルの真ん中から寄せてくる。ケーキは、なんとなく甘ったるすぎて、とても、この空気とは合わない味をしていた。それは間違いなかった。

「あ、いただきます」

焦りながら、緑龍も小さく言って、大介と同じようにケーキを自分の方に寄せる。そして、それをおぼつかない手つきで、切って口の中へと入れていく。

「わーい」

とか言うのは、この場では雄大しかいなかった。

雄大は言うのと、楽しそうにケーキをすぐに自分の方に寄せてくる。それをフォークで切って食べる。

青龍は、さつきから目をつぶったままで、何をしようとしもない。「どうだい？」

ハンスが東海林たちに聞いた。

聞かれても、東海林には答えようがなかった。この空気の中で食べても、恐らくおいしく感じられることはきつとない。そんな気が、東海林にもしていた。

「おいしいですとつても」

雄大は、笑いながらハンスに言った。どこか雄大は違う。いつも思うが、それはあながち間違いでもない気がする。

「そうかい？うれしいね」

ハンスは言った。何で、ハンスが作ったわけでもないケーキを、美味しいと言われて喜ぶのか、それは東海林には分からなかった。そんな詳しい話は分からなかった。

「それで、さつきに続きなんだけどね」

ハンスは言う。

東海林のケーキを食べる手が、ぴたりと止まる。ハンスの方に、真剣な視線を向ける。

「その話によると、畔君はどうやら、スタンガン突きつけて来たらしいね。それで、何でも香奈君に『殺す』なんて言うもんだから、それで防衛として、黄龍を使ったっていうわけだね」

ハンスは言った。

一瞬、

東海林の口の中に、何かきつく酸っぱいものが現れたような、そんな気分が駆られた。それが一体何なのかはよく分らない。しかし、東海林の口の中ではやけに野暮ったく、後味が悪い酸味が広がっていた。

「…、香奈さんが、ですか…？」

東海林は、少しばかり喉を乾かしていた。

大介は、東海林の方に視線を向ける。少しばかり心配そうな、そんな視線であることは間違いなかった。

「それは、彼女の話だけだと何とも言えないんだけどね、でも、それに似たようなことは言っていたよ」

ハンスは答えた。

東海林はそれを聞くと、少しばかり視線を沈めた。そして、どこか悲しいような、そんな気分になってくる。

「それで、今その詳しい内容を、畔君から引き出そうとしてるんだけどね。でも、うまくいかないんだよね」

ハンスが言った。「やっぱり、記憶的なものは、僕らにはちょっと無理かもしれないね…」

東海林は、それに関して何を言うことも出来ない。

「あーッ」

雄大が、急に声を張った。

聞いた東海林たちは、一気に雄大の方に視線を向ける。紅茶を零したとか、ケーキを落としたとか、東海林はてっきりそういう物だと思っていた。しかし、テーブルの上には、雄大の紅茶らしきものと、雄大のケーキらしきものが、雄大の目の前にあった。

「記憶うー」

何を言っているのか、はっきり言って東海林には分からなかった。青龍は、面倒くさそうに、雄大の方へと視線を向けた。

「青龍ならできるかも知れないな」

雄大は、何かを仄めかすような、そんな口調で東海林たちに言った。東海林たちの視線が見開かれ、一気に視線を浴びていた。

ハンスが言った。

「青龍君、が？」

聞いた青龍は、少しばかり面倒くさそうに目を細めた。それ以外にすることもなかったと言えば、そう言うことになるかもしれない。うん。青龍なら、相手の記憶くらいカッパドキアかもね」

言っている意味が分からない。そもそも、知っている単語を並べればいいというわけでもない。東海林は思うが、この際そんな事関係ない。

「…、」

青龍は、面倒くさそうな視線を、ハンスの方に向ける。

「できる、のかい？」

ハンスは言った。

聞いた青龍は、少しばかり目を閉じて、小さく息を吸った。「…、少しなら」と、小さく呟くように青龍は言った。

ハンスはそれを聞くと、「そうかい…？なら頼むよ」と青龍に言う。

雄大は分かっている。だから青龍を推薦したのだ。

分かっているから推薦したのだ。

青龍は、面倒くさそうに立ち上がると、畔の方に近づく。尻尾はだらりと垂れていて、どこか抑揚がない動きだった。上下もしないし、左右も動かない。ただきつちりとした、ただの運動のように、青龍の動きは規則正しかった。

青龍は畔を見ると、少しばかり目を細める。そしてハンスの方に向ける。「…、」無言で、何かをハンスに言う。それを見たハンスは、少しばかり視線を逸らした。

青龍は畔の方に視線を向ける。そして、ガムテープの間から見えている指を、青龍はじつと見つめた。白っぽくて、華奢な細い指だった。それだけだったらそうだったが、それはあまりにも白くて、生きている感覚がそこにはなかった。

青龍はその指に鼻先を近づける。一瞬、東海林は青龍が、何をしようとしているのかわからなかった。あの体勢と言ったら、手にキスをする程度しか思いつかない。そもそも、東海林の位置からでは、青龍の口元がどんなふうになっているか、死角になっていて見えていなかった。

青龍は、その華奢な白い指を、小さく、しかし牙が食い込むほどには噛みついた。

小さく、キシヤツ、という音が、青龍の耳には聞こえてくる。そしてその音は、青龍の中に、確実に流れ込んでいく畔の血と共に、入ってくる。

やはり、東海林たちには何をしているかは分からなかったし、それで何が分かるのかすら、東海林には分からなかった。しかし、それが必要なのなら必要なのだ。東海林は考えて、別に青龍が何をしているかを見ようとはしなかった。

はつきりした。

青龍は、牙から華奢な白く細い指を離した。やはり、指からは小さく、嫌な音がする。青龍は、はつきりしている。非常に、これ以上ないくらいに明白になっている。

これがすべてなのなら、と青龍は思う。

「…、分かった」

青龍は言いながら、立ち上がる。そして東海林たちの方に視線を向ける。別に口から何かを垂らしているわけではない。

「…よかったよ」

ハンスは、どこかあまりうれしくなさそうな、そんな雰囲気です青龍に言った。青龍は、真っ直ぐハンスを見つめているだけだ。

「本当か…！」

大介は、どこか驚いた風に、青龍の方に言った。

聞いた青龍は、それでもハンスの方から視線を離さない。雄大は、別にどうでもよさそうな視線を、どこか別の方に向けているだけだった。

「それで？」

ライカンが、青龍に聞いた。

それを聞いた青龍は、ライカンの方に視線を向ける。ライカンは、力のこもっていない声で、しかしはつきりした口調で、青龍に問いただした。

「どんなことが、分かったの？」

分かったには分かった。しかし、これは危ない。それほどまでに危ないということは理解しているつもりだった。

青龍には、それがそれ以上のことだとも思えなかった。それが、大変なことだということ以外は、特にあまり、何かを思っているわけでもなかった。

しかし、その『大変』なことだと思う中に、どこか『感心』がその中にはあった。その中にある妙な感心が、青龍の中の何かを、本当に少しではあるが、抑揚をつけさせた。それが、あながち嘘でもない。

「……」

急いだ方がいいかもしれない。

青龍は言っと、沈黙を守るだけだった。

結局、一度寮で態勢を立て直すことにした。そうでないと、その『タンクラス（TANCLAS）』とか言うマフィアの団体に、色々な意味で木端微塵にされそうで怖かった。黄龍は強い。人間なんかよりもずっと強い。それは分かっているのだが、それでも、備えなければ気が済まないのは、それは香奈が人間だからなのかもしれない。

「きつとみんな、合奏してるのね、今頃」

香奈は言った。

吹奏楽部の今日の練習メニューが、合奏だとは知らない。もしかしたらパート練習かも知れないし、セクション練習かも知れない。そして、香奈の思った通り、もしかしたら合奏かも知れない。香奈は、どこかさびしいような、そんな感覚に似たものを持っていた。それが何なのかなんてことは、香奈にはよく分からなかった。

「そうかもしれないわね」

黄龍は言った。

空腹感さえなかった。そこに、安らぎなんてものさえなかった。何処まで行ってもあわただしい空気が、ただひたすら香奈の周りを取り巻いて、香奈をあわただしい気持ちにさせていく。そして、香奈をどうしても、妙な気分にならせてしまう。どこか腑に落ちない、破綻したような、しかし、それ以上の物が宙ぶらりんな、そんな妙な感覚。

「みんな、私がいなくても大丈夫かしら」

香奈は、小さく呟いた。

大丈夫ならそれでもいい。大丈夫でないのなら、それでも香奈は、なんとなく許せるような、そんな気分になってくる。

残念ながらこれは現実で、どこまでも夢ではない。

「……」

黄龍は、その香奈の問いに答えることが出来なかった。どっちにしても、あまりいい答えにはならないことを、黄龍は理解していたからだ。黄龍は香奈に、何を返すこともできなかった。

「きつとみんな、大丈夫よね」

香奈は、強がりだった。

そうでなくては、こんな台詞を今、言えるわけがないのだ。そんな台詞は、香奈が強がりだから、言えるようなものだった。

「……そうかもしれないわね」

空気が、震えなかった。

気分が悪かった。そもそも、気分がこの状況でいいという方が、

色々な意味でおかしいと思うのは、きっと黄龍だけではない。黄龍は、どこか気持ちが悪くなりながら、空気がおかしなことになっているような、そんな気がしてならなかった。

「私ね、少しだけほっとしてるの」

香奈が言った。

意味が分からなかった。

聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこまでも別の方向を向いている。どこまでも、黄龍でない方向に視線を向けている。

「私がいなくても、大丈夫なんだなって思って、ちょっとよかった気がするのよ」

香奈は言う。黄龍は、少しだけどこか、張りつめたような感覚に苛まれる。香奈は、どこまでも開放的な、そんな表情を、黄龍とは別の方向に、そして黄龍とは真反対に、向けていた。それがどこかなんてことは、香奈自身にもよく分からなかった。

「…、」

黄龍は、香奈を見て沈黙する。息が詰まるのは、きっと空気が悪いからだ。黄龍は考える。

「きつと、みんなうまく行けるわよね、中学のみんな」

香奈は言った。

吹奏楽部は、中学生と高校生に分かれる時と、合わせる時がある。今日は合わせる日だが、香奈の心の中は、どこか張りつめたような、そんな雰囲気とは無縁な感情を、どこまでも心の中に孕ませていた。

「…、」

黄龍は、黙っていた。

いい言葉が、見つからなかった。いい言葉が見つからなくて、どうでもいいような、そんな考えだけが、黄龍の中を走って、直に低徊し始める。

「…香奈が、そう思うのなら、きつと…」

黄龍は、言葉を詰まらせた。



それ以上、言えなかったのだ。言ったら、それが本当になりそうだから、黄龍は言わなかったのだ。

それが本当に、香奈にとっていいことなのか。

黄龍には分からなかったし、きつとこの後も分からない。

もし香奈が、黄龍が今想像している、一番の奥底の、真っ暗闇の道へと突き進んでいるんだとしたら、の話ではあるが。

「そうよね」

香奈は笑う。無理な笑いでもなければ、どことなく自然味を欠いている笑み。

黄龍は、香奈にとっての何なのか。はつきり言って、黄龍自身には分からなかったし、きつとこれからも分からないと思う。

そこには、空気がいいなんて存在しなくて、ただ緊張感と、それと似た安堵が、あちらこちらに漂っているだけだった。目に見えないのは、いつもの空気とほとんど同じで、見た目は何も変わらなかった。

意味が分からないし、青龍が何をやっているのかもわからなかった。そして、青龍が何をやったのか、そして青龍が言っている意味が、東海林たちには、いまいち理解が出来なかった。

「……？」

東海林は、少しばかり首をかしげた。

ハンスは、少しばかり青龍の方に視線を向ける。青龍はどこまでも、真っ直ぐしか向いていない。はつきりとどこかを向いているわけではない。ただ真っ直ぐを見ているだけなのだ。

「それは、どういうことだい？」

ハンスは青龍に聞いた。

聞いた青龍は、ハンスの方に視線を向ける。そして、口を開く。

「……畏だ」

青龍は言った。

その意味も、東海林にはよく分からなかった。東海林には、それ

がどう言ったものなのか、と言うことも、想像が出来なかった。想像の範疇を、とうに超えていた。

「どんな？」

大介が青龍に尋ねる。少しばかり、不安に似たものが、大介の中にこみ上げてくる。

青龍は、「…様々な行動パターンが、読みつくされてる。だから、何をしても危ない」警告気味に、東海林たちに言った。

「それって、どういうこと？」

ライカンが、口をはさんだ。

「…」

一回青龍は沈黙し、少しばかり目を閉じる。

東海林は、畔の指のあたりを見る。何かあるかと見て、少しばかり目を見開く。畔の華奢な、白くて細い指から、若干血が垂れている。

「…これは、香奈とマフィアの争い。…、マフィアの名前、畔の雇い主の団体名は『タンクラス（TANCLAS）』、それは様々な団体と対立するもので、その団体の中でも、色々とはバツがある。その中の一派が、畔を雇って、他のリーダー格を潰そうとした」

聞いた大介は、「…え」と声を発する。

東海林には、いまいちよく分からない。

ハンスたちは、何かを理解できたような、そんな表情で青龍の方に目を細める。雄大は、何も気にせずにケーキを食べている。

「それって、もしかして…」

大介は言った。

大介の頭の中で、様々な物事が繋がって行く。

香奈 畔に襲われる：畔 『タンクラス（TANCLAS）』とか言うマフィアに雇われている：『タンクラス（TANCLAS）』とたくさんの派閥がある お互い対立しているマフィア：香奈 畔に襲われている 『タンクラス（TANCLAS）』に目をつけられている 派閥争いに巻き込まれている？

思考が、一本に繋がりがける。まだ仮説の話だった。しかし、それはあまりにも、この状況に融通の利く仮説だった。

青龍は、大介の方に一度、頷いた。

東海林には、何の事かさっぱりわからない。頭の中で、ごちゃごちゃとしたものが、伸びたり縮んだりしているだけだ。

「それって、どういうことだ？つまり」

東海林は青龍に聞いた。

それを聞いた青龍は、話すのが面倒くさそうな表情をする。その分かりに、ハンスが東海林に説明する。

「つまり、香奈君は、少なくとも」

『タンクラス（TANCLAS）』の派閥争いに関係があるってことだよ。

ハンスは、はっきりと言った。

はつきりと、東海林には分からなかった。それが一体何なのか、ではない。何故か、でもない。意味が分からないわけでもない。ただ、それがどこまで行っても、東海林にとって夢と似たような、そんなものにしか見えなかっただけだ。

「…へ？」

東海林は言った。

青龍は、面倒くさそうな表情をしながら、雄大の座っている席の近くに戻って行く。そして、青龍は目をつぶって、辺りの音を聞いているのか、それとも考えを巡らすのか、そんなような雰囲気、東海林たちに醸し出す。

「香奈さんが…、マフィア…？」

東海林には、分からなかった。

ハンスはそれを考えると、少しばかり顔をしかめる。青龍の方に一瞬、視線を向ける。

「青龍君、もしかして香奈君のこれからの行動って…」  
ある思い当たりがあった。

今朝話していた、昨晚襲われたことについて。そして、それにつ

いて深く追求しなかったことについて。

ハンスの中で、その二つが引つかかる。

「…、」

楽多祖ヶ谷の、廃工場。

青龍は呟いた。

東海林には、いまい何が言いたいのかわからない。それに、その前に分らないことがある。

「香奈さんが、マフィア…？あぁ…」

東海林は言いながら、頭の中でぐちゃぐちゃとなりかけたものを整理しようとスル。

香奈 青龍の言うことが正しければマフィアなんだけど？

それって本当に本当？　と言うか、何だよ『タンクラス（TANCLAS）』って聞いたことないぞそんなマフィア　そもそもテレビでマフィアのことをそんなに聞かない　廃工場？　楽多祖ヶ谷の廃工場　女子寮？

もう訳がわからない。

ハンスは、東海林の方に視線を向ける。

「どうやら、僕たちはまた、やらなければならないことが出来たみたいだ」

ハンスは、どこか冷静そうに、しかしどこか焦った雰囲気、東海林の方に向けていった。東海林に、冷静な気持ちと、焦った雰囲気が移る。

「香奈君は今、非常に危ない地点にいる。『タンクラス（TANCLAS）』に殺されるか殺されないかっていうね。そして、それを彼女は、一人で抱え込もうとしてる。でも、『タンクラス（TANCLAS）』を一人では相手に出来ない。そんなことをしても、命を無駄に落とすだけだ。いくら黄龍君がいてもね」

ハンスは言った。

それが意味することは、東海林には明白だった。

聞いた東海林は、ハンスの方に視線を向ける。ハンスは、真面目

な視線しか東海林に送らない。

「もしかして、それって、香奈さんは『タンクラス（TANCLAS）』とは直接、関係がないってことですか？」

東海林はハンスに聞いた。聞かれても、「それは、ちょっとわからない」とハンスは答える。当たり前だ。

東海林は「…」、「少しばかり口を閉ざす。

「でも、」

ハンスは言う。

「香奈君は、一人で『タンクラス（TANCLAS）』に太刀打ちしようとしてる。それを、僕らは手助けしなくてはならない、もし、東海林君がそれを望んでるんならね」

一瞬、訳が分からなくなる。

香奈 香奈 香奈 どこまで行っても香奈

マフィア？知らないそんな事

香奈は、いつも香奈なんだ。

東海林は、心の中でハンスが言いたいことを理解した。それは、もう東海林がとくに覚えていたことだった。しかし、応用が利かなかった。

応用できた。

「俺は行きます」

東海林は、ハンスの方に視線を向ける。

ハンスはそれを聞くと、「東海林君らしいね」と少し笑う。今日は、たくさんの人に笑われた気がするの、きっと気のせいではない。

少しばかり微笑みながら、ハンスは大介の方に視線を向ける。視界には、緑龍もすっかり、捕えられている。

「大介君たちは？」

ハンスは尋ねる。

「勿論、同行させてもらいます」と大介は言う。

「僕もです」緑龍は、大介に続いて言う。

「頼もしいね」とハンスは、さつきよりも微笑むような、そんな視線で大介を見つめる。そして、ライカンの方に視線を向ける。「ライカンは行く？」ハンスは尋ねる。

「…、」

ライカンは何も答えずに、雄大の方に視線を向ける。察したハンスは、雄大の方に視線を向ける。「行く？」とハンスは、雄大に聞く。

「うーん、どうしよっか」

雄大は、目をつぶっている青龍に言った。青龍は聞くと、少しばかり目を開いて、雄大の方に視線を向ける。「…畔に近づいてみる」訳の分からない答えが返ってくる。

聞いた雄大は、一瞬変な顔をする。きっと誰だってそう思う。意味が分からないし、そもそも、答えになってない。「それということ？」流石の雄大も、よく分かっていない雰囲気だった。

しかし、青龍の目はまっすぐとしている。どこか本気なその眼に、雄大は逆らおうとはしない。

「分かったよ」

雄大は言っと、立ち上がって、畔の方に歩み寄る。

胸元が、少しばかり青く輝く。

東海林たちは、少しばかり目を見張る。何だ…？と心の中で思い始める。ライカンは、なんとなく納得するような、そんな気分になる。

「あれ」

雄大は言いながら、首に吊っているあの青い結晶を取り出す。ネツクレスのような感覚で、いつも雄大は持ち歩いているようだった。学校は、装飾品は認めていない。だから、きつとシャツの中に隠しているんだろう。東海林は思う。

八面体の、あの綺麗な結晶が、畔に近づくとびに光を増す。あの結晶は、確か学校の中庭の、あの円筒状の奴の地下へ行くための鍵のようなものだったはずだ。

それが何で、今光ってるんだ？

東海林は思う。

雄大は、畔の方に、その結晶を持ちながら近づいていく。光は、確実に、しかし不規則に増していく。光が、雄大の手の中からあふれ出しそうなほど、光っている。

畔のポケットが、青く輝いている。

「……？」

ハンスは、それをじっと見つめている。東海林たちは、あっけにとられて見つめている。

雄大は、畔のポケットに結晶を近づける。畔のポケットが、青く光り輝いていく。そして、その光は雄大の手に持っている結晶と、調和しながら混ざりあう。

瞬間、

光輝く。青い閃光が辺りを包む。音が出ないのが不思議なくらい、それは光だけだった。

一瞬にして光は、リビング全体を満たす。あたりが一瞬にして青の世界になり、それ以外何もなくなってしまったような、そんな強すぎる光が、そこにはある。

どこまでも、何もかもを飲み込みそうな、蒼。

「なッ！」

東海林は目を手で覆う。

「うわッ」「わッ」言いながら、大介と緑龍も目をつぶる。

「……」

青龍は、それをじっと見つめている。

ほんの一瞬の出来事で、その光は一気におさまる。青い光は一瞬にして消え去り、しかし代わりに、雄大の手の中で光っている結晶が、さつきよりも光り輝いていた。それもどこまでも、何もかもを飲み込みそうな、そんな蒼だった。

畔のポケットは、もう青く光っていない。

「……？」

雄大も、呆然としているだけだった。

「…何があつたの？」

ライカンも、一人、不思議そうに呟いた。

「…、」

青龍は、何かを知っている風に、ただ沈黙を守っていた。視線は、雄大の方を食い入るように見つめている。

手の中の、結晶を見つめている。

「何がどうなつたの？」

雄大は、青龍に呟いた。

それを聞いた東海林たちは、一気に青龍の方へと視線を向ける。

青龍は、さっきと変わらない視線で、雄大の手の中を見つめる。

「…、雄大に戦力を与えただけ」

青龍は言った。

はつきり言つて、それだけだと意味が分からない。

東海林は思うと、青龍に「それってどういうことだよ」「尋ねるように投げ捨てる。」

「…、」

青龍は、東海林の声なんて全く気にしていない風に、雄大に言った。

「…、バスーンを、想像してみて」

それは、明らかに雄大に向けられた言葉だった。

それを聞いた雄大は、少しばかり悩むような、そんな声を発する。

「うーん…」言うが、雄大は手に持っている結晶を見る。最初は薄紅色だったのに、今は青く輝いている。意味が分からない。

それ以外に、やることはない。

雄大は思うと、バスーンを想像する。雄大がバスーンを想像することなんて簡単で、形だけでなく、手触りまで、自分の中で再現される。細部が、細かくそこに現れていく。

結晶が、まとまった光を纏う。それは甲高い音を発しながら、光を形成していく。その形は、確かにバスーンの形に近い。



「あ、」

雄大は呟いた。

さっきまで結晶の紐を持っていた手が、今は、青いバースーンのスラップに代わっている。結晶ではなくて、今雄大の手の中にあるのは、明らかにバースーンだった。

「バースーン」

雄大は言った。

青龍は、当たり前な風にそれを見つめていた。

はつきり言つて、それはものすごく困る。青龍にとって当たり前でも、こっちにとっては当たり前ではない。

「どうなってるんだ？」

大介が、青龍の方に視線を向ける。

ライカンが、代わりに答える。

「さっきの、畔のスタンガン」

聞いた東海林たちは、ライカンの方に視線を向ける。ライカンは、別にいつもと変わらないような視線で、どこか遠くを見つめている。「あれが、もともと雄大の持つてる結晶の一部だった。それが元に戻っただけ」

つまり、こういうことだ。

畔が持っているスタンガンは、もともとあの結晶の一部だった。

あの結晶の一部が、今雄大の結晶の中に戻って行って、そして、雄大の考えで形が変えられるおまけがついてきた。

「意味が分かるような、分からないような…」

東海林は呟いた。

雄大は、そのバースーンを啜えてみる。そして、その光の中に、息を吹き込んでいく。勿論バースーンの指使いで。

ボー

まるやかで、どこまでもまるやかで、それでいて滑らかな音質が、東海林たちの耳に響く。余韻を残して、それは確実なまとまりを残す。

「おー、」

緑龍が、感心気味に言った。

青龍はその音を聞くと、少しばかり吐息を吐いて、小さく息を整える。そして、雄大の方に視線を向けた。

「…、それで、雄大が願えば、音魔が使える」

聞いたハンスは、目を見開く。

「音魔が、願えば使える…？」

ハンスは聞いた。

青龍は、ハンスの方に細めを向ける。そして、面倒くさく、あまり肯定したくはないが、青龍は頷いた。

ハンスは、「わお…」と小さく呟く。

「まーいいやー」

雄大は言つと、そのバスーンを口から離す。バスーンは光を纏い、さっきのままの、あの結晶に戻る。どう考えてもバスーンより小さく、どう考えても、さっきのバスーンを形成していた全てだとは思えないほど、その結晶は小さかった。

それは徐々に光を失い、そして消える。結晶は青のままで、雄大の手の中で、ネックレスとして存在している。

「これで、戦力が増えたってこと？」

ライカンは、小さく呟いた。

東海林は、どこか腑に落ちなかった。さっきの出来事と言い、そもそも腑に落ちないことが多すぎるような、そんな気がするのだ。

少しばかりハンスは目を閉じる。顔をしかめるが、どう考えても、自分の中の考えでは、あり得ない答えが返ってくる。そして、考えないことにする。

「でも、これで香奈を助けられるってことだな」

大介は呟いた。

考えるべきことは、二つ。

一つは勿論、香奈を救うこと。そしてもう一つは、香奈を救うにあたって、それに必要なメンバーが一人足りないということだ。

「ハンスさん」

東海林はハンスに呟いた。

当初の目的を忘れていたわけではない。ただ、理由がもう一つ増えただけだ。

「どうしたの？」

ハンスは、どこか腑に落ちないような、そんな表情をしながら、東海林の方に視線を向ける。東海林はまっすぐな視線を、ハンスに向ける。

「頼みがあるんですけど、」

聞いたハンスは、少しばかり目を閉じる。そして、少しばかり腑に落ちなくて、もやもやしたそれに、更にもやもやした何か注がれていくのを感じた。それが多くなって、更に心の中の靄が、はっきりしたものへ変わって行く。

不愉快だが、愉快だった。

「何だい？」

ハンスは、いつの間にか笑っていた。

聞いた東海林は、ハンスにこう頼む。

「赤龍と、」

コンタクトを取ってほしいんです。

はっきりした声で、東海林は言った。大介は、少しばかり安堵を覚えたような、そんな視線を東海林の方に向けていた。

そこは、どこまでも海だった。さっきから飛んでいるが、海しかいていない気がするの、きっと気のせいではない。赤龍は、意図的にぐるぐると、巨大な円を描きながら飛んでいるのだ。それがどこだかは分からないが、底のない深い青色をした海が、赤龍の赤を飲み込みそうな、そんな底知れない感覚が、赤龍を苛んでいた。

さっきからずっと、同じ場所をぐるぐるぐるぐる回っているだけ

で、一日前とその日とを、ただ行ったりきたしているだけだった。小さな島国程度なら見えるが、それ以外に国は、この辺にはありそうもなかった。

何もない、と言うわけではない。そこには、巨大な鏡がある。

しかし、人が赤龍を目にすることは無かった。これだけ世界を回っている、器らしき人間には、赤龍は会っていない。赤龍は、あきらめてぐるぐるぐると、さっきから回っているだけだ。

赤龍を、巨大な海が映し出す。海は、赤龍の影をはっきりと映し出して、そしてそれを、はっきりと消し去っていた。

赤龍の背中に、もう何が乗っているわけでもなかった。あるのは、赤龍の影だ。それから太陽。

気持ちが悪かった。背中に何も乗っていないくて、それが鏡のような海に映るのは、ひどく気持ちが悪いものだった。気持ちが悪く、その上吐き気がして、更に不安になっていった。どんどんと、不安は募っていく。

このまま、いつそのこと海に落ちてしまおうか。

赤龍は考える。少しばかり目を細めて、小さく、ため息に似たような、そんな吐息を吐き出す。

もしかしたら東海林は、本当に、赤龍がいらなくなったのかもしれない。勉強なんていくらでもやれば賄えるし、赤龍がいなくなる分、食費だって少なくなる。ゲームだって東海林の好きな時に出来て、好きな時にやめられる。好きな時に香奈と一緒に帰れて、好きな時に眠れる。赤龍の鼻に、激辛ソースを入れる必要もなくなる。

赤龍は更に考える。

もしかしたら、東海林に厄介ごとを持ち込んでいたのは赤龍かも知れない。そして、東海林を危ない目に合わせた元凶も、もしかしたら赤龍かも知れない。赤龍が全ての元凶で、赤龍が東海林の下からいなくなれば、東海林は幸せになれるのかもしれない。

それじゃあ、と赤龍は思考を停滞させる。

赤龍は、誰の近くにいればいい？

赤龍は考えてしまう。その思考は停滞して、赤龍の中にくつきりと形を作って行く。

赤龍は、誰かが近くにいただけで、その誰かを自分のごたごたにまきこんでしまう。その誰かは、東海林であれ、器であれ誰であれ、そのはずだ。赤龍をいに嫌う集団なら、なおさら危ない。そもそも赤龍を『人』が知っているという時点で、その人は普通の人ではない。赤龍は考える。

なら、赤龍は誰のそばにいればいい？

考える。誰にも巻き込まない、そんな存在。赤龍の、そんなごたごたにも巻き込まれない、または巻き込まれても対処できるような、そんな存在。

赤龍は考える。海は、赤龍をくつきりと映し出し始めている。赤龍の赤い鱗が、海にくつきりと、細かく彩られている。

赤龍は逆に考える。

誰が、赤龍の近くにいてくれる？

考えてみる。つまり、赤龍のごたごたに巻き込まれず、それでいて、赤龍と一緒にいて不快にならないような、そんな存在。

いるのか？そんな奴は。

赤龍は考える。そして、更に頭の中で、考えていく。

思考の逢着、赤龍はため息を吐いた。はあ…。

知ってうれしいことと、知って不快なことがある。その思考の逢着した場所は、明らかに、赤龍にとっていいものではなかった。

そこは、空白地帯だった。

それが意味することは、誰でも明白だった。つまり、そう言うことだ。その場所が空白と言うことは、答えは簡単だ。

誰もいない。

そこには、誰もいない。または、いなくなった。

赤龍は、少しだけ悲しくなってくる。さっきよりも少し、悲しいという気持ちさがこみ上げてくる。青い中にいる赤龍は、どう見ても青の仲間ではなかった。海は青でしかなくて、赤龍は赤でしかなか

った。赤龍の背中に、誰かが乗っているわけでもなくて、昨晚見ることが出来たあの『影』に似た存在も、今は空白に埋もれていた。誰にも求められない。

赤龍は考える。少しばかり、ため息だけでは気持ちの整理がつかなくなってくる。

誰にも必要とされないし、その誰かすら、近くにいただけで不快にさせてしまう。または困らせて、迷惑をかけてしまう。

そんな奴に浴びせられる言葉を、赤龍は簡単に想像できる。

『出て行け！』

だ。簡単な話だ。

簡単すぎて、それは赤龍の中でぐるぐると渦を描いて回って、そして途切れて、それから妙な風に赤龍の靄を重くする。

海の中は、それに比べ、どこか透き通っているような、そんな風なものに満ちていた。そこは、底が見えそうなくらい透き通っていた。海は、そこにある空が完璧に見渡せそうなくらい、透き通っていた。

もしかしたら、赤龍も、もしかしたら、その透き通るような海の底の空に手を着くことが出来れば、赤龍の靄なんてものがなくなるかもしれない。そもそも、そこには靄なんてものすら、無いかもしれない。

赤龍は考えながら、少しばかり水面に近づく。潮の香りがする。音がする。そして、どこまでも透き通っている。

海が鏡のように、赤龍の顔を映し出している。そこには、どこまでもすがすがしそうな表情をした、青みがかった赤龍がいた。その後ろには、やはり誰もいない。しかし、空に少し近づいた赤龍は、とてもすがすがしそうで、とても輝いていた。影ではなく、そこにあるのはどこまでも、空にしか、赤龍は見えなかった。

空に手を伸ばそうとした、その時だった。

一つの音が、赤龍の耳の中で、小さく響き渡った。ノイズのような音だったが、それは次第に揺れを少なくしていつて、それは完璧

な声に代わる。

何の機械を使っているわけでもない。

『やあ、赤龍君』

その声は、聴いた声だった。

ハンスの声だ。

赤龍は思いながら、目を細める。そして、海の方から視線を逸らす。赤龍は耳の方に、自分の視線を向ける。

「何じゃ、ハンスではないか」

赤龍は、声のトーンを落として、そうハンスに言った。

ハンスは、自分の耳に手を当てて、何かを行っているようだった。それが幻術であるということしか、はつきり言って東海林には分からない。

「やあ、赤龍君」

ハンスは、いきなり、まるで独白のようにそうつぶやいた。しかし、それが独白ではないということを、少なくとも東海林たちは理解している。

ハンスはテーブルに手を着く。

そして、そこから声が聞こえてくる。

『何じゃ、ハンスではないか』

その声は、赤龍の声だった。

東海林は、どこかほっとしたような、そんな気分でその声を聞いている。声は、ハンスの手からテーブルで再現されている。恐らく幻術。東海林には、それしかわからない。

「何だか、少し声がやつれてるね」

ハンスは、どこか笑顔で赤龍に言った。

赤龍はそれを聞くと、少しばかり不愉快そうな声で、ハンスに答える。

『あたりまえじゃ、ずっと寝ないで、昼夜太平洋を飛び回っているのじゃからな』

東海林はそれを聞くと、「は…？」小さく声を出す。しかしそれは、赤龍には聞こえない。赤龍は、今ハンスの声しか聞こえていない。

「それはまた、何で？」

ハンスは、笑みを絶やさずに赤龍に聞いた。

東海林は、赤龍の答えに期待する。少しばかり怖くもあるが、緊張している、とも言い換えられる。

『赤龍には、それしかやることがないのじゃ。哀れなことに』

赤龍は言った。

「自分で哀れとか言うなよ…」

東海林は、どこか呆れた風な口調で、そのテーブルに言った。聞いた大介は、無言で数回肯く。

「ところで、東海林君と喧嘩してるんだって？」

ハンスは、赤龍に聞いた。

赤龍の声が、一瞬止まる。小さな息遣いだけが、そのテーブルを伝わって、東海林の耳に届いてくる。

雄大は、関係ないと言わんばかりに、ケーキを食べている。

赤龍は、沈黙を小さく守る。そして、その緊張に、小さな息遣いが聞こえてくる。東海林も、少しばかり緊張する。

「それって本当？」

ハンスは聞いた。

東海林は、少しばかり目を見開く。

『…、うむ』

赤龍は、肯定した。

その声は、さっきの声よりも、どこか疲れた様子であったことは、間違いなかった。どこまでも、赤龍は、いつもの赤龍ではなかった。

あくまで、東海林の知っている範囲で。

「それで、」

ハンスは赤龍に言う。



それと同時にハンスは、東海林の方に視線を向ける。少しばかり微笑んではいるが、東海林の方に真剣なまなざしを向けて。

東海林は、小さく目を閉じる。そして、少しだけ乱れた呼吸を、自分の中で整える。ハンスを、真っ直ぐと見つめる。

見たハンスは、一度、しっかりと東海林の方に頷いた。

「赤龍君は、東海林君の所に戻ってくる気はある？」  
息をのんだ。

少しばかり唐突なような、そんな気もしなはなかった。しかし、それは唐突でもなんでもなくて、いつか来ることには間違いがない、そんなことだったことは、確かだった。東海林も、それを承知している。だから、息をのんだ。

赤龍の返事は、帰ってこない。まだ、どこか小さく鼓動が乱れているような、そんな雰囲気もあった。

それは、もしかしたら東海林の鼓動かも知れない。

東海林は思う。そして、少しばかり呼吸を整える。

「…、東海林は、」

赤龍は言った。

東海林は、それに集中して耳を傾ける。大介や緑龍も、その話に耳を傾ける。青龍は目をつぶっている。

「…、そこに、いるのかの…？」

赤龍は聞いた。

尋ねた、と言うべきだった。

ハンスはそれを聞くと、東海林の方に視線を向ける。東海林は聞くと、少しばかり考える。そして、一度小さく、首を横に振った。

大介と緑龍は、その東海林の反応に、少しばかり驚きを覚える。何故ここで、それを言わないのか、と言うことに關して。

もし、東海林がハンスの近くにしていると分かったら。

東海林は、赤龍のことを考えたのだ。そして、その結果が偶然、これだったということだ。それは簡単な話だった。

東海林の前だと、もしかしたら赤龍は、正直になれないかもしれ

ない。

それを、東海林は身を持って、経験した。

「いないよ」

ハンスは、東海林が示した通り、赤龍に言った。

聞いたのか、赤龍は小さく、ため息に似た何かを吐く。少しばかり東海林は、その声に意外さを覚える。『はあ……』の声、それは、どこからどう聞いても、赤龍の声に他ならなかったからだ。

東海林のため息にそっくりな、赤龍のため息。

『なら、ハンスになら、言えるかもしれんな』

赤龍は、言った。

聞いたハンスは、少しばかり心を穏やかにする。目を閉じて、何かに集中するような、そんな雰囲気です赤龍に言う。

「何か、あったんだね」

それが、一番初めに言うべきことだ。ハンスにはそれが分かっていた。

東海林は、真面目な表情でテーブルの方に視線を向ける。テーブルは、静かなままだった。声は、少しばかり何かを考え込んでいた。「何があったの？」

ハンスは、穏やかな声で、赤龍に尋ねた。

赤龍は、少しばかり不本意そうな口調で、ハンスにこう答える。

『うむ……』言い、それから小さく息継ぎをする。

『東海林がいないから話すのじゃが、実は、赤龍はとても不安なのじゃ』

赤龍は言った。

聞いた東海林は、少しばかり、目を見開いた。しかし、そこまで驚くようなことでもないかもしれない。東海林は考える。

『赤龍が、もし器に出会えなかったらどうするか、そして、もし出会えたとしても、その器が赤龍を受け入れてくれるのか。その器が、』

赤龍の厄介ごとに巻き込まれても、平気なのかどうか。

一瞬で、東海林の心が揺さぶられた。それは、もしかしたらお互い様なのかもしれない。それは、東海林には分らない。

『赤龍は、他の龍よりも何故かよく狙われる。そのせいで、その器に嫌な思いをさせないかどうか、赤龍は疑問なのじゃ。東海林が、赤龍を嫌いになった理由も、そうじゃからな』

喉の奥が渴いていく。しかし、口は嫌なほど、湿って行く。

『東海林は、正しかったのじゃ。確かに赤龍がいるから、東海林は大変な思いをして、赤龍のわがままに付き合っているから、いろいろ疲れてしまっているのかもしれない。じゃったら、愛想を尽かしても、赤龍には何も言えん』

赤龍は、さらに続ける。どこか、その声は震えている。

『出て行けと言われても、赤龍には文句を言う資格はあらん』  
言った。

東海林の中で、何かがもやもやと、しかしどこか、言葉に出来ない何かが、あふれ出していくような、そんな感覚に近い物を感じる。東海林は、何も言うことは出来ない。赤龍を、そんな風にさせてしまったのは、もしかしたら東海林かも知れないからだ。

少なくとも、それは理解していた。

「それじゃあ、」

ハンスは口を動かす。動きが、妙にどろどろとしているような、そんな気が東海林にはしない。

「赤龍君は、東海林君の所に」

帰ってきたいと思う？

ほぼ、核心と言ってもいいものが、そこに突き出された。

同時に、東海林と赤龍の心を、それはぐつと、揺さぶって行く。どんどん、またはそれ以上に。

どんな答えが返ってくるのか。

東海林は、テーブルに耳を傾ける。頭の中で、思考の停滞と感情

の流動が行き来する。さまざまなパターンの、赤龍の返答が、東海林の頭の中で響いてくる。それは、単に東海林を焦らせるだけでは収まるわけがなかった。

赤龍の声が、少しばかり途切れる。東海林には、赤龍の鼓動が、聞こえてくるような、そんな気がしてならない。

「…、な、何をいきなり」

赤龍は、凍結しかかった思考回路を、自分の炎で溶かしていく。しかし、それはほとんど溶かしきれない。

「そんなの決まってるさ」

ハンスは、東海林に言った。

「君が、彼と一緒にいたくないかって、聞いてるんだ」  
ハンスは言った。

誰に向けられた言葉なのか、それを東海林は、理解することは出来なかった。その言葉は、赤龍にも、東海林にも伝わってくる。

大介は、少しばかり感心気味に、「なるほどな」と小さく言った。少しばかり不思議そうに、緑龍は大介の方に視線を向ける。大介は、ハンスの方に視線を向ける。本当に、大介はどこか、満足しているような、それか何かを楽しんでいるような、そんな視線をしていた。

「…、」

黙る。それ以外に、何ができるわけでもない。しかし、どんどん息が詰まって行くのが分かる。その問いは、考えと言う考えをことごとく凍結させていき、感情と言う感情を、ことごとく迸らせていった。

そんな簡単なものではない。

東海林は、少しばかり汗を握る。赤龍は、小さく息をのむ。少しばかり考えて、小さく息をつく。

「ふー、はあ…」

それは、深呼吸の样にも聞こえたし、ため息のようにも聞こえた。どこまでも、肺の奥に伝わって行かないような、そんな息だった。

「…、」

どこを向いているのか。

ハンスは、東海林の方に視線をまっすぐ向けていた。そんなことは、東海林の中では決まりきったことだった。

考えてみれば、当たり前な話だ。

東海林は、赤龍と一緒にいたくないか、それとも一緒にいたいのか。

考えるまでもない。

そもそも、東海林は赤龍と一緒にいて、楽しくなかったのか？赤龍が図々しくて、なれなれしくて、鬱陶しくて、もうやめてほしい、だなんて思ったのか？東海林は赤龍を見ていて、赤龍と一緒にいて、楽しくなかったのか？

東海林は、それ以上の物を赤龍に、見出していなかったのか？

赤龍は、確かに厄介ごとを東海林に振りまいたかもしれない。しかし、それを受け止めたのは東海林だ。もし東海林が厄介ごとを嫌だと思ったなら、赤龍なんて、ハンスが初めて襲来した時から、放っておけばいい、と考えればよかったのではないか？そんなややっこしい、面倒くさい、しかも生死を左右するものなのだから、赤龍を放つても、それは東海林にとって、また人間としても、一つの方法だ。それは決して間違っていないし、逆にそれは、反論が出来ない。こいつを近くに置いておいたら、もしかしたら死ぬかもしれない、なんてものを自分から置いておこうと思うのは、そんなのはただの自殺行為だ。何処までも剣呑で、どこまでも樹圈で、どこまでも自分の立場を危うくしうるものだ。

でも、東海林は赤龍になつて言った？

東海林は赤龍に、こう言ったことを覚えている。簡単な話だ。とても簡単な話で、今でも言葉にできる、そんな言葉だ。

その言葉は、こうだ。

お前を守りたいと思う。

そんなに難しいものではない。ただ、苦しんでいる物を見て、守りたいと思うのは、それは間違った感情だろうか。それは違う、と

東海林は考える。それは東海林の考えていることではあるが、それは間違いではない。

東海林は、赤龍を守りたいと思っているし、今でもそう思っている。

簡単な話だ。簡単すぎて、嫌気がさす。

東海林は思つと、ハンスに言つた。

「『一緒にいたいのに、決まってる「だろっ」「であろっ」「』

二人は言つた。

見事に、それは同時だつた。それは何ら、不思議なことには感じなかった。シンクロニシティなんてものは、ざらにあることだ。

聞いた大介と緑龍は、どこか興味深そうに、テーブルと東海林の方に視線を向ける。ライカンは、じつとハンスを、見つめている。

ハンスは、「そうかい」と、赤龍に微笑んだ。

「それじゃあ、赤龍君。君にいろいろと伝えたいことがあるんだ」  
ハンスは言つた。

赤龍はそれを聞くと、『何じゃ』と答える。少しばかり、辛そうな声だつた。東海林は聞くと、まだ突っ掛りがあることを覚える。

「まず一つ目は、赤龍君。君の声、実は東海林君が、聞いてたんだ」  
どこかいたずら気な、そんな口調だつたことが、救いだつた。

聞いた赤龍は、一瞬の思考停滞を覚える。しかし、すぐにそれが何だかを理解する。『…むッ』と赤龍は、小さく呟いた。

「だよね、東海林君」

ハンスは、東海林に笑顔で尋ねる。

そんなに笑顔でいられるのも、色々と困る。しかし、東海林にこみ上げてきたのは、少しばかりの笑みだつた。

「まあ、はい…」

東海林は言つた。

『…、東海林、かの…?』

赤龍の声だつた。

聞いた東海林は、少しばかり口の中が、カラカラになって行くの

を感じる。乾いていく。しかし、何かが潤いを取り戻していく。

「ああ、まあな」

東海林は言った。

聞いた赤龍は、『聞いて、いたのかの…』と尋ねる。東海林は聞くと、少しばかりどもる。そして、赤龍に答える。

「まあ、な」

さつきから、同じことしか言えなくなっている気が、東海林にはする。

しかし、それでいい気も、東海林はする。

「でもね、赤龍君」

ハンスは言った。

赤龍は、どこかじれったそうに、しかしどこか恥ずかしそうに、ハンスの方へと耳を傾ける。『うむ…？』と赤龍は、ハンスに呟く。「赤龍君が、一緒にいたいって言った時に、実は、東海林君も同時に、同じこと言ってたんだよね」

東海林の方が、恥ずかしくなっていく。

赤龍は、『む…』と小さく呟く。

『そう、なのかの…？』

少しばかり、突っ掛りがあるような、そんな口調だった。しかし、それは間違いなかった。それは確かにそうで、東海林は確かに、赤龍と同時に、ほとんど同じことを言った。ただ、語尾がいつものように違っただけだ。

それだけの話だ。

それを聞いたハンスは、「うん、殆ど同じ。語尾だけ違ったね」と、どこか楽しそうに言った。それは、東海林の方にも来る言葉だった。

『そう、か…』

赤龍は言った。

どこか、息が小さくなっていく。そして、少しばかり息が、浅くなっていく。どこか、笑みのようなものが零れてくるのは、東海林

の気のせいではない。

呟くと、海に映る赤龍の顔に、少しばかり、歪みのような、そんな歪が生まれてくる。それは漣を立て、赤龍に波紋を残す。

「そう、なのか…」

赤龍は飛びながら呟いた。

これでもう、赤龍のすべきことは分かっていた。

海の底にある空に手を伸ばすのは、もう少し後でもできることだ。それに、海の底から、いずれ誰かが迎えに来る。それは、赤龍には分かりきったことだった。

「東海林は、まだ、赤龍のことを…」

温かくて、妙にじれったくて、そして、靄のようなものが、赤龍の周りを取り巻いていく。どこか気持ちが悪くなるような、そんな気持ちだった。しかし、気持ちが悪いと言っても、悪い『気持ちの悪い』ではなかった。色々な意味でよく分からない、いい意味での『気持ちが悪い』と言う物だった。

赤龍も、はつきり言ってそれがよく分かっている。それが分かるとも思えない。しかし、それを実感することは出来る。

今、赤龍は実感している。

何かが、赤龍の中からこぼれ出している。温かいものが、海の方へと漣を作る。

「…、グフツ…」

小さくしゃくりあげて、少しばかり赤龍は、目を閉じる。赤龍の瞳孔は、海の中でも縦に割れている。しかし、海だからなのか、どこかその瞳孔は、何かに滲んでいるような、そんな風にも見えなくはない。

揺らいでいる。

しかし、揺らぎはしない。

『赤龍、』

その声は、東海林の声だった。



声は、赤龍の中で響いて、それは、赤龍の中で余韻を残す。海の中にまでは響いて行かない。しかし、海の中に映し出されている余韻は、空白部分を埋めていくような、そんな感覚に近かった。

「…」

名前を呟こうとした。

赤龍に、いまそれをする事は出来なかった。今赤龍に出来るのは、少しだけ息を飲み込むことだけだった。

『早く、』

帰ってこいよ。

東海林の言葉だった。

聞いた赤龍の中で、何かがあふれていくのを感じる。化学の授業で、液体ヘリウムの超流動と言うのを聞いたことがある。ゲームをしていても、それははつきりと聞こえてきた。それと似た感覚の何かが、赤龍の中でも起こっている。

赤龍が、冷たいのではない。

海が、冷たいのだ。

思うと、赤龍は少しばかり、片腕で目をぬぐう。そして、小さく再び、しゃくりあげる。翼は、少し乱れ気味に動いている。

「全く…」

赤龍は言った。

呆れたような、うれしいような、

赤龍自身、よく分からないような、そんな言葉だったことは、確かだった。

「遅いぞ、東海林…」

そう言うのは、当たり前前に近かった。

東海林は、少しだけ遅かった。ほんの少し遅かった。しかし、もしかしたら、とも赤龍は思う。もしかしたら、これくらいが丁度いいのかもしれない。これくらいが、喧嘩に懲りる、いい時間なのかもしれない。

東海林はそれを、見計らったのだろうか。あくまで、数学的な意

味合いで。

違う。

赤龍は考える。そんなことは、あの東海林には出来ない。東海林に出来るのは、己の感性を主張することだけだ。

つまり、そう言うことだ。

東海林も、喧嘩に懲りたのだ。

赤龍は考えてみる。喧嘩をして、出て行って、そしてもし、自分から連絡を取ろうと思ったら、どうするだろうか、と。赤龍は実際、一度東海林の所に行った。しかし、東海林はその時、まるで赤龍には見向きもせず、香奈の方にはばかり視線を向けていた。もしかしたら、それは当たり前なのかもしれない。赤龍は考える。赤龍だって、雌のことを考えないわけではない。それに、赤龍だって、目の前に雌がいたら、同じような態度を示すかもしれない。そう考える。

それは、自然なのだ。

それに、と赤龍は考える。

赤龍の方に視線を向けないのは、当たり前だ。そんなの、考えてみれば簡単で、簡単すぎる物だった。逆に、何で赤龍がそれに気付けなかったのか、不思議なくらいだ。

赤龍は考える。

それはどこまでも、赤龍の中で正当化されていく。そして、それは同時に、赤龍の否定を意味していた。

簡単な話だ。

赤龍には、勇気がなかったただけなのだ。東海林の前に顔を出して、謝ろうとする勇気が、赤龍には無かったのだ。

それに引き替え、

赤龍は少しばかり、尊敬してしまう。まさか、龍が人に対して尊敬なんてものを抱くだなんて、思ってもいなかったが。実際に、赤龍は今、非常に人を尊敬している。尊敬に値するなんて物ではない。

東海林は、自分から謝る勇気があった。  
考える。

少しばかり、赤龍は考えを全面的に、改めた方がよさそうだった。それは、色々な物に対して、だ。

少しの間の沈黙。

それは、厳粛に保たれていた。何の音もしない。あえてする音と言え、風が、赤龍の体を取り巻く音だろうか。

ほんの微かではあるが、赤龍には聞こえていた。

「して、」

赤龍は言った。

聞いたハンスは、小さく『ん？』と呟く。

「赤龍はいかにして、東海林の下に向かえばいい」  
聞いた。

それを聞いたハンスは、考えもせずに赤龍に言った。

『え、飛んで帰って来れない？』  
聞いた。

それを聞いた赤龍は、「はあ……」と小さくため息をした。しかし、そのため息は、赤龍を圧迫するような、そう言ったものではなかった。

「今赤龍は、太平洋の中央にいるのじゃから、飛んで帰るとなっても、また少し、時間がかかるぞ？」

それを聞いたハンスは、『うーん、』と少しばかり、面倒くさそうな声を発する。『まあ、仕方がないか』とハンスは言う。実は、何かをされなくても、赤龍は東海林の所に、帰って来れることは帰って来れた。

それとは関係がなかった。

帰って来れる帰って来れないに問題はない。赤龍が問題にしていたのは、そんな簡単なことではない。

どうすれば、東海林の近くに、一刻も早く戻って来れるのか。

それだけが、赤龍の中で問題になっていた。

『分かった。それじゃあ、僕の言うことをよく聞いてね』  
ハンスは言った。

そういう時は、大概本気だ。

赤龍はそのハンスの声で、理解した。完璧に、しかしどこか、表面的に。

「…、何じゃ？」

赤龍は聞いた。

この話してる時間も、赤龍にはじれつたくなってくる。こんなに無意味に感じるのも、赤龍には初めてだった。

それを聞いたハンスは、赤龍に言った。

「これから僕は、君に双影<sup>せいかげなこう</sup>中行つていう術を施す。君は影の中を通つて、僕らの目の前に突然とあらわれる。言っている意味が、分かるかい？」

今一分からない。

そんなことは言っていられない。

「して、赤龍は何をすればいい？」

赤龍は、少しばかりせかすように、ハンスの方へ声を響かせる。喉が、久々に潤いを取り戻したような、そんな感覚を孕んでいた。

「君は今、飛んでるんだよね？」

ハンスは言う。

聞いた赤龍は、「さつきから、そう言っておろう」と言う。「そもそも、飛ばずしてどうやって、赤龍が太平洋を巡るといふのじゃ」聞いたハンスは、小さく笑む。「確かに」と言つと、赤龍に続ける。

「僕がこれから三つ、カウントダウンするから、数え終わったら、翼の動きを止めてほしいんだ」

言っている意味がよく分からない、と思つのは赤龍だけだろうか。声が、聞こえてくる。「そんなことしたら赤龍が落ちるんじゃない」と言つのは、東海林の声だ。

「大丈夫、心配しないで」

ハンスは、東海林に言った。

「その時にはもう、赤龍君は僕らの目の前に現れてるはずだからね。」

影の中を渡ってるんだから、そんなの殆ど関係がないからね』

ハンスは言った。

赤龍は、どこかまだ、不安感を拭い去れない。

「…、」

一瞬だけ、黙る。

『と言うことだから、分かった？赤龍君』

ハンスは、赤龍に尋ねた。

これは、思いのほか少し怖い。太平洋のど真ん中で、羽ばたくのをやめると言うのは、飛行機に海の中へもぐれと言っているようなものだ。正確には、落ちろ、と言われているようなものだが。

しかし、背に腹は変えられない。それに、赤龍には急ぐ理由があった。

それに、猜疑心を持つ理由なんて、そもそも赤龍には無いのだ。

赤龍は気づく。

赤龍は、ハンスに猜疑心を抱く必要なんて全くないのだ。

考える。そして、小さく深呼吸をする。

「…、了解した」

赤龍は息をのむ。

そして、赤龍は目を閉じる。どうせ目を閉じて飛んだとしても、ここは何の障害物もない、太平洋のど真ん中だ。障害物が多いコンクリートジャングルとは違う。

少しばかりの恐怖と、ある意味スリルに近い感覚を、赤龍は覚える。しかし、どこまで飛んでもぶつからない、と言う不思議が、赤龍の中には生まれる。飛んでいるのに、障害物をそのまま、通り抜けるような、そんなわけのわからない快感がある。

『始めるよ…？』

ハンスは言った。

赤龍はそれを聞くと、小さく息を吸った。息を吸って、それからハンスの方に答えた。

「うむ…」

少し、スリルにも似た何か、とは違う恐怖心のような、猜疑心のような、よく分からない感情がこみあげてくる。

ハンスは、一つ目を数える。

『三』

ハンスの声。

それは赤龍の中で、確実に募って行く重々しい言葉。

これはカウントダウンだということを、赤龍は改めて実感させられる。これはあくまでカウントダウンで、ただのカウントではない。赤龍の中で、鼓動が少し、高鳴って行く。

『二』

少しばかり、息が切れていく。翼を動かす間隔が、どんどん狭くなっていく。赤龍は、固く目を飛ぶって、まだハンスが、最後の数字を言っていないことを頭の中で処理させる。しかし、それは非常に繊細な思考で、赤龍の中を、繊細ながら、滅茶苦茶な方向に走らせていく。走って行って、それから赤龍は、再び、喉の渇きのようなものを覚える。

海水は、残念ながら飲めない。

そもそも、飲む気すら起きない。

『一』

この次の数字は語られない。

しかし、このリズムは、赤龍の心の中に、しっかりと刻まれる。何もかもが、赤龍の頭の中で繰り返されるような、そんな気分になって行く。特に、東海林と分けれてから、今までの事。それが、ずっと頭の中で繰り返される。

そして、それは破綻していく。

どこかで、その繊細な思考回路は、赤龍の中で音を立てて、確かに崩れていく。赤龍は、小さく息を吸おうと思う。しかし、考えと体が、全く同調しない。同調しない、とか言う問題でもない。

考えが、体を動かしているわけではない。

赤龍は、リズム感だけはよかった。

すぐに、『零』がくる位置で、赤龍は翼を羽ばたくのをやめる。もしまだ海の上に赤龍がいたとしたら、赤龍は海にまっさかさまになる。まだそんな程度では、赤龍は死にはしない。しかし、それなりに心に来るものくらいはあるだろう。赤龍は考える。

赤龍の時間が、一瞬止まったかのような、そんな感覚を覚える。何もかもが一瞬にして消え去ったような、そんな感覚。でも自分は存在していて、しかし自分は何も思っていない。何も思っていないくて、ただ存在しているだけの、ただそんな場所が、目の前に広がっているような気がした。

赤龍は、どこかで嗅ぎ鳴れた臭いを嗅いだ。

それは、東海林のにおいだった。

それとほとんど同時に、赤龍は固い何かに墜落した。

ゴツッ…

赤龍は、床に頭を打った。

それは、聞いているだけでも痛々しい音だった。

床に落ちるなんて、ある意味、龍として何か心残りなものはあるかもしれない。東海林は、いきなり現れた赤龍を見てそう思う。原理は、さっきハンスが言った通りだ。つまり、影の中を移動するらしい。それを引き起こしているものが何だかわかれば、科学で同じようなことが出来るかもしれない、と東海林は同時に、小さくではあるが考える。

「痛たたたた…」

赤龍は、頭を少しばかり右手で押さえ、目を固く瞑りながらそう言った。目の前にいるのが赤龍なんで、東海林は少しばかり、動揺した。

こんなに時間がかからない物だとは思わなかった。それに、こんなに自然に、赤龍が現れる物だとも、東海林は思わなかった。

思うと、東海林は赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、固く瞑った目を徐々に関きつつ、辺りを確認する。少しばかり見回して、小さく、「謎じゃ…」と呟く。はつきり言っ、そう思わないやつの方がおかしい気がする。それはきっと、東海林の気のせいではない。

「…、」

少しばかり、口の中が涼しいような、そんな気がしなくもなかった。体の中の空気の巡りが、悪いような気もする。東海林は、息を数回、小さく吸い上げる。そしてその、赤い龍の方に視線を改める。「お帰り」

東海林は言った。穏やかな口調で、その方向に向かって。

聞いた赤龍は、少しばかり口を堅く閉じる。そして、少しばかり視線を泳がせると、どこか、ボソツとしたような声が聞こえた。

「た、ただいま…」

赤龍は言った。

小さくではあるが、赤龍は確実にそう答えた。それは東海林の耳の中に、確かに残響のように残っている。それはどこまでも、消えない。

「ところで、」

ハンスが言う。

それを聞いた東海林たちは、ハンスの方に視線を向ける。雄大はケーキを食べている。

「そんなにのんびりしている暇も、なさそうだよ」

ハンスは言った。

いつの間にか、時間は六時近くになっている。いつの間に、

東海林は心の中でつぶやく。そして、少しばかり小さく、ため息を吐く。東海林は赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、少しばかりそれを気にしている様子ではあった。しかし、それを言い咎めることはしなかった。



「時間がないとは、どういうことじゃ…？」

赤龍がハンスに尋ねた。

それを聞いたハンスは、「うん」と赤龍の方に言う。そして説明を始める。

「実は、香奈君が今、大変みたいなんだ」

そう言うと、ハンスは視線を、ガムテープでぐるぐる巻きにされている、畔の方に視線を向ける。畔は、どこか空ろな視線を放っている。何処になのかは、分からない。

「あの子、畔っていうんだけど、その子に、殺されそうになったみたいだね」

一瞬「何じゃと…ッ！」と赤龍は声を張り上げる。

香奈が、何故狙われなくてはならないのか。

それは、赤龍には分からない。恐らく、ここにいる中で知っているとしたら、ハンスくらいかもしれない。赤龍は考える。そして、もう少し考えてみる。

「そしてね、香奈君が今、向かいそうな場所に、もしかしたら袋叩きされるかもしれないんだ」

ハンスは言った。

冗談でもなければ、悪ふざけでもない。赤龍を誘い出すための口実でもなかった。ただ、それはどこまでも、事実でしかなかった。

「もしこのままいったら、香奈はどうなるのじゃ…」

赤龍は、ハンスに尋ねる。どこか、心配以上の物が、赤龍の心の中を、徐々に采配していく。赤龍には、よく分からない。

「それは、やっぱり、殺されるかもしれない」

ハンスは、少しばかり口どりを重くして、赤龍にそう言った。

聞いた赤龍は、少しばかりあたりに目を泳がせると、小さく吐息を放った。それはどこまでも、ため息に似ているだけの、ただの吐息だった。もしかしたら、さっきまでの赤龍のため息のようなものは、もしかしたら、ただの吐息だったのかもしれない。赤龍は、吐息を吐いただけだったのかもしれない。

東海林は、妙な気分になる。

本当に、妙な気分だった。

「だから、っていうのは少し言い方がおかしいかもしれないけど」  
ハンスは言った。

赤龍の方に、ハンスは視線を送る。赤龍は、その視線を躲すわけがなかった。

言う。

「僕らの大切な仲間のためにも、一緒に、戦ってくれる…？」

赤龍は、それを聞いて少し、本当に少しだけ、がっかりした。別に、誰が言おうが、赤龍はそれを聞いたら、助けに行くつもりだった。それは変わらない。そんな程度の、小さな落胆に過ぎなかった。しかし、赤龍が小さく落胆したのも、事実ではあった。ましてやそれは事実でしかなかった。それを、東海林が理解できているのかは分からない。

赤龍は、小さく思った。

東海林が、赤龍に言った。

「まあ、お前が行きたかったら、でいいんだけどな」

東海林は言った。

どこか、投げやりとは違う、別の何かの感覚に近かった。しかし、赤龍には初めて、東海林の言っている言葉の意味が、よく分かったような気がした。

いつもの赤龍なら、それを聞いてどう反応したか、それは赤龍自身にもわからない。どう反応するかだけは分からない。

しかし、と赤龍は思う。

東海林が、赤龍にそう言ったことだけでも、かなりの進歩な気もしなくはない。ただ、それに伴って、赤龍も成長しているかいなか、それが問題だった。

赤龍は、成長しただろうか。

考えてもわかるものではないし、考えて何かを言う物でもなかった。それは、赤龍にはよく分かっていた。

だから、赤龍は言った。

「誰に言っておるのじゃ」

赤龍の声だった。

それは、どこまでも赤龍の、どこか図々しくて、どこか上から目線の口調だった。

東海林には、それがどこか、心地いいような、そんな気にしかなかった。

「決まり、ってことだね」

ハンスは言った。

赤龍は立ち上がり、ハンスたちの方に視線を向ける。そして、小さく微笑む。「さて、」と赤龍はつぶやく。

東海林の方に視線を向ける。

「東海林こそ、覚悟は決まっておるのじゃろうな？」

赤龍は、どこかいたずら気に、東海林へ声を発した。

それを聞いた東海林は、少しばかり、ではあるが驚く。赤龍がそんな一言を、東海林に言うとは思えなかったからだ。そもそも、そんな台詞を言えるということ自体、東海林には驚きだった。

少しばかり、息を潜める。

しかし、どこか開放的なそれが、東海林の中で満たされていくのも、自身で理解している。つまり、そう言うことなのだ、と東海林は理解する。それだけで、それ以外なんでもない。

東海林は、赤龍の目を覗きこむ。

赤龍の目は、いつものように光り輝いていて、目の中の光は、どこにも無くしてはいなかったようだった。ましてや、その光は、東海林の寮を出て行く前よりも、ずっと輝いていたように見えるのは、きつと東海林の気のせいではない。

赤龍は、成長した。

それだけのことだ。

それが、東海林にはどこか、うれしくもあった。しかし、妙な気持ちが増していくような、そんな気があったのも事実だった。

東海林は、少しばかり深呼吸をする。どこまでも、ため息とは無縁な息が、そこに放たれる。それが、ため息だと思われなければの話ではあるが、少なくともそこでは、ため息になることは無かった。東海林は、赤龍の方に視線を向ける。

そして、一瞬だけ小さく、赤龍に微笑んでみせる。

「…」

俺を誰だと思ってる？

東海林は言った。

東海林の目にも、光がともっているのは確かなことだった。

静寂、と言うよりも、どこか寂寞に近い、靄のような存在に近かった。嫌と言うほど、それは香奈の心の中で広がり、そして縮んでいく。縮んでいくと、それから煙のように、もくもくとした妙なものが、また広がって行く。

時間は、大体六時くらいだった。

結構な時間が、経っていた様子だった。それは、香奈にもわかっていて。ただ、時間を無駄にした、と言うような感覚は、少なくともなかった。そこにあるのは、香奈の感覚と、時間との差異だ。

「黄龍」

香奈は言った。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこか俯いたような、そんな視線で黄龍から目を離していた。

「…」

黄龍は何も言わない。

香奈は、それでもよかった。はっきり言って、この沈黙があるから、もしかしたら今の、この平穩に似た心の在り方があるのかもしれない。

「私たち、大丈夫よね…？」

その意味が、黄龍にはうまく把握できていない。

しかし、何を答えるわけにもいかなかった。何を答えるわけでも

なく、黄龍は、小さく息を飲んでいた。香奈が、今なにをも思っているのか、そんな細かいことは、黄龍には分からなかった。

「私たち、ちゃんと、真っ直ぐ進めるわよね」

香奈は言った。

黄龍には、香奈の言いたいことが、なんとなくすら分からなかった。真っ直ぐの意味が分からないし、何が大丈夫なのかもわからない。適当な受け答えをするなら、何も答えないほうがまだ。黄龍は考える。そしてあえて、何も言わないことにする。

「…」

しかし、香奈は続ける。

時間は、刻一刻と過ぎていく。しかし、ほんの一秒二秒だ。それだけに過ぎない。本当に、ただそれだけだ。

「きつと、私たちが望んでるものは、悪い物じゃないわよね、絶対。だって、みんなが笑顔になれるような、そんな事なもの…」

香奈は言った。

何が言いたいのかは、黄龍には分からなかった。

しかし、と黄龍は思う。少しばかり困るが、その『困る』を押し切って、黄龍は自分の心を口にする。

「それは、香奈にとつてはの話」

香奈は、少しばかり驚いた風な視線で、黄龍の方に目を向ける。

どこか、目が潤っているような、そんな風にも見えなくはない。香奈は、少しだけ、悲しそうな光を目に浮かべている。

「香奈にとつて、それはいいことかもしれない。でも、もしかしたらそれは、他の人たちにとってみれば、とっても厄介で、もしかしたら、何かの障害を来すものかもしれない。もしかしたらそれだけじゃなくて、その動きは毒となりえるかもしれない。それは香奈にとつていいものかもしれないけど、でもそれは香奈だからよ」

黄龍は言った。

香奈は聞くと、視線を落とした。どこか悲しそうではあったが、黄龍はその言葉を、何かで訂正するつもりなんてものはさらさらな

かった。ただ、黄龍にとって、それがただ、常なだけだった。

「…、何で、」

香奈が言った。

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。少しばかり、口の中が酸っぱくなる。

「何で、みんなが笑うことが出来ないのかしら…」

香奈にとって、

それは黄龍にとっても、答え難いものだった。黄龍には、それを答えることは出来ない。適当なことを答えることもできない。ただ、それが本当だと思うことを、黄龍は言うだけなのだ。

だから黄龍は、答えた。

「幸せが、人によって違うから、よ」

悲しいことなのかもしれない。

それは、ひどく悲しい物なのかもしれない。皆が同じように笑うことなんてできない。誰かが笑っているということは、誰かが泣いているということだ、と黄龍は言ったのだ。直接的ではなく、間接的に。

それは、間違っているのかもしれない。しかし、合っているのかもしれない。それは香奈には分からない。

香奈は小さく涙を流す。小さくて涙を掬うと、小さく、心で息をためる。「それでも」と香奈は言う。

「私には、それが正しいと思う。それでみんなが、笑顔になれないんだとしても」

香奈の声は、手堅いものがあつた。

少しばかり。黄龍は目を細める。そして、香奈の方に視線を向ける。いつもとは違う視線を、香奈は床に向けていた。いつもの香奈の視線なら、もっと優しい、もっと温かみのこもった視線だ。

しかし、その香奈の視線は、どこまで行っても冷たくて、どこまで行っても、何か頑ななものがあつた。

「…、」

何が正しいかではない。

もう、はつきり言って正しい正しくないの問題ではない。それを、黄龍は理解していた。それを、香奈が分かるかどうかの問題だ。分かったとしても、あの視線は、本気の視線だ。今までの香奈の視線の中で、一番本気の視線だ。

「…、香奈が、そう思ふのなら」

黄龍は言った。

意思表示でもあった。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。何を言われるかは、何も考えない。期待しない方がいい。香奈は考えた。

もし、黄龍と香奈の考えていることが違ったら、香奈はどう思ふか、きつと分らない。

今の香奈本人だからこそ、そう思えた。

黄龍は、続けた。

「、それが正しいと思うのなら、私はそれについて行く。私は、そう決めた」

その声は、確実なものだった。喉が渇くような、そんな台詞だったことを香奈は理解している。

それが、本当に黄龍の思っていることなのかは分からない。もしかしたら黄龍は、心の中では、香奈を蔑んでいるのかもしれないし、もしかしたら、黄龍は心の中で、香奈に強い敵意を抱いたかもしれない。

それは、香奈には分からない。

だから、こう答えるしかなかった。

「、そろそろ」

香奈は立ち上がると、時計の方に視線を向ける。時計のピンク色が、妙に褪せたように見えたのは、気のせいだろうか。

香奈は考える。

六時を回った、その時だった。

少しばかりではあるが、心のどこかでまだ、抵抗と言う物を感じ

ている。さつき香奈が言ったこと、それ自身に違和感を抱いている。もしかしたら、香奈本人に、違和感を抱いているのかもしれない。全員が笑顔になれないんだとしても、それが正しいと思う限り。

いいこと？

わるいこと？

香奈は、考えるまでもないことに思い当たる。

「行くわよ」

香奈は、どこか冷たく、黄龍に言い放った。すぐにベランダの方に出ると、香奈は小さく息を吸った。

黄龍は、それについて行くしかなかった。それについて行くしかなかったし、それ以外に選択なんてものは存在しなかった。

青龍の話によると、その『タンクラス（TANCLAS）』とか言う集団は、楽多祖ヶ谷の廃工場に溜まっているらしい。それを聞いた時、東海林は思わず考える。

楽多祖ヶ谷、つまり、女子寮のあるところ。

つまり、香奈だ。

『タンクラス（TANCLAS）』は、香奈を狙っている。それが、表に出たような、そんな言葉だった。

なのに、と東海林は思う。

もう六時を回っているのに、それなのに、まだ東海林はこんなところにいる。赤龍と、やっとよりを戻せて、やっといつもの東海林と赤龍に戻った。と言うのに、今度は香奈が大変なのだ。

欠ける、何てことはあり得ない。そんなことは、絶対にありえないのだ。

赤龍がいなくなってみて、初めて分かった。誰か一人が仲間から欠けるということは、その仲間の間の距離が、その誰かひとり分、広がってしまうということだ。ぽっかりした空間が、そこには確実に存在した状態になってしまう。

それは嫌だった。



それに、そんなことは誰も、きつと望まない。望めないし、望む人はきつと、悲しい人だ。

「早く、行った方がいいかもしれないね」

ハンスは言った。

聞いた東海林は、ハンスの方に視線を向ける。少しばかり焦っているのか、早口でハンスに聞いた。

「ハンスさんは、一緒に行かないんですか……？」

東海林の側にいるのは、大介と緑龍、雄大と青龍、ライカン、それから勿論、赤龍だった。全員の距離は、まだ変わっていない。今の内だ。

東海林は、少しばかり口の中を焦らせる。

ハンスは、少しばかり早めに、口を動かしていく。

「うん、僕は畔を見ていなくちゃいけないし。それに、ユーカの事もあるしね」

どこかで聞いたことがある。

ドイツ人は時間に厳しい。色々な規則を重んじて、遵法だということ、東海林は聞いたことがある。東海林が思うドイツ人のイメージに、ハンスが合うとは、夢にも思っていなかったが。

しかし、考えなくてもハンスはドイツ人なのだ。

それは、ある意味あたりまえと言ってしまえば当たり前なのだ。

「そう、ですよ」

東海林は言った。「分かりました」

ハンスはそれを聞くと、どこか焦っているような、そんな雰囲気ですぐ、東海林の方に言葉を呟く。

「君は、何を望むんだい？」

始め、意味が全くと言っていいほどわからなかった。

分らない、と言うよりも、それ自体に意味があるのかどうかすら、東海林には分からなかった。

何を聞いているのか、東海林には一瞬わからなくなる。

青龍はその質問を聞くと、ハンスの方へと視線を向ける。どこか

細い視線と、それからどこか、冷静そうな視線だった。

「望む……？」

東海林は、ハンスに聞いた。

聞いたハンスは、「うん」と東海林に言った。「君は、何を望むんだい？」ハンスは尋ねる。「君は、香奈君を助けて、どうしたいんだい？」

聞いた東海林は、少しばかり黙る。青龍は、面倒くさそうに目を閉じる。

赤龍は、ハンスの方に視線を向ける。東海林は、少しばかり向けた視線を、ハンスの方に細める。

赤龍が代わり、ハンスに言った。

「そんなの、決まっておる」

一瞬、東海林も何が起こったのかわからなかった。

雄大は、どこかつまらなさそうな雰囲気で、その青い結晶を弄っている。右手の中で、それは確実な鮮やかさを、辺りに放っている。見ると、少しだけさつきと形が変わったような、そんな気もしなくはない。しかし、雄大は細かいことが嫌いだった。そもそも、細かいことなんて考えてはいられなかった。考える気も、雄大には起きなかった。

「……？」

東海林は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、間違いない、と言うような視線で、ハンスの方に視線を向ける。

「……」

小さく、ハンスは赤龍に笑った。

大介は聞くと、緑龍に小さく尋ねる。「おい、ここ笑っておくべきか……？」と聞いた緑龍は、「さあ……」と困った風に答える。

「言つてごらん」

ハンスは、赤龍に言った。

赤龍は、その答えに確信を持っていた。それは、確実に赤龍の中でどこまで行っても東海林だった。それに、多分それは正しい。

それはきつと、東海林が否定しない限り、正しいと思う。

赤龍が、そう思ったただけだった。

しかし、赤龍がそう思ったのだ。

「東海林は、」

みんなと一緒にいたいんじゃない。

それは、あまりにもいつものことで、東海林は逆に、気付いていなかったのかもしれない。あくまで、過去形は保っている。どこまでも、気付いていなかった、のだ。

赤龍が帰って来て、確信が持てた。それだけの事でもあった。

「……」

東海林は、それを聞いて赤龍に、微笑み返す。赤龍は、東海林の方に微笑んでみせる。いつもよりも、自然な笑みで、それでいて、赤龍の真っ直ぐな、どこか自慢げな視線が、東海林の方へ注がれていく。

そう、これがいつもだ。

東海林は思う。

ハンスはそれを聞くと、少しばかり目を細めた。

赤龍と、東海林の間の境界線、と言う物が、ハンスの中では、よく分からない物と化していた。はつきりしない、そんなぼんやりとした、不自然な形を取ったような、そんなものにハンスは見えた。しかし、そんなことはあくまで、どうでもいいことではなかった。

聞いたハンスは、二人の間を見つめる。間に、意思疎通を越えた、感覚の共有に似たものを、ハンスは見逃さなかった。

干渉だったか、それとも適合だったか。

どれにも当てはまらない気がするの、ハンスだけだろうか。

「……、そう、かもしれないね」

ハンスは、赤龍に言った。あくまで、赤龍に。

それを聞いた赤龍は、「そうに違いない」と、ハンスに語った。  
赤龍には、絶対的な確信に似たものを、持っていたのだ。  
「かもな」

東海林は、嘯くような、そんな口調で赤龍に言った。

そして、ハンスの方に二人（一人と一匹）は視線を向ける。ハンスは、小さく息を吸い込んで、吐いた。

「それじゃあ、俺たちは行きます」

そう言った時、一瞬で空気が凍りつくような、そんな感覚に、ハンスは見舞われた。そこにあるのは、あくまで本当の事。

だから、ハンスも本当のことを言う。

「…、絶対に、みんなで帰ってくるんだよ」

それは、いつものことに近かった。

しかし、今日のこの出来事は、いつもの事よりも少し、重いことだったことは確かだ。ハンスの言葉でさえ、東海林にとって重かったのだ。

「…、」

何も言わずに、東海林は振り返って、「行くぞ、みんな！」と声を張り上げる。持ち合わせてない筈のリーダーシップが、東海林の中で湧き出てくる。そして、みんながりビングから、東海林の後に続いて出て行く。

「…、死なないでね」

そこでは、ハンスの声は、非常に小さな声だった。

## 役を割り分けて担う

ハンスの泊まっているホテルから、楽多祖ヶ谷まではそんな距離はない。しかし、東海林たちが、楽多祖ヶ谷に詳しいわけもなく、楽多祖ヶ谷の廃工場、と言われても、全く分からなかった。

唯一、畔の記憶の中を覗いた青龍だけは、その廃工場の場所を知っていた。それ以上に、何か重大なことを知っていそうだと思うのは、東海林の気のせいだろうか。東海林は考えてみる。

曇り、と言うよりは、雨雲に近かった。朝の予報では、こんなに雲がかかるだなんて言っていなかったし、そもそも『晴れる』と天気予報は告げていたはずだ。

これが、天気予報の未発展、と言う物なのだろうか。

東海林は、赤龍の背中に乗っていた。赤龍は東海林を背中に乗せて、青龍の後を歩いて行くように飛んでいく。青龍の上に乗っているのは、雄大とライカン。そして、赤龍の隣を飛ぶように、青龍について行っているのが緑龍だった。緑龍の上には、勿論大介が乗っている。

東海林は、携帯電話を耳に押し当てる。焦燥感に似たものが、その携帯電話の中から、東海林に伝わってくる。

『おかけになった電話番号は、現在電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、かかりません』

つまり、そう言うことだ。

それ以外に、何もなかった。

自動音声は、東海林の中で妙な思考に繋がって行く。しかし残念ながら、その妙な思考が正しいことを、事実が告げている。

香奈は、携帯電話の電源を切っている。つまり、外からの連絡を絶っている。と言うことは、香奈はいつもの状況にはないということだ。

今、香奈がいつもの状況にない、と言うことは、ここにいる七人

（三人と四匹）なら、それが何を意味しているのか、すぐに理解できはらずだ。

その一人に、東海林がいた。

東海林は、吐き捨てるような声で、「クソッ」と呟く。そして、少しばかり強引に、携帯電話の電源ボタンを押す。携帯電話に、何も変化がないような、そんな気が東海林にはして、仕方がなかった。「出ない……ッ」

小さく、東海林は空中に呟いた。誰にも聞こえない程度に言っていると東海林の喉の奥から、焦りがこみあげてくるのが分かる。

東海林は、香奈に電話をしていた。

それ以外に、電話をする相手もない。香奈と連絡と取れば、少しは話し合いになると思ったのだが、それはあくまで、東海林の中の推論に過ぎなかった。

香奈は、電話に出なかった。いつもなら、東海林の電話ならすぐに『あら、東海林君』と明るいう口調で受話器に話しかけてくれるのに、今日は、そんな様子がなかった。

「東海林、どうじゃ」

赤龍は、東海林に聞いた。飛んでいて、風で東海林の声が聞き取れなかったのか、龍の耳でも、さっきの東海林の声は聞こえなかったようだった。

それを聞いた東海林は、少し大きめの声で言った。

「駄目だ、コールしても、留守番になるだけだ」

東海林は言った。

それを聞いた赤龍は、やはり東海林と同じ場所に、たどり着いたようだった。「それは……、」そこで、赤龍は言葉を止める。

「結構ヤバいって、ことじゃないのか？」

大介の声が、隣から聞こえてくる。

それを聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。少しばかり目を細めて、真剣そうな視線を、東海林の方へと向けている。

東海林の焦りが、更に甚だしくなっていく。喉が、嫌と言うほど

乾いてくる。腹痛が、東海林の中で襲ってくるような、そんな気分にもなってくる。

「…、かもな」

東海林は言った。

聞いた緑龍は、東海林の方へ、別の提案する。

「それじゃあ、何か、別の連絡手段って、無いんですか？」

流石の緑龍も、どこか焦ったような雰囲気で東海林に言った。東海林も、その声につられてではないが、冷や汗が頬を伝っていく。

「…残念ながら、ハンスさんがいないからな。もしかしたら、ハンスさんがいたら、何とかなるかもしれないけど」

それを聞いた緑龍は、少しばかり表情を沈める。東海林の方を向くわけではなく、ずっと前を見ている。青龍を見逃してはいけない。

「何か、他の方法は無いのかの…」

赤龍は、遺憾そうに言った。

雄大は、さっきから何も言っていない。いつもの雄大ではないような、そんな雰囲気、今の雄大は纏っている。それが何なのかは、東海林には分からない。

「…、」

青龍は、いつも通り無言だった。しかし、雄大はいつも通りではなく、寡黙だった。何処までも、雄大は黙っていた。

ライカンは、何も話すことがなかった。

後ろで、話し声が聞こえる程度だった。

「と言うことは、」

赤龍が東海林に言った。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、少しばかりではあるが、東海林の方に視線を向ける。

小さく、ふてぶてしく、笑った。

「急いだ方がいい、と言うことじゃな」  
極論だった。

その通りだった。

この状況下ですることは、電話ではない。それに、話し合いでもない。どうやって、香奈を救うかどうか、と言うことだ。

それ以外に、何があるわけではない。

やることにそれなだけだ。

「…」

はつきりした。

思考の低徊は、きっと赤龍がいなかったから起こったことだ。赤龍がいなかったから、それが東海林に何らかの影響をもたらして、そして、思考が低徊したのだ。

今の東海林に、思考の低徊なんてものは無かった。

それが、東海林にとってのはつきりした、またははつきりしすぎる物になった。それは、なんとなく、懐かしいような、そんなものがあつたことは間違いない。

つられてなのかどうか、なんてことは、はつきり言って東海林には分からなかった。しかし、東海林はどちらでもよくて、ただ、赤龍の様に、図々しく、素晴らしく上から目線で小さく笑った。

「そうだな」

東海林は言った。

そして、前を見る。ぽつぽつとだが、雨が降り始めている。辺りが、段々と暗くなっていく。真っ暗に近い、そんな色だった。

灰色と、青と、それから黒を、思いつきり濃く混ぜ合わせたような、そんな色だ。

「急がないとな」

雨が、赤龍の上にも、東海林の肩の上にも、小さく振り始めている。

不規則で自然的な、そんなリズムを刻みながら、雨は強さを少しずつ、増していった。不規則さが、心の中で、妙に気持ち悪いような、そんな気分を膨れ上がらせていった。

いつ、ここで、何が、どうやって作られていたのか、そんなこと



は分からなかった。香奈が、天野下学に通う前から、ここは廃工場だった。一時期は、幽霊が出るとかで噂になったが、それがいつのことだったか、実はよく覚えていない。香奈が分かることは、一つだけだ。

ここに、『タンクラス（TANCLAS）』がたまっているということだ。

ここは今、タンクラス（TANCLAS）の溜まりになっている。つまり、目の前には、香奈を殺そうとしている奴らが溜まっている建物がある。きっと一人や二人ではない。三人でもないし、もっとそれよりも多い数、と言うことは、なんとなく感覚で理解できていた。マフィアと聞いたら、もしかしたら千人越え、と言うのもあり得るかもしれない。香奈は、かつて聞いたことのあるニュースを思い出す。タンクラス（TANCLAS）ではないが、どこかのマフィアが警察に捕まって、そのマフィアの人数が尋常ではなかったことから、報道されたものだ。

そのくらいいるかもしれないし、それよりは少ないかもしれない。しかし、香奈の中で、これだけは言いきれることがあった。確かなことで、どこまでも、香奈にとって正しいこと。

「…ここね」

香奈は言った。

黄龍は、何も言わない。ここが、何なのかと言うことも、はっきり言ってよく分かってない。分かることは、ここが工場だった、と言うことくらいだ。

「…、」

嫌な予感、とでも言えばいいのか、そんなような変な感覚が、そこにはあふれていた。そこに流れてくる風は、黄龍の体をすり抜けて、何かを摩耗させていくような、そんな冷たい流れを持った風だった。

嫌な予感ではない。

そんな抽象的なものではなく、もっと具体的で、本能的な『嫌な

予感』だった。そこにあるのは、そう言ったものだった。

「…ねえ」

香奈は、言った。

それを誰に語っているのかは、黄龍には分からない。しかし、その言葉が、どのくらい張りつめている物なのか、それはなんとなくではあるが、理解することが出来た。

小さく、香奈は呼吸をした。

「これで、本当に全部、うまくいくと思う…？」

悲しそうな、そんな感覚でもあった。

黄龍の呼吸が、いつもより浅くなっていた。

緊張ではない。

緊張何ていう、分かりやすく、あまりにも単純なものではない。確かに、緊張もそこには孕まれている。空気そのものが、ここでは張り詰まったような、そんなものを持っている。

「…、」

何も答えられないし、黄龍は、何を理解しているわけでもない。分かっているわけでもない。香奈に答えられることは、そこには一つもない。

「本当に、私が頑張れば、東海林君が幸せになれると思う…？」

息が詰まった。

思考が、奔走しているようだった。まるで何も考えられなかった。しかしそこには、奔走と冷静の両極端が、奇妙な風に結び合って、それは妙に、香奈の心を無心にさせた。

「…」

本当に、何もなかった。

言える範囲も、黄龍が考えられる範囲も、越えていた。

香奈は、何も答えが返ってこないことを承知する。もしかしたら、もともと承知していたのかもしれない。しかし、香奈はそれでも続ける。

「…でも、私はやる。やらないと、やられちゃうもの」

自己満足？

それでもよかった。それが自己満足だろうが何だろうが、香奈にはどうでもよかった。ただ、やるべきことがそこにあるだけなのだ。「…、かも、知れないわね」

それだけは言える。

聞いた香奈は、小さく目を閉じる。息を小さく吸って、少しだけ目を開ける。辺りは、さっきと同じ、暗い、夕暮れの暗さを越えた闇に、包まれている。

どちらに転んでもいい。いい方に転んでも、悪い方に転んでも。どっちにしても、こうなってしまったからには、こうするしかない。こうするしかないし、他に道がなかった。

偏見？

そんなことは分からないし、そうであったとしても、香奈は一向に構わなかった。

「…、黄龍」

香奈は、黄龍に呟いた。「あなたは、私と一緒にいて、絶対に、後悔しない…？」哀しそうな、そんな口調だった。

風が一瞬止んで、それから、一瞬だけ、時間が止まったよな、そんな感覚に近かった。その間、そこには何もなくて、沈黙しか存在していないような、そんな感覚に近かった。

黄龍は、口の中に、空気が流れ込んでくるのを感じる。だからどうするわけでもない。

その空気を、黄龍は押し出していく。

「…私は、香奈について行く。そう決めたの」

黄龍は、言った。

少しだけではあるが、何故か悲しいような、とてもうれしいような、そんな気がしてならなかった。そしてまた、あの言葉を呟こうとする。

しかし、その時口を紡ぐ。

香奈は、小さく言った。

「後で、ね」

黄龍には、それが何を指しているのか、なんとなく分かったような、そんな気になって行く。胸の中に何かが詰まっているような、そんな感覚に近い。しかも、これは放っておいたら、どんどん硬化していく、危ない物のような気も、黄龍にはしていた。

しかし、黄龍にはそう答えるしか、出来なかった。

出来ないから、今こうして香奈の隣にいるのだ。

「…」

香奈は小さく息を吸った。

様々な顔が、目の中で浮かんでくる。目を閉じなくても、香奈の中では見えてくる。みんなの笑顔が、見えてくる。

はつきりとした、真っ直ぐな視線を香奈は向ける。

「行くわよ」

香奈は言った。

言うと同時に、廃工場の門を、一步一步、確実に踏みしめていく。それを聞くと、黄龍もついて行く。それしかできないし、それ以外に何かをしようとも思わない。

門を、くぐった。

そこは、より一層、夜が真っ暗になったような、そんな雰囲気を見せていた。そして、小さくではあるが、雨が降ってきたのを感じる。小さな雨粒が、小さく振ってくる。予報では、確か一日中、晴れだったはずだ。それは夜も同じだ。

香奈の肩に、黄龍の足に、雨は当たる。

香奈は急ぎもせず、廃工場の中に、足を踏み入れていく。さつきよりも、少しずつ重くなっていく。尋常ではない重さの足を、香奈は絶えず、前に動かし続ける。

廃工場に電気が来ているわけもなく、その中は真っ暗だった。しかし、工場と言う割には、案外簡単につくりをした工場だった。ここが昔、何の工場だったのか、なんてことは、香奈は知らなかった。きつと、そんなに細かな過程を必要としない、おおざっぱなものだ、

としか分からなかった。

しかし、電源を入れればすぐに機械が起動して、今にも動き出しそうなくらい、それは綺麗な形をとっていて、錆も少なかった。

異様な光景、と言ったら異様な光景だし、そうでない、と言ったらそうでない光景だった。自然だし、不自然だった。

その時だった。

「あら、来てくれたのね。うれしいわ」

声が、聞こえた。

今まで聞いたことのないような、そんな声だったことは間違いない。

声は、香奈の前方の方から聞こえてくる。聞いた香奈は、目に力を入れて、前の方を見渡し始める。

さっきまでいなかったような、大人数の誰かが、そこにはいた。一つ普通ではないところを挙げるとするなら、手に、全員が拳銃を持っている、と言うところだろうか。

おそらく、魔銃。

香奈は、それを少しではあるが、察した。

「『タンクラス（TANCLAS）』へようこそ、なんてね」

ふざけるようにして、その人物は言った。最前列にいる、香奈と同じ年くらいの、日系の少女だった。

「私の名前は板滝<sup>いただき</sup> 姫野<sup>ひめや</sup>、よろしくね」

そんな風に、よろしく何て言われても、あまり親近感が沸くような、そんなほのぼのとした関係にはならない。香奈は思う。

「一つ確認させてくれる？」

その声の人物、姫野は尋ねた。聞いた香奈は、「何：」と冷たく、姫野に言い放った。

「あなたは、オソノ・ハルセの娘よね？」  
ハッとなった。

その話を、畔にしたことは無かった。確かに、香奈の父親は春潮御園だ。外国風に言ったら確かに、オソノ・ハルセとなるかもしれない。

しかし、その話は、小学校以上の友人には、したことがなかった。つまり、香奈の父親の話は、今の東海林たちは知らない、と言うことだ。

黄龍は、香奈が動揺していることにすぐ気付いた。視線を向けて、香奈の目を見つめる。

「…、何で知ってるの」

声を、少しだけきつくして、香奈はその少女に言った。

よく見ると、その団体は全員、少女の集まりだった。そこに、少年は存在しなかった。この廃工場にいるのは、よく見ると女だけだ。「何でって、何が？」

姫野は言った。

聞いた香奈は、小さく息を吸う。そして、姫野の方に目を細める。「だから、何であなたが、私のお父さんのことを知ってるの…？」それを聞いた姫野は、「そんなの、分からない？」と小さく言った。

「でもそんなことはどうでもいいじゃない」

姫野は言った。

香奈は、さっきよりも目を細める。「どうでもよくないわ」冷たく、香奈は言った。

「…、」

どこかつまらなさそうに、姫野は目を細めた。

「何で、私のお父さんを知ってるの…？」

それを聞いた姫野は、「…、あなた、本当に何も知らないみたいね。ジェーンから話しは聞いてたけど」と小さく呟く。

「まあいいわ、知りたいんだったら教えてあげる」

姫野は言う。

香奈は、その声に耳を傾ける。

その声が、嘘をついているような口調ではなかったことだけは、確かだった。

「オソノ・ハルセは」

タンクラス（TANCLAS）のリーダーだったのよ？

一瞬、

意味が分からなかった。

頭が真っ白になった、とも違う。何かが、そこにはなかったのだ。息をすることさえ、香奈は忘れていた。

「……」

香奈は目を見開いて、姫野の方に視線を向ける。少女は、何も問題はない、と言わんばかりの、ごく普通のような、そんな視線を香奈に向けていた。香奈に向けて、少しばかり、自慢げに笑っていた。「これでわかったでしょ？」

姫野は言った。

「あなたが私たちに、狙われる理由」

聞いた香奈は、心の中で思う。そんなことはありえない。

しかし、とも香奈は考える。

香奈の父親、春潮御園は行方不明だった。

幼いころから、物心つくその前から、香奈の中に御園の記憶はなかった。覚えてもいないし、だから何なのか、とも香奈には言えてしまう。父親がいなかったら、どうってことは無い。そう思っていた。

急に、そんな話を掘り返されても困る。

「あのオジサン、本当に嫌いなよね」

姫野は言った。

聞いた香奈は、視線を姫野の方に向ける。

「私たちの言うことは無視して、他のマフィアともできるだけ交友を深めて、大きな力をつけようなんて戯言をぬかしちゃって、みんなから反共が来たわ。そんなことをしたら、『タンクラス（TANCLAS）』としての誇りがなくなるって。まさかあのオジサン

に、こんなかわいい子がいたなんて、知らなかったけど」

姫野は言っと、香奈の方に視線を向ける。

「もともと、あのオジサンの子供が、この『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーになるはずだったのよ。本当は、あなたが『タンクラス（TANCLAS）』を引き継ぐことになってたのよね。でもあのオジサン、どんなに聞いても『私には子供はいない』の一点張りで、もうどうしようもなかったから、それでみんなの反感が爆発して、」

殺されちゃったわ。

「あのオジサン」

そんなに、衝撃ではなかった。

はつきり言って、香奈にとって御園がいてもいなくても、はつきり言って関係がなかった。どうでもよかったし、そもそも、赤の他人とも割り切ることが出来た。しかし、あまりいい思いがするようない、そんなものでもなかった。

「それで、代わりに私がボスになったわけ。ついでに言っと、私のお父さんはその時、副リーダーだったわ」

そんなことはどうでもいい。

香奈は思いながら、少しばかりむしゃくしゃするようない、そんな気持ちで姫野へぶつける。

「だったら、何で今さら私なんて…」

小さく言いかけた。

その時だった。

姫野が、「そうなのよー」と香奈へ言った。声は、どこまでも透き通り、その工場に響き渡る。耳鳴りのようない、そんな響き方をする。

「あの時あのオジサンが、子供はいない、なんて言うもんだから、みんなそれがある意味信用して、私をリーダーにしたわけよ」

本気なのか、それとも全くの嘘なのか、それは全く分からなかった。一体何を言いたがっているのか、香奈には分からなかった。



「でも考えてみて」

姫野は言った。

廃工場の中は、息が詰まるような、そんな空気だった。その空気は淀んで、さらに悪くなっていく。

「もし今、あのオジサンの娘であるあなたがいるってみんなが知ったら、どうなると思う？みんな、あなたをリーダーにさせようとするのよ？言ってる意味が分かる？」

少しばかりバカバカしくなる。

香奈は思うと、小さく吐息を吐く。

「私は、何と言われようともマフィアのリーダーになんてならない」  
聞いた姫野は、「あなたの方が分かってないじゃないの」と、どこか呆れて、蔑むような口調で言った。

「もしいるって全体に知れたら、それこそ分裂物よ。私もよくは知らないんだけどね、そのオジサンの意見に、賛成だった人たちだっているのよ。でも反対派の方が多かったし、それにあんな発言をしたもんだから、その賛成派だって少しは怒ったわけよ。『タンクラス（TANCLAS）』を滅亡させる気が、ってね？」

姫野が何を言いたいのか、いまいち香奈には分からない。

しかし、それは香奈に関係がない話ではない。香奈と、大きくかわりがある話だ。香奈は考える。

「でも、あなたが出てきてしまった。最近調べて分かったんだけどね？私も。それでもし、貴方がいるとばれたら、どうなると思う？賛成派は絶対に、あなたをリーダーにさせようとする。でも反対派は、あのオジサンの娘なんてとんでもない、と思うでしょうね。そこでもう、団体として分裂よ。暴動なんかも起きるだろうし、そんなことになったら、『タンクラス（TANCLAS）』としての誇りも何も、何もないじゃないの。まあ、そもそもマフィアに誇りなんて、なんて思つかもしれないけど。でも私たちにとってはね、『タンクラス（TANCLAS）』は居心地のいい場所なのよ、とっても。分かってくれる？」

香奈は考える。

「…そんなの、あなたたちの勝手じゃない」  
考えて、香奈は言った。

今ここで、その言葉を肯定したら、香奈は殺される。それを香奈は、少なからず理解していたからだ。

姫野は「つれないわね…」と小さく呟く。

香奈は、姫野に尋ねるようにして、言葉を放った。

「あなたの後ろにいるのは何なの」

姫野はそれを聞くと、「ん？」と小さく香奈に答える。そして「ああ、」と小さく頷く。

「これは、オジサンの反対派よ。つまり、私を支援してくれるの。それにこの子たちは、私に忠義深いのよ、とっても。だから、ここであつたことを、全部なかったことにしてくれるの。それだけじゃなくて、みんな私の手伝いまでしてくれるのよ？ いい子たちだと思わない？」

姫野は言った。

そんなことを香奈に言われても、はつきり言って、いい印象が沸くはずもない。そもそも、この廃工場自体が、あまりいい雰囲気醸しだしてはいない。あるのはよんだ空気と、古い機械油の臭いだった。

「…、」

香奈は沈黙する。そこには、何も音がないわけで阿ない。さっきよりも雨が激しくなっているのか、雨の打ち付けてくる音が、香奈の耳には届いていた。非常に、気持ちが悪かったと言えば気持ちが悪かった。

「と言うことだから、」

姫野は言う。

香奈は、少しばかり視線をきつくする。姫野の方に、瞬きを忘れて見つめる。

「私たちの協力をしてほしいの。いいかしら」

とても、軽い口調だったということを、香奈は理解した。

それを意味することが、香奈には何となくではあるが、理解をしていた。それは、非常に簡単なことだった。

私たちの協力 私たちの利益になるようなことをしてほしい 御園の子孫を消してほしい 死んでほしい。

簡単なロジックだった。

それが、香奈の中で、ロジックと呼べるものなのかすら、疑問だった。香奈は思うと、小さく呟いた。

「…拒否するわ」

黄龍は、少しばかり口を窄める。

香奈自身の、鼓動が速くなっていくのを感じる。香奈は今、自分でも緊張していると分かるほどに、非常に鼓動を早くしていた。もしかしたら、緊張している、よりも強度な恐怖だったのかもしれない。

聞いた姫野は、「あら、そう」と軽く呟く。

香奈はそれを聞くと、小さく「黄龍」と名前を呼ぶ。

黄龍は香奈の目の前に走る。勿論、まだ姫野の、つまらなさそうな声は響いてきてはいない。しかし、黄龍は走り出した。

「それじゃあ、仕方がないわ」

一瞬、

銃口が、香奈の方に向けられる。そして、その弾の様な物を、黄龍は自分の爪で弾き飛ばす。

それを合図にでもしたかのように、みんなが一斉に散らばり始める。姫野の後ろにいた少女たちはみんな、姫野の後ろから、一斉に三々五々する。

そして、また別の方向から、銃口を向けられる。そして、香奈がその標準に入る。

銃声がしたと思ったら、その方向にはもう黄龍がいる。黄龍は、一瞬で多方向の銃声を聞き分けて、その方向から飛んでくる弾のよなものを、自分の爪で弾き飛ばしているのだ。

これには、限界がある。

どんなことをしても、これは追いつかなくなる。

しかし、黄龍はただひたすら、爪で飛んでくる弾を弾き飛ばす。

黄龍は、自分の感覚が許す限り、自分の爪で、飛んでくる弾をはじき唾していく。それは最終的に、どこへ飛んでいくのかわからない。そんなことは関係ない。

黄龍には、ただひたすら、守りたいものがあるだけなのだ。ただ、守りたいものがあるだけで、ただそれだけなのだ。

何度も何度も、爪で弾を弾き飛ばす。弾き飛ばした後、その弾は消えていく。空中に、解けるようにして消えていくような、そんな感覚がある。

「……」

香奈は、どこか張りつめたような、そんな雰囲気で見ている。黄龍の、その必死な顔を見ると、香奈自身、心が締め付けられるような、そんな気分になってくる。でも、うれしくもあった。黄龍は、香奈について行ってくれる、と言ったのだ。

それを、香奈はしっかりと覚えていた。ただそれだけのことだった。

「あら、やっぱりその子、反射神経いのね」

姫野は、そうつぶやく。そして、楽しそうな表情をして、香奈の方へと拳銃を向ける。そして、引き金を引いていく。

その繰り返しだ。

単純だが、黄龍には単純ではない。

時々、二回同時に銃声が聞こえることがある。しかし、何とか黄龍は、両手を使って弾を弾き飛ばしていく。動き回っていて気付くが、まだ、昨日の傷が治り切っていないのを、初めて知る。

そんなことは構ってられないし、構っているだけ時間の無駄だし、そんなことを考えていたら、確実に危ない。

そう黄龍は、頭ではなく本能で考えていた。その時だった。

「みんな」

その声は、姫野の物だった。

一瞬、聞いてぞっとする。

しかし、姫野はどこか、うれしそうな視線を香奈の方に向けている。みんなはそんな表情を、真っ直ぐ見つめている。

「今思っただけど、この際戦力を削いじゃうっていうのはどう？」  
聞いたみんなは、まだ何だか分からない、と言うような視線を姫野に向ける。

姫野は、それについて細かい説明を啜えていく。

「この際だから、あのチョコマ力動く子の方を、重点的に狙うっていうのはどう？そうすれば、必然的にオソノ・ハルセの子だって、あきらめざるを得なくなるわ」

なるほど、と言う声が小さく上がる。

黄龍は、小さく息を吸い込んだ。

そうか、とも思う。流石、リーダーは違う、とも黄龍は思う。確かに、今は香奈本人を狙っても、黄龍に攻撃を止められる。しかし、黄龍がいなくなってしまうえば、または動けなくなってしまうさえすれば、香奈は、防御が出来なくなる。弾を、防ぐことが出来なくなる。つまり、そう言うことだ。

黄龍は思いながら、「……」小さく声を上げた。

あたりを睨みつける。

銃声が聞こえてくる。それは、自分に向かって。

黄龍は素早く避けるか、それが弾を高速で弾き飛ばすかして、何とか回避していく。しかし、とも黄龍は思う。

気づいた。

本能的に、ではあるが、黄龍はこの時すでに、気付いていた。

これでは、攻撃もくそも何もない。

それだけのことだ。

黄龍は思うが、しかしこの循環は、もう開始されてしまっている。かといって、香奈だけを廃工場の出入り口に向かわせるのは、あま

りにもリスクが高すぎる。もし、出入り口に向かわせている間にも撃たれてしまったら、そこですべて終わりだ。黄龍も、きっと絶望感に打ちひしがれるだろう。

考えたくもないし、考えられなかった。

黄龍は、香奈の近くを離れないように動き、よけながら、弾を爪ではじいていく。偶に避けることを失敗して、若干のかすり傷を作るが、さっきのと同じだ。

そんなものに構ってはいられない。

何か、

黄龍は考える。

何か、攻撃手段は、ないの…？

考えていても、すぐに弾が飛んでくる。それがどんな方向であれ、飛んでくることには変わりない。

黄龍の思考は、途切れ途切れに、時々リセットされながら、その連鎖をただ繰り返していた。

何か、攻撃手段。

それさえ分かればよかった。今の黄龍には、それさえ分かるなら、何もかもを投げ出すかもしれない、とも思った。

その時だった。

銃声が、重なって三つ。

そんなことは、ほとんどなかった。しかし、今初めて、その音が廃工場に響き渡った。

一つは自分の肩の方に、一つは自分の腹に、そしてもう一つは、香奈の心臓の位置。

つまり、そう言うことだった。

もしこれに当たったら、香奈は確実に終わる。つまり、姫野の野望が成し遂げられて、黄龍は暗澹に打ちひしがれる。しかし、香奈を守ったら、黄龍は自分に迫ってくる二つのどちらかしか、防ぐことが出来ない。見た目、二つともよけたら、香奈に当たる。心臓よりは致命的ではないにしろ、かなりの障害を被るのは確かだ。

黄龍は考えて、実行に移すしかないと思う。  
それしかないし、それ以外に何もなかった。それに黄龍には、あの程度の覚悟くらいは、決まっていた。

決まっていなかったら、そもそもこんなところにはいないとも思う。  
黄龍は息を潜めつつ、それを実行する。

黄龍は、香奈の胸の前に手を伸ばし、爪でその弾を弾き飛ばす。  
もう片方の腕で、薙ぎ払うようにして、二つの弾を弾き飛ばそうとする。

香奈に弾は届かなかった。

ほんの一瞬ではあるが、爪に妙な感覚が走ったのを覚えている。  
何かが掠ったような、そんな妙な感覚だった。

……

そう、香奈に弾は届かなかった。

届いたのは、黄龍だった。

食い込んだのは、腹と、それから肩をそれで、右胸のあたりだった。

食い込んで、それは肺で止まったような、そんな感覚があった。  
なんとなくではあるが、一瞬で黄龍は、それを実感した。

それとは別に、痛みが黄龍を襲った。腹から伝わってくる、何かをひねりつぶしたような、そんな痛みと、それから息苦しさ。

黄龍は、途端に息が苦しくなっていく。視界がグランと大きく揺れ、目の前の色が、若干赤く染められていく。

自分の鼓動が速くなっていくのが分かる。自分が平衡感覚を失って、床に倒れていくのも感じる。衝撃は、あまり感じない。

黄龍は倒れると、少しばかり目をつつろにする。まだ、黄龍自身が生きていることを実感するが、どんと、意識と呼べるものが飛んでいくのを、ひしひしと感じてもいた。

「黄龍……!!」

香奈は、大きく叫んだ。

途端に倒れたような、そんな風にも見えた。

少しばかりじれつたいような、そんな気分になって行く。そんな妙な気分で、しかも、とてもむしゃくしゃするような、そんなじれつたさだった。

黄龍の左側腹部と、肺のある右胸から、どんどんと血が流れていく。龍だからと言うのがあるからか、少しずつ、流血は止まって行く。しかし、それでもひどい傷だったからか、気を失う程度に、黄龍は地を失っていた。

「あら、見事命中？」

姫野は、どこか楽しそうな、そんな口調で呟いた。

香奈は黄龍の倒れている場所に体を近づけ、腕で黄龍をゆする。

黄龍の目は、しっかりと閉じられている。音を聞いているのかすら、香奈には分からない。しかし、香奈は分からないからこそ、言い続けるしかない。

「黄龍：！黄龍：！」

言うが、返事はない。

ただ、声が聞こえてきたのは確かだった。

「あら、なんてかわいそうなのかしら」

その声は、姫野の声だった。

香奈は、黄龍をゆすり、「目を覚まして……！！ねえ……！！！」と、若干涙目を浮かべている。それをさらに、どこかいたずら気に姫野は語る。

「見るだけで涙がこみ上げてくるわ」

それでも、どこかふざけているような、そんな口調であることは間違いなかった。

聞いた香奈は、姫野の方に目をきつく細める。さっきよりも数段、目を細染めていたことは確かだ。

そんな視線を見ると、姫野は少しばかり悲しそうな表情になる。

どこか悲しそうな、笑っているような、そんな表情を、香奈の方に、まっすぐ向ける。

姫野は、香奈に言った。



「かわいそうだから」

銃を構える。

その表情は、歪んだ笑み。

「あなたから」

殺してあげる。

そして、引き金を引こうとする。引き金はどこか軽く、そしてどこか、ゆっくりと引かれていく。

ある意味で、覚悟をしていた。

覚悟をしていたのは、別に黄龍だけではない。黄龍だけではなくて、香奈も覚悟をしていたのだ。黄龍は、香奈を守るという覚悟。香奈自身は、みんなを傷つけさせないという覚悟。

黄龍が覚悟をするためには、香奈が覚悟を決めなくてはならない。しかし、黄龍が倒れてしまった。

銃が、間近に突き付けられたような、そんな気がして初めて、香奈は理解したのだ。はつきりとした、真っ暗な靄を、香奈は見るこ  
とが出来た。

もう既に、自分は黄龍を巻き込んでいる。

はつきりと思う。だから、今自分に、銃口が付きつけられているのだ。黄龍と言う守り手がなくなったから、香奈は防御をできなくなったのだ。

もっとひどい。

香奈は考える。これは、そんな事よりもっとひどいことだ。

黄龍は、香奈のためにいろいろなことをやってくれた。しかし、今の自分はどうだろうか。確かに、みんなを傷つけさせないという覚悟が、香奈の中にはある。今もそれは変わらない。しかし、とも香奈は思う。

黄龍がいなかったら、黄龍が覚悟をしてくれなかったら、自分はどこまでも、何もできなかったのではないのだろうか。

考えることしかできないし、それ以外を、迫られてはいなかった。しかし、とも香奈は思う。

もし、あの引き金ひとつで、すべてが終わるのなら。

そもそも『タンクラス（TANCLAS）』が狙っているのは、東海林でも赤龍でもない。香奈に他ならない。理由もやっと、理解出来た。

そう、香奈自身なのだ。相手にもちゃんとした理由があつて、そう言つた行動に出ているのだ。それ以外になんでもない。目的のために動いているだけに過ぎないのだ。

香奈だつて同じだ。

香奈だつて、みんなを傷つけない、と言う理由から、自分から『タンクラス（TANCLAS）』を潰そうと思つたのだ。だからここにいる。

それに、それが一番、みんなが幸せな方法だとも思つた。あくまで、香奈が見ているみんなは、それが一番だと思つていた。

自分も、それが一番幸せだと思つたのだ。

しかし、とその考えに歯止めがかかる。

よく考えてみると、それは『タンクラス（TANCLAS）』の団体に迷惑がかかる。今まで隠匿されてきた存在が、ニュースにあらわになるかもしれない。『タンクラス（TANCLAS）』はもしかしたら、分裂してしまうかもしれない。それはあまりにも、『タンクラス（TANCLAS）』の事情に沿わない。

だが、もしここで香奈が、あの引き金ひとつで消えてしまったら。香奈は考える。

黄龍には迷惑をかけてしまったし、非常につらい思いまでさせてしまった。黄龍から流れ出る血が、香奈の心の痛みが変わっていくような、そんな感覚さえあつた。

実際の痛みなんて、分からなかった。

だから、黄龍と同じように痛みを分けることが出来れば、きっと黄龍だつて報われるはずだ。このまま血がなくなったら、一体どんなことになるのか、それは分からない。

だから、香奈は思つたのだ。

もしかしたら、引き金を引かれた方が、一番、みんなが笑顔になる方法なのかもしれない。

そう考えた。

その瞬間だった。

音が、聞こえてきた。それは、何か、楽器の音のような、そんな感覚だ。この音は、バスーンだろうか。香奈は咄嗟に思った。

須臾、

バンツ！！

それは、廃工場の出入り口が、何かで吹き飛ばされた音だった。

爆薬でもない、クレーンでもない。それじゃあ、一体なんだろうか。みんなは、廃工場の出入り口の方に視線を向ける。あの姫野さえ、その方向に視線を、啞然としながら向けていた。

香奈は、小さく息をのむ。そして振り返る。

一瞬、

香奈の心が、何かで締め付けられるような、そんなひどい何かで満たされた。気持ちが悪いほど、視界がグランと揺れる。めまいが起きそうなくらいの頭痛が、一気に香奈を襲ったのだ。それは、香奈の心を貫いた。

そこにいたのは、東海林たちだった。

東海林は、一瞬その光景を見て焦ったが、まだ香奈の目に光があることを確認すると、少しばかりの安堵が、心の中を取り巻いた。そこにいたのは、勿論東海林だけではなかった。

東海林だけではなくて、雄大や青龍、大介や緑龍、それからライカンがいた。勿論赤龍も。

小さく、東海林は過呼吸しながら、その光景を見つめている。香

奈の足元に広がっているのは、確実な赤色だった。

しかし、見かけ香奈には、外傷がなさそうだ。

「大丈夫！？香奈さん……！」

東海林は言った。

目から、涙が零れてきていた。香奈は、温かすぎるそれが、あまりにも輝いていたのを、齒を食いしばって堪える。

何故ここに来たのか。

そんなことは問題ではない。

今、ここにいる東海林が、どこまでも東海林であることに問題があるのだ。その問題は、絶対解決されない。

「……東海林……君」

徐に、香奈は東海林へ呟いた。

姫野はそれを見ると、「ふーん、」とどこか、面白げに言った。

東海林はすぐに、手に持っている携帯電話の画面を、あるコマンドを実行する手前までの操作を行った。

「真打登場？って感じがしら」

姫野は、東海林たちに向かって言った。

「お前か、『タンクラス（TANCLAS）』とか言うのは」

東海林は言った。

声が出なかった。しかし香奈は、呟いていた。

姫野はそれを聞くと、「そうよ」何のためらいもなく、そう答えるだけだった。それを聞いた東海林は、少しばかり腹が立つてくる。

「なんでお前は、香奈を狙うんだ」

東海林は少しばかり後悔する。

しかし、今さら言ったことは取り返すことは出来ない。

それを聞いた姫野は言った。「そんなの決まってるじゃない」と東海林に言う。「リーダーが恐れるのは、同じくリーダーだけよ」

東海林には、その意味がなんとなく理解できていた。

「何で香奈を襲うんだ」

東海林は声を張り上げる。

それを聞いた姫野は、小さく呆れたような、そんな雰囲気のため息を吐く。「ふーん…」どこか、深いため息だった。

「あなたって、国語力ないでしょ」

いきなりそんなことを言われても困るし、そんなのはどうでもいい。

東海林は思った。

ただ、東海林はじつと、その方向に睨みを利かせている。姫野は、つまらなさそうにため息を吐いた。

「はあ…、香奈は、元『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーの娘なのよ」

大介は、少しばかり目を大きく丸める。緑龍も同じだった。しかし、それ以外の人物に、反応は無い。

「でもそのリーダーは、子供を作ってないとか言っておきながら、この様だったわけよ。今さらそんなのが出てきても、今のリーダーの私にとっては、厄介ごとでしかないってこと。ただの邪魔に過ぎないのよ。分かる？」

聞いた東海林は、それを聞いた後さらに、そいつに呆れてくる。

「だからって、香奈を殺していい理由にはならないだろッ！」

東海林は声を張り上げた。

聞いた姫野は、小さくため息を吐く。

香奈は、声が出なかった。あまりにも、息が詰まったような、そんな感覚が胸の中に溜まり込んで、息をすることさえつらかった。

しかし、小さく声を出す。

その声は、誰にも届かない。

姫野はそれを聞いて、再びため息を吐く。「はあ…」そして、東海林の方に視線を細める。どこか、不愉快そうな視線であったことは確かだった。

「あなたにはそうかもしれないけど、私たちにはそう言う問題なの」

そう言うと、姫野は視線を改める。少しばかりいたずら気に笑う

と、姫野は東海林に、少しばかり冷たく微笑む。

「あなたが誰だかは知らないけど、ここで邪魔をされるわけにはいかないのよ。もしこれでわかってくれないっていうんなら、」

姫野は、銃口をさらに上げる。

狙いは、東海林だった。今引き金を引いたら、絶対に東海林に当たる。銃が、それ自体を孕んでいた。

そんなことはどうでもよかった。

今問題なのは、そこで香奈が、傷ついているということだ。それだけだし、それ以外に他ならなかった。

すっかりとした視線で、東海林は携帯電話のボタンを押す。

それを見た雄大は、バースーンを口に咥える。

携帯電話が光を帯びる。それを見た姫野は、目を細めた。

「……」

少しばかり侮蔑したような、そんな視線で東海林を見下すと、その光の中へと、引き金を引いた。

「……」

ダメッ！

香奈の声が、轟いた。

しかし、それは一瞬にして別の音に置き換わる。

銃声だ。

つまり、東海林の方にあの弾が、撃たれたということだ。

一瞬で、何もかもが崩れ去ったような、そんな気が香奈にはした。これで、もう何もなくなっただような、そんな雰囲気。

すぐに消し飛んだ。

光が止み、シルエットがあらわになる。そこにあるのは、さっきまで持っていなかった赤い、鱗だらけの剣を、鱗だらけの右手で持った東海林が、そこに存在する。

「……、やっぱり、一筋縄じゃ行かないみたいね」

姫野は言った。

東海林は視線をきつくする。相手の様子をうかがっているともい

う。

雄大は青いバスーンを構え、青龍は、いつの間にか手にしている透明な剣を、相手の方に向けている。ライカンは、二足歩行だったのが、四肢を地面に、綺麗につけている。どこか、射抜くようなそんな視線を、放っている。

少しばかり、シユールなような、そんな気もしなかなかった。

「全く、変な世の中よね」

姫野は言った。

それを合図にするかのように、姫野は引き金を東海林に引く。

一瞬にして東海林は、その弾を剣で受け流すと、いつもの走るスピードでは考えられないような速さで、姫野の方に駆け抜ける。銃声が、その廃工場に轟く。半端でない数の弾が、東海林に向かって放たれる。走りながら、東海林は一つ一つをはじいて行く。

走り出したのを見ると、雄大はバスーンを演奏し始める。青龍は水の剣を振りかざし、ライカンは青龍と反対方向に向かっていく。

大介と緑龍は、小さくではあるが、通る声で香奈に言った。

「香奈ッ、来いッ」

聞いた香奈は、緑龍と大介の声がした方向に視線を向ける。銃を放っている奴らは、そんな声には目もくれず東海林や雄大に弾を浴びせていた。

香奈は聞くと、少しばかり逡巡する。そして、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、さっきと同じように、倒れている。まだ出血が多いことを、香奈はその時知る。

少しばかり息を小さく吸う。そして香奈は、黄龍を肩に担いで、少しばかり急ぎ足で大介と緑龍のいるところに向かう。

丁度みんなの死角になっている場所だった。ここから聞こえてくるのは、滅茶苦茶に響いた銃声と、それからバスーンの音だけだ。香奈は一瞬、よくあんな場所にいて、あの声が聞こえたな、と感心する。

「黄龍のけがは…？」

緑龍が、香奈に聞いた。

それを聞いた香奈は、口を堅く紡ぐ。そして、肩に担いだ黄龍を  
あおむけに寝かせる。

腹から、滅茶苦茶な出血をしている。見ると、肺のあたりからも  
出血していることが分かる。緑龍は、小さく息をのむ。そして、首  
筋に指をあてた。

そして、納得する。

「まだ大丈夫……」

小さく言つと、香奈は少しばかり目を丸くする。

緑龍は、黄龍の方に手を重ねる。そして小さく目を閉じる。辺り  
に、新鮮な風がまとつてくるのが、香奈でもわかる。

その風は、黄龍に柔らかく纏い、傷口を優しくなでていく。どん  
どんと、傷口が直つて行くように、香奈は見える。

「……」

涙が零れそうな、そんな勢いだった。しかし、声が出せないこと  
を踏まえると、香奈は、あえて涙を流すことを堪えた。

「何とかこれで、応急処置は出来ましたが、まだ、黄龍を起こさ  
ないでくださいね？」

緑龍は言つた。

それを聞いた香奈は、少しばかり疑問そうな、そんな視線を緑龍  
に向ける。

緑龍は、小さく微笑む。黄龍に微笑んだようにも見えたし、香奈  
に微笑んだようにも、それは取れた。

「だって、起きたら二人とも、きつと東海林さんと参戦してしまう  
でしょ？少しばかり、自重お願いいたします」

緑龍は言つと、大介の方に視線を向ける。

大介は、黄龍の首筋に手を軽く当てる。「異常はないな、ちよつ  
と脈が弱いけど」と大介は言う。

ちよつと、

だったら、大丈夫かもしれない。香奈は思える。ちよつとなら、



黄龍を今から起して、自分のごたごたに巻き込まれてしまった東海林を、助けることが出来るかもしれない。香奈は考えてしまう。

しかし、思いとどまる。

さっき言われたばかりだったことを、香奈は思い出す。黄龍は今、かなり体力を削ってしまったのだ。今黄龍に必要なのは、十分な休養だ。

それを、香奈は十分に理解していた。

香奈は小さく息を吸うと、「分かった」と緑龍に言った。そして小さく、こうつぶやくことにした。

まだ終わってはいない。

しかし、終わっていないからと言って、言ってはいけない言葉ではない。

「…ありがとうね、緑龍君…」

どこか、心温まる言葉だった。

それを聞いた緑龍は、少しばかり顔を朗らかにする。そして、香奈にこうつぶやいた。「そもそも、それが僕の役割ですし。けがをしたらこっさり、ここに来て手当をする。きっと銃声で、みんな聞こえないでしょうし」緑龍はどこか、あっけらかんと言った。

しかし、次の言葉は、少しばかり深かった。

「それに、当然のことをしたまでです」

どこまでも緑龍は緑龍で、それ以外の何物でもなかった。

なんとなく、懐かしいような感覚を仄めかせながら、ライカンは走っていた。相手を錯乱させるようなそんな感覚でライカンは走っていた。

ライカンに向けて、銃を向けてきているのが数人。

しかしその数人とも、ライカンたちと同じく、ライカンを狙うように、と役割を言い渡された奴らだのだ。

ライカンは考える。全く、進歩しないな。

思いながら、東海林のいない方に走って行く。それからどんどん

と、どこか嘲笑しながら、どんどんと別の方に視線を向かわせていく。

咄嗟に身を屈めると、その弾は、仲間の体を少しばかり掠るようにして、通りすぎていく。

「キャッ！」

声が聞こえてくる。ライカンに、罪悪感はない。

そもそも、殺していないだけだと思います。ライカンはそう言った、無感情さに身を任せているわけではなかった。

しかし、ライカンは走らなければならなかった。走りながら、何かをするということも可能なのだ。ただそれだけで、それが人に来ない、と言うだけのことだ。ライカンは考えながら、再び身を屈める。

そして、若干の悲鳴が聞こえてくる。

ライカンは、なんとなく懐かしいような、そんな感覚で走っているだけに過ぎない。ただ、そう言った役を割り振られた、と言うだけともいえる。

雄大のバースーンは、青龍の力を補佐していく。音がする度に、その水の剣は形状を変えて、そして相手に切りかかる。

しかし、水だからと言うこともあるからか、それが物を切る、と言うところには至らない。ただ『その痛みを擬似的に与えている』に過ぎないのだ。どちらかと言うと、効果は幻術に近い。

青龍は、少しばかりつまらなさそうに、弾が来ているのを見る。

時々、雄大の方にも弾が行くことを認識しつつ、青龍は水で、防御を固めていく。幾つも同時に、水を操るのはそんなに難しい話でもない。雄大がいれば、簡単にできる話だ。

銃声とともに、青龍の脳が素早く反応する。水がバリアのような働きをして、その弾は形を失う。なんとなく変な感覚はしていたが、特に気にすることは無い。そう思いながら、青龍は更に、水で人の『痛覚を刺激』していく。ただそれだけだ。

痛みを受けた奴らは、その痛みに悶える。

まだ死なないだけましだ、と青龍は思いながら、別の方に視線を向ける。そこからも、別の銃声が聞こえてくる。見ると、ライカンがちよろちよろと動き回って、仲間が撃っている弾を使つて、そのまま相手を攻撃しているような、そんな戦法をとっていた。

少しばかり気にくわないが、まあいい。

青龍は心の中で思いながら、銃声を聞く。自分に向けられたものだ。

容易に察知すると、バースンの音が聞こえてくる。そのまま水が、バリアのように働いて行く。

「…、」

少しばかり視線を細めて、青龍はそいつらに水の剣を向ける。そいつらの顔に、恐怖も何もないことが、何となく青龍には分かる。

とりあえず、東海林に危害を加えさせなければいいだけのことだ。

青龍は考えながら、駆け抜ける。その人の波の中を潜り抜けて、痛覚だけを刺激していく。ただそれだけだ。

本当に切ったりはしない。甘いことに。

青龍は、つまらなさそうな表情をしながら、人に『痛覚』を与えていく。どんどん、人が悶え倒れていく。

「青龍やる」

雄大は、どこかふざけたような口調で、青龍にそう言った。

聞いた青龍は、雄大の方に一瞬視線を向けると、東海林の方に視線を向ける。

東海林の太刀筋を、何とか姫野は避けていく。そして、隙のような場所に銃を向け、引き金を引く。

それに反応して、東海林はすぐに剣をその方向に向ける。一体何分経ったのか、東海林には気になって仕方がなかった。それに、赤龍が痛がっていないかどうか。

香奈が、傷ついていないかどうか。

東海林には、気になることばかりだった。

「あなた、随分やるのね」

姫野は言った。

聞いた東海林は、姫野を睨み返す。少しばかり、姫野はどんな反応をしているのか、よく分からなくなってくる。

仕方がなく、姫野は更に銃口を向ける。

そして、どんどん弾を撃ち出してくる。東海林はそれを、避けて、持っている剣ではじき返す。

さつきから、同じことの繰り返しだ。

姫野も東海林も、気付いていた。さつきから何一つ、お互いがやっていることが変わっていない、と。

これ以上の発展は、期待できない、と言うことだ。

姫野は少しばかりつまらなさそうに、そして面倒くさそうな視線をしながら、東海林の方に拳銃を向ける。引き金を引くころには、もう既に、そこには東海林はいなくなっている。別の方向から、東海林の剣が風を切り、それを姫野がよける。

面倒くさくなってくる。

姫野は思うと、いったん手を挙げる。

「待つて、」

聞いた東海林は、剣を構えたままだった。もしここで、剣を下した状態で引き金なんてひかれたら、たまったものではない。そう言うことだ。

「…、随分と用心深いのね」

少しばかり姫野はがっかりする。

そして、東海林に説明するように、呟いた。

「これじゃあ埒が明かないわ。私が撃つてあなたが防いで、そしてあなたが切つて私がよける。こんなんじゃ、いつまでたっても何も変わりはないわ」

言っているのが、マフィアのリーダーだということを、東海林は忘れてはいない。

さつきから、警戒を怠ってはいない。

しかし、姫野の視線は本当だった。しかも、その視線が真っ直ぐなものだったということを、東海林が理解できないはずがなかった。「だから、一騎打ちしましょう？」

一瞬、

東海林には、姫野が何を言っているのか分からなかった。「一騎打ち……？」と東海林は言う。『とな……？』と赤龍が、どこか気楽そうな雰囲気と言った。

「そう、今は序の口だけど、私の本気の弾がよけられて、銃が壊されたら私の負け。あなたが銃に打たれたら、私の勝ち。まあ、私が勝ったらあなたたちを、多分打ち殺すでしょうけれど」

脅しているのか、それがどうなのかは分からなかった。

しかし、姫野の視線は、冗談めいてはいなかった。表情はどこか、いたずら気な笑みを孕んではいるが、視線に、そんなものは混ざっていないかった。

まざりつけのない、純粋な。

思うと、東海林は尋ねる。

「どこで」

聞いた姫野は、「工場の外。この辺りは住宅地でもなんでもないわ。ただたくさん工場があるだけ。だから、外でどんちゃん騒ぎしても、気付かれはしないわ」

姫野は言った。

東海林は、それでも警戒を怠る気はさらさらなかった。そもそも警戒を怠ったら、その時点で姫野に打ち殺されそうで、そんな気がして、東海林は警戒を怠れなかった。

「……条件がある」

東海林は言った。

聞いた姫野は、少しばかりつまらなさそうな表情を東海林に向ける。「何かしら」と姫野は尋ねる。

手に、汗のようなものが伝っていく。しかし、それが汗ではない

と分かると、少しばかり気持ちが悪くなってくる。しかし、それは仕方のないことだった。

「もし俺が外に出て、その瞬間にお前が俺を殺したり、隙を見て攻撃はしないことだ。勿論他の奴も同じ」

東海林は言った。

少しばかり、姫野は口を窄める。「それだけ？」と東海林に尋ねる。これは、聞いてみる価値がありそうだ。

「絶対に姑息な手は使わない。もしお前が姑息な手を使ったら、俺は容赦しない」

聞いた姫野は、どこか意外そうな口調で尋ねる。「あら、それじゃあ今までののは、容赦があつたってことかしら？」どこかいたずら気な、そんな口調。

東海林は、黙ってはいない。

「勿論、容赦はしてない。今度は、その容赦のなさを向ける相手を、変えるだけだ」

東海林は言いながら、横目で、銃を撃ちあっている少女たちを少しばかり見る。勿論、警戒は怠っていない。それはビンビンと、赤龍の中に伝わってきた。息が詰まるくらいの、警戒だったことを、赤龍は理解している。

「……」

姫野は、少しばかり目を細める。

「……分かったわ。条件を飲みましょう」

姫野は言った。少しばかり、面倒くさいような、そんな気がしか姫野にはしていなかった。それは仕方のないことかもしれないが、姫野にとって、面倒くさいことこの上なかった。

東海林は警戒を解かない。姫野は外に、一歩ずつ踏み出していく。そして、ときどき東海林の隙を伺うが、そこに隙なんてものは存在しない。姫野は、とてつもなく面倒くさい相手と、戦いを挑んでいるようだった。

姫野は思う。

廃工場の門の前に歩いていくと、東海林の方に振り返る。東海林は、さつきから、どこから取り出してきたのかよく分からない剣を、鱗だらけの手で持っていた。勿論、構えている。

姫野には、それが変なものにしか見えなかった。

東海林は、姫野が立ち止まった瞬間に、警戒を強めた。

視線はきつくなり、東海林の目には姫野しか映っていない。しかし、周りの音が東海林には聞こえてくる。それは、面白いくらい、誰がどこにいるのか、手に取るように分かってしまった。

「随分と、鱗だらけなのね。あなた」

姫野は言った。

聞いた東海林は、それを聞き逃した。ただ、どこかに流れて言ったような言葉だ。

雨が、降っていた。

しかも、土砂降りだった。

しかし、そんなことに構っていられるような余裕は、どこにも無かった。今油断したら、絶対に大変なことになる。ある種の緊張と恐怖だったのかもしれない。

「随分と、冷静なのね。殺されるかもしれないのよ？」  
聞いた。

姫野の声だった。

東海林は、無感情に言い返すだけだった。

「もう、そんなことは承知の上だ」

もう全員、分かっているはずだ。

雄大は、はっきり言って分かっているのかどうだかわからないが、しかし、大介や緑龍、青龍やライカンも、それを理解してついていた、と東海林は考えている。

だから東海林は、何もためらってはいない。

だから、真っ直ぐ見つめているだけなのだ。

視界が悪いことの上なかった。

後ろからは、銃声が聞こえてくる。ただ、それが東海林に向けら

れたものでないだけだ。もし今、東海林に弾が向けられても、東海林はそれに反応できる自信があった。どこからか、バースンの音も聞こえてくる。そう言えば、雄大はバースンを使ってたな。

東海林は思う。

思うと、東海林は再び姫野の方に視線を向ける。姫野は、さつきからあまり話していない。笑みも、あまりよくはない。

少しばかり、睨まれているような、そんな感覚に近い。

しかし、それはお互い様、と言う物だ。東海林も、姫野を睨んでいる。姫野が睨む前から、それはずっとそうだった。

雨の音が、ますます増していくような、そんな気がしてならなかった。

とても、重々しい雨が、東海林の肩に打ち付けていた。真っ暗な世界に、真っ暗な雨だった。廃工場だった。

東海林は、小さく息を整える。

真っ直ぐと、相手をただ見つめている。相手がいつ、攻撃を仕掛けてくるか、それが分からない。しかし、ここでは不意打ちをした方が有利となる。つまり、不意打ちを取った方が、勝つ確率が高くなる、と言うことだ。

しかし、とも東海林は考えている。

剣と言うのは、不意打ちをするとき、かなり大振りな動作を、遅からうが早からうがしなければならぬ。いくら東海林が速かったとしても、いくら、赤龍の力を借りて早くなっていたとしても、東海林に、不意打ちを取ることは難しかった。

しかし、

拳銃は、簡単だ。

ただ相手に向けて、引き金を引けばいいだけなのだ。それですべてが終わる。ジ・エンドだ。しかし、それをよけられたらそこでもまた、引き金を引けばいい。

どちらが有利か、

東海林は冷静だった。



姫野は、東海林の方にゆつくりと、銃口を向ける。東海林は、姫野を見つめている。

「……」

冷たく滞った時間が、そこに流れていく。雨だけが、どんどんと東海林の肩に当たっては、流れていく。そう、雨だけが。

一瞬だった。

姫野は東海林に引き金を引いた。

つまり、そういうことだった。

東海林は姫野を見ていた。しかし、不意打ちを仕掛けようなんて気はさらさらなく、東海林は、姫野が攻撃をするのを待っていたのだ。

こちらから攻撃してしまうと、姫野に隙を突かれるのはまず間違いない。経験の差だ。

しかし、こちらにも経験と言う物がある。

東海林は、じっと待っていただけだ。

今の東海林なら、きっと後ろから飛んできた弾も、剣で弾き返すことが出来る、そう本気で思ったからこそ、東海林は姫野の弾をよけることが出来た。

剣で弾き返したりはしない。

時間が一気に流れ出す。

東海林は駆け抜ける。雨の中を、通り抜けるようにして、東海林は姫野の方に駆け抜ける。姫野は、それを見ながら引き金を引き続ける。東海林は少しばかり隙を作った。それは、端っている際に仕方のないことだった。

流石に、リーダーは他の奴と違う。

東海林は思いながら、前から飛んでくる弾を剣で弾き返す。一つが東海林の頬をかすめる。東海林は、顔色一つ変えない。

「……」

あら、面白いじゃないの。

姫野は心の中で、小さく呟くだけだった。

東海林は大きく、剣を振る。

銃声が鳴る。

剣を振り下ろす。

少しばかり、鈍痛を感じたことは間違いない。東海林の手に、命中とまではいかないが、かすめたよりも大きな感触が、一気に東海林へと伝わって行く。

少しばかり、東海林は顔をしかめるが、東海林が剣を奮うことはもう間違いないことだった。

「…」

まあ、いいかしら。

姫野は思った。

小さく目をつぶった。

姫野の銃が、東海林の剣で粉々になった。

『…ぬ』

「…？」

姫野も、赤龍もその東海林の行動に疑問を持った。しかし東海林は、それ以外にすることを、考えすらしなかった。

東海林の考えていたことは、うまく言ったのだ。

「…、あなた、どういう…」

本当に驚いたのは、初めてかもしれない。姫野は思いながら、東海林の方に視線を向ける。東海林は、姫野の方に、さっきよりは幾分朗らかな、そんな視線を向けていた。

「俺、思うんだ」

東海林は言った。

「はつきり言つて、今香奈が、マフィアのリーダーになんてなりたくない、って言えば、それで全部おしまいになる話だと思うんだ。今はお前がリーダーなんだし、きつとどんなやつだって、仕方がないと思うさ。今、お前がリーダーなんだからな」

東海林の右手が、光で包まれる。

東海林の手に握られているものは携帯電話で、東海林の隣にいるのは、赤龍だった。東海林の携帯電話は、開いているのに、全く光を放っていないかった。

電池が切れたのだ。

しかし、そんなことははっきり言って、問題にすらなりはしなかった。問題なんてものではない。そんなの、はっきり言ってありえない。

東海林が、あまりにもはっきりとした、そんな解決策を提案したからだ。

「お前もそう思うだろ？」

東海林は聞いた。

赤龍は答える。

「うむ！勿論じゃ」

聞いた東海林は、少しばかり顔を沈ませる。「かーッ」東海林は言う。

「お前の声のせいで、雰囲気が台無しだな……」

聞いた赤龍は、「むッ……」と小さく呟く。「それは、東海林が赤龍を必要としていない、ということかの？」

いじけたような、それかいたずら気な口調だった。

聞いた東海林は、少しばかり目を細めて、赤龍の方に視線を向ける。東海林は答える。

「そーかもなー」

東海林は言った。

赤龍は、少しばかり視線を沈ませる。東海林には分からない程度に。

その瞬間だった。

「お前がいなかったら、こんな野暮で、危なっかしくて、」

こんなにスリリングな場面には、出会えなかったよ。

一瞬、赤龍は顔を上げる。

東海林の顔は、止んだ雨と、顔を出したで、いつもよりかは輝いているように見えた。

「ッ」

途端に、何と言っているのか分からなくなる。

赤龍は、こう言った場面に遭遇したことがない。はっきり言って、何と言っているのか、赤龍には分からない。

「全く、東海林はいつまでたってもあほじゃな。そんなことを、わざわざ赤龍が聞くとなんて思ったか。今のは付加疑問文と言う奴じゃ」

強引に、

しかしどこか楽しそうに、赤龍は言った。

「ッ」

姫野は、面倒くさそうな、そんな感覚で見つめるしかなかった。

そこに声が響いた。

「やめ！」

それは、姫野の声だった。

その声が、廃工場に響き渡った。そして、それはとても、どこか穏やかな声だったことは、確かだった。

聞いた一同は、姫野の方に視線を向ける。姫野は、面倒くさそうな視線をしながら、仕方がない、と言うような雰囲気、廃工場の中に入ってくる。勿論、びしょ濡れだった。

東海林たちも、姫野の後に続いて、廃工場の中に入ってくる。東海林は、周りを見つめる。訳が分からない、と言わんばかりの表情を、青龍や、緑龍や大介は向けていた。雄大とライカン、特に何の感情も、抱いている風には見えなかった。

「オソノの娘はいるかしら？」

姫野は言った。

一瞬、香奈の背筋に冷たいものが走る。さまざまな思考が、頭の中で巡って行く。黄龍が、少しばかり目を固く閉じる。

「…」

香奈は、黙りながら東海林の方に視線を向ける。

東海林は赤龍と一緒に、どこまでも、すがすがしい顔をしていた。香奈は、一瞬何が何だか、よく分からない。どうしてそんな顔をしていられるのか、香奈には不思議でなかった。

しかし、東海林は香奈の方に視線を向けると、小さく微笑む。一度、頷く。

さらに、香奈の中では意味が分からなくなってくる。

姫野は、辺りを見回してもう一度、香奈に言った。

「出てきて頂戴、言ってほしいことがあるの」

姫野は言った。

そんなことを言われたら、更に出て行きたくなるのは、きつと気のせいではない。香奈の中で、確実な警戒心が、組み立てられていく。

しかし、

香奈の方に向けられている、東海林の笑顔の意味が分からない。

香奈は思いながら、小さく吐息を吐いた。そして、小さく息を飲み込む。大介は、香奈の方に視線を向ける。

「一体、どういう…」

緑龍が、小さく呟いた。

香奈は立ち上がり、姫野の方に歩いて行く。東海林の姿が、しっかりと自分の視界に入ってくる。

そして、姫野の姿も香奈の視界に入る。

小さく息を飲み込んだ。

姫野は、少しばかりつまらなさそうな、そんな視線を香奈に向ける。香奈は、少しばかり警戒を解こうとは思えなかった。

姫野は、香奈に言う。

「あなたに言つてほしいことがあるんだけど、いいかしら？」

聞いた香奈は、「…、何」と小さく呟く。

聞いた姫野は、はつきりところ尋ねた。

「私は、『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーになるつもりはない、って」

何を言っているのか。

一瞬、香奈には分からなかった。しかし、香奈は別に、それを言うこと自体に抵抗を覚えているわけではない。香奈は、別に『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーにも、そもそもどんなマフィアのリーダーにもなる気がないのだから。

「…駄目？」

姫野は聞いた。

聞いた香奈は、「それを私が言ったら、どうなるの」と尋ねる。

「あら、随分と警戒心が旺盛なのね」姫野は、小さく呟いた。

「あなたは、『タンクラス（TANCLAS）』の後を継ぐ権利がなくなる。そして、私たちから狙われる理由がなくなる、ってところかしら？」

それは、色々な意味で、寝耳に水だった。

はつきり言つて、そんなことを言え、だなんて、言われたことは無かった。少なくとも、姫野には、殺すか殺されるか、するかされるかを覚悟していた。

「よく考えたら、簡単な話なのよね。あなたがリーダーになりたくないっていうんなら、きつと他のメンバーだつて、納得するはずよ。それが、オジサン推進派だったとしてもね？だから、そうなれば私たちは、もう無駄な労力を使わなくていいわけ。分かった？」

香奈は聞いた。

話としては通っているし、矛盾もしてない。香奈も、はつきり言つてその通りだと思える。しかし、どこか引つかかる。

そのわだかまりの解き目に、東海林がいることを香奈は理解する。東海林が、つまり『タンクラス（TANCLAS）』のリーダー

である姫野と、交渉をしたのだ。

喉の奥から、言葉が詰まる。

しかし、それは仕方のないことだった。あまりにも仕方のないことで、それが一番の解決策だと分かっているのだけれども、それが香奈にはどうしても納得することがうまく出来そうもなく、逆に、心の中の靄のような変な気持ちの悪いものが、もくもくと煙のように立ち込めていくだけだった気もしなかった。

しかし、それは、最善の策だった。

要するに、お互い誤解していただけなのだ。ただ、それだけなのだ。

「どう？」

姫野は聞いた。

なんとなく、悲しくなってくる。

しかし、それは仕方のないことなんだとも思う。

最善の策に従うまでだ。香奈は、自分に言い聞かせた。

「…、私は、」

『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーにはならない。

はつきりと、香奈はそう言った。

言っただけで、それに感情がこもっていたかどうか、それはまた別問題だった、と言うことを、香奈だけは理解できていた。

「聞いた？みんな」

姫野は言う。

全員は、姫野の方から視線を変えない。ただ、どこまでも淡々としているだけだ。姫野はとも、すがすがしいような、どこか癪なような、そんな表情をしていた。

「これで、リーダーは私になったわ。いつも通り、いつもの場所に集合すること！」

姫野がそう言って、手を宙に挙げる。姫野は手をたたく。

一瞬にして、『タンクラス（TANCLAS）』のメンバーがいなくなり、そこには姫野だけが残っていた。

どこか面倒くさそうな、そんな表情をしながら、姫野は言った。  
「全く、どこまでも癪ね、あなた」

姫野は言う。

それは東海林に向けられたものだった。

そんなことを言われても、東海林には何が癪なのか、全く分からない。小さくではあるが、東海林は息をのんだ。

「そんなのお前の勝手だ」

そう言った時だった。

その時には、姫野はもう既に、そこにはいなかった。もうとつくに、廃工場を出て行った後だった。

東海林にも、どこか癪な気分が移った。

雨が止んでいたが、それは東海林には、もう既に意味がないことだった。



申し訳ないような、そんな気分

結局、こうなってしまった。

結果としては、いいことなのかもしれない。香奈は考える。しかし、それ自体が持つ本質は、香奈にとっては、非常にづらいものに他ならなかった。何故、あんなことになってしまったのか、それ自体が、香奈を不安感に陥れた。

今もまだ、香奈は不安に打ちひしがれているも、同然だった。

東海林と軽い挨拶を心無く交わし、香奈は、どこまでも頭の中で取り巻いて行く、よく分からない物に苛まれていた。

黄龍は、香奈の肩に担がれて、香奈は、自室に向かっていった。今のところ誰にも会っていないから、きっと大丈夫だろう。香奈は思いながら、自室のドアを開けて、そして、黄龍を床に寝かせると、自分はベッドの上に倒れ込む。

泣きたくなってくる。

香奈は、どうしても泣きたい気持ちになってくる。当たり前だった。

自分自身で決めたことを、何一つ守れなかったのだ。

何が他人を傷つけないだ。何が他人を巻き込みたくないだ。

何が笑顔だ。

香奈は思いながら、ベッドの上でうつぶせになる。枕が、何かで湿って行くような、そんな感覚を覚える。心も体も、どんどん悲しくなってくる。

「……」

香奈は、言葉なく呟いた。

ただの靄だった、と言えばそうなるかもしれない。香奈は思う。もしかしたらただの靄だけで、そんなのは言葉ではなかったのかもしれない。

自分の目の前にあるのは、どこまでも真っ黒で、どこまでも暗澹

でひしめき合った、そんな絶望にも似たものだった。全くと言っていいほど、もう香奈には、周りが見えていなかった。もしかしたら香奈は、もう何も、見えないかもしれない。

そう考えた。

香奈は、泣いていた。

泣きたくなつてくるのではなく、泣いていた。

こらえきれない、申し訳ないような、そんな気分が、自分の中から流れ出していく。東海林の顔が、香奈の中で笑っている。東海林の顔が、あまりにも輝いていて、香奈には咽かえりそうなくらい、それは微笑んでいた。

香奈は、小さく息を飲んだ。

そして、小さく顔を上げた。

目の前にあるのはただの壁で、東海林ではない。

それを理解すると、再び自分が、本当に馬鹿だと思えてきて、本当に嫌になつてきた。香奈は、香奈の中でどこまでも、馬鹿だった。小さく、しゃくりあげた。

香奈は、泣いていた。

悲しくて、悔しかった。東海林に、合わせる顔がなくなつてしまつた気が、そんな気がした。それが、香奈には悲しかった。

「…、」

小さく、しゃくりあげる。

その時だった。

「…、どう、したの…?」

黄龍の声だった。

気絶から、回復したのだ。

香奈はそれを知ると、小さく黄龍の方に視線を向ける。しかし、香奈は香奈のままだった。香奈は、黄龍の声を聞いているにもかかわらず、小さくしゃくりあげた。

香奈は、どこまでも申し訳なかった。

どこまでも、香奈は謝罪するしかなかった。

「…私…」

香奈は言った。

「どうやったら、東海林君に顔を合わせることが出来るの…?」

聞いた黄龍は、少しばかり息を詰まらせて、顔を上げる。香奈の顔が、ベッドの中に沈んでいて、その顔を見ることが出来ない。

香奈は、続ける。

「私…、東海林君を笑顔にしたかったただけなのに…、なのに、…私…、巻き込んだじゃった…、巻き込んだじゃった…ッ」

さらに、小さく息をのむ。もう自分が、しゃくりあげていることすら、香奈にはよく分らない。

「私、だれも傷つけないと思ったのに…、東海林君に、迷惑かけちゃった、…、…どうすればいいの…ッ」

香奈は言った。

真っ暗だった。その先は、ただ真っ暗だっただけだった。香奈にとって、その先は真っ暗だった。目の前すら、香奈にとっては真っ暗で、何もないと同然だった。はつきりと言える。もう、自分の目の前は真っ暗で、さっきまで見えていたものすら、見えなくなってしまうみたいだ。

しかし、声は聞こえた。

「…、何、的外れなこと、言ってるのよ…」

それは、黄龍の声だった。

聞いた香奈は、はっとなった。そして、黄龍の方に視線を向ける。さっきまで、床でとぐろを巻いていたくせに、今は床の上に、ちょこんと座っている。しかし、その黄龍の視線は、どこか空ろだった。それでも黄龍は、座っていた。

「…、」

香奈は、悲しそうな視線で、黄龍の王に視線を向ける。黄龍はただ、香奈の方に視線を向けている。ただ、それだけの話だ。

「東海林は、香奈のことが心配だったのよ。みんなそう。香奈が思っているように、東海林だって…、香奈のことを考えているのよ。」

そうでなかったら、香奈があそこにいるって気付けなかったもの」  
黄龍は言った。

「…でも」

香奈は言った。

涙を浮かべながら、香奈は、枕の方に顔をうずめようとする。

「私は、東海林君を、関係ないことに巻き込んで…、それで…」

香奈は言った。

黄龍は言った。

「…、香奈が巻き込んだんじゃないわ」  
はつきりと。

香奈は、その言葉の意味が理解できる気がしなかった。黄龍は、何を言いたがっているのか、それすら香奈には、よく分かっていなかった。

「東海林は、自分から香奈を助けに行こうと思ったの。だから、香奈は何もしていないし、これについては、誰のせいでもない。香奈のせいじゃないわ、」

絶対に。

黄龍は言った。

もう、訳が分からなかった。何と言っているのか、香奈には分からなくなってきた。はつきりと、もう香奈の中で、意味不明な文字の羅列が、さっきから右から左に流れていくようにも見えた。しかし、それは徐々に、香奈の中で翻訳されていく。

「…、私は、どんな顔をして…、東海林君と会えばいいの…?」

香奈は言った。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細める。

小さく黙ると、黄龍は、少しばかり小さく息をつく。黄龍は小さく、どこか呆れるような雰囲気で、香奈に言った。

「…そんなの、」

いつも通りでいいじゃない。

…

…ッ！

香奈は小さく、しゃくりあげた。また、枕が少しだけ湿ったのを、香奈は感じた。そんなことは関係なくて、香奈の中で、さっきよりも妙な感覚が、どんどんと膨れ上がって行くのを感じた。ただそれだけのことだった。

「香奈のいつもの顔が、東海林のお気に入りのはずよ…？」

黄龍は言った。

一瞬の出来事だった。

黄龍が、あまり体調がよくない、と言うこともあってなのか、香奈の動きについて行くことが出来なかった。いつもなら、どんなに早くても、銃の弾くらいなら目に見えるはずなのに、その香奈の動きは、全くと言っていいほど見えなかった。それに、黄龍はそれに気付もしなかった。

香奈はベッドから降りて、黄龍にしがみついていた。

泣いていた。

肩にうずくまって、小さくしゃくりあげながら、香奈は涙を流していた。黄龍には、それがあまりにも、一瞬の出来事のような、そんな感覚に近かった。

香奈は、声を少し枯らして言った。

「…ありがとう…ッ、黄龍ッ！」

香奈は言った。

黄龍はそれを聞くと、また小さく、どこか呆れたような、そんな雰囲気ですべてに言った。

「それは、もう少し先…」

小さく、どこかいたずら気に、自分の肩で泣いている香奈に、小さく言った。さっきと違う、どこか温かいものが、香奈の中でふれたのは、確かなことだった。

蒼空にはたくさんの星が輝いて、大きな月が光っていた。何処にもいかなければ、海に映りながら、何か別の物を、影のように、

光り輝かせながら、映し出していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9761w/>

---

蒼空への扉.GGM

2011年9月23日19時28分発行